

# 書きたいもの詰め合わせた闇鍋話

オニヤンマンマ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ゲーム内結婚で子供NPCを作ったせいで、なんとなくやめにくくなりずると最終日までプレイしているウルベルトさんおよび家族ぐるみでユグドラシルプレイしているたちさんが、アインズ様と共に異世界に行く話。

ただでさえ最強なナザリック勢がワールドアイテムでさらに戦力過多になる予定

捏造設定多数のために注意

オリジナルワールドアイテムが多数登場し

オリジナルNPCが多数登場します

ナザリックに原作にはない場所が多数登場します  
書きたいもの順

1位 オリジナルNPCたち

2位 人間種アバターになってしまった強くてニューゲームウルベルトさんのひとり旅改めナザリックはぐれ旅

3位 たっちさんがいるので幸せそうなセバス

同率3位 ホモ

4位 漆黒の剣生存ルート

# 目次

理由	1
理由2	10
ユグドラシル	18
異変	48
宝物殿	57
それぞれ	71
それぞれ2	86
情報収集	112
混乱する男	119
思うこと	135
方針	149
集合	180
あるいはこんなifルート(本編に関係ないので読み飛ばしても問題なし)	195
質疑応答	208
劇場のアクター 前編	221
劇場のアクター 後編	232
どうしようもない話	242
どうしようもない話2	254
掘られた墓穴ふたつ	268

## 理由

ナザリツク地下墳墓、七階層溶岩。

男にとってそこは、見慣れている場所。そして通い慣れた道だった。

シルエットの細さを浮かび上がらせる黒いトレンチコートを纏った男は、何かを噛みしめるように一歩一歩、殊更ゆっくりと歩く。意志の強そうな黒い目に、冷えて固まったマグマの道や赤茶けた岩の大地を、飲み込まれるような圧迫感を与えてくる溶岩だまりを、原初ではなく終焉を思わせる赤黒い炎を吹き上げる火山を、ひとかけらも見逃すまいと執念じみた慎重さで焼き付ける。

名残惜しげに時折振り向いては、飛び交う炎の中の悪魔に恐れる様子もなく見つめる。これが表情の動かない仮想現実の中でなければ、強い意志を感じる鋭くきつい眼差しを満足げに細めていただろう。

この完全なる滅びの場所を作り上げたのは自分たちなのだという満足感。それが消えていく寂しさと、かつての栄光の残骸の上に立っているだけの空しさが胸を掠めても、完成された地獄は男の心を癒やしてくれる。

赤い熱がもたらす空気が、まるで血煙のように視界を赤く染める。生者の存在を拒む灼熱の大地。

こぼり、こぼりと赤い泡が浮かび上がっては溶岩の川の中に消えていく。生命という存在を拒む、熱せられた死の世界。

自らの理想とする悪の粹を凝縮した悪魔の住処——  
歩を進めていくと、支える物を失った無残な白い柱が見えてくる。崩れた天井、破壊された神像、見るも無惨な廃墟。神聖さは邪悪によって消し払われ、息苦しくなるような静謐さが溢れている。退廃の美しさをどつしりと纏うそこは、元々は巨大な建造物であったことが伺いしれるほど壊された建物の土台の名残や残骸が視界のそこかしこに広がっていた。

その中ほどまでに辿りつくくと、ふらりと現れた悪魔たちが男に頭を下げた。魔将と名付けられたそれらに「ああ」と吐息のような声で応

じると、しばらくじつと見やりやがて男の視線は離れた。

廃神殿の床に残った石畳を歩くとかつかつ、と決まった効果音が発生する。わざとらしいくらい足の音を響かせながら、男は迷いのない足取りで神殿跡を歩く。

各神殿跡地には、我が子のような存在である悪魔のための場所を隠すように作つてある。

調べ物をするための書斎、休息をとるための寝室、男が大量に与えた衣服をしまうためのクローゼットルーム、風呂や台所などの水回り、ゆつくりとくつろぐためのリビングスペース、聖なる神殿跡を邪悪な悪魔が支配したと知らしめるようなおどろおどろしい財宝を保管する彼のためだけに存在する宝物倉庫、悪魔らしい作業をするための（ニューヨークニストの職場には劣るもの）それなりに立派な作業部屋など――

男の思いつく限り、悪魔にとって必要な生活空間を作つてやつたつもりだった。

階層の景観を優先したため一カ所には集約できずにばらばらに隠すように配置することになったが、たとえば部屋のひとつひとつが離れていてもできるだけ不便にならないように苦心してデザインした。

そこまでして、データの塊の存在でしかないものにわざわざ部屋を作る意味などないのだろうが、男を含めかつての仲間たちはそういった拘りに対して同意を示す者たちばかりだった。ならばと開き直り、作り物のキャラクターに一心を注ぐ羞恥を振り捨て、自重せずに我が子のための家を作り上げた。

ここまでして作り込む理由を、理解できなさそうにする仲間だつていた。そういった者たちには、厨二病と言われても言動や振る舞いの細部にまで気を配る延長なのだと言明した。自分の趣味を包み隠さず見せている仲間とはいえ、絶対に知られたくないと恥じ入つてしまふものはある。内面にある熱をもった感情を、つまびらかに語る気は男にはなかった。

作り上げたものを机上だけのものとして扱いたくなかつた。それを喜んでくれる感情など悪魔にはなくても、与えられるだけなにもか

もを与えたかった。ギルド拠点という箱庭を完璧な見栄えにするための努力なのだと言いつつには、到底足りない熱意の根元。

男のそれはギルドロールに徹底しているなどという拘りを超えた、己の被造物への確かな愛情だった。

「デミウルゴス」

万感を込めて名前を呼ぶ。

男の存在に気付いたのだろう。銀の尾を持つ紳士然とした悪魔は、設定されたAIに従いごく自然な動作で頭をたれた。

男は顔が伏せられていることを残念に思うと同時に、安堵もしていた。胸に去来するこの罪悪感。それを悟るようなことなどできるはずがないのに、見破られることを恐れている。ロールプレイをしすぎて現実と演技の区別がなくなってしまうのかと、他者に知られたら笑い飛ばされても仕方ない動揺をしている。

馬鹿馬鹿しい感傷は、未だ消えない。

「私は、お前を作ることができてよかった。何ひとつ間違えず、今の前として生み出すことができて、本当によかった」

男は当初、NPCを作るとき、与えられた粘土をどんな形にすればいいのか分からない子供のように戸惑っていた。

迷うくらいであれば、仲間のようにならぬで敵を迎え撃てる性能にすればよいのに「そうではない」と否定してくる内面の声があった。けれども、どうすれば納得のいくものが作れるのが分からない。自分がどうしたいのか、形にできないもどかしさ。

悪戦苦闘しながら少しずつ、少しずつ、形にした。与えるべき要素をひとつひらめくと、次はこうしたい、こうであつたら嬉しいと、徐々に与えるべき姿がはつきりするようになった気がした。霧にでも包まれていたかのようなぼんやりとした全容が次第に見えてくる。

NPCを作り上げる過程で、仕方がないことなのだ幼い頃から殺し続けた感情と向き合った。そのとき、男が生み出したい命の形が克明に浮かび上がった。

最終学歴は小学校、学などなく物を知らない男が必死になって叡智持つ存在であれと文字を打ち込んだ。誰よりも賢く、誰よりも才気溢

れ、誰よりも統治に優れ、誰よりも軍指揮に勝る。本を読み、知識を得て、言葉を蓄え、一文字一文字に苦心し、その在り方を納得のいくまで作り上げたのだ。ゲームには一切反映などされない無駄な文字の羅列。それに準じた、あまりにも無駄が多いクラス構成。

襲撃者たるプレイヤーとの戦闘を考えると、レベル100でありながら足止めにもならない強さになっている。貴重なポイントを使つてそんなNPCを作ること認めてくれた仲間には、感謝しかない。申し訳なさと後ろめたさを抱いても、この悪魔を作り上げたかった。

悪魔を作るうちに自分自身すら知らずにいた、男の本当の願いを見つけていた。

狂人じみた妄想である。

馬鹿げていると、ありえないと理解している。

でも、夢を見るくらいいいだろうと自嘲する。

人間に対する徹底した邪悪な存在を――

人類とは踏みつぶすべき虫けらだ。わずかなアークロジにしがみついて生きる人間はとてつもなく愚かに見えるだろう。弱者を踏みにじり、リミットが見える最後の瞬間まで享樂に生きようとする豚共、搾取されるしかない最下層に生まれた家畜のような自分たち。世界というものに終わりが見える。先がない世界に生きている。奈落の底のような断崖がすぐそこまで迫りくる中で、騙し欺し生きている、ギリギリのところ生かされている。そうまでして無様に生きなければならぬのなら、いつそのこと滅んでしまえばいい。

神が世界を救わないのであれば、人間がただただ世界を貪り醜く這うように足掻き生き続けるのであれば、いつそのこと悪魔に支配されたほうがどんなにましか。

世界を壊し、そして手に入れて悪魔の楽園にでもすればいいのだ。滅び行くリアルを攻め落としてほしい。

男は、数多の悪魔を率いて世界を破壊し尽くせる絶対的な悪を願った。

幼少の頃から底辺で足掻き憎悪を燃やし続けた男が渴望する、歪み

狂い捻れているただ一つの救済。

しかし作り物の悪魔は、どれほど男が希つてもリアルを壊すくってしてはくれない。

それはそうだろう。

だってこの悪魔は仮想世界の住人でしかないのだ。AIに制御されたマネキンでしかない。リアルという外があることすら知らない、ナザリックだけが彼の世界なのだ。そんな存在が現実で体を持つなんて、夢物語でしかない。

最初から分かっていたことで、男は別に失望したりはしなかった。妄執をNPCという形で具現化までしてしまう自身の業の深さに失笑してしまうが、そうしてよかったのだと思う。これを生み出したのが自分なのだと思うと、自尊心をくすぐられるくらいに誇らしい。程度の低い自分とは全く違った、横暴で邪悪で酷薄で優麗で蠱惑的で紳士的な悪魔は、妬みと嫉みで充ち満ちている男のどす黒い物で凝っていた浅はかな心を洗い流して、あたたかいもので満たしてくれた。

(それで、一区切りでもつけられれば良かったんだろうけどな)

夢は夢と諦めればいい。想像の中にしか救いはない。それをはつきりと自覚し、ゴミのようなリアルで細々と暮らしていけばよかったのだ。

ゲームの中で手に入れた数少ない友人とたまに連絡を取り合って、毎日が苦しいと愚痴を言い合って、ささやかでもいいから何か幸せを見つけて、やがて生まれに相応しいみじめな死に方をすればよかったのだ。

だが、そうはならなかった。

それで終わってはならないと、男の中を苗床にして育った復讐心が声をあげる。

空想の中だけ終わらせるのか。

恨み辛みと打晴らす、その望みを頭の中で絵空事として描くだけで満足していいのか。

それで本当にいいのか？

身の内から現状を憂える慟哭が聞こえる。



理想の姿を仮想世界で振る舞えば振る舞うほど、悪を語れば語るほど、現実世界の自分と剥離した存在になればなるほど、いいようのない怒りが沸く。

好き勝手に振る舞えるゲームの中と、底辺を無我夢中に生きる自分を比べるなんて妄想癖が行きすぎて、ただの病気だ。

だが、強固な理性があっても、熱を帯びた激情は冷めやらない。

「デミウルゴス、お前がいたから、私は……」

言葉は続かない。熱い吐息と共に、かみ殺される。

頭が悪く、視野が狭い世界の中で目の前の理不尽をただ呪うことしかできなかつた過去の自分。

何が悪いのか、どうすればいいのか、正体のつかめない何かに闇雲に負け犬のように吠えることしかできなかつた。

デミウルゴスを作るために得た知識は、男の中の漠然とした記憶や感情を整理し、心中で生まれては水のように流れて溢れるどす黒い思いを鋭い凶器として確立させた。

知識に裏打ちされたことにより、くつきりと世界を捉えることができるようになっていた。なにを憎むべきか分からないまま八つ当たりのように『わかりやすく腹立たしい者』を嫌ってきた。だが、それも終わりだ。男は憎むべき世界を、はつきりと見ることができた。はつきりと知ることができてしまった。

生まれながらにして上下の決まった社会。

その枠組みを作り上げたトップ企業。

奴らは誰かの苦しみと悲しみと共に巻き上げた富で、笑いながら生きていく。

俺は、こんなにも孤独で苦しいのに、それを下敷きにして幸せを謳歌している奴らが居るのだ！

デミウルゴスを作り上げながら、男もまた復讐者として新たに産声をあげていたのだ。

愚かな自分を変えてくれた被造物。

どんな人間との関わりでも変えられなかつた知恵のない馬鹿な自分を、ほんの少し賢くしてくれた。

(なあ、お前) 山羊頭の悪魔が無力な人間である男に問いかけてくる幻想を見る。麻薬中毒者の幻覚のように、自分は追い詰められすぎて末期になっているのだろう。

(可愛くも愛おしい我が子は、こんなにも立派で悪魔らしく在り続けている。なのに、お前はそれでいいのか?) 山羊頭の悪魔が蒙昧な人間である男を嘲笑う幻想を見る。

(搾取されるだけの虫けら。自分が踏みつぶされないうちにほっとして、踏みつぶされてしまった者など見てみないふりをしている。それでいいのか?) 山羊頭の悪魔が卑怯な人間である男を詰る幻想を見る。

(なあ、お前。お前は、それでも……) 山羊頭の悪魔が、自身が問いかけの形をとりながら責めてくる。それで、いいのか? と。

自分を中心とした世界は、許しがたいことばかりだ。見えるものはすべて醜く、仮想の世界にしか美しいものはない。この世でもっとも美しいと男の心に響くのは、今日の前に広がる悪魔たちの惨憺たる楽園。

「今の私は、お前にはどのように見えるのだろうかね」

事情があつて、男は慣れ親しんだ悪魔のアバターではなく人間の男の姿をしている。

だが、男の問いかけは見てくれるの事を問いかけているのではなく、自分という人間の本质をどう見えるのだと問いかけている。

答えがないことは分かりきっている。これは問いの形をもった、単なる自問自答。

この悪魔に、自分はどんな姿を見せたいのか――

男は作られた存在に対してまるで生きているかのように振る舞うことにためらいがない。遊びの一種がいつのまにか本気になって、本当に生きているかのように錯覚している。そのせいでリアルに支障が出るまで病的に追い詰められているのだ。自分でも本当に愚かだと思う。

けれども偽りのない愛情があつた。物に抱くにはあまりにも愚か

しい真摯な感謝があった。男が幼少のころから抱えていた不条理に対する憎しみは、それらすべてを混ぜ合わせて男の中で決して消えない炎となった。

ちっぽけな存在で終わりたくない。

平穏を望んでいいようにこき使われて惨めに死んで終わるなんて、我が子のような悪魔に見せたくない。

見てくれだけの嘘を必死に塗り固めた、ウルベルト・アレイン・オードルでありたくない。

愛する我が子に胸を張れる親でありたいから、世界を壊したい。

切迫した使命感に常に追い詰められていた。このままでいいはずがない。自分はこのまま安穏と過ぐすべきではない、と。

愛すべき悪魔に背中を見せて、この馬鹿げた矜持と意地と愛情を胸に秘め、武器を手にとって戦いに墜ちるべきだ。

思うだけではなく、その手段をすでに得ている。あとは決断するだけなのだ。

なのに、その選択を、未だに男はできていない。

目の前の悪魔は男の心を揺さぶり、死地に向かわせる誇りそのものだ。

このユグドラシルという場所にある大事な物がその悪魔だけであったならば、自分の選択肢に晴れ晴れとした気持ちでとうにこの地を去っていただろう。

けれど、それができない心の楔が、出来てしまった。

男は頭を下げたままの悪魔の前を通り過ぎ、瓦礫に隠されて作った住居スペースに向かう。

「イリニ、ちゃんといいい子にしていたか？ デミウルゴスを困らせていないか？」

ごくごく自然な、子を思うやさしげな親の声だった。惜しみない深い愛情がにじみ、我が子を迎えにきた親として、なんら遜色のないものだろう。何処にでもあるありふれた親子の光景であったろう。

その子供が、創られたデータの塊でなければ。

五、六歳ほどのちいさな男の子が、姿勢正しくだがどこが手持ち無沙汰に椅子に座っている。

微笑を浮かべたやんちゃやそんな顔立ちには表情の変化は一切なく、名前を呼ばれたことで機械的にウルベルトに顔を向ける。

その顔立ちは、リアルでの男の幼いころに似ている。

男個人が所有するデータだけの存在。それこそが、ゲームではウルベルト・アレイン・オードルという名前を持った男の、最大の未練である。

## 理由2

「モモンガさん、今までありがとうございます。一度はギルドを辞めた身なのに、家族共々このギルドに受け入れてもらって、本当に感謝しています。この二年間で娘の笑顔を取り戻すことができたのは、このナザリツクのおかげです」

繊細かつ豪華な作りの椅子の脇に立った白銀の鎧を纏った騎士は、丁寧に関節を下げた。

「いえ、私は何もしていません。ギルド長として当然の仕事をしていただけですし、それに私のほうがみなさんに助けてもらっていたんですよ？ 維持費を稼ぐのを手伝ってもらったし、イベントと一緒に参加して貴重なアイテムをゲットもできました。なによりリーザさんには単身でナザリツクの襲撃者を撃退してもらったことだってあるんですよ？ むしろ、ギルド長としてより感謝しなければならぬのは私です」

恐ろしい威圧を纏う骸骨の魔法詠唱者は、しきりに恐縮した。言葉だけの謝意ではなく、本当に感謝したいのは自分なのだ。心の底から思っている。

また一人、また一人と、どんどん仲間たちが欠けていく恐怖に怯えている日々があった。

頻繁にログインしてギルド維持に携わっていたのはギルドマスターである自分と、悪に拘る悪魔のたった二人。

彼までいなくなってしまうたら、と常に怯えていたと思う。

ウルベルトにまで見捨てられてしまったら、そしてこの醜い内心の執着を見せて彼に引かれてしまったら、そう考えただけで落ち着かない毎日を送っていた。

彼とログインのタイミングが合わず、かつての栄光の思い出だけを糧に、一人寂しくギルド維持に奔走しているだけの時も多々あった。

たまに唯一残ってくれたウルベルトと顔を合わせることができても、たった二人。しかも後衛の魔法職だけではできることは高が知れている。

稼いできたものを宝物殿に放り投げるだけのルーチンワークをこなすだけの無味乾燥の時間が流れた。

お互いに、何があつたわけでもないのに気まずくぎくしゃくするような居心地の悪さすら生まれるようになってしまっていた。

置いて行かれた寂寥と、裏切られたと身勝手な憎しみに身が焦がされる、絶望と言うには生ぬるい日々。自分自身でもこれはおかしいと自覚できるくらいのウルベルトへの依存。生活を維持するため以外のリアルをすべて捨てても見返りなんて何一つない、満たされない毎日。

『モモンガさんは、辞めませんよね？ 流石に、俺ひとりではこの維持は無理なので、モモンガさんまでいなくなったら……なんて言うか、いえ、貴方を止める権利は俺にはないんですけど、辞めて欲しくないって言うのが本音で、あの、すみません、忘れてください』  
『辞めません。私は、このギルドマスターですから』

モモンガはためらいがちなウルベルトの問いかけと、願いにきっぱりと答えた。

ギルドに在籍だけしていた仲間の一人が、何も言わずにアカウントを消して名簿から名前を消してしまった日の会話。

その会話がモモンガのよすがであり、暗雲としたモモンガを唯一安堵させ癒してくれるもの。

辞めて欲しくないと請い願うのはいつもモモンガの側で、自分が言われるとは思ひもなかった。

あの頃は、大分病んでいた。モモンガはその自覚がある。リアルをかなぐり捨ててゲームにのめり込んでいるのは今も変わらないが、昔はその比ではなく、思考回路がマイナスで相当おかしかった。

あの愉しかった時間はもう戻らないのだと、理解したくない現実から目をそらし続けていた。

皆、二度と帰ってこないかもしれない。頭の中の冷静な部分が理路整然と理解している傍らで、もしかしたら誰か帰ってきてくれるかもしれない、とわずかな希望にすがってギルドのために奔走していた。

ギルド一位の実力者、ワールドチャンピオンのクラスを持つたっ

ち・みーが、ひどく申し訳なさそうな態度で戻ってきたのは、そんな時だ。

ウルベルトは、たっち・みーの姿に嫌そうな態度を見せながらも、内心喜んでいたのではないだろうか。

時間が解決してくれたのか、戻って来た仲間がいなくなることを恐れたのかウルベルトの悪態はかつてに比べるとやわらかかった。

ゲームをやり始めたとき、異業種狩りに心が折れてもう続けることを諦めていたモモンガを照らしてくれた光。彼がユグドラシルから消えて沈んだはずの光が、再び登り孤独に染まり始めていたモモンガを再び照らしてくれたのだ。決してたっち本人には言わないけれど、その瞬間は奇跡のようだったと心に深く刻まれている。

モモンガは二度、たっちに救われたのだ。彼はまさしくモモンガにとって希望の光だった。

たかがゲームで大げさなことを、そう他人に思われるのは理解しているが、モモンガにはそのたかがゲームだけが大事な場所で生きる場所だった。それ極限の乾きに苦しむ中で差し出されたコップ一杯の水のように、命をつなぐに等しいものであったのだ。

一度離れたギルドに戻ってきた理由は、もちろんモモンガを救うためであろうはずがない。たっちがいるだけで勝手に彼が救われただけである。家族思いで真面目な彼が姿を現したのは、ナザリックが名残惜しくなったとか、もう一度ゲームを楽しみたくなったとか、そういう理由ではなく、やはり家族のためであった。

今まで不義理にしていたのに、今になってナザリックを利用したいという身勝手な主張をすることを、聞いているモモンガが申し訳なくなるくらいに丁寧に詫び、顔を見せ合えば口論に発展していたのが嘘のようにウルベルトにも腰を低く弁明し、たっちは切り出した。曰く、幼稚園に上手になじめず沈みがちな娘に第六層を見せてあげたい。つれてきても良いだろうか、というのが彼の要望だった。

第六層は、ぶくぶく茶釜の渾身の作であるダークエルフの双子が守護者を務める階層だ。そこには双子のために作られたペットたちがたくさんいる。凶暴な見た目のモンスターが多いが、見ているだけで

癒やされる見た目のモンスターもいるのだ。

そして、使い切りワールドアイテムによって第六層に後発的に付け加えられた【生産場】牧場領域には、猫そのものの見た目のケツトシーの領域守護者がいる。牧場領域にはファーマーのクラスをもつ見た目が可愛らしいガチャモンスターを多数配置しているので、足を踏み入れて眺めているだけで非常に癒やされる場所となっている。

たっちはそれらと娘にふれ合いをさせたいらしかった。友達ができず、塞いでいる娘に少しでも笑顔になってもらいたい、と。今までも手を尽くしたが空振りに終わっているらしい。

現実世界では生きている動物に接するのは非常に難しい。しかし、仮想世界なら話は別だ。

そして、第六階層は動物たちとふれあえるだけではない。

ふたりの住居たる巨大樹も、子供心をくすぐる見た目をしているだろう。

入り組んだジャングルは、現実では絶対に体験できないアスレチックにもなるだろう。

そして天井にはリアルからはとうに失われた美しい夜空が広がる。とてつもなく感動する最高のロケーションなのだ。

たっちの願いを聞いたモモンガは、すぐに結論を出した。

彼の娘を受け入れることで大切な仲間がここに訪れてくれるならば、モモンガはなんでも利用する、と。

「もちろん、歓迎します。ここはたっちさんが作ったギルドでもあるんですから、そんなに気を遣わなくてもいいんですからね」

「まあ、いいんじゃないですか。俺は反対しません。それに人が誰もいないより、たっちさんの娘さんが来たっていうんなら、その方がいい」

まるで客人のように一歩ひいたところで振る舞う彼にさみしさを感じながらモモンガは了承をしめし、ウルベルトはたっちと顔を合わせようとしながらかも彼の願いに了承を示した。

かといってここは仲間とともに作った場所で、モモンガひとりの決断でなんでもしていい訳ではない。利用しようと決めても、彼の良心



がやっぱり邪魔をする。好き勝手したところでギルドをただの過去として既に去った仲間たちは気にはしないだろうが、モモンガは氣にした。

やまいこの妹という前例もあるので、ギルメン以外の者をナザリツクにいれるのは反発などないだろうが、そこはギルドマスターを任されるほどに真面目で周囲の意見を重視するモモンガである。たっちの娘の事情をギルメンに説明してもいいか確認してから、モモンガはみんなにメールを送ることを決めた。

日を改めて娘を連れてくると言ってお立ち去ったたっちを見送った後のモモンガの行動は早かった。

ナザリツクを去ってしまったギルメン……第六階層を作るときに特に中心となった者たちには非常に丁寧な『ギルメンの身内であるが部外者をナザリツクに招いてもいいか』を懇切丁寧にお願いした。たっちの娘のためであり、そしてこれをきっかけにナザリツクを思い出して戻ってきてくれる者がいないか、叶うかどうかも分からない小さな願いもこめていた。

半数以上、メールの返答が返ってこなかったが、メールを返してくれた者全員が「もちろん」とたっちの娘を歓迎すると言ってくれた。それらをたっちに伝え、来てくれるのを楽しみに待っているとモモンガは付け加え……それからは、モモンガにとって至福の時であった。

全盛期のようにはいかないが、見知った顔がぽつりぽつりと顔を出すようになったのだ。たっちの娘を思う気持ちにかこつけたゲスな下心であったがために、それを利用したことに申し訳ない気持ちがあったが、現金なことにより喜びのほうが大きかった。そんな自身に失望したが、『モモンガの世界』は失望を塗りつぶすほどに輝かしい光にあふれていたのである。

竜人種族でキャラメイクし、ほとんど人間と変わらない見た目のたっちの娘はミーシャというキャラ名でログインした。

ミーシャは最初の訪問でナザリツクをとても氣に入り、たびたび訪れるようになった。それこそがモモンガの望むことだった。

第六層の生き物たちに虜になったのもさることながら、ダークエルフの双子をことのほか気に入った。見た目が上の年齢に見えるものが多い中で、年が近いひと二人には親近感を感じさせるらしくアウラお姉ちゃんマーレお兄ちゃんと呼びかけ、よく一方的に語りかけていた。そしてたつちの作ったセバスにも、親しげに「じいじい」とよく話しかける。

たつちはそれをほほえましげに、しかしどこか悲しげに見守っていた。

本当は、リアルで友達を作って居場所を作って欲しい。

それが、父親としての彼の願いなのだろう。

モモンガはそんなたつちを案じるふりをしながら、ずっとナザリツクに興味を持っていて欲しいと言う本音を隠し続けた。

娘のみをナザリツクに送り出す訳がないので、それにたつちが付き添い空白の期間が嘘のように頻繁に顔をあわせるようになった。

毎度訪れているのに、その維持をモモンガだけには任せる訳にはいかない。娘をひとりリアルに帰した後は、ナザリツク維持をもに担ってくれるようになった。共に戦うことはモモンガがずっと望んでいたもので、ウルベルトとたつちと共に狩りに行った日、モモンガは心の中で思い切りガッツポーズをしていた。

ウルベルトにブランクをからかわれ、それにたつちが反論し、モモンガが二人を懸命に宥めて。そんな、ありふれたやりとりがとても愛おしかった。

時間がたつと、そこに小さな少女も加わることになるのは、モモンガは思いもよらなかったが。

たつちの娘も、最初のうちは第六層を眺めるだけだったが、次第にナザリツクを探検してまわるようになり、外の世界に興味を持つようになる。ユグドラシルを遊び尽くしたプレイヤーにとつては色褪せた場所も、VRゲームを始めて遊ぶたつちの娘にとつてはとても新鮮なこと、モモンガやウルベルト、そして彼の子供NPCを巻き込み四人とひとりではしゃぎまわって一緒になって遊ぶようになった。

無邪気で好奇心いっぱいな小さな子供がいるだけで、飽きるほど繰

り返した作業がまったく別物に感じた。

子供の前では喧嘩をなるべく控えてくれるので、ハラハラすることがないのもありがたい。

楽しい、とにかく楽しかった。

たっちとしてはモンスター相手とはいえあまり乱暴な真似をしてほしくないようだが、そこは蛙の子は蛙というべきか、年齢の割に優れた反射神経でばっさばっさとモンスターを倒してガンガンレベルを上げていくことになる。

そこに、娘が世話になっっているし、そして自分ひとりが蚊帳の外が寂しいからとたっちの妻が加わる。彼女もやはりたっちの嫁であった。女性らしい柔らかな物腰がゲームのキャラ越しに伝わってくるというのに、モンク系のガチビルドをした彼女は時にはギルド内最強のたっちを驚かせるほどのダメージソースを叩き出す。さすがにワールドチャンピオンの夫に勝てないが、たっちの腰が引けるくらいの戦いぶりを見せつけてくれる。

人数が増えることで単調な狩りだけではなく、運営が用意するイベントにも参加する余裕ができた。

時折、タイミングがあれば子供好きのペロロンチーノや弟を単独行動させることに不安を覚えるべくぶく茶釜、同い年の子供たちとなかなか友達になれない少女を心配する現役教師のやまいこ、たっちが戻ってきたと聞いて再び勝負を挑むために体の勘をもどすために奮闘する武人建御雷、武人建御雷と仲が良かった二式炎雷たちともどもに行動した。

小さな女の子の笑い声が、ギルドに活気を取り戻させてくれた。た。

かつての陰りが嘘のように、幸せな時間だった。

たっちが戻って来てくれなければ、もしかしたらウルベルトもゲームを離れて、今自分はひとりだけだったかもしれない。

たっちが戻って来てくれなければ、もしかしたらたっちひとり残っ

てくれたウルベルトへ狂っているくらいに執着して、最後の仲間すら失うくらいの醜態を見せていたかもしれない。

恐縮しながら感謝を重ねるたちちを見て、思う。

たちちが戻って来てくれて、本当によかった。

心の底から、感謝しているのは、自分だ。

## ユグドラシル

1

ウルベルトがゲーム内結婚をしたのは、ギルドの仲間が少しずつ離脱しはじめたころだった。

どれほど隆盛を誇っていても避けられない事態、『ユーザーの飽き』というものが来たのだろう。ギルドでは家族関係や仕事の忙しさなどやむにやまれぬ事情あつて辞めていくものがほとんどだが、それは一体どれだけが本当のことなのやら。ギルド長たるモモンガはそれを真面目に受け取っているようだが、ウルベルトは穿った見方をしていた。自分ほど極

端な理由はないだろうが、彼だつて自分のやりたいことのためにギルドを近いうちに辞めるつもりなのだ。

つまらないと感じるようになっていくのに、プレイするのは苦痛だろう。その選択は間違っていない。ウルベルトは彼らのその選択を至極当然に肯定した。

自らが所属するアインズ・ウール・ゴウンだけではない。  
ゲーム自体の人口が減り始めていた。

目標を失い、マンネリ化したゲームに未来はない。  
ユグドラシルという世界にはまだまだ解明されていない要素があるが、それを探そうと気概がわき上がるほどの熱意を持つ者は極端に減つただろう。今でもギルド単位で活発に活動しているところなどことは違った意味での変わり者揃いであるワールド・サーチャーズぐらいではないだろうか。

坂を転げ落ちるようにユグドラシルの衰退が始まった。

他のMMOでは珍しくもない『結婚』という機能が新たにアップデートで加わったのは、そんな時期だ。

やまいこを經由して彼女の妹の明美から頼まれたのだ。



「結婚指輪による補正、ですか」

一緒に遊んでいた支援職の仲間が辞め、今まで通りプレイするのが

難しくなった。そこで目を付けたのが新たに登場したアイテムの補正である。

新規の客引きのためと、ユーザーの復帰を狙ったものなので、一連のイベントを達成するまでの難易度がかなり低い。リスクに比べてリターンが非情に大きいアイテムだ。

この結婚指輪、さすがは自由度に定評があるユグドラシルのアイテム。決まり切った内容の補正ではなく、パートナーとなった相手のクラス構成で補正の項目や数値に幅ができる。

最強の魔法職《ワールドデイズター》をはじめとした強力な魔法職についているウルベルトの補正は、明美にとって理想的であるらなかった。

それに対して、モモンガがたかだかゲーム内の話なのに「結婚!!」ウルベルトさんが結婚!! 嫉妬マスクの同士だと思っていたのに、「と非常にみっともなく動揺したり、女の子たちが演技がかった様子で楽しげに声をあげたり、男共がまるで小学生のように囃したてたりしている。

断れる雰囲気でもなく、また断る理由もなかった。

もはやゲームを辞めることに傾いている自分に、補正の旨味など関係のない話だが、この話を受けるデメリットなどないのだから素直に快諾したほうが男として紳士的だろう。

動揺して躊躇うほうが絶対に格好悪いと、極力平静を装って何気なく了承した。女の子とまとも付き合ったことがなかったから、ゲーム内で打算があるとはいえプロポーズされて嬉しい、とかそんなことは絶対がない、とウルベルトは心の中で何度も自分に言い聞かせていた。

この結婚システムは、パートナーがアカウント削除をしても指輪の効果は継続する。いずれウルベルトが辞めても、問題はないだろう。どうせ、明美だって近いうちにこのゲームから離れるのではないだろうか、とも邪推している。ゲーム内の嫁を置いていなくなったところで問題はないはずだ。

「いいですよ。魔力系魔法詠唱者の明美さんがパートナーだと、こち

らにもメリツトがありますしね」

総MP量が30パーセント加算され、魔力攻撃力大增、時間経過によるMP回復の効果が少増、デバフに対する対策効果などなど。

ウルベルトや仲間が苦勞して製作した指輪の上位互換となる様々な効果が、この結婚指輪ひとつでこれでもかというくらい付随している。追い詰められているのか、クソ運営にしてはユーザーに対してかなり嬉しい仕様だ。

これがもう少し前であれば素直に喜べたのだろうが……ウルベルトは表情が動かないアバターであることに感謝しながら、内心苦笑していた。

「そうと決まれば話は早いわね！ 明美ちゃんのために結婚式は派手に挙げない」と！

ピンク色の粘体が音頭をとると、一同が拳をあげておおと賛同した。女性陣を筆頭に、当人たちを置き去りにして熱狂的な盛り上がりを見せていた。

「明美とウルベルトさんのためのウエルカムドールは私が作るね！」

「せっかくですから結婚式用の衣装がほしいですねー」

「NPCたちもふたりの結婚式に参加させたいな」

「いいですねそれ！ シャルティアの新しいドレスあげないと」

「新郎の身内のデミウルゴスには、特に気合いの入った礼装を作つてあげましょう」

「アウラとマールも着飾つてあげなきゃ」

「いなくなつた同志たちに代わり、メイドさんたちに私が結婚式用パーティドレスを新しく新調しなきゃなあ。みなさんも出来れば手伝つてくれませんか？」

「余興はニューロニストに任せろ！」

「やめて」

「余興は恐怖公にま」

「やめてくださいー！」

「無駄課金で仕込んだ妖精楽団の合奏が役立つ日が来ようとは……会場の音楽はお任せください」

「それはいいですね、オルゴールさん。楽しみにしています」

「NPCも参加なら式場はナザリック一択ですね。聖堂を結婚式場用にリフォームしますか」

笑顔のアイコン、はしゃぎまわるアイコン、楽しげな感情をあらわすアイコンが円卓の間いっぱい飛び交った。

一緒に肩を並べて遊んでいた仲間たちが少しずついなくなっていく寂しさを振り切るように、残された皆はこのイベントを楽しもうと意気込んでいる。

後からこのことを知ったら、いなくなったみんなが悔しがるくらいにいい式にしたいね。

そう笑いあいながら、善は急げと準備に取りかかった。



「助けてください、モモンガさん」

指輪を手に入れるためのイベントをクリアし、その指輪を二人ではめ合うことでユグドラシルでのふたりは結婚したことになった。皆に祝福される式の予定も間近で幸せいっぱいのはずの男のたわごと、助けを乞われたモモンガは笑顔のアイコンを表示して「リア充爆発しろ」とのたまった。

「あ、すみません。本音が漏れました。どうしましたかウルベルトさん。なにかありましたか？」

「ははっ。酷えよ、モモンガさん。いや、ちょっと聞いてください、明美さんが酷いんですよ」

わざとらしく傷ついた声を上げたウルベルトが、全く酷いとは思っていないのろけのような話しぶりをしはじめたので、モモンガは心を凍らせて間髪入れずに端的に罵った。

「リア充爆発しろ」

「お願いします、俺の話聞いてください」

「ウルベルトさん、それって聞いていると独り身の心が第四階層になりませんか？ ブリザードが吹き荒れませんか？ ダメージが入りそうなのは俺の気のせいですか？」

骸骨が絶望の嘆きをあげるが、山羊は冗談だと受け取っているのか



一切取り合わない。

「何を言っているんですか、モモンガさんはアンデットだから冷氣系じゃダメージ入りませんって。ええとですね、話の本題にはいりませんが、明美さんが設定した子供NPCが酷いんですよー!」

モモンガの聞きたくないという心の叫びに気付いているのかいな  
いのか、ウルベルトは懸命に訴えた。

結婚すると、特定アイテムを手に入れるクエストに挑むことができ  
るようになる。一度挑むと、失敗成功にかかわらず二度と挑戦するこ  
とはできないそのイベントの成功報酬は、子供NPC作成アイテム  
『愛情の雫』という。

子供NPCは、傭兵モンスターよりもキャラ性能に融通が利きAI  
が優秀だ。そして拠点NPCの運用よりもかなり気軽に行えるよう  
になっている。傭兵モンスターののように判に推したような決まった  
姿形やクラス構成ではなく、拠点NPCのように一から自由に作成で  
きる。なおかつ死亡したときの復活に拠点NPCのような膨大な金  
貨を要求されることもない。デスペナルティによるレベルダウンが  
生じるが親プレイヤーのログイン時間に応じた自動復活の機能があ  
り、他にもプレイヤーと同じようにデスペナルティを緩和する魔法や  
アイテムでの蘇生が可能だ。

使い勝手のいいNPCを獲得できることもあり、子供NPCを作成  
できるようになるのは結婚するためのクエストよりも難易度が高い。  
この難易度の高さは、二人だけで挑まなければならぬという条件が  
あるためだのだが、話しぶりからすると問題なく既に終わっているよ  
うだ。

モモンガがギルドメンバーと一緒にお祝いのための準備に奔走す  
るなか、ふたりつきりで楽しく難関クエストに挑んでいたらしい。打  
算のためのゲーム内結婚とはいえ、二人きりで協力して困難に挑むこ  
とで深まる絆があったかもしれない。それによって、データではある  
が子供を得るのだ。

別にウルベルトは悪くはないのだが、モモンガの中にある精神的な  
限界が決壊し、血の滲むような悲鳴をあげた。

「やっぱりのろけじゃねえか！」

ギルド長はいつもの慇懃さをかなぐり捨てて、素に戻って叫んだ。

「いやいや、のろけじゃないんです。これを見てください」

ウルベルトはコンソールを操作し、一枚のスクリーンショットを表示する。

モモンガはウルベルトが指さしたスクリーンショットを見る。オフ会であったことがあるウルベルトのリアルな姿に似ている幼い男の子だ。

ここでモモンガようやく真面目に対応するようになる。

「酷いっていうかネットでプライベートに近い姿をさらすのは問題があるのでは……」

「どうか、問題しかない。個人を特定できるような情報を流すのは安全を考えると御法度だ。」

「明美さん、俺に黙って女性陣だけでNPCの装備品作っちゃったんですよ。この子の装備は完全に明美さんの趣味のコーデイナーなんです。正直言うと、俺の意見も聞いてほしかったです。あ、ちなみにですね、このNPCの名前は明美さんがつけたんですけど、イリ二つて言うんです。悪に拘る悪魔の子としてはあまり相応しくないんですけど、明美さんの子供でもありますからねー。目元は俺に似ているんですけど、口元とか輪郭戦は、明美さんが子供のころの写真を参考にして作っているんです。なかなか可愛いと思いませんか？あ、さすがにこの姿のままは外に出しませんよ。頭部装備で仮面を付ける予定です。クラス構成方針なんですけど……」

立て板に水どばかりにウルベルトが饒舌に話す。

それを聞きながらモモンガは嫉妬マスクをかぶっていないくとも血の涙を流すような思いだった。

二段構えの精神攻撃に、仲間内で攻撃が意味などないことも忘れてあらゆる魔法をウルベルトにたたき込んだ。

「うおおおおお!!!」

温厚な青年の声がドスの効いた雄叫び染みた咆哮となる。

これが、ギルド内で後々まで語り継がれることになる『ギルドマスターモモンガ様ご乱心事件』の全貌である。

2

思いつ話に花を咲かせている最中、ウルベルトと明美の結婚の話になりモモンガは意識を遠くに飛ばした。

忘れていた傷が抉られ、乾いた笑いが漏れる。

「うわ、モモンガさんがなんか怖い」

「貴方のせいじゃないですか、ウルベルトさん」

「たっちが咎めるような口ぶりだからかう。」

「全くもってその通りです、たっちさん」

「えー、なんでですかモモンガさん、選りに選ってたっちさんの味方なんかしないでくださいよ」

態とらしく拗ねた風に言うウルベルトに、モモンガは朗らかに笑った。

モモンガ様ご乱心事件は、大多数の男性陣の意見によりウルベルトが完全に悪いとギルド内の厳然たる多数決により決定し、結局ウルベルトに謝っていない。ウルベルトも謝罪を求めている風でもなかった。彼にとつてあれは仲間内の戯れあい、後に禍根を残すほどのものでもないのだ。

普段、腰が低すぎるほど低いモモンガの堪忍袋の尾が切れたあの一件は、ギルド内でのモモンガへの評価を少し変えた。無論、いい方向に。人を大事にし、遠慮しがちで真面目すぎるのは彼の長所だが、少しでも絡みにくいところがあり、どこか踏み越えにくい一線があった。

温厚なギルドマスターとて、逆鱗に触れられれば怒るのだ。気を使われすぎること逆につつきにくいところがあつたモモンガに対して、他者が感じてしまう垣根をあの一件が大分取り払った。

「あのあとはペロロンチーノさんたちに慰めてもらつて、勢いで敵対ギルドに喧嘩売りに行つて大敗して帰つてきて……懐かしいなあ」

モテない男たちの嘆きと憎しみを原動力にし、綿密な作戦もなしに

本当に勢いだけでPVPを仕掛けたら返り討ちにあったのも、今では懐かしい思い出である。

女性陣には呆れられ、リア充な男たちには大いに笑われ……責任のあるギルドマスターとしてあるまじき失態が本当に情けなく、だが子供のようには大笑いをして、最高の仲間たちとの馬鹿をやったことが本当に楽しかった。

表情の変化はないものの、声に漂わせるしんみりとしたせる空気に、たち・みーとウルベルトは同様に過去に思いを馳せる。そして同時にこいつと喧嘩した思い出が大半でなんかムカついてきた、と表面に出しはしないが険悪な感情を抱いた。

「いやー、ほんと昔はいろいろありましたよ。たちさんがクソツたれセラフイムの罠にかかった時なんて傑作でした。そうでしょう、モモンガさん」

「初見殺しイベントボスに一発で潰されたウルベルトさんのあの情けない断末魔が今でも覚えてるんです。あれは面白かったですよね、モモンガさん」

「え、ちよつと待ってください。二人とも、なんで今までの会話でいきなり喧嘩になりそうになってるんですか？」

モモンガは一触発の二人に慌てるよりも呆れた。

「険悪さが落ち着いたかと思っただが、本当にこの二人はかわらない。」

全く、今日が最後の日だと言うのにこの二人は……

そう、思ってからモモンガは落ち込んだ。改めて考えると、気分が重たくなってしまふ。この楽しい時間は、もう数時間しか残っていない。

最後、ユグドラシルは泣いても笑っても今日で終わってしまうのだ。

昔に比べれば幾分かマシになり、心穏やかに眺めていられる程度の舌戦を繰り広げている二人に気づかれないよう、モモンガは内心悲しい吐息をついた。

寂しい、悲しい、そんな暗い感情が胸いっぱい広がる。

表情が動かない仮想空間のアバターで良かったと、モモンガは嘆息する。そうでなければ、今にも泣きそうな顔に歪んでいるに違いない。

——へろへろさんがログインしました

視界に現れた電子メッセージ。

モモンガは涙が混じりそうな感覚を慌てて引っ込める。

この大切な日に大好きな仲間に失態を見せたくない。

メッセージとともに現れた黒い粘体に向かってモモンガは努めて明るい声で言う。

「お久しぶりです、へろへろさん」



四人は円卓の間にいた。

豪華な作りの部屋には、それにふさわしい造りの巨大な黒曜石の円卓が鎮座している。それを囲むのは四十一の椅子。

繊細な細工で飾られた豪華な椅子は、そのほとんどが空席で、どこかもの悲しさを漂わせている。その空虚さは人の心が離れていつて衰退したゲームの終わりを、如実に物語っていた。

全員が座っていたのは既に遠い過去のこととなってしまっている席が使われているのは、今やたったの四つ。

ひとつは暗夜の威圧を纏う恐ろしい骸骨が座っている。緻密な金と紫の縁取りが美しい漆黒のアカデミックガウンを纏うその姿は、ゲーム内のモンスターとして相対するオーバードなどとは一線を画した魔王の偉容すらあるだろう。

もうひとつは白銀の全身鎧を纏う威風堂々とした聖騎士が座っている。魔王のような骸骨とは真逆の存在感を放ち、見る者に救国の英雄を思わせる姿は座っているだけでも清冽さがある。ギルド内屈指の良心であると皆が意見を一致させるほどの正義感を保つ男。一見して異形とは判別できないが、全身鎧の下には昆虫型の屈強な身体が隠されているのだ。

もうひとつは黒の粘体が座っている。ドロドロとした塊が波のように常に動き、同じ姿を保つことなく表面が蠢いている。

最後のひとつの席には黒髪の男。前者ふたりと違い、異形ではなくただの人間である。抜き身の刀のようにすらりとした瘦躯を黒のトレンチコートに包んでいる。端正な顔立ちでありながら人をあまり寄せ付けたがらない鋭い目つきをしており、きゅつと引き結ばれた唇からはどこか非情な内面が滲み出ているようにも見える。

異形種限定ギルドである「アインズ・ウール・ゴウン」において、男の存在はひどく場違いであった。

不思議そうにするへろへろにこの経緯を説明すると、彼は同情しながら納得してくれた。

「そんなことがあったんですかー、それは大変でしたね。ウルベルトさん」

「最終日にこうやってウルベルトさんに会えて本当に良かったです。三日前のチート誤認の垢BANは本当に焦りました」

恐ろしいな見た目に反して、骸骨の声は実に柔和な声で喜びをあらわす。

「あれは、控えめに言って喜劇でしたね」

くつくつと喉を鳴らし笑うたち・みー。

「なんですか、たちさん。あんたの正義も堕ちたんじゃないですか、人の不幸を笑うなんて。当事者の俺からしてみれば、あらぬ疑いをかけられて最悪だったんですから。まあ、一番大変だったのはモモンガさんでしょうけども……その節は本当にお世話になりました、ギルド長」

感謝を向けられたモモンガは、いえいえと謙遜したそぶりで首を振った。

ギルドにおいて最も悪に拘る男、ウルベルト・アレイン・オードルは三日前に五人で参加したイベントにおいて、魔力攻撃の火力上げまくった《大災厄》を放ったところ運営からチートの疑いをかけられアカウントが削除された。

運営の誤解であるので、そこを徹底的に——最終日間近の垢BANによってゲームへのやる気が完全に折れたウルベルトに代わり、ギルド長であるモモンガが——責め立てて、悪魔のキャラは取り戻せな

かったもののなんとかこうやってゲームにログインできるまでに至ったのだ。なにせ、終了が決まったゲームなので、新規を受け付けていない。現行のアカウントが削除されてしまうと、最終日に顔を合わせる事が不可能になってしまうのだ。モモンガは文字通り死ぬほど忙しい仕事の傍ら何回も運営とメールを取り合い、苦勞の末にウルベルトの新アバターを獲得したのだ。

「笑うな、と言われましてもね、ウルベルトさん。運営の無能さには失笑がもれます。後付けの結婚関連の支援とワールドアイテムの相乗効果が、運営の想定を超えていたからといって、チート認定はないですわね」

たっちは明瞭な声で続ける。

「火力特化型のガチビルドと装備、結婚指輪の壊れ補正と子供NPCからの支援効果、モモンガさんからのバフ魔法とスキル、ステータスアップの使い捨てアイテム。そこにバランス崩壊上等のワールドアイテムを突っ込むと……いや、本当にすごかった。最後になんに見事なものを見せてもらって感謝しています、ウルベルトさん」

珍しくウルベルトを褒めるたっち・ミーにモモンガとへ口へ口が驚き、それ以上に褒められたウルベルトが驚きたじろいだ。

「感謝って、あのくらいでさ……たっちさん、あんた。なんですか、それ、ほんと大げさですから」

声が随分と上ずり、なんか変なものでも食べたんじゃないですか、と言う悪態にいつもの覇気がない。

「何を言ってるんですかウルベルトさん、貴方らしくもない謙遜ですよ。大げさとは思いませんか？ ワールドエネミーにぶつけてみたかったですね。ワールドエネミー最小人数攻略記録を更新できたんじゃないでしょうか」

たっちの賞賛に新手の嫌がらせかよ！ とウルベルトが吠える。本気で嫌がってるのではなく、とてつもなく照れている。

「本当にすごかったです、ウルベルトさん。あの破壊力はギルド内どころかゲーム内でもトップクラスでした。みんなにもお見せした

かったなあ」

モモンガがとどめのように褒めちぎると、ウルベルトは頭を両手で盛大に掻いた。表情が動いたら、大いに照れている彼を見られたのだろうと思うとなんだかおかしい。

運営がゲーム終演を飾るために用意した渾身のイベントボスをもの二発で撃破した光景は、まさに圧巻であった。これが全盛期に起こった出来事であれば、ゲーム内に激震が走り伝説となった出来事であろう。

かつて1500人の襲撃者たちがチートを連呼した第八階層のあれらをゲームとして正当として認めた運営が、バランス崩壊前提のワールドアイテムというものを作ったあの運営が、思わず垢BANしてしまいうくらいに圧倒的な短時間総与ダメージであった。

ギルドメンバーがそろっていれば、ウルベルトの最後の結末も含めて盛大なお祭り騒ぎになったはずだ。

「あの火力をもう見られないのは残念ですね。アカウントだけじゃなくアバターも取り戻せたら、最終日イベントにでも乗り込んで《大災厄》を放って悪役ギルドらしく最後を終わらせられたんだろうけど」正義の味方を目指した男のセリフとは思えぬ言葉を吐くたつちに、昔と変わらぬ良識と常識人らしさでたつちの物言いに苦笑した。

「運営としてもそうされるのが怖いから、ウルベルトさんの元のアバターを返さずにレベル1の既存NPCから選ばせたんでじゃないでしょうか」

運営主体のパレードをメインとしたまさにお祭りイベントはそのフィールド限定で攻撃行動不可になっているが、そういった場所以外でも掲示板などの呼びかけで集まって楽しんでいる者たちがいる。迫り来る敵を倒すイベントもゲーム内のそこかしこで行われている。運営のミスで削除してしまったキャラを復活させるのはある意味仕方ないこととはいえ、そのイベントをぶっ壊しかねない存在を最終日に野放しにすることは、かのクソ運営でも流石にできなかつたらしい。

悪名高きギルドに所属し、なおかつその中でも実力者としてそこそ



こ有名だった弊害なのだろう。ウルベルト・アレイン・オードルという男には、本人にその意思がないと必死に言い募ろうが、記念すべき最終日になにもしてかさないという信用がなかった。

ワールドアイテムを使用していたとはいえ、違法改造のようなダメージを叩き出したウルベルトにたいしてどのような協議がなされたかは推測しかできないが、レベル100のウルベルトのアバターを復活させるのは危険、と判断されたのだろう。ワールドアイテムや、各種装備を喪失した状態でアカウント復活させれば簡単に回避できる問題なのではと、一介のプレイヤーである三人は思うのだが、運営は念には念をいれたようだ。

運営の意図せぬ状況を作り出さないように、言いがかりでしかない様々な理由をつけて最終日に使えるアバター制限をかけた。

最終日にログインするアバターを何種類か用意し、そのひとつを選ばせる手法をとったのだ。レベル1に逆戻りしたうえに、種族を選ばせる自由すら与えてくれなかったらしい。ウルベルト曰く「せめて異形種のひとつくらい入れておいてもいいのに、全部人間種でしたよ！しかもこれ以外は無駄にキラキラしてとてもじゃないけど選べたもんじゃありませんでしたね」と、わざとらしくぞつとしたそぶりを見せるような選択肢しかなかったらしい。

賞賛地獄の流れを変えたいのか、ウルベルトがなんか厨二病患者がやりそうな格好いい？ ポーズをおもむろに行う。

「流石の私も、無知蒙昧な人間種とも相手といえども最後の貴重な時間を壊すような無粋な振る舞いをするつもりはないのですが」

山羊の悪魔のときは似合っていた慇懃なロールプレイが、今の姿だと非常に滑っている。滑稽と言ってしまったてはいけないのだろうか。我慢しきれずにモモンガはつい吹き出し、へろへろも小さく笑い、たつちは態とらしく腹を抱えて笑った。

「たつちさんはともかくモモンガさんにへろへろさんまで、酷いですよ、そこは笑い耐えて一緒にのつてくださいって」

ウルベルトは無然とした様子でたしなめる。本気で言っている訳ではないのは雰囲気伝わった。しかし、真面目なギルド長はすみませ

んと慌てて謝る。わざとらしい咳払いのち仲間内との悪ふざけで培った渾身の魔王ロールを遅まきながら演じる。

「ウルベルトさんの言う通り、残りの少ない大切な時を、忌々しい人間共に関わって浪費したくない。大切な思い出が残るこのナザリツクで、玉座の間で最後を迎えようと思っっているのだが、みんなはどうだ？」

本当ならば、どうですか？ と下手に出てお願いしたいのがモモンガの本心なのだが、ロールプレイに任せて偉そうに言ってしまった。その内心はかなり冷や冷やしている。

「モモンガ卿のご意志に従いましょう」

王に従う騎士のようにたっちは優雅に応え、

「ええ、それはいい。こればかりは同士に賛成ですよ。モモンガさんの最後を側で飾るには、あまりにも貧相な姿なので私としては非常に心苦しいのですが。このような形でよければ喜んでお供いたします」  
ウルベルトは嬉しそうに返してくれる。

「あ、えと、せっかく来たし私も最後までいようかな」

へ口へ口はためらいながらも承諾してくれた。

### 3

ちよつとした企みがあつてモモンガはギルド武器を携えて四人で玉座の間に向かった。

メッセージでたっち・ミーの妻であるリーザと娘のミーシャを呼び、ギルド武器の権限でこつそりとイリニを玉座の間に呼び出す。

ちなみに、本来であれば異形種しか所属できないギルド《アインズ・ウール・ゴウン》であるが、人間種になってしまったのは不可抗力の理由があることと、最終日であることもありウルベルトはそのままギルドの一員として終わることは多数決で決まっている。

既に姿はないが、モモンガからのメールもあり顔を出したギルメンたちも「今さら、そんなことでギルドから出ていけなんていえる資格はありませんよ」「オレ達がここにこれない間、ずっとモモンガさんを支えていてくれたウルベルトさん追い出せるはずないって」「ギルメ

ンが楽しく遊ぶための縛りでしたし、それがギルドのみんなにとつてマイナスになるならばいいらないルールだと思っんです。残っているモモンガさんたちが悲しい思いまでして、みんなで決めたルールを守る必要はないって、断言できますよ」と快く、そして今まで全く沙汰のなかったことを申し訳なさそうにしながらウルベルトの存在を認めていた。

玉座に向かうまでの間、たっちはへろへろにリーザとミーシャも来ることを説明した。

「へー、今日もたっちさんの奥さんと娘さんが来てるんですか」

実はたっちには内緒である事を進めているため、今日も滞在している事を知っていたへろへろだがモモンガたちのサプライズに協力するために初めて知ったような素振りでうんうんと応えている。

「はい。いつもは夜更かしは禁止しているんですが、今日だけは特別に。昼寝はたっぷりしたから、きつと今も元気にはしゃいでいます」  
お気に入りの第六階層に、これまたお気に入りのNPCセバスやエルフ姉弟を従えて遊びまわっているだろう。

ギルドに所属していない妻と娘を頻繁に出入りさせていることに後ろめたさがあるのか、たっちは申し訳なさそうにしている。それに関してはたっちには内緒でウルベルトと一緒に画策していることがある。こちらの件も、たっちを除くギルドメンバーには許可を取って根回し済みだ。最終日なのだ、ウルベルトの件と同様、ギルド内ルールを破っても、罰は当たらない。臨機応変とは素晴らしい言葉だと、モモンガは後ろめたさから完全に開き直って晴れやかに内心で微笑んだ。

雑談をしながら目的地向かっていると、へろへろの黒い粘体の挙動がおかしくなった。アバター越しでも見ていると不安になるヨタヨタ、よろよろとした擬音がつきそうな動きが、一転する。道の途中で待機しているメイドを見るや否や、過去の情熱を思い出したのかへろへろがそれまでの疲れを忘れたかのように盛り上がりつつ語り出し、勢いが止まらなくなったのだ。「メイドさんこそ至宝!」「この子達のデザインも本当にこだわって、こだわり抜いて……もっというんなメ

イド服を作ってあげたかった！　なんで今日でユグドラシルが終わってしまうんだ！」泣き出さんばかりにメイドの足元の床にへばりつき、このまま動きそうにならないへ口へ口のために彼女たちも最後を飾る玉座の間に配置することにした。

「せっかくだし、守護者たちも玉座の間に配置しませんか？　まだ時間がありますよね」

たっちの提案に、

「うーん、いいですね、その方がそれらしくなりますから」

モモンガは即座に答えた。設定を変えたアルベドとイリニのみを相手にする予定であった、ある計画。その計画に一枚噛んでいるたっちの提案に、モモンガはそれはいいと頷いた。

素早くギルド武器で設定画面をいじる。まだ時間はあるから、これで守護者たちも玉座の間に集合するはずだ。

せっかくだから、最後は最強装備で締めくくろうという話になり、装備を整えた三人を見て、

「最強装備いいなあ。俺、レベル1だから元の武装が装備できない」  
うらやましそうにウルベルトがぼやく。

ワールドアイテムを含めて当時の所持品もともに復活した。しかし、レベル制限にひっかかって最強装備を身にまてえないのだ。

仕方ないので、イベントNPC用に作られている黒いトレンチコートやそれに合わせた上下の衣服とブーツを着たままにしている。上級に分類される物の中では破格の性能を持つ物だが、ウルベルトが所持している神器級の武装と比べるにはおこがましいものだ。せめてと思いい装備した宝石で飾られた半仮面とて、最強装備の装飾品にはほど遠い。

そして両手の指にあるのは、ギルド内を自由に行き来できる指輪と、結婚指輪だけだ。

かつては十本の指すべてに指輪がはまっていたが、現在キャラにかけた課金が無効化されて左右一本ずつしか指輪が装備できないようになってる。

スタッフ・オブ・アイنز・ウール・ゴウンに相応しい装いを、と

意気込んで完全武装するモモンガ。それに触発されてより一層勇壮で美しいワールドチャンピオンが纏える鎧に着替えたたち・みー。古き漆黒の粘体の姿が、さらに悍しくなって見えるような黒い霧を纏うへろへろ。

その側に立つにはちよつと見窄らしいとウルベルトは珍しく肩を落としていた。

「コートの下にワールドアイテム隠さないで、見えるように装備するのはどうでしょう。『黄金豊穰の宝鍵』はワールドアイテムなだけあって、外装がとても作り込まれていますからね。それを見せるようにするだけでも、大分違うのでは？」

そんなウルベルトに同情したのか、たちが助言する。

名称には鍵とあるが、形状は宝石飾りである。小ささまざまな大きさの虹色の輝きを閉じ込めた真球の宝石が、幾重もの房となって緻密に作らせた帯状の金属細工の下で繊細に揺れている。ウルベルトはそれを腰に巻き、コートで隠していた。

黄金に染まる豊穰のように魔力を常に溢れさせている、という設定のアイテムで魔法効果を莫大に底上げし、かつ課金アイテムがなければ使い物にならないとされる超位魔法の詠唱時間を（課金アイテムほどではないが）極限にまで短縮できる。二十四時間の間に回数が制限されているが、十階位までの魔力系魔法のスクロールとして使用することも可能だ。

「ええ!? ワールドアイテムをまたゲット出来たんですか？ 凄いやないですか!？」

「みんなゲームを引退していくからギルドを解散するからと、明美さんが所属していたギルドのワールドアイテムを貰い受けたんですよ」世界に数少ないワールドアイテムを持っていることに驚くへろへろに、ウルベルトは説明した。彼は話しながらたちの助言に珍しく素直にうなずき、コンソールを叩き装備を調べなおす。

そんなウルベルトを見ながら、たちはそれにしても、と何か思い出すように顎に手をやり思案する仕草をした。

「先ほど貧相な姿、とウルベルトさんは先ほど言っていましたけど、その

アバターってどことなくどころかりアルの貴方にかなり似ていますよね、自虐ですか？」

「ゲーム内のウルベルトと比較すると確実に貧相ですし、リアルと比べても細いですよ。リアルの俺はもつと筋肉ついてますから。視力下がってませんか？　なんであれが自虐になるんですか？」

「親切な助言の後にわざわざ指摘してくるたつちに、ウルベルトはふんと不愉快そうに鼻を鳴らす。

確かに似てるよなあ。とモモンガも思っていた。オフ会で会ったことのあるリアルの彼とアバターは目鼻立ちが似ているのである。ぱつと見たときはつきりと違いが、全体的な体の線がアバターだと華奢であることくらいだ。

しかし、ここで声に出してたつちに賛同すると、ウルベルトが不快な思いをしてしまうかもしれない。というか、後々拗ねかねない。

ここで喧嘩されて今度たつちの家で予定しているオフ会の空気が悪くなってしまったら困る。それはもう非常に困る。

少しばかり険悪になってしまった空気をかき消すために、モモンガは必死に話題をそらす。

「あー、もしかしてそのアバターも魔法職なんですか？　運営が準備したNPCが元のアバターなんですよね？　何か特別なクラスやスキルを持つていたりするんですか？　レベル1だつて言うのはお聞きしたんですが、詳しくはまだ聞いていなかったのよ」

「これのクラスですか。人間種専用のクラスみたいですよ。クラスは《ヘラルディスト》、レベルは1。紋章に隠された力を解放して戦うクラス、だそうです。分類としては、一応魔法詠唱者ですね」

モモンガの問いに、ウルベルトは険のある空気を潜め、コンソールで調べながら丁寧に答えてくれる。

「へえ、初めて聞きますね。まだ発見されていないクラスとか、取得が難しいクラスだとかだつたりするのかな」

「どうでしょう、人間種専用クラスなんて強力なやつしか覚えていませんかね。このクラス、結構微妙です。ガチビルドの上位陣プレイヤーなら取らないんじゃないでしょうか。ユグドラシル上に存在す

るなんらかのマークをバーコードリーダーのように読み込んで、マークに応じた攻撃やバフ、デバフ、回復効果が出る、と。ひとつのクラスで様々なことができるけれど、その分特化したクラスの能力には及ばない、器用貧乏クラスですね。まあ、便利ではあると思いますけど」

コンソールで自らのクラスを詳しく確認しているのか、目で画面を追っている。そのときウルベルトが小さいながらも驚きの声をあげた。

「あ」

「どうかしましたかウルベルトさん」

モモンガが心配そうに声をかける。

「いや、なんでもありません。運営の謝罪のつもりなのかは知りませんが、ワールドデイズスターもレベル0の状態で保持していたので、ちよつと驚きました」

特殊な方法でしか取得できないクラスをレベル1アバターが所有していたことに、ウルベルトは素直に驚いていた。

「宝の持ち腐れってやつだなー。ちっ」

これから終わるゲームで最強クラスを保有しているようがなんら意味はないのだが、ウルベルトは悔しそうにしている。悪に拘ってロールプレイしていたウルベルト・アレイン・オールドルというキャラクターを最も相応しく彩ったワールドデイズスターというクラスに思いいれがあるゆえに、クラスに相応しくない雑魚のまま終わることに未練があるのだろうか。

話しているうちに巨大な階段を下り終わり、最下層へとたどり着く。

階段を降りきると周囲には襲撃者を迎える広間となっており、そこには複数の影が待機していた。

へロへロたちメイド好きが、時間とお金と情熱を注ぎ込んで作り上げた傑作たち。プレアデスター

「ソリユシャン……」

自身が作ったNPCと久方ぶりに会って、感きわまるへロへロ。

「私、馬鹿なことしたなあ」

独り言のようにこぼす。

「今更になつて、ここに来れなかつた時間があまりにももつたいなかったって、後悔してる」

泣き言のように小さくこぼれ落ちた言葉に、モモンガの胸が詰まる。

そう、言つてくれる仲間がいてくれた。

それだけで、自分が注いできたもの全てが報われる気がした。

来なかつたことを後悔してしまうほどの場所を、最後のこの瞬間まで残すことができたのだ。

それはきつと、誰に理解されなくても、誇つていいことだ。

4

仮想空間であることを理解していて尚、圧倒される光景が広がる玉座の間。

ここに辿り着くまで、軽口を叩き合っていた面々だが、扉を開けた瞬間に一変した空気に飲み込まれるように神妙に押し黙り、感嘆の嘆息をこぼした。

つい最近訪れたばかりの場所であるが、モモンガはそれでも慣れずに空気に飲まれる。

圧倒的な力持つ者の居城であると知らしめる広大で荘厳な部屋。巨軀を持つ異形であろうと届かない、見上げるほどに高い天井。天井から吊り下げられた絢爛豪華なシャンデリア。シャンデリアの宝石の光が生み出す美しい輝きを、精緻な金細工で飾られた純白を基調にした壁が反射する計算され尽くされた美しさ。

壁にかかった四十三の旗に、モモンガは満足気にうなずく。

この仕込みのために、ぶくぶく茶釜とペロロンチーノ姉弟、やまいこや武人建御雷、二式炎雷それに加えてウルベルトにも協力してもらったのだ。旗に描かれるシンボルデザインから始まり、旗を作りにあたり足りない素材を集め、製作系クラス持ちがいなかったため他所のギルドに手を借りるための手配、旗の配置を変更するため全体的なバラ



ンスの見直し、かなり大変だった。

だが、その大変さに見合う結果になった。

最初からここにあったかのように、玉座の間に馴染んでいる。

たっちは玉座の間の変化には気づいていないらしい。ウルベルトと黙って顔を見合わせる。多分、顔が動けば悪戯の成功を心待ちにする子供のようになっているはずだ。

玉座の間にメイドたちを引き連れた四人が辿りつくと、続々とNP Cたちがやってくる。

たっちの妻であるリーザと娘のミーシャも、セバスと六階層の守護者たちを伴い玉座の間に到着した。

リーザは部屋に入るなり圧倒され、どこでも元気にはしやぎ回るミーシャも、今までいた場所とは全く違うと全身を威圧するような玉座の間の空気に呆けた様子で固まった。ここはおいそれと声をあげていい場ではない、そう小さな子供にすら理解できてしまう荘厳な間――

そんなふたりにモモンガは歩みよる。

「今日は来てくださってありがとうございます、リーザさん、ミーシャちゃん」

「モモンガおじさん！ 今日招待してくれてありがとうございます！ とつても楽しかったよ」

子供の屈託のない感謝に、心の中が暖かくなる。

子供って本当にいいなあとしみじみと感じる。だがそれと同時に、我が子どころか結婚、そもそももつと前段階の恋人という存在と全く縁のない生活を送っていることに少々のわびしさを覚えてしまった。

へ口へ口の紹介も簡易に済ませると、リーザはおずおずと礼を告げた。

「いえ、大事な日なのに私たちもお邪魔させてもらってこちらこそありがとうございます。夫や娘とこうやって遊ぶのは本当に楽しくて……それが、今日で終わりだなんて、なんだか寂しくなりますね。でも、友達同士での集まりに、本当にお邪魔してよかったのかしら？」

「もちろんですよ。お二人にも来てくださらないと――それで、その

ことなんですが」

モモンガはちよつともつたいぶつて間を置く。

「ーあの、旗を見て欲しいんです。壁に掛かっている旗なんです、ギルドメンバー全員のイメージからそれぞれの文様をデザインして、あしらっているんですが、今まで旗は四十一ありました」

あ、と声をあげたのはたつちだ。

旗を見てもなにを伝えたいのか意図がまだ理解できないリーザは首を傾げる。

「今、あの旗は四十三枚、飾られています。サプライズをしたかったので、旗のデザインはお二人の意向を無視してしまっただけですが気に入っていただけると嬉しいです」

「あの、モモンガさん、もしかして」

声が動揺で上ずっている。

たつちの斜め後ろに立ったウルベルトが無言でサムズアップしていた。

へろへろは笑顔のアイコンを浮かべている。

「今まではギルドのルールがあつて今までお二人をギルドメンバーに迎え入れられませんでしたが、今日はユグドラシル最後の日。杓子定規にならずに、全員が楽しく終わろう、ってみんなで決めたんです」  
その“みんな”が四十一人全員でないことに寂しさを感じるが、ほとんどメンバーが集まらなくなり解散して消えていくギルドが多い中、一緒にゲームを遊んだ仲間と一緒に最後を飾れるのは僥倖だろう。

「リーザさんとミーシャちゃん、二人にアインズ・ウール・ゴウンの一員になってもらいたい。ギルドを代表して、スカウトさせていただきます。今までこんなにギルドに貢献してもらったのに、最後までお客様扱いはしたくないんです。あの、お嫌でしたか？」

恐る恐る問いかけるモモンガに、リーザは首を振る。

「嬉しいです、とつても」

社交辞令ではない、感情がこもった柔らかな女性の声。

モモンガは安堵の息を吐きながら頬を緩める。

「ええと、ミーシャもパパと仲間になれるっていうこと？ 子供だから、ミーシャはギルドつていうのに、入れなかつたんだよね？」

「そう、ミーシャちゃんも、たっちさんや俺たちの仲間になってくれな  
いかな？」

「うん！ なりたい！ 仲間に、なるよ！」

力一杯頷く。

「あれがミーシャちゃんの旗だよ。そして、隣の旗がリーザさんの、お母さんの旗だ。反対側が、たっちさんの旗。」

モモンガが指し示すと、ミーシャは一瞬固まった後飛び跳ねて喜んだ。

「可愛い！ 素敵だよ、モモンガさん大好き！」

予想以上に喜んでくれて、モモンガは相手を崩した。

「おれだけじゃなくて、ペロロンチーノさんや茶釜お姉さんに、やまいこお姉さん、武人おじさんに式式さん、ウルベルトさん、みんながミーシャちゃんたちのために作ってくれたんだよ」

「良かったね、美沙。ありがとうございます、モモンガさん。それと、ウルベルトさんも」

落ち着きなく旗を指差し母親と父親に視線を移動させて可愛いと連呼している。そんなミーシャと娘を見守るリーザの肩に手をおき、たっちは頭を下げた。

「別に、あんたのためじゃありませんから。お礼を言われる筋合いはないです。モモンガさんにも頼まれちゃいましたし、ミーシャちゃん  
とリーザさんのためです」

「ウルベルトおじさんもありがとう！ ペロロンお兄さんも、茶釜お姉ちゃんも、みんなみんな大好きだよ！」

誰も得しないおっさんのツンデレは幼い少女の大好き発言によって穏やかに流され、微笑ましい空気に満たされる。

（あんた、馬鹿だよ。ペロロンチーノさん。なんで今日、ここにいないんだ）

ミーシャの発言を聞いたら一番狂喜乱舞して喜びそうな男の不在を心の片隅でぼやく。

「たっちさん、お礼を言われることじゃないんです。むしろ、ルールに縛られずにもっと早くしていれば良かったなって思っています。俺が意気地が無いからこんなギリギリになるまで言い出せなくて、謝って礼を言わなきゃいけないのは俺の方なんです。だって、リーザさんとミーシャちゃんは、私たちの大切な仲間なんですから」

「そう言ってもらえると、すごく嬉しい。なんだか、面映ゆくなっちゃいます」

「仲間！ 友達！ ギルド！ モモンガさんともウルベルトおじさんともへ口へ口おじさんともみんなと友達っ。アウラお姉ちゃんともマールお兄ちゃんも仲間で、お友達なんだよ。ずっとずっとお友達なの。もう、会えなくなっても、大切な友だち。絶対に忘れないんだ」  
明るさの中に誓いをにじませる少女。

（会えなく、なるんだよなあ。分かってても、覚悟してても辛いよ。終わりがあ、なんで終わるんだよ。こんなに、楽しくて幸せで仕方ないのに）

二人の加入の操作をしながら、落ち込んだ気分を出さないよう努めて明るく振る舞った。

玉座の間がNPCたちで埋まっていくにつれ、モモンガは目眩のような感覚を覚えた。

仲間がいて、自分の我儘にも付き合ってもらって、幸せなはずなのにこの現実から目を逸らしたい。

終焉がひしひしと近づいてくる。

時計を見たくない。

でも、終わるからには綺麗に終わらせたい。

みんなが笑えるように。

とても大切な思い出になるように。

ユグドラシルで過ごした時間は宝物だった、とそう言いたい。そう仲間達に言って欲しい。

「もうそろそろ、ですね」

名残惜しげなたっちの声、突きつけられた現実に胸が潰えるような気がした。

「モモンガさん、ほら貴方がそこに座らないと締まらないって」  
ウルベルトが玉座を指差す。

「そうそう、あの玉座に相応しいのはモモンガさんしかいないんですから」

へろへろが同意する。

「さあ、モモンガさん、玉座に」

たちも促してくる。

部屋の最奥にある玉座。ギルド発足以来、そこはモモンガの座るべき椅子と定められた至高の座。

仲間に薦められ、階段を上がり、モモンガは玉座に座る。

さて、終わりを始めるとするか。

ふう、とため息をつきスタッフを強く握る。

ここからが正念場だ。

役になりきるのが恥ずかしいなど言ってられない。

変に羞恥心が混じると、かえって格好悪くなる。

最高のロールで、感動的に締めくくるのだ。

ペロロンチーノさんとも約束したではないか。絶対に格好いい魔王ロールで最後を飾ると。

だが、土壇場になってモモンガは気付いた。

（あれ、でも別にロールしなくても良くないか？）

調子よく煽ててくる今はここに集まれなかった仲間たちにその方が絶対にいいよ！ と勧められて勢いで頷いてしまったが、いざ聴衆

（ほとんどが意思のないNPCだが）の前に一人だけ座ると、経験したことのない緊張が襲ってくる。

（なんで俺一人だけ座って、偉くもないのに偉そう……でも、何か喋らないと間延びするし、時間もなくなるし、ええい、ままよ！）

モモンガは大事な場面の寸前に襲いかかってきた羞恥心をかなぐり捨て、話し始める。

「皆、今日はよく集まってくれた」

（まだ小さいミーシャちゃんには退屈だろうし、リーザさんはロール

プレイだなんてよく分からないだろうからドン引きされるんだろう

から」

「皆、今日はよく集まってくれた」

（まだ小さいミーシャちゃんには退屈だろうし、リーザさんはロール

プレイだなんてよく分からないだろうからドン引きされるんだろう

から」

な。でも、あと少しの間だけお付き合ってください、すみません」

心の中で二人に土下座した。

「今日、<sup>ユグドラシル</sup>世界はついに終焉<sup>おわり</sup>を迎える。いかな隆盛を誇ったアインズ・ウール・ゴウンとてそれは免れえぬ。このままであれば世界の消滅と共に、過去の栄光もろともナザリックは消滅するだろう」

できうる限り、厳かな声というものを意識する。

しんとした玉座の間にそれは思いのほかよく響く。

滑りそうな時はモモンガをけしかけた者たちの一人でもあるウルベルトがなんとかカバーしてくれることに期待しながら、必死に考えた台詞を脳内で反芻する。

「しかし、それを許す私たちではない。最愛の我が子でもあるシモベたちよ、お前たちまで崩壊に巻き込まれることは決してさせない。私たちアインズ・ウール・ゴウンの大秘術を持ってユグドラシルとは違う別の世界に転移してもらう」

大秘術とは何か？ と問われたら、モモンガは知らんと答えるしかない。単なる雰囲気作りの勢いである。こう、それっぽい何かになりさえすればいいのだ。

要は、このままNPCたちのデータが消えてしまうだけなのは惜しく、悔しく、悲しいから、彼らは消えるのではなく、これから別の世界に行つて俺たちの代わりに一大冒険活劇を繰り広げるんだよ！ という妄想を過剰なまでに仰々しく語っているのだ。

意思の持たない者たちが消えていく者たちが、その悲しさなどわかるはずもないから、これは残される自分たちのための儀式。

NPCたちがまるで生きてるように振る舞い、『俺たちの冒険はまだまだこれからだ！』を彼らにさせて、ユグドラシルが終わった後も、彼らは消えてしまうのではなく、別の世界で生きているのだと考えることで喪失を紛らわせ癒すのだ。

「転移した先がどのような場所かは、私たちを持ってしても分からない。だが、お前たちであればどんな場所であろうと、ナザリックの名を知らしめてくれると信じている」

モモンガはギルド武器の権限で設定画面を開き、予め用意していた

データを素早くペーストする。

子供NPCには、プレイヤー不在時のギルド管理代理能力というのが搭載されている。

敵襲による破壊したギルド内の修復、NPCの復活、罫の配置変更、スキルに応じたギルド維持のために必要な金貨の精製など様々な項目がある。

プレイヤー人口が少なくなり、ギルド管理が困難になってきたが故に後発的に搭載されたこの機能は、拠点NPCは持つことができないものだ。

ウルベルトの子供NPCであるイリニに譲渡できる権限を、最大まで拡張する。

「イリニよ、此方に」

モモンガの命令により、イリニが壇上に上がり跪く。

「このナザリックを、私の宝を、私たちの宝を、お前に託そう」  
「え」

最後は魔王ロールでNPCに未来を託すような演出にすることは共に計画したが、イリニに関することは全くの寝耳に水だったウルベルトは、呆気にとられた声をあげた。

「このナザリックの象徴とも言わべきスタッフ・オブ・アインズ・ウル・ゴウン。今日からお前がこの杖の所有者としてナザリックを治めるのだ。そしてシモベたちよ、よく聞け。イリニは見てわかるようにまだ幼い、この子を支え、守り、教え導き、育み愛してやって欲しい。これは命令ではなく、私たちからの願いだ。よくよく心がけて欲しい」

(ふふ、驚いてるなあ。ウルベルトさん。後でみんなの動画見たらどんな顔をするかな)

自分一人だけ、しかも大勢の前でロールさせるのは酷くないか？

とモモンガごねて、ウルベルトには秘密で製作者からNPCに未来を託すロールをしてもらっているのだ。シナリオは一本、『これで最期のお別れになるけれど、新天地で頑張っ欲しい。イリニがナザリックを継ぐから、幼いあの子を支えてやって欲しい』という感じの内容

だ。これに関してはたつちにも協力してもらっているので、最終的に巻き込み事故にあったモモンガ自身を含めて、全七本の動画が作成された。

(ウルベルトさんが、未来を託すロールを一番して欲しがってたからなあ。俺も、NPCが消えるのは悲しいけど、俺は、みんなと遊べなくなるのが一番悲しい辛い。でも、ウルベルトさんは、イリニとデミウルゴスに会えなくなるのが一番辛いんだろうな。なんだか、イリニには思い入れがあるみたいだし……)

ウルベルトがゲームを続けていた理由がNPCの二人であるのならば、ユグドラシルが終わってもみんなと会えたり違うゲームで遊んだりする手段がある自分よりも彼のほうがずっと辛いはずだ。

(違う世界でも我が子が大切にされている。そう思えたなら、ウルベルトさんの気が、少しでも軽くなるといいな)

「私たちは共に行けぬ。だが、何処であろうとどんな時であろうと、お前たちの幸せを願っている」

ちら、ちら、と眼下にいる仲間たちに視線をやり、モモンガは彼らにも何かいうように促す。自分だけ話しているのもそろそろ辛くなってきた。察してくれたのだろう。たつちたちは壇上に上がってくれる。

「セバス、あとは任せた。ナザリックの風紀を守れそうなもの数は数少ないからね、とても大変だろうけれど君の働きに期待している。みんなも、セバスをあまり困らせないでくれると嬉しい」

「ソリュシャン、みんな、なかなか会いに来れなくてごめんね。信じられないかもしれないけど、君たちは私の大事な宝物だ」

「じいじい、アウラお姉ちゃんマーレお兄ちゃん、猫ちゃん、今までありがとう、楽しかったよ、バイバイ」

「美沙が笑えるようになったのは、あなたたちがいてくれたおかげ。本当にありがとう」

リーザやミーシャまで一緒にNPCに声をかけてくれた。このノリに付いてきてくれるなんて、と感動する。

ウルベルトは少し黙ったあと、イリニに近寄って何事か耳打ちし、



デミウルゴスに向かって口を開く。

「デミウルゴス、あとは任せた。どんな困難な状況に直面しようとなにひとつ間違はなく動けることを確信している。それだけの力があると俺は知っている。有した知識になんら間違いないことを、俺は分かっている。俺はお前に期待しない。なぜなら、必ず結果を出すことを知っているからだ。曖昧な『期待』なんていうものをかける無駄なことはしない。だが、それは悪魔という異形にとっただけ正しい結果だということをお忘れな」

（なんか格好いいこと言ってる！　すごい！　これが真の厨二病の渾身ロール）

ウルベルトの内心の悲しさへの同情も吹き飛び、一瞬、本気で感心してしまった。

すぐに気を取り直し、最後のメに入る。視界の端にある時計を確認する。

あと少ししかない。

「さて、最後の命令だーお前たち、アインズ・ウール・ゴウンを不変の伝説とせよ」

この台詞の次は、たちとウルベルトの合の手が入る段取りになっている。

「アインズ・ウール・ゴウンは、永遠に不滅なり！」

「アインズ・ウール・ゴウンこそ、世界の絶対者なり！」

「アインズ・ウール・ゴウン万歳！」

「アインズ・ウール・ゴウン万歳！」

「アインズ・ウール・ゴウンばんざい！」

ミーシャまで混じってくれた。

へろへろの声も重なる。

リーザの声も。

たちとウルベルトが、互いに負けてたまるかとばかりに声を張り上げている。

モモンガも声を上げる。

こんなに無我夢中で叫ぶように声を出すのは、ギルドホームを手に

入れるあの時以来かもしれない。

終わる。

終わるのだ。

おわ、

57、58、59、00

01、02、03、04

らない？

「父様！どこに行ってしまったのですか!? 父様あ！」

どういうことだと、訝しみコンソールを叩くよりも先に、聞いたことのない子供の悲鳴が聞こえた。

ありえないはずのことが起こっている。驚きと困惑に胸中がざわつくが、感情のうねりがある一定のラインを越えようとすると、勝手に鎮まっていく。モモンガは自分が自分ではないと錯覚するような冷静さで、その声の発生源を見つめた。

子供が、固定された表情でただずんでいただけの小さな男の子が、不安げに眉を潜めて目尻に涙をためて父親の姿を求めている。

小さな体には不釣り合いなスタッフ。モモンガが先ほど渡したばかりの杖を持った、作られた存在が、このように泣き叫んだりしたりしないはずの存在が、それを一生懸命に抱えながら、泣いていた。

## 異変

思考が停止していた。

何が起こっているのか分からなかった。

いわばゲーム内のマネキン人形のようなNPCが感情を表わし、声をあげている。

へろへろほどコンピュータ技術に詳しくは無いが、これほど豊かな表現が今の科学技術を持ってしても非常に難しいことくらい知っている。

「モモンガおじさま、父様がない、いないんです！　どこに行ってしまったのですか!?　皆、僕たちを置いてどこに行かれてしまうというのですか!?　嫌です、置いて行かないで！」

希求する小さな子供。懸命に訴える寂しさに染まった瞳に、モモンガは息を飲む。こんな“目”をコンピュータが作り出せるはずがない。

この事態を一発で説明できる理由があるとすれば、ゲーム終了間際に寝落ちしてしまって、寝る寸前までの妄想を夢に見てしまっているかもしれない、という状況。

だが、明瞭すぎる意識がこれは夢ではないとはつきりと告げてる。

では、今この状況は一体どういうことなのか？

モモンガはさして良くない頭を忙しなくフル回転させる。

子供NPCが父と呼ぶのは、おそらくウルベルトのことだ。モモンガは骸骨の中に闇が灯ったような眼球のない眼窩あたりを見やる。いない。

ウルベルトだけがいない。

ギルドメンバーがいる。NPCもいる。だが、瞬きの間にウルベルトだけが姿を消してしまった。

それを頭の中で明確に意識した瞬間、途方もない喪失感に訳もなく叫び出したくなった。

「うあ……」

絶叫となり迸りそうになった悲痛を、己の中の何かが咬み殺す。はし切れのようにモモンガの中に残ったものは苦痛の吐息となった。なぜ、ずっとずっと彼だけがモモンガと一緒にいてくれた人なのに、彼だけがいらない。

どうして、どうして、どうして？

(どうして、あの人がいないんだ？)

そして、どうしてともう一つの疑念が浮かぶ。

(どうして、こんなにあの人がいないことがおかしいと感じるんだ？) 執着は確かに前々からあった。彼だけはナザリックから去らないでくれと願いつづけていた。ずっとナザリックに残り続けた同胞。しばらくしてから戻ってきた仲間たちに抱くものとは隔絶した捻れた仲間意識。でも、これは何かが違う。

仲間が去っても諦めることができていた今までの自分と違う。

いついなくなってもおかしくないと、直視したくない認めたくない現実をまだ受け止められていた過去と違う。

(ウルベルトさんは俺の仲間なんだからいて当たり前、いないのが、おかしい。だから、俺がこんなにも取り乱してしまうのは当然で。……取り戻さなきゃ、あの人は“俺の”ギルドメンバーなんだから) そう、傲慢に言い切れる自分がいる。

ゾツとする。

まるで他人を顧みない化け物のように自分勝手だ。

己への疑心と仲間の喪失に感情がゆり動く。その度に、抑制がかか

る。  
咄嗟に伝言をウルベルトに繋げようと試みた。難しくなにも考えていなかったおかげか、コンソールもないのに魔法を発動ができた。使いたい、と思った瞬間に呼吸のように自然と発動することができた。

もし違う場所にいるのならさすがにでも迎えに行く。

だが、彼からの応答はなかった。

心の温度が一気に下がって、生きた心地がしない。

「伝説でも、なんでも作ります。アインズ・ウール・ゴウンの名を何処

でも何処までも知らしめます、永遠に名を残す偉業を成し遂げます！ だから父様も、モモンガおじさまもいなくならないでよお！」  
幼子の必死の懇願に、は、と遠くに飛ばしていた正常な意識が戻ってくる。

戸惑っている場合ではない。現状を把握しないといけないのだ。

鎧や表情の出ない種族のスライムだから分からないが、おそらくたっちもへ口へ口も相当戸惑い、現状を理解しきれていないはずだ。リーザは何が起こったかは分からなくても何か致命的にありえないはずのことが起こってしまったことを無意識に察しているのか、怯えた顔で我が子を覆うように抱きしめている。たっちはそんな妻子を片腕で腕を回し全てから守るように力強く抱きしめていた。片手はいつでも武器を取れるよう、最大限の警戒を払っている。

(例え、夫婦だろうと垢バンは免れないじゃないか……でも、何も起きてない)

ここが仮想現実であると無理に思い込むのがいかに難しいかという状況証拠が着々と積立られていることに、モモンガは崖の端に追い詰められているような切迫感を強くした。

目が、幾つもの目がモモンガを見つめてくる。

意思の無い人形の目では無い。

感情あり、人格を持つ“生きている目”が何かを待つかのように、自分たちよりもよほど恐ろしげな形相をしたシモベたちも皆一様に不安げに恐ろしげに、モモンガを、仲間たちを見つめている。

イリニは子供NPC、こうやって話すのは彼だけが特別だからか？

他のNPCも同じように心を持ったかのように振る舞うのか？

何を、何かを言った方がいいのか。

モモンガは混乱しつつ、この場をなんとか乗り切るための方便を考える。

「落ち着い……落ち着くのだイリニよ」

「モモンガおじさま……でも、でも、いえ、ごめんなさい、モモンガおじさま。醜態をお見せしてしまいました」

ぼろぼろと涙をこぼしながらも、気丈に涙を服の袖で拭くとモモン

ガに謝罪し唇をキュツと引き結んだ。

その様子に、作られただけの存在だというのに、そうさせてしまったことに罪悪感が湧き上がる。モモンガは幼い子供に無理をさせてしまったのだ。

今、モモンガはNPCと会話した。簡単なコマンドに従うAIはあるが、こんなにも滑らかな会話など可能なのだろうか。

混乱、焦燥、絶えず感情が渦巻くがどこかでブレーキをかけられるように一定のラインから内心の昂ぶりが抑制される。それが恐ろしくもあるが、そのおかげだろうか、モモンガは今、最も大事な現状把握の推測をなんとか可能としていた。

「終わるはずのユグドラシルが終わっていない。何があつた……？」

—

モモンガひとり言のように漏らした言葉に、一瞬、熱が灯るかのよ  
うな静寂なる歓喜の嵐が巻き起こった。

無言の熱狂を骸骨の体で感じ取り、十分とたっていない今日という  
間に、何度目になるのか分からない絶句をする。

時間が来て、強制排出されるはずのゲームが終わらない。

システムエラーによるゲーム延長？

だが、ゲーム延長により作られた存在がこのように話すようになる  
のか？ サービス終了と見せかけた超大型アップデート？ アップ  
デートであるような会話が可能になるのか。機械とは到底思えない  
滑らかな発生は果たして可能なのか？ モモンガの中で疑問は尽き  
ない。

そして、どうしてウルベルトだけがいないのか。彼と、自分たちの  
違いといえば正式なプレイヤーキャラでログインしているか、運営が  
用意したNPCを使用した変則的なログインしているか、という一  
点。その違いにより、彼だけが時間経過により、強制排出によるログ  
アウトになった？ 取り残されてしまった自分たちは、この訳の分か  
らない現象に巻き込まれてしまった？

モモンガはコンソールを出し最後にして唯一絶対の手段であるG  
Mコールをしようとする、だがコンソールが浮かび上がらない。

頭の片隅で既に予想していたからだだろうか？ 戸惑うくらいに冷静な自分がいた。それにまた一層、モモンガは自分自身に違和感を覚えるのだ。

「たっちさん、へろへろさん、リーザさん、ミーシャちゃん、GMコールはできますか？」

モモンガの問いかけにはっと硬直が溶けたように、大人三人は空中を叩く。一様に答えは『NO』。モモンガは胸中で苦虫を噛み潰した。一体、どうなっている。

瞬時に下した判断は、ギルド武器をイリニに渡したままにしておくのは危険、ということ。

ウルベルトの子供を疑うのは胸が痛むが、ギルドを維持する上で必要不可欠のものを無防備にNPCに持たせておくわけにはいかない。

モモンガは穩便に、そして違和感なくスタッフを返してもらったため、言葉を考える。イリニは信仰系魔法の使い手だ。なんらかの異常で発生した人格により、逆上でもして十階位魔法を放たれたくはない。明美が自分のプレイに合わせて育てたクラス構成は、とにかくモモンガとは相性が悪いのだ。

「イリニよ。どうやら、まだお前にこの杖を渡しておくわけにはいかないようだ。世界は終焉を迎えず、異変が起こった。私にも、何が起きているのか観測できていない。このナザリックのために、今一度私に杖を持たせてはくれないか？」

「はい、もちろんです、モモンガおじさま。このスタッフは僕にはあまりにも重いです。これは、貴方にこそ相応しいもの。僕ごときではこのナザリックの主人は務まりません」

イリニは全くの反抗を見せず素直にモモンガに杖を返した。

ギルドの証を受け取り、モモンガは次の一手をとる。

玉座の傍に立つ守護者筆頭に視線をやる。泣きそうな幼子を抱きしめたくて仕方がないのだと案じる目で、じっとイリニを見つめていた。

「アルベド」

「はい、モモンガ様」

アルベドは名を呼ばれると子を心配する母親の顔から、瞬時に臣下としての凜々しい表情へと切り替わる。美しい女の澄んだ声は上に立つものの気品があり毅然としていた。

それだけで忠誠心、というものをひしひしと感じる。

ふわり、とわずかに動いた空気の流れにのってわずかな匂いを感じる。

心地よい、良い香りだった。気のせいではない、電脳法によって禁止されているはずの嗅覚が刺激された。

(アルベドも、話せるのか。子供NPCだけじゃない、拠点NPCもイリニと同じように意思をもって話せるのか。それに、この匂い)

改めてそれを確認すると、既に超えている異常事態への許容範囲がさらに溢れて決壊した。もう、どうすればいいのだ。

とにかく、ギルドメンバーだけで話し合うためにNPCたちをこの場からそれらしい理由で追い出さなければならない。たちなど、守らなければならないものがある分、精神の疲弊が激しいだろう。そして、NPCたちの前で明らかな警戒を取ることにどんな心象を植え付けるのか、と考えるとこのままにしておくわけにはいかない。レベル100のNPCをざっと見下ろす。気分は爆弾処理班だ。

「大墳墓を出て周囲、半径1キロ以内を確認するための部隊を編成せよ。仮に知的生物がいた場合は交渉し、できる限り友好的にここまで連れてこい。交渉の際は相手の条件を可能な限り聞き入れても構わん。戦闘は極力避けることができ、戦闘が発生したとしても即座に離脱もしくは勝利し、必ずナザリツクに戻ることができる者を、これを完遂できるものを選べ。できるな？ アルベド」

「了解致しました、モモンガ様。直ちに編成致します」

拠点を出ることができない設定になっている拠点NPCだが、外に出るといふことに違和感を感じている様子はない。

だが、本当に外に出ることは可能なのか？

もし不可能であれば、NPCとの戦いになったら外に脱出すればいいだけのことになり、不測の事態で戦闘となった場合こちらの生存率は格段に上がる。



「もうひとつ、全軍はナザリックの八階層を除く全域を総点検せよ。異常が見つかり次第、私かたちさんかへ口へ口さんに報告するのだ。もし、何も見つからない場合でも、各階層守護者たちは私とアルベドにその結果を報告するように」

二度手間になるが、アルベドには上がってきた報告も聞くつもりだ。

違う報告結果をあげて情報を隠匿しないかという確認のためだ。これでアルベドにまで情報を隠されたら手間をかけた意味はないが、保険はかけられるだけかけておくべきである。

「九階層の確認が終了次第、メイドたちは定期的に九階層にウルベルトさんが帰還していないか徹底的に調べ、また、彼がいつ帰還しても迎え入れられるよう準備をしておけ。ニグレドには消えてしまったウルベルトさんが周囲にいないか隈なく搜索させ、発見できた場合に備え外の探索部隊と連絡を密に取れるように連絡網を構築しておくように。これらを二時間以内に完遂させよ。そして、この最初の周囲確認が終わったあとも、ウルベルトさんの搜索部隊は改めて新たに編成する。アルベド、これらに関する手配は任せた」

ニグレドの取得している魔法ならば、探し物や人の探索を容易に可能とする。

だが、それをもつてしても、モモンガは魔法による発見が困難であることを理解していた。

まず、この異常に彼が巻き込まれておらず、無事現実に帰っていた場合はそもそもないものを探し出せない。

次に、この異常に共に巻き込まれたが、ひとりだけ別の場所に飛ばされた場合も、彼の所有するワールドアイテムが魔法での探索を阻害するので探し出せない。

本来であれば、最終日で情報探索警戒をしていないレベル1のウルベルトを見つけ出すのは簡単なはず。だが、ありとあらゆる優れた魔法を超越する壊れ性能のワールドアイテムの一つである黄金豊穡の宝鍵はそれを覆ってしまう。あのアイテムには、敵性があるかもしれないある一定の魔法に干渉されると、完全無効化する効果がある。

二グレードによる監視魔法、探索魔法などまるでそこになにもいないかのように透過するのだ。逆に、攻性防壁でも発動すれば所在地はわからなくてもどこかに存在していることがわかるのだが、あのアイテムのせいでウルベルトがこの仮想現実を超越した場所にいるのかいないのかすら判別をつけなくさせる。

それに加え、例えば、ウルベルトがこの世界に来ているとして、シューティングスターで居場所の分からない彼の元に行きたいと願っても、ワールドアイテムを持つ彼を基点にすることは不可能。シューティングスターで彼をこの場所に呼ぶことも不可能なのだ。(あの人がもし同じように巻き込まれていたら……指輪のことに気づいてくれるといいんだけど)

彼が自分の意思で戻って来てくれるのが一番早い。

「はい。謹んでご命令拝領いたします」

アルベドは優雅に頷く。

「そしてユリ、君はイリニについて彼を休ませてあげてくれ」

「はい。承知致しました。モモンガ様」

嗚咽をこらえようとして、まだひくひくとしゃくりあげているイリニに、縁者でもあるユリをつける。

他の保護者代りは仕事を振った責任ある役職についているので、イリニの側にいてやれる時間と余裕はないだろう。

「直ちに行動を開始せよ」

「承知いたしました、我らが主人よー!」

一部のズレもなく唱和し、NPCたちはモモンガたちに跪拝すると大きな扉に向かっていく。

続々と玉座の間から退出する彼らを見送る。

動きも機敏で、まるで映像で見たことのある軍隊の団体行動のように統制がとれていて美しい。

傍に控えるアルベドが、忘れていた黒歴史を克明に浮き彫りにされる名前を口にしなかったら、のんきに見とれていたかもしれない。

「モモンガ様、自身の力量不足を露呈させることとなり大変心苦しいのですが、ご命令を遂行するためにお願いがございます」

突然の想定外の申し入れ。

(え？ 難しいことは言ってくれるなよ？ 俺のできることで頼むぞー)

威厳を繕わなければならないから、下手な対応はできない。

「うむ、なんだ言ってみよ」

「周囲の探索をする最上の編成のために、パンドラス・アクターを宝物庫から出していただけられないだろうか？」

## 宝物殿

モモンガは、今の段階ではNPCたちが見せる忠誠心を心の底から信じきれていない。

現在、忠誠心があつたとしてもそれは永遠に継続されるものなのかな？

自身の行動、言動によって増減するものだとしたら、それは恐ろしいものでしかない。なぜなら何をやっても、ジェットコースターのように急降下する右肩下がりの結果しか出せないことが容易に想像できるからだ。

しかし、ここにはいかにも完璧な男たち・みーがいる。メイド愛に置いて右に出る者はいないへろへろがいる。自分が多少失態を見せても、カバーしてもらえないのではないか？ いや、自分の評価が仲間の評価に響き、足を引っ張ってしまつて、それが取り返しのできな亀裂を生んでしまつたら……最悪の可能性を想定にいれると下手なことは言えない。

モモンガがその場を乗り切るために半ば思いつきで下した命令を真面目に遂行しようとして、謂わば上司であるモモンガへお伺いを立てているのである。献身に応えるよい上司であるのなら、ここは鷹揚に領いてやるべきだ。だが、

(俺は、俺はあいつを外に解き放ちたくない!)

忠誠心を維持しなければという理性と、あれを人目につくところに出したくないという感情がせめぎ合う。静止しているNPCの状態でも、恥ずかしくて恥ずかしくてたまらなかつたのだ。それが動き出して喋るのだ。それはどれほどの心理的なダメージになるだろう。

ああ、と身悶えそうになつて感情が抑制された。さきほどまでは恐ろしさすらあつたものだが、今はとてつもなくありがたい。

「そうか、パンドラか……あれを使うのは確かに悪くない」

心の中の天秤に悩み続けて結論を出せないままだんまりにするわけもいかず、適当に茶を濁す発言をしたが、これは失言だった。「どうしてパンドラが必要なんだ？」と偉そうに聞けばよかった。

正直なところ、なぜパンドラを探索に加えたいとアルベドが結論を出したのか、さっぱり理解できない。

自分の発言だというのに、え、なにが悪くないの？ 教えるよ！と詰め寄って詰りたくなつた。

数年前に忘れてなかつたものにするためにしまい込み、仲間たちが戻ってきて霊廟通いをするようになっても見ないふりをして通り過ぎ、だがそんなモモンガをあざ笑うかのようにロールプレイのために最近になって掘り起こされてしまったあの黒歴史の設定の塊を何故……全ギルドメンバーの実力八割を使えるとかナザリツクの智者とか設定した気はするが、それはわざわざ引つ張り出すほどのものだろうか。

よく考えればすごいのだろうが、諸々のアレな設定さえなければ胸をはって自慢して回りたくなるくらいすごいかもしれないが……いや、あれを自慢して回るのではないな。ないわ。

モモンガは思考の袋小路に陥つた。

仲間たちが設定したものがNPCたちの細かな人格や能力にどう反映されているのかわからない今、守護者統括としておそらくそれを把握しているだろうアルベドの提案に乗るのは最も得策なのだろう。だが、

（俺は、俺はあいつを外に解き放ちたくない！）

ここは早急にパンドラを外に出さなくてもいいという方向に守護者筆頭を上手く言いくるめなければ。

そのためにはアルベドが彼を必要とする理由を知り、その理由を覆すような方便を考えるのだ。

訳知り顔で頷いてしまった以上、ここからどうしてパンドラがいるのだと問うのは悪手。

涙をやつと止めているイリニに、モモンガは視線を向ける。

自分の無能に幼い少年を巻き込むのはとてつもなく申し訳ないのだが、今後の自分たちの威厳の維持のために彼を巻き込んだ。

心の中では絶えぬ土下座で床に頭を打ち付けている。

（すみません、ウルベルトさん！ イリニをこんなふうに使つてごめ

んなさい！ ごめんイリニ！ この借りは必ず返すから！

「イリニ、今は辛いかもしれないが、お前は私たちになにかあったときのナザリックの後継者だ。いずれ部下となる者たちのことを把握していなければならぬ。今回の件、何故パンドラが探索の部隊に必要か、わかるか？」

イリニはふるふると首を振った。

「申し訳、ありません。僕にはまだ分からないです」

（いいんだよ、いいんだよ。俺も分からないから。ありがとうイリニ！）

「いや、謝ることではない。これから覚えていけばいいだけなのだから。いや、違うな。私たちが教えていかなければならないことなのだ。お前がそれを気に病むことなど、一切ない。アルベド、この子にわかりやすいように今回の件にパンドラが必要な理由を説明してやれ」

「畏まりました。モモンガ様。僭越ながら、私が説明させていただきませう。イリニ様、ご存知の通り我々はナザリックの外の者に対する評価は地に這うように低く、特に人間に対しては価値のない虫けらと同等です」

美しい唇から放たれる虫けらという単語は、かなりの威力があった。

優しくたおやかな美女の微笑に、酷薄な影が忍び見える。

モモンガは絶句した。

（ご存知ないのですが、ご存知ないのですが）

モモンガは冷や冷やしながら聞いた。

この会話が聞こえていたのだろう、たつちは天を仰ぎ、リーザは冷ややかな目で夫を見つめ、へ口へ口は困ったように粘体をひねらせて視線をそらしている。

そうなってしまう理由が、分からないでもないのだ。

悪役ギルドのNPCに相応しい設定であったり、あるいはNPCの前で調子に乗った残忍な悪役ロールプレイの影響もあるのかもしれない。カルマ値の影響も大きそうだ。これは後ほどの意識調査は必

須だろう。

「……うん。でも、嫌いでもよそのひとにあんまり酷いことはして欲しくない。食料や道具の材料に使うために必要な場合は罪のないひとたちではなく、処分されて然るべきものを用いてほしい」

(ご存知だったのかイリニ！ それに食料や道具の材料って!?)

新たな新情報にモモンガは息継ぎもできない。

成る程、これだけ異形が数多くいれば人間を食料とする種族もいるだろう。

人間を食料に、という話に一瞬驚きはしてもそういうものか、と腑に落ちて不思議と嫌悪感がない。

(この感覚はなんなのだろう。見た目だけではなく、心までアンデツトになってしまった?)

いや、今考えるべきは自分の変化ではない。

ただ心配なのは、こういつた残忍な話に最も耐性がなさそうなりーザたち母子だ。モモンガは様子をうかがう。

彼女は視線を落とし、すこし考え込んでいるようだ。

「はい、イリニ様。それが貴方の御意志であれば、我々は喜んでそれに従いましょう。貴方の望みに従わず、己の欲望のままに罪のない者を殺す者がいたならば、それはもうナザリックの同胞ではありません。守護者筆頭として私が責任を持って処断いたします。……ですが、イリニ様。今この場にいる最も尊き者であるモモンガ様やそれに次ぐたちち・みー様、へろへろ様、リーザ様、ミーシャ様のご命令であればその限りではございません、どうぞご了承ください」

「案ずるな、イリニ。ウルベルトさんの大事な息子であるお前を悲しませるような命令は下さないと誓おう。そうだろう、たちちさん、へろへろさん」

「……もちろんです。私の掲げるものは弱きを助け悪を挫く、正義。悪逆非道な振る舞いなど決してしないと愛する妻と娘の名にかけて誓うから、安心して欲しい」

「はい。そんな命令はしないから大丈夫だよ」

「そういうことだ。アルベド、この件について皆に漏れなく周知させ

るように。父親の不在で心労も多いだろうイリニをこれ以上悲しませないためにも、頼んだぞ」

イリニを利用してのナザリック全体の釘さしをした。

あらかじめ知っておけてよかった。

手の打ちようがない段階になってから初めて知りましたでは、遅すぎた。

内心胸を撫で下ろしながら了承の返事を丁寧に戻そうとするアルベドを静止させ、モモンガは話の続きを促す。

「それしてしまったが、そう、大事なものはパンドラが探索部隊に必要な理由だ。ヒントはパンドラは悪性に傾く者が多いナザリックにあって、悪性に傾いてはいるものの中立であること。さあ、何故だと思う？」

モモンガは訳知り顔を続けるために、自分の推測をまじえながらイリニに問う。詳しくはわからないが、アルベドの中ではパンドラはナザリックの外の者を侮る悪性の者よりも中立寄りで交渉に向いていると考えたのだろう。善性の者がイリニのように外の者に対して嫌悪感をもたずに好意的に接することが可能ならば、セバスでもいいのではと単純に考えてしまうのだが。

「そうです、イリニ様。重要なのは友好的にナザリックにとって優位な交渉ができる者という点なのです」

（あれ、今俺が言ってもいなかったことが付け加えられてなかった？）  
「友好的に、ならばセバスやイーグルたちでも可能だけれど、かれらは性格がまっすぐすぎて相手の性質が悪い者であった場合、搦め手でも使われたら交渉に不安が残る、ということだね。デミウルゴス兄様なら相手がどのような者であれ手玉にとれそうだけれど、兄様には守護者として下された命令があるから、そちらが優先される。確かにパンドラならどんな相手でも自分のペースに持っていけそうだ。どうアルベド、これで正解かな？」

「はい。イリニさま、その通りでございます」

子供の成長を見守る母親のような微笑で、アルベドはイリニの出した答えに丸をつけた。

「よくぞ答えにたどり着いた。流石はウルベルトさんの息子だ。これ



からもお前にはこうやって問題を出す場合があるから、心しておくように」

モモンガは相好を崩した。

それに反して心の中では絶望していた。

なにをどう考えてもアルベドに対する反論は思いつかなかった。

モモンガはパンドラズ・アクターをしまいっぱなしにしておくことを諦めた。



後ほどすぐに宝物殿に向かうということを書いてアルベドたちも玉座の間から下がらせた。

「う、うう。たちちさんもへろへろさんも酷いです。私しか話してないじゃないですか」

張り詰めていたものが切れた脱力感に任せて、玉座にだらしない格好で座りたかったが時間がなかった。

「すみません、何がどうなっているのか混乱していて。とにかく理沙と美沙を守らないといけないということで頭の中がいつぱいになっていました」

「一時は一体どうなることかと……いやー、今も何ひとつ解決していませんんですけどね」

頭でもかいているつもりなのか、へろへろと粘体の一部が触手のように伸びて体の上部にグニャグニャと押し付けている。

「イリニくんあんなに泣いているのに、パパのウルベルトおじさんはどこに行っちゃったのかなあ」

ミーシャは自分の進退ではなく、子供らしい純粋さで年の近い男の子のことを心配そうにしていた。

「ここは、本当にどこなのかしら。私たち、帰れるの？」  
娘を抱きしめ、たちちに寄り添うリーザは不安を口にする。

その疑問に答えられる声はない。

ログアウトできない。GMにも助けを求められない。

まるで、リアルから切り離されてしまったようだ。

いや、仮想現実がまるで現実になってしまったようなのだ。

「まさか、とは思うんですが……」

へ口へ口は恐る恐る言い出す。

「これは仮想世界<sup>ゲーム</sup>ではなくて、ゲームのキャラクターの姿のままここが現実になってしまったんじゃないで、しょうか……」

気弱な性格の持ち主のせいかな自信なさげに声がどンドン尻窄みになっていく。

そんなわけがないと笑い飛ばす者はいなかった。

むしろそう思っているからこそ、空気はずんと重くなる。

薄々気づいていたが、改めて声に出されて突きつけられ、かろうじて見えていた気がした最後の思考の逃げ道が塞がれてしまったのだ。

もう、覚悟を決めるしかなかった。

「みなさん、宝物殿に行きましょう。あそこなら身を守るためのアイテムがたくさんあります。それに、あそこはこの指輪がないと行けない場所ですから、いざというときの避難場所にもなります」

宝物殿、そこは四十一人の歴史と、そして終わりから遡ること二年の期間によつて、気が遠くなる量の様々なアイテムにあふれている。

前者が稼いだ宝物の総量と、後者が置く場所のない宝物殿にむりくりぶち込んだ宝物の総量は、七対三の比率である。

大量に放出された解散するギルドのアイテムを安く買い込んだり、ゲームを引退する知人からただで譲ってもらったりと、労力の割に手に入るものの量は多かった。

そのうえゲーム終了決定によつて、まだ辛抱強くユグドラシルに残っていたプレイヤーのやけっぱちの大売り出しで、かつてない物量が市場に流れた。

NPCたちに未来を託すロールプレイングが決まってから、「私たちの手を離れるNPCの役に立つものを、喜ばれるものを」というのをコンセプトに買い物をしてはNPCたちに設定された私室に飾り、いらなかったものはここに放り込むことを繰り返したので、中はものすごいことになっている。

ゲーム最終日ともなると、ウルベルト念願の「イリニにワールドアイテムを持たせる！」を叶えられる買い物ができるしまうくらいに

は、捨て値でさまざまな物が売られていた。

そういうわけで、役に立つ物はたくさんあるのだ。これを使わなければ、本当に宝の持ち腐れである。

コンソールがない代わりとなる操作方法を、なんとか理解したアイテムボックスからアイテムを取り出した。ギルドメンバーの証となる指輪とブラッド・オブ・ヨルムンガンド対策のアクセサリを二人に渡す。これが期待通りの効果を発揮できなかったら、笑い話では済まされない。

転移のイメージをつかめるか定かではない女性二人の手をたっちに握ってもらい、「では、宝物殿へ」はつきりと口に出すことでそこに行くという意味を固める。

指輪の力を使用しての玉座の間への移動は阻害されるが、玉座の間からの移動は確か可能だったはず。

指輪の力はあつけなく瞬時に解放された。

視界が一瞬黒く染まると、またたきの間に荘厳な玉座の間から、壁のように宝物がうず高く積まれた宝物殿へ。

宝物殿の光景にびっくりする女性陣に、ついついナザリック自慢の蘊蓄を語りそうになるのをぐっと堪え、先を急ぐ。

様々な貴金属や希少品を横目に、一行は進んで行く。

そしてモモンガは、NPCが居る時には切り出せなかったことをやっとなりに提案したのだ。

「みなさん、身の安全の確保をしましょう。NPCたちは俺たちに今のところ従順なようですが、これから何が起こるのかもわからない。NPCが完全に味方だとしても、ナザリックの外は全員敵だらけという危険もあります。今、私たちはゲームの姿のままですが、それに従ってゲームの能力も使えるのか、アイテムも使えるのかなど確認しておくべきだと思います」

メッセージ

伝言はさきほど使えたことを考えると、おそらくは能力も変わらずに使用できるだろう。これのおかげで、モモンガはそこに関しては悲観に染まったり不安に駆られたりしないですんでいる。しかし、他の能力も、そして自分以外の者も確認しておくべきだろう。いざと

なった時にやっぱ無理だった、となつては遅すぎる。

モモンガの提案にへろへろはおお、と感嘆する。

「さすがモモンガさん。先のことをしっかりと考えていますねー」

「確かに、それは重要ですね。これがゲームの見た目だけで中身の能力は現実のままでは、ナザリックの一番弱いPOPモンスターにもやられてしまいそうですから」

「ゲームのままなら、娘を守るのは簡単なんでしょうけど……いえ、それでもやっぱり大変なのかしら。みなさんが作ったNPCは強い子達が多いんですものね。それに、外……ゲームの沼地がそのまま現実にでもなっていたら、それも怖いわ」

「仲間の作った愛すべきNPCたちを疑うのは心が痛みますけどね、絶対に大丈夫だと確認できるまでは対抗策はしっかりとっておいたほうがいい」

なにせ、悪性が高くてナザリックの外部の者は、とくに人間は虫けらときた。これで実は自分たちが人間だったと知れたらどうなるのだろうか。

アルベドのあの発言には肝が冷えた。

「何かあったらママもパパもミーシャが守ってあげるよ！ それにね、大丈夫だよ。じいじいもアウラお姉ちゃんもマーレお兄ちゃんもやさしいから、ミーシャをいじめたりなんかしないもん。こういうのをね、きゆう、って言うんだよ」

ミーシャは幼さゆえか完全に状況をわかっておらず、一人底抜けに明るい。

「はは、美沙は難しい言葉を知っているなあ。そうだね、セバスを疑うのは親として恥ずべきことだな。彼は私が作った正義のNPCだ。いきなり敵意を向けてくるなんてしない」

「それなら、私のソリュシャンも、ソリュシャンも……ソリュ、ああ、カルマ値マイナスだあ。いえ、う、うん。たぶん、玉座の間にいたときの彼女ならきつと、おそらく……」

へろへろはスライムの体を悩ましげに捻っている。どうにも自信がなさそうだ。

(俺のパンドラズ・アクターはなあ、悪性とか善性とかそれ以前の問題なんだよなあ)

モモンガは気が遠くなる絶望を、強制的な抑制を利用してぱっとスイツチでも入ったかのように切り替えた。とにかく今後のためにもいろいろ実験は必要で、パンドラをここから出したらみんなで六階層の円形闘技場に向かい、いろいろと試すことにしようと思った。

「かくて汝、全世界の栄光を我がものとし、暗きものは全て汝より離れ去るだろうー」

『自分のNPCに、自分たちがいなくなっても頑張れエールを送り、イリニをよろしくねってするロールプレイ』をしたのは記憶に新しく、扉のパスワードをさくさくと口にして先へと急ぐ。

(あ、やばい。もしかしてあの時のことって覚えてるのか？ まさか覚えてないよな、忘れてるよな。最後だからもういつそ投げやりになってはっちゃけちゃったあれを覚えてないよな?)

ここから先はモモンガひとりだけだ。

みんなには扉の前で待っていてもらう。

あの設定によりどんな性格が表れてしまったのかわからない今、おいそれと仲間に合わせるわけにはいかない。

いろいろと言いつ聞かせ、必要であれば恫喝し、おとなしくさせなければならぬ。これはモモンガにしかできない急務であった。

急ぐ足が重い。急ぎたくもないのに、自分が決めた二時間というタイムリミットが首をしめる。部下がそれに間に合うように行動をしているのに、上司のせいでその時間制限を守れないとなるとつもない失点となりかねない。だいたい、時間を決めたのは自分なのだ。仕事の締め切りを決めた本人がそれに間に合わせられないのは噴飯ものであろう。

内心で、見限られてもおかしくない。

だが、今モモンガをもっとも苛ませるのは、いつ訪れるかわからない不穏な結末へ至る失点についてではなく、もっと生々しく痛々しいもの。絶望が、羞恥が、昏い感情となって骸骨の体の中で渦巻く。

博物館のような通路を黙々と通り過ぎ、奥を目指す。

雰囲気切り替わる。あかりが落とされた全体的に薄暗い古墳じみた通路に出る。

かつては寂しい気持ちで通った、この場所。自分の女々しさを知られたくないがために、ウルベルトにも内緒で作っていた仲間たちのアヴァターラ。

二年前は弾んだ足取りで何度もここに来た。

たちちさんが帰ってきた。茶釜さんも、ペロロンチーノさんも、またひとりまたひとり、と。

全員帰ってきてくれたらいいのに、という無茶な願いは、無論叶わなかった。だが、仲間たちの最強装備を取りに行くあの瞬間の感情はとても満ち足りて幸せだった。思い出ただけで盛り上がる感情、それは抑制がかかる強いものであった。しかし無理やり心を冷却するような効果があらわれるよりも早く、モモンガの喜びは勝手に萎む。(だって、あのとときのパンドラは喋らなかつたしな)

おそらく、この先にいるバンドラズ・アクターはアルベドやイリニのように喋り、玉座の間にはいたNPCたちのように感情をむき出しにするのだ。一心に、ひたむきに。

(アクターだから大ききでつて設定して、それにドイツ語も喋っちゃうのかよ。まじかよ、勘弁してくれよ)

かつかつと音を立てて歩き霊廟を目指していると、自らがたてる足音よりも大きなーかなり急足だー足音が近づいて来た。

「んんもモンガさまあああああ！ Mein Gott！ 我が創造主うう！」

通路の先から、おお振りで両手を開き、再会の感激をあらわにするネオナチ軍服をまとったはにわ顔の異形が突撃してきた。

「私の創造主たるモモンガ様！ 世界の終わりに貴方様が巻き込まれる必要などありません！ 私たちのことなど捨て置き、リアルにお帰り下さい、貴方の命に勝るものなどこの世の何処にも存在しないのです！

Obes Befehle von unsrem Gott sind  
モモンガ様をさし置き生きながらえられる命などこの身にはないの

ですからっ」

「お、おう」

息急き切って走ってきた創造物に、モモンガは情報の行き違いに謝ればいいのか、発言に燦然とぶちこまれるドイツ語に奇声をあげればいいのか、自分が想像していた以上にパンドラズ・アクターに慕われていたことを喜ばいいのか、短時間の中で咀嚼しなければならぬことが多すぎてついおざなりな返事になってしまった。配下に取りうるうとしていた威厳ある態度もすっぽりと抜け落ちて、間抜けに棒立ちする。

(いや、待て、まてまてまてまて！)

精神の抑制が止まらない。

(世界の終わり云々かんぬんを言うっていうことは、アレを覚えているってことかよ！)

未来を託すお遊びロールにはそれぞれの性格が色濃く表れ、なかなか面白いものがあつた。

ペロロンチーノの別離を前提とした最初で最期の悲しきプロポーズ。

ぶくぶく茶釜は『大秘術には、ギルドメンバーのユグドラシル側の肉体が礎になっている』という設定を勝手に生やした。迫真の演技力により悲劇と希望を感じさせるすばらしい出来栄えになっている。ちなみに大秘術に関してそのような設定をNPCに語ったのはぶくぶく茶釜と、その設定をその場のノリで少し拝借したモモンガだけである。

やまいこは女性らしい優しい感じにしあがった。貴重なアイテムであるシューティングスターを渡して、この指輪が自分の代わりにユリを助けるといふ言葉が実に彼女らしい。ボーナスが吹き飛んだ指輪をさらりと手放すやまいこに、目の前が暗くなったとか気が遠くなったとか、そんなことは決してない。

武人武御雷は武人としての生き方をコキユートスに託す男らしい渋さがあるもの。

式式炎雷は年頃の娘や妹を心配する男身内という不器用な感じで、しどろもどろ終始言葉に困っている感じに妙にリアリティがあった。何も考えずにぶっつけ本番で来た、という忍者にみんな「だからか！」と笑ったものだ。

たち・みーはセバスの簡潔な設定に通じる実にあつさりしたものの、だがその短さにはあたかも信頼があるかのように感じられて妙に格好良かった。

そしてモモンガは、というと。変にはずかしがると、逆に滑稽になると考え、いつそ吹っ切れることにしたのだ。

『パンドラズ・アクターよ』

長いローブをわざとらしく捌く動作。

『今日は大事な話があつて来た。心して聞け。いずれこの世界は終わりを迎えることとなった。私の全ての結晶たるこのナザリックも例外ではない』

モモンガはここでおお振りに腕をふって拳を握る。

『だが、私は、私たちは！　みすみすお前たちを終わりに巻き込ませるつもりはない！』

低く抑えた声から、大きく張り上げた声に変化させる。

『私達のこの命を使い、大秘術を行う。それによってナザリックを他の世界に転移させる』

手を胸の前に置き、ない心臓を握る動作をする。つかめるとしたらワールドアイテムのモモンガ玉くらいだ。

『終わりを乗り越えた先、ナザリックがどのような地に辿りつくかは私でも分からない、だがパンドラよ。ナザリックの中でも抜きん出た智謀を持つお前ならどのような地でも賢く生きていけると信じているぞ』

リング・オブ・アイズ・ウール・ゴウンを渡す。

『この指輪があれば、宝物殿から出られる。このユグドラシルから転移したら、宝物殿を出てナザリックの新たな主人であるイリニを助けてやってくれ。彼はウルベルトさんの大事な息子だ……』



モモンガはちいさくちいさく、声をひそめた。

『あのひとだけがずっと俺と共にいてくれた、支えてくれた、俺を必要としてくれたとても大切なひとの……』

つい漏れたつぶやきをのみこみ、大仰な動作でごまかす。

『あの子を支えてやれ、その身を一切惜しまず仕えてやってくれ』

そしてモモンガはふふ、といたずらっぽく笑う。

『だがなパンドラ、たとえ終焉を乗り越えようと、すぐに出ていってやる必要はない。役者は遅れてやってくるものだからな』

ちなみに正しくはヒーローは遅れてやってくる、である。

『Ich おw 前 の 幸nsche 運dir をv 祈iel 祈Gl る るck』

誤用も含めて、大変恥ずかしい仕上がりとなったあのシーンを、あの言葉を、あの動作を、あのなんとか発音をしたドイツ語を、覚えていくというのか！

(ど、ドイツ語は、せめて他の諸々は我慢できても、ドイツ語だけは、ダメ！ ああつ！)

「あ、あいういっしゅー！」

モモンガは勝った。精神の抑制という楔が発動する寸前に、奇跡のような速さで感情のまま行動を起こした。

モモンガは負けた。己の精神の恒常的な安定のために感情に任せて貴重な指輪の願いを発動させてしまった。

だが、モモンガは後悔しないだろう。

「仕事だ、パンドラ。来い！」

『W 我 が 神enn の 望es み とme あines ら ばG らottes ば ばW らille!』

「ドイツ語はやめろ！ 敬礼もやめろ！」

それぞれ

ドイツ語ドイツ語と念じていたせいとか、パンドラズ・アクターの記憶から跡形もなく消え去ったのは本当にそこだけだったらしい。

モモンガは結局彼にゲームのサービス終了は迎えていることを説明し、ぶくぶく茶釜の作った設定を借りて誤解を解くはめとなった。

ヘロヘロたちが待っている通路を早足で目指す。

「いいか、私が誤解を与える言動をしたのは認めるが皆が大秘術に使ったのはこちらでの体であって、同胞たちはリアルな肉体に避難している。半身が欠けてナザリックに戻れなくなってしまっただろうが、無事だ。そして本来であれば同じようにナザリックの礎となるはずだった私達が、終焉の後になぜこちら側に残ってしまったのかは、正直なところ分らん。私たちが帰る方法も分からない。あるいは、術の失敗で我々はあちら側の肉体を犠牲にしてしまったのかもな。果たして帰れるのか……」

適当に思いついたそれらしい推測を乱暴に言ってから、モモンガは少し考える。

むしろ帰る必要なんてあるのか？

あの現実には価値があるのか？

今、自分の側には大切な仲間がいる。この、大切なナザリックから帰れずにいる。

もし、現実世界に帰れなくなれば。

彼らの居場所はこの愛しいナザリックとなるのだ。

いなくなることに怯えずに、ずっと一緒にいられるのだ。

それはとても、とても幸せに満ちたことだ。

手放しによるこべる素晴らしいことではないか！

モモンガはごくごく自然に湧いてくる欲望に、ブレーキをかけた。あるいは勝手に抑制がかかったのか、モモンガには正直判断がつかない。

(俺は、おかしい)

ないつばを飲み込む。

じわじわと内側から変わっていく、もしくは変わってしまったことにゆっくりと気づいているだけなのか？ どちらにせよ精神の変貌を自覚したモモンガは、じっと押し黙った。ゆるやかに恐怖が湧く、この恐怖の根源は……

(変わることが怖いんじゃない、変わってしまったことでみんなに見放されてしまうのが、恐ろしい)

「モモンガ様、どうなされたのです？」

ギルドサインの帽章がついた制帽に手をかけ、舞台役者じみた大仰さのみぶりてぶりを交えてこちらを案じてくる。

「うん、いや、なんでもない」

モモンガは短時間でこれだけ精神的に疲労させてくるパンドラに頭痛を覚えながら、ふと気づく。

そういえば、モモンガはパンドラの忠義に対してなんら報いることを言っただけでやれていないということに気づいた。

あれほど我が身を省みぬほど心配してくれたのに、感謝の言葉のひとつもないのはおかしいだろう。

自分の作った存在であるからといって、おぎなりにしていい道理もない。それが手痛いしっぺ返しになっても困りものだ。いろいろと

いかに自分にとつて目を逸らしたい存在であっても、それとこれとは別だ。何か一言くらい言っただけでもいいだろう、と。

「ひとつ、言い忘れたことがあったのを思い出してな。……お前にあのよう心配されて嬉しかったぞ、ありがとう」

パンドラ相手にそれらしく装飾したセリフを考えるのは面倒で、ただ感じたままを述べた。

「んモモンガさまあ！ あれだけのことで、そのような過分なお言葉をいただけるとは！ 生きてナザリックに居られることを貴方様に感謝しなければならぬのは私です！ 私は、シモベとして当然のことを言っただけであります！」

後ろからついて歩いてくるパンドラズ・アクターの方は見ない。

それでも視線をやらなくても、言葉一つ一つにうるさいくらいの身振り手振りをつけていることはきぬ擦れの音や、激しく打ち鳴らされ

る軍靴の音で簡単にわかる。

「ええい、うるさいわ！ 素直に俺からの感謝を受け取っておけ！  
いいか、パンドラ。探索の任務に就くさいはその大げさを極力抑え  
ろよ。頼むから！」

どうにも、自分が作ったものという気持ちがあるせいか、このドツ  
ペルゲンガーに対しては口調が砕ける。

支配者のような振る舞いを心がけねばという意識が幾分か薄れ、素  
の鈴木悟が混ざる。まあ、これはおいおい直していくとしよう。

パンドラを連れて戻ると、ヘロヘロ達はのんきな会話をしていた。  
「体がボロボロだったのに、今はすごく調子がよく感じるんです。こ  
んなにすっきりした感覚いつ以来だろう。私は会社に行きたくない  
ですよ、会社から逃げられるなら逃げたい。もう、眠っていいでしょ  
うか、もう寝て覚めたらエルダーブラックウーズのまままでメイドさん  
たちに囲まれていたいですよー。はは……」

「仕事に行けないのは困るなあ。いろいろと相談窓口が立て込んでい  
るのに、みんな仕事が雑でまともにすすまなくて。真面目に警察官の  
職務を全うしないひとが多すぎて、あの状況を放っておくのは心配で  
す」

「ミーシャもね、学校行かないでアウラお姉ちゃんたちとお勉強した  
い！」

「こら、美沙。そういう理由で帰りたくないなんていうのはダメ」

聞こえてくる会話は、現実逃避なのかとても気楽な会話だ。日常と  
なんら変わらない。とてもではないが、異常な事態に陥っているよう  
には到底思えない。

（みんな、俺のように受け入れてしまってるのかな？ 仕事がしんど  
くて体を壊してるっていうヘロヘロさんやまだ子供のミーシャちゃ  
んはともかく、リーザさんは意外だな。もっと取り乱すのかと思つて  
た）

それとも、いまだにこの状況を夢とも思っているのか。

モモンガは首を捻った。

「みなさん、もどりました。円形闘技場に行きましょう」



玉座の間から退出したアルベドは一階層でパンドラを待っていた。

「お久しぶりですね、Fraulein」

「そうあれ」と創造主に定められた大仰な身振り手振りを封じることにはいささかの躊躇いと違和感があるが、無駄が多いあの動きが不必要に時間を取ることはわかっている。モモンガに予め命令されていたこともあり、パンドラズ・アクターは彼にしては非常に珍しく大人しく知的な佇まいで守護者統括のアルベドに再会の挨拶をした。

「久しぶりね、パンドラズ・アクター。以前会ったときにその軽々しい呼び方は慎むよう言ったはずだけど」

美しい女の、完璧な微笑はどこか硬い。それは発言に不快を示した、などという単純なものではなくもつと根が深い苦悩がにじみ出ていた。

「おお、これは失礼しました。守護者統括殿」

ギルドメンバーのみしか立ち入れない宝物殿を守護領域とするパンドラズ・アクター。彼が初めて他のシモベたちと顔を会わせたのは、ウルベルトの結婚式。その時も彼はこうやって女性陣の不興をかっていた。

面識はその一度きり。

だが、その一度の短い間に彼の深い知性と、名前の通り舞台役者じみた滑稽な振る舞いの奥にある侮れなさ、というのをアルベドはしっかりと見抜いていた。

「モモンガ様から聞いているわね？」

現在、ナザリツクは想定不能の事態に陥っているわ。至高の存在であられる方々が困惑するほど、火急の情報収集を必要としている。

私たちではかの方たちの手足となるには到底足りないけれど、粉骨碎身し働き、情報の少なさから混乱している方々のその憂いを少しでも取り払わなければならないの。

……ねえ、パンドラ、貴方はナザリツクを世界の終焉から救うための転移の大秘術に関して、どこまで知っているのかしら。大秘術の代償が何であったかはご存知？」

微笑に宿る憂いの原因を、パンドラは理解する。彼女は己が非才を嘆いているのだ。

「モモンガ様から全てを聞きました。御方々の半身が秘術の礎として行使されている、と……」

自分たちが生きるために、尊い方が犠牲になった。そのあれと設定され、常にオーバーリアクションでテンションが振り切れている状態で話すパンドラズ・アクターでもその事実を口にするには、あまりにも苦々しく、悔しかった。

「そう、貴方も教えられていたのね。」

この事実は現状、ナザリックのほとんどのシモベが知らないの。

アウラから聞かされた私とモモンガ様から教えられた貴方を除けば、ぶくぶく茶釜様から話を聞かされたアウラとマーレしか知らないわ。折を見て周知させるから、そのことは黙っていてちょうだい。

今、御方たちのなものにも代えがたい、それこそ私たちの命などとは到底釣り合わない大事な半身を用いての大秘術の行使の直後なの。一見するとお変わりなどないように見えるけれど、どこにその反動がきているのかも分からないわ。至高の方々の犠牲を知ったシモベの混乱や悲嘆で、残ってくださいだった方々のお心を乱すわけにはいかない。いいわね、パンドラズ・アクター、このことはまだ他言無用よ」

「ええ、承知しております。守護者統括殿」

半身を失い、二度とナザリックに帰ってこれなくなった者の中には、彼女の創造主であるタブラ・スマラグティナがいる。その悲嘆を飲み込み、気丈に振る舞う守護者統括にパンドラは軍帽をとって深々とお辞儀をし敬意を示す。

「では、貴方はアウラが率いるシモベたちの一団とソリュシャンと共にナザリック周辺の探索に加わってもらおうわ。」

周囲の探索と情報収集がメインなのだけれど、それを上回る最重要任務があるの。それはイーウルベルト様の搜索」

パンドラはやはりそうなのか、と内心ひとりごちる。

モモンガが至高の方々と合流するとき、ずっとナザリックを守っていてくださっていたウルベルトの姿がなかったのだ。

多数の至高の気配を感じながら宝物殿で待機しているとき、急に気配がひとつ消えた。それは、ウルベルトのものであったのだ。

モモンガに事情を尋ねる前に探索の任務につけと追い払われたので子細は知らないが、彼だけがナザリツクの外に放り出された事情があるらしい。

「周辺にウルベルト様を見つけ次第、姉さんからアウラに連絡がはい  
る手はずになっているわ。その時は、何をおいてもウルベルト様を優  
先なさい。言わずとも分かっているでしょうけども」

アルベドは先程までの憂いを取り払い、婉然とした笑みを深める。  
「役割分担なのだけれど、ソリュシヤンには戦闘回避のための周囲の  
警戒と索敵、そして知的生物の発見をしてもらうわ。アウラは探索を  
担当をし、なんらかの事情で戦闘が発生した場合シモベを使って退却  
の時間をかせぐ、あるいは完全な殲滅が役割。貴方の仕事は知的生物  
を発見した場合、『出来るだけイリニ様の御心にそえるよう友好的に  
ナザリツクにとって最上の利益となる交渉』をすること」

守護者統括としての顔が、違う何かになる。

「イリニ様はウルベルト様のご子息であらせられるけど、かの至高の  
お方とは違い、下等生物にとっても優しい方。その優しい御心を痛ま  
せるような行動を、他の者たちと違って、貴方は取らないでしょう？」  
仮に、それに反する行動をとれば、何をもってしてもその報いを  
受けさせるといふ女の顔を浮かべる。

パンドラは彼女のその顔に、以前会った時とは全く違う差異を感じ  
取る。荣誉ある守護者統括という最高の地位についても、女であ  
ること、サキユバスであるということ捨てない放埒な本性を潜ませ  
ている彼女だが、その気配が薄い。

今の彼女は、まるで。

「承りました。ウルベルト様のご子息には、モモンガ様より直接託さ  
れた願いもございます。かの方の御心にそえるようこのパンドラズ・  
アクター、任務に励みましよう！」



ある、過去の日の話。

モモンガはその日、ギルド武器を持っていた。

本来ならばずっと所定の場に飾られていて、本人の気の小ささのせいでおいそれと持ち出したくはないのだが「この子の名前は？　どんな子なの？」というミーシャの質問にいつでも答えられるように、マスターソースを閲覧できるギルド武器を持ち歩く癖がついてしまった。

ナザリックに再び顔を出してくれるようになった面々は、それを責めるでもなく、むしろ気にしすぎなモモンガに対してその行動にたいして背を押してくれた。

彼らの言い分ではギルドマスターなんだからいいだろう、それに似合うし、ということらしい。

しかし、仲間から了承を得られたとはいえ、みんなで作ったみんなのもの。自分の都合で勝手に持ち出していいものではない。そんな罪悪感があったから、玉座の間でアルベドを発見したとき、勝手にワールドアイテムを持ち出したらしいタブラのことを責める権利もないと思った。

アルベドの持つ真なる無に気づいたのは、リーザとミーシャの旗を玉座の間に飾るにあたって、配置の変更を考えるために玉座の間に行った時のことだった。

「これは酷いー！」

ペロロンチーノは爆笑した。

「あんたも人のことは言えないでしょう」

ぶくぶく茶釜はそう言いつつも、呆れているようだ。

「いやー、ギヤップ萌えのタブラさん、ここに極まれりって感じですね」

でも、いくらなんでもこれは酷い、とモモンガは思った。

設定を見ればワールドアイテムを持たせた理由が分かるかと考え、いそいそとコンソールを叩いて拝見させてもらったわけだが、それを後悔するくらいの長文の羅列が視界に襲いかかってきた。それをな



んとか読み終えた後の、とどめが「ちなみにビッチである」の身もふたもない言葉。

設定の隅から隅まで、いかにも悪役ギルドナザリックのNPCらしき、これぞ最上位NPCだとも言える設定であると思いきや、最後の最後の一文に全てが持っていられる。

たおやかな女性の見た目を裏切る狡猾さ、残忍さ、女性らしい振る舞いをする一方でそれは実は計算されたものであるかもしれないとなかなか深い設定だ。個人の能力、ナザリックに対する忠誠、そして守護者統括である矜持は高く、味方であれば頼もしいだろうが、この女性が意思を持って話すようになったら、非常に恐ろしい女性になることは間違いあるまい。

だが、びっちなのだ。

「モモンガさん、タブラさんには悪いけどいつそコレ、変えませんか？」

そう言い出したのはつい先程までタブラさん最高と声高らかに笑っていたペロロンチーノだ。

「シャルティアの設定はあれなくせに、弟にしてはいいこと言うわね」「え、でも。本人の了承もなしに、それは悪いでしょう」

モモンガはその提案にためらった。

「んー、俺、『ナザリックは転移する』っていう話に合わせて、シャルティアの設定を少し変えるつもりなんですよ」

「え、初耳なんですけど、ちなみにどんな風にも？」

「こればかりはモモンガさんでも内緒です」

へへ、といたずらっぽくわらう。

「今までのアルベドはユグドラシルだからこそ、この『ビッチ』という設定でいられたけれど、違う場所に行くにあたってはそんな暇ないってことで。こう、場所が変わるんだっていう設定に説得力が増すし、心機一転してもいいんじゃないかって思って。そのほうが、未来を託すっていう感じにピッタリじゃないですか？　これがイリニ率いる新生ナザリックの守護者統括だ！　的な感じになる一文に変えちゃいましょうよ」

「うーん。いいわね。私も後でアウラとマーレの設定いじろうかしら。いいと思うんですけど、モモンガさん」

ぶくぶく茶釜までそんなことを言うのだ。

「ギルドマスターとして仲間の間違いは正してやるべきですよー！」

「せっかくだから、ギルマス特権を使ってしましましょうよ。モモンガさんのことだから、使ったことないでしょ？ ゲームが終わる前に、わがままのひとつくらい許されるよ、モモンガお兄ちゃん」

「そ、その声はやめてくれ姉貴ー！」

説得に次ぐ説得に、最終的にはモモンガが折れた。

消すのは最後の一文だけ。設定に使える限界文字数ピツタリ使い切るまで書かれたそこに入れられる文字はたったの11文字。

その日は作業しながらそこに当てはめる文章について三人で考えたが、結局決まらなかった。

二人のログアウトを見送った後、一人きりになったモモンガはウルベルトとの会話をふと思い出した。

ウルベルトと二人きりでナザリック維持をしていたとき、彼が言ったこと。

子供の頃に両親が帰ってきてくれなかった悲しさとか、孤独感を今でも覚えているんです。

小さい時の自分と似たイリニが、帰ってこない俺や明美さんを待っているのかと思うと、なんていうか、自分と重ねてしまって、ですね。会いに行かないと、って思っちゃうんです。ほんと、NPC相手に馬鹿馬鹿しいとは理解しているんですけど。データなんだから、悲しいとか寂しいとか会いたいとか、そう感じるわけないのはわかってるんですけど。

この子が俺と会うことで慰められているなら、自分も慰められている気がするっていうか。あの時誰にも救われなかった自分を助けるっていうか……自己愛みたいなもの、気持ち悪いつて自覚はあるんですけど。

寂しいな、って思います。平気だって、ずっと思っていましたけど一

人は、寂しい。だから、俺は、イリニを自分の部屋じゃなくて七階層に居てもらってるんです。あそこならきつと賑やかで……とかそういうバカな妄想してます。

ほんと、おかしいでしょ？ モモンガさん。これがいい年した男の考えていることですよ。ありえねーってなりますよね。

ゲーム終了に伴い、もう、父親であるウルベルトは彼に会いに行けなくなる。

彼らの新しき旅路の後、イリニの父親代わりは、きつとデミウルゴスになるのだろうか。そんな空想を浮かべる。

では、母親は？ ユリだろうかと考えたが、たしかやまいこがイリニの設定にユリを姉のように慕っていると書いていたから、母親とは少し違うのだろうか。

「母親にしては、ちよつとどころかかなり怖すぎるかもしれないけど……うん、悪役ギルドナザリックの幼い主人を支えなきゃいけないだもんな。怖すぎるほうがかえっていいだろう」

モモンガはアルベドの設定を書き換える文章を決めた。

ギルド長権限を行使し、最後の文を変更する。

（俺が、ウルベルトさんの存在に助けてもらっていたように、この子が助けてもらえるといいな。あの人は一人は寂しいって言ってたけど、俺の存在が少しでもその寂しさを癒せてたのかな……イリニだけじゃなくて、俺もあの人を助けてやることはできていたんだろうか……はは、俺も大概気持ち悪いな。

うん、アルベドには新天地ではアルベドにはイリニを傷つける奴がいたらばっさばっさ薙ぎ払ってもらって拷問でもなんでもしてもらおう。それで表側では本当にやさしいお母さんみたいな顔してるんだ、主婦業は得意って書いてあったしな。その裏でイリニのために謀略とか拷問とかしてるんだろうな、きつと）

俺が、あの人を助けてやれる特別な存在になりたかったから、代わりとなる子供に助けてやってほしいという願いを託す、代替行為だ。ああ、本当に俺は頭がおかしい。

“イリニの母代りである。”

◆◆◆  
『創造されし者よ、そう在れ』

至高の方によって決められた形がある。自分たちに決められた役割。

アルベドはその形すべてに誇りを持っている。かつて、創造主が定めていた己のあるべき姿すら、アルベドは愛していた。いかな地位についていようと、自分の本性まで捨てることはない。そんなタブラ・スマラグティナのアルベドへの愛情を感じ取ることができた。

そして、モモンガによって与えられた役割も。たとえば、それがモモンガの自分勝手な欲求から端を発するものであっても、シモベであるアルベドにとってはこの上ない喜悦であった。彼女の全ては彼ら至高のために存在しているのだから。それが彼の沈んだ心の慰めとなるのであれば、いかなるものでも受け止めよう。

口頭での命令と違い、己の形を定められる特別な命令というのはそれ以外の『何か』まで受け取る。最初に形を決められたときはあるべき形とともに流れこみ濁流を受け取るようではつきりとした判別はつけがたいのだが、二度目のそれを、アルベドははつきりと知覚することができた。

同じようにペロロンチーノによって新たなる形を与えられたシャルティアも、それを取りこぼすことなく受け止めたようだ。

「ペロロンチーノ様がお隠れになつてしまったあと、ペロロンチーノ様が私と『結婚できなかつたことをとても悔しがるくらいにいい男性を見つけて、幸せになれ』と……そう決められたの。私が、私が本当に結ばれたいのは、あの御方なのに！ プロポーズもしてくださいだったのに！ どうして！ 断るつもりなんてなかつたのよ、天にも上る気持ちで、なにも言えなくて……ペロロンチーノ様に誤解を与えたままこのまま会えなくなるなんて、思つてなかつた！ あんなに、あんなに私を大事に思つていてくださったのに！」

悲鳴だった。忸怩たる悔恨を叫んでいた。

「会いに来てくださらなくなつて、私のことをいらなくなつてしまつたのだと不敬にも疑つてしまつたの。でも、そうじゃなかつたのよ！私のことを本当に愛してくださっていた！会えなくなることを悲しんでおられたのに！ どうして、どうして……」

三階層でシャルティアからの報告を聞きにいった時、激情をぶつけられた。

廓言葉も忘れ、ただの少女のように。

それを宥めすかして、守護者としての責任を自覚させ立ち直らせるのは流石に骨だつた。

最後には守護者として相応しいあるべき姿、をとつていたが完全に立ち直るのは難しいだろう。自らの創造主と二度と会えないという事実は、自分たちシモベにとつて絶望でしかないのだから。

アルベドがこうも冷静でいられるのは、彼女が受け取つたものはシャルティアとは全く性質がことなるものだからだ。

シャルティアが取り乱すのは、形とともに注がれたのはなんら対価をもとめていない、返しようがない深い愛であつたため。受け取るこゝとしかできない、それによつて主を慰めることもできなければ、何かをして差し上げることができない、ある意味とても残酷なもの。

アルベドが受け取つたものは……強い、執着。それはアルベドに対してのものではなく、吐き出すことのできないウルベルトへの想いを八つ当たりのようにぶつけられた。

（強い、とても根深い、モモンガ様の我儘。これに応え、最良の結果を出すことこそ、シモベとしての幸せ）

アルベドはうつとりと微笑む。

至高の方という存在は全てが尊く大事なのだが、形、というものを定めてくださった方にはどうしても特別になつてしまう。創造主たるタブラ、そしてアルベドに新たな形をもとめたモモンガに対して、どうしても臆服した感情が湧いてしまう。タブラの不在になんとか平静を保っていられるのも、それが理由かもしれない。自分を決めてくださった方が、いるのだ。そのお心に添えるよう、シモベとして返していける方がいるのだ。これを喜びと言わずして何を喜びという

のか。

自身がウルベルトを守りたいと願っているから、代わりの存在であるイリニを守らせる。

自身がウルベルトを助けたいと願っているから、代わりの存在であるイリニを守らせる。

自身がウルベルトの特別な存在になりたいと願っているから、代わりにアルベドに特別な役割を与える。

自身がウルベルトの敵を甚振りたいたから、代わりにアルベドにその役割を与える。

自身がウルベルトの理想にそう姿を見せていたいから、代わりの存在であるイリニに対して優しい姿をするよう願う。

自身がウルベルトの敵を排除したいから、代わりの存在であるイリニの敵を徹底的に排除するよう願う。

代替行為だとモモンガは自嘲していた。だが、それで彼の人の心が救われるのであれば、アルベドは全力でその思いに応えよう。

アルベドは悲鳴を愉悦と感じる残忍な本性を垣間見せる笑みを唇に刻む。

ナザリックの主人は、外に対して慈悲を与えるよう命じたが、その実はどうだろう。

表向き残虐な行為を禁止しながら、イリニが厭う行為であろうと、彼が進むべき道に邪魔であればひっそりと排除せよ。モモンガはそうアルベドに命令しているわけだ。

やはりモモンガ様はモモンガ様だ、とアルベドは思った。

(ふふ、私とモモンガ様はまるで共犯者のようね。いえ、そう感じてしまうのはあまりにも不敬だわ。気持ちを改めなくては)

ぎゅつと己の体を抱きしめる。

モモンガのウルベルトへの執着を思い返すほど、胸が逸る。

ナザリックはモモンガにとって宝だった。全てだった。他の何物にも代えられないというその愛もまたアルベドに届き、その想いのたけ全ての結晶であるナザリックをモモンガにとって『ウルベルトの代わりである』イリニに譲り渡すという決断は、一種の。

(モモンガ様のウルベルト様への愛の告白なのだわ)

他人の情事を垣間見てしまったかのような感覚だった。他人の情事を見たところで気恥ずかしくなるような初心さなどサキユバスでもあるアルベドにはないが、それが至高の方のものともなれば話は別だ。名状しがたい気恥ずかしさと罪悪感と、そして道ならぬ思いに對して、何かときめきのようなものを抱いてしまう。

そこに恋愛感情がないことに、ちぐはぐさを覚えるがモモンガがアソデットであることも起因しているのだろうと明瞭な思考で推察した。アルベドが感じたのはとてつもなく澄んでいる大量の水の鎖が、ウルベルトを絡め取りたくて仕方がないという欲求のイメージ。肉欲はなく、ただ共にありたい、特別でいたいという幼い子供のような切望。

ウルベルトがいないと気づいたときの狼狽を見た。

喪失を嘆く噛み殺した悲鳴を聞いた。

なんであろうと自分から彼を奪う者は許さないという怒りを見た。

己の“モノ”であるウルベルトを必ず取り返す、という強い覚悟を見た。

もはやアルベドにとって、疑いようのない確信になった。

(なんて、辛い、一途な片思いをされているのでしよう)

ほう、というため息をついた。

体がやけに熱い。

あまりにも強い想いにこちらが焼き尽くされそうだ。

ナザリツクの主人のために、一刻も早くウルベルトを探し出さなくては、とアルベドは誓う。

(今は、ウルベルト様はおられないけれど、その間の無聊を御慰めしなくては……それは、私だけにしかできないこと)

アルベドは七階層にいる。守護者統括としての仕事もあるが、彼女の愛しい子に会うためだ。

灼熱神殿の中に隠されている、ナザリツクの至宝を探す。

イリニに優しい母の顔をちゃんと見せなければ。

それが彼の望むことなのだから。

とても、とても愛しくて仕方のないという態度を見せよう。  
とても、とても大事でしまい込んで外に出さず自分の側でずっと守  
りたいくらい大切なのだと伝えよう。

モモンガがウルベルトに伝えられない代わりに。



## それぞれ2

双子の姉は、終始固い表情だった。  
マーレも同じだ。

外の探索部隊に組み込まれた姉とモンスターたちを見送り、マーレは泣きそうになりながら、一人でとぼとぼと六階層の確認に回っていた。

至高の方々のお役に立てることは、シモベとしてとても嬉しい。  
全霊を持つてその命令に答えなければならない。

「ぶくぶく、ちゃがまさま……」

領域守護者たちにも確認し、自分の目でもしっかりと全容を見る。  
周る、歩く、立ち止まる、見る。

いろんな場所に、創造主との思い出がある。  
もう、過去になってしまう思い出がある。

ずっとずっと、重ねていけると信じていたのに、これ以上増やすことが不可能となってしまった、思い出だけがある。

四肢に十分に力はいらない。  
こんなことではいけない。

ぎゅつと大事な杖を握りなおした。

「ボ、ボクにもっと力があれば、ぶくぶく茶釜様の代わりに、なれたのかな……」

至高の存在の足元にも及ばないシモベの存在では、代わりになれるはずもない。だが、代わりになりたかった。

至高の存在が自分たちに未来を託すために集められた玉座の間。そこには双子の創造主たる御方の姿が欠如していた。

二人は、大切な御方がいない理由を知っていた。

世界の終焉からナザリツクを、アウラやマーレたちを救うための大秘術——その礎として既に尊い御身を投じていたからだ。

終焉そのものが防がれ、ナザリツクはユグドラシルに在るままなのか。それとも転移は行われたのか。

どちらにせよ、自分たちシモベは、助けられてしまったのだ。尊い

御方を犠牲にして、おめおめと生き残っている。

ぽつり、ぽつりと至高の存在が御隠れになってしまっていたとき、二度と帰ってきてくださらないかもしれないと、でも、もしかしたら帰ってきてくださるかもしれないと、わずかな希望にすがっていた。

不安で寂しくて、怖くて……たったお二方の気配しかしないナザリツクでずっと待ち続けた。

今になって、それは幸せな時間だったのだと、マーレは知った。

もしかしたらと、夢を抱くことができた。そして、再会してまた一緒にすごすことが出来たのだから。

けれども、今回の別離はそんな夢すら打ち砕く。

マーレたちシモベの力不足のせいでもう、二度と会うことは叶わない。絶対に。

「ご、ごめんなさい。ごめんなさい」

届くことはないを知っていても、リアルに居られるという半身になってしまったぶくぶく茶釜に謝罪した。

アウラから聞いたと言うアルベドが報告を聞きがてら口止めにきた。

残ってくださいった方々の御心を煩わす必要がないように、時期が来るまで口外は禁止する。

この事実を知ってしまったからには、シモベたちは平静ではいられないだろう、と。

本当に、そうだ。

この事実は残されてしまったシモベたちの心を揺さぶる。

残ってくださいった方々——あるいはぶくぶく茶釜らがなんらかの策を講じ、自分たちのために残してくださったのでは、と思う——にこれ以上心労をかけてはならないのだ。今は御身がこのナザリツクに在るとはいえ、大秘術の行使による弊害がないとは言いい切れない。

偉大な方達が、命の一つを犠牲にえらぶほどシモベを大事に思ってくださいっていることを知った。その恩義に報いないのは、シモベとして怠慢だ。命を賭してくださいった方々に胸を張れるよう、より一層の

忠義を、より一層の栄光を、捧げねばならない。

「あ……」

マーレは立ち止まる。

畏敬と崇拜の対象である、自分たちの全てである尊い気配を自分の守護する階層で感じた。

「ご、ご挨拶に向かわない」と！

マーレは駆け出した。

姉ほどに早く走れない体がもどかしい。

円形劇場の貴賓席から、至高の方達が見えた。

マーレの胸の内に、罪悪感が広がる。

さきほどまでであった罪悪感は、ぶくぶく茶釜へのもの。

今、マーレの胸に広がり迫ってくるのは、彼らから尊い同胞を奪ってしまった罪悪感だ。

至高の方を害してしまった迂遠な理由は、きつと自分たちなのだ。

大好きで大切な方々の、かけがえのない存在を奪ってしまった、途方も無い罪。

マーレは自分は裁かれるべきなのだ、と自らを責めた。

アルベドの言葉も忘れ、一目散に主人たちに向かって行く。

「モモンガ様！ たっち・みー様！ へろへろ様！ リーザ様、ミーシャ様！」

モモンガと合流したあと、すぐにも円形闘技場に行こうかと言う話になったが、アイテムの確認と補充をするべきと考え直し、しばらく宝物殿にいた。

アイテムボックスの仕様を確認しなおし、安全を確認した円卓の間と宝物殿をリーザとミーシャに移動させて使用感を確かめてもらう。

モモンガはひとりでレメゲトンの悪魔たちの確認をしに行ったりと、なかなか慌ただしかった。

そうこうしてから、やっと来たのが六階層だ。

森の匂い――

自然が破壊尽くされた現代において、それはどんな大量の金を積んでも嗅ぐことが難しいとても贅沢なもの。

そこそこの上流階級が、それを再現した高級品の香水の匂いを、自然をイメージした家具に纏わせたり、一室に上品に纏わせているくらいなのだ。

この匂いは、そんな偽物とは一線を画した本物を感じさせる。

本物の匂いなど嗅いだことなどないはずなのに、本能がこれは森の匂いだと知っている。

格子戸の先を行くと、娘のために通いなれた円形闘技場——円形劇場と名前がつけられたそこは、子供には到底見せられないような殺戮の舞台——があった。

だが、嗅覚につよく訴えかける変化に、今までとの変容を強く確信する。

「猫ちゃんたちはいるかなー」

いつもであれば、ここにくる一番の目的である農場の方に勝手に向かいそうになったので、たつちは慌てて娘の手を掴んだ。今は何が起るのかわからないのだから、目を離すわけにはいかない。

「雪丸にはいつでも会いに行けるから、今日はパパとママと一緒にいような、美沙。体を動かして、おかしいところがないか確認するんだ」  
時間も時間だから、そろそろミーシャのことを休ませてあげたい親心もあるが、それ以上に安全の確保が重要だった。些細なことには目をつむる。大丈夫だ、と安心してからひとところゆつくり休んでもらえればいい。

「はーい。でも、いつものミーシャと変わらないよ？」

軽快にラジオ体操の動きをして、異常はないとアピールする。

「それ以外にも、魔法やスキルを使えるか、確認しような」

ミーシャはその時に興味を湧いたものを、強さなど全く関係なく好きないように取得していた。フアーマー、ハイ・フアーマー、ティマー、レンジャー、コック、ウィザード、ビーストサモナー、ドルイド、ハイ・ドルイド、フォレスト・メイジ、フォレスト・メイジ・アライヴアルなど直接戦闘系のクラスはなく、魔法も魔力系召喚術と信仰系森祭

司術をそれぞれ第四階位までしか使えない。仮にゲームと同じ力が扱えたとしても、戦闘となったら一番の弱点がミーシャになるだろう。

「うん、わかった!」

昼寝をしていたとはいえ、全く疲れた様子を見せずに返事をする娘にたつちは、おやと首を傾げる。

いつもとは違い夜中まで起きている興奮状態のせいかと思っていたが、ゲームの体になったことも関係しているのだろうか。

「どうかしましたか、たつちさん」

闘技場の中央に五人で進んでいると訝しげなモモンガに問われる。

「ミーシャが全く疲れた様子を見せないのです、おかしいなと思っただです。時間的にももう眠くなってもいいのに、まだとつても元気なので」

それを聞いて、邪悪に見えるが内実は実直で素直な骸骨はうくと首をひねる。

「ミーシャちゃんの種族は疲労無効の効果はないので、装備品の効果じゃないでしょうか。リング・オブ・サステナンスを皆さんつけていらっしゃいましたよね? もしかしたら、そのせいかも」

「……本当に、それが理由ならゲームのアイテムがそこまで現実の肉体に影響を与えているって、すごいですよね」

たつちはしみじみと感心した。

「うわあ! 本当に溶けたわ、巽さん見て見て!」

子供のようにはしゃぐリーザの声に、モモンガとふたり声のほうに向く。

そこにはクズドロップ装備品をへろへろに突っ込んで遊んでいるリーザの姿があった。

「へろへろさんすごい! ドロドロだ! ドロドロさんだ!」

ミーシャも一緒になって楽しんでる。

「パッ常時発動型特殊技術スもちゃんと発動できるみたいですねー。切ることも可能みたいです」

粘体に触れるとドロドロと氷のように溶けていた金属製の装備。

ミーシャがアイテムボックスから取り出したであろう装備品を手にとって押し付けても、コールドタールのような黒い粘液が弾き返すだけで溶けることはなかった。

「……なんていうか、すごいな。本当にゲームの世界に入り込んでしまったみたいだ」

現実味の薄い光景に、モモンガは見入る。

「そうですね。……もう、全く。理沙は、子供じゃあないのに……」

たっちは困ったように、しかし愛しげにそこぼすと妻のもとへ歩をすすめた。

その時、彼は強い視線を感じる。

敵意はない——第六感のようなものがそれを察して過剰な警戒を抑える。

「モモンガ様！ たっち・ミー様！ ヘロヘロ様！ リーザ様、ミーシャ様！」

そしてすぐに悲鳴のような叫びが届いた。

最上位値にある貴賓席、そこにダークエルフの幼い少年がいた。

只人であればためらうような高さのある場所から、ためらいなく飛び降りる。

危うげな足取りで着地する。よろめくようにするから、一瞬、怪我でもしたのかと心配してしまった。

衝撃は肉體能力に緩和されたらしく、ダメージを一切受けていない様子でこちらに向かって走ってくる。

可愛らしい擬音が似合いそうな足取りで、だが本人としてはかなり必死そうだった。

見ているこちらが可哀想になるくらいに。

マーレ・ベロ・フィオーレ。

ぶくぶく茶釜が徹底的にこだわって作った双子の片割れ。

男の子だが少女の服装を可憐に着こなす、NPCの中でも有数の実力を持つ10歳ほどの少年。

そんなマーレは目にいっぱい涙をためて、転びそうな勢いでモモンガたちに向かって跪いた。

「も、申し訳ありません！」

「ふえ!？」

気の抜けた声は、一体誰のものであったのか。  
いきなり謝られた理由が皆わからず、混乱する。

「ボクたちに力が足りないばかりに、至高の方々が犠牲になるだなんてっ。御方がたのために存在するのがボクたちシモベなのに、それなのに、それなのにつ」

真っ先に察することが出来たのは、パンドラと同じようなやりとりをしたモモンガだった。

「あの、ボクたちなんかのために、失われていい存在であらせられないのに。皆様がいないと、シモベであるボクが生きる意味なんてないの。なのに、なのに……ぶくぶく茶釜様が、ボクたちのために大秘術の礎になると、贄となつて未来を託してくださいと……」

次いで、未来を託すロールプレイに立ち会ったたちも、ようやく得心がいった。

「ぶくぶく茶釜様が本当にお隠れになつてしまうなんて、いやで、とつてもいやで、怖くて、至高の方の決定を覆すことが不忠となつてもいいから、見限られてしまつてもいいから、生きていらつしやつて欲しかった。だから、ぶくぶく茶釜様の代わりにボクたちの命の全てを捧げるからやめてほしいと、必死になつてお願いしたんです。でも、あの御方はボクたちを愛しているから仕方がないので仰つたんです」  
この世の全ての絶望を背負っているかのような、悔恨の叫びだった。

たちはあの時のことを思い出す。

『セリフの合間に沈黙時間をいれますけど、それはアウラとマーレと会話してるんだって脳内補完してくださいねー』

あの軽い遊びの範囲に収まる行為が、こんな重い結果につながるなんて誰が想像しただろうか。

まともな大人なら想像なんてするはずないのは理性ではわかっているが、渦中にいるたちはひどく後悔した。

(恨みますよ、茶釜さん)

遊びに便乗した共犯者でもあるのだが、たっちはそれを柵に上げて  
心中で呻いた。

「ぶくぶく茶釜様の、大切な半身が失われてしまったのは、ボクの無力  
のせいなんです」

ぽと、ぽと、と床に雫がおちる。溢れた涙がこぼれおちていた。

さげられた顔の下、悲壮感で身を震わせて泣いている。

それは違う、違うのだ。自分たちにとってゲームで、遊びだった。  
あの話も遊びの延長戦で、こんな幼い子供が罪悪感を持つ必要なんて  
ないのだ。

ゲームが終わってしまって、いなくなってしまう自分たちにそれら  
しい理由をつけただけで、この子のせいではないのは明白なのだ。

「それは違うよ、マール。残された半身の身で、君たちの幸せをずっと  
祈っていると茶釜さんは言っていただろう？ そんな風に悲しげに  
しているのは茶釜さんがのぞんでいたことではないんだ」

たっちは歩み寄り、マールの前で片膝をついた。

「ほら、マール。顔を上げてごらん」

たっちが優しく言っても、マールは顔をあげなかった。半ば強引に  
顔を上げさせて、涙を籠手のまま拭いてやる。装備を外したらかえっ  
てマールを傷つけそうだから仕方ない。装備を解かなくても、人間の  
感覚ではなく節足の神経が繋がっていることを理解していた。

涙にぐちゃぐちゃになっていた。小さな子供にこんな顔をさせる  
のは、人の子の親として心が痛む。

「君たちと二度と会えなくなってもいいから、自分たちの肉体を使っ  
て君たちを消滅から救ったのは私たちの我が儘なんだ。それに巻き  
込まれてしまったマールに謝らなければならぬのは、むしろ私たち  
のほうだ」

「そ、そんなことないですつ。すべてはボクが不甲斐ないせいなんで  
す」

拭いても、拭いても涙はとまらない。

「ど、どうか、ボクに、罰を、御与えください」

それは、いつそ殺してほしいと願っているように聞こえた。



ナザリツクへと還ってきてくれたぶくぶく茶釜の、大切なNPC。たつちと同じく、そんな彼が泣いたままでの放っておくことなんてできなかった。

泣いている子供をなぐさめた経験なんてないのに、すこしでも何かしてあげたくてモモンガはたつちと隣に片膝をつく。

「なあ、マーレ」

頭をなでながら、茶釜さんの想いを少しでも代わりに伝えようとしたその時、

「いたっ」

少年の小さな悲鳴があがった。

モモンガは反射的に手のひらを引っ込めた。

「あー、もしかしてネガティブタッチじゃあ……」

へろへろのつぶやきが聞こえる。

（ネガティブタッチ？ でも、ゲームではフレンドリーファイアはなかったはず……現実になって同士討ち禁止が解除された？ しまった！ よりによってこのタイミングで気づくのかよ！）

は、と隣を慌ててみる。

（あ、やっばい。たつちさんの視線が痛い。突き刺さってる！）

フルフェイス越しでもわかってしまう視線。

モモンガは慌ててこの場を上手く切り抜けるよう頭を働かせる。

「いいか、よく聞けマーレ。今のが罰だ。痛かったらう？」

（よし、ネガティブタッチを切る。へろへろさんだつてすぐに切り替えてたし、簡単にできるはず……）

意識すると、呼吸のように自然と行うことができた。

「い、今のが、ですか？」

到底足りない子供が目が訴えてくる。

「そうだ。そして罰はあれだけではないぞ」

モモンガが付け加えるとそれを待ち望む顔をするが、マーレの想像

するようなことをするつもりはない。

ぐりぐりと乱暴なくらい頭をなでる。

「う、あ。モモンガ様っ」

涙で目もとを赤くしていたが、頬も紅色に染まる。いやそうにして  
いる訳ではなく、びっくりして照れているようだった。

「お前はまだ子供なのだからな。こうやってたくさん撫でられて、み  
んなに可愛がられるのが罰だ。だいたいな、ぶくぶく茶釜さんにとつ  
て宝物であるお前たちに罰なんて与えたら、私があの人に怒られてし  
まうだろう？ あの人を怒るととても怖いんだ、マーレは知らないか  
？」

「あ、あの。知らないです。ぶくぶく茶釜様はとてもお優しくかったか  
ら……」

「そうか。それはきつとマーレがとてもいい子で大事だったからなの  
だろうな。そして私にとつても、みんなにとつても大事なのだ。いま  
でも、これからも、それは変わらない。だから、どれだけ自分のこと  
が許せなくても、自分の無力が罪だと思っけていても、誰にもその罪を  
裁かせたりしない。……茶釜さんがいなくてもみんなに愛されて、幸  
せになりなさい。それがきつと、お前にとつて一番の罰となるのだろ  
うな」

ぶくぶく茶釜がいなくても、その言葉にマーレはびくりと身体を震  
わせて、また大粒の涙をこぼした。

「ぶ、つう、ん」

嗚咽をこらえようとしたマーレを、モモンガとたつちの間に割って  
はいった存在が抱きしめた。

「泣くのを無理に我慢する必要なんてないのよ」

労わりにあふれたやわらかな声がマーレを包む。

リーザだった。

すべてを許容するような慈愛にあふれる母親という存在感、それが  
少年の琴線にふれる。

至高の方に対する不敬を考える余裕もなく、限界は決壊する。

「あ、ああ。ぶくぶく茶釜さま、ぶくぶくちやがましゃ、ま、うう」

円形劇場に、小さな子供の大きな泣き声が響いた。



ナザリツクの頂点に立つモモンガの命令を完遂し、至高の方々の胸の内にある憂いを少しでもいいから取り除く。いや、自身の持てる力を十二分に発揮し、心身共に十全になっていただくよう励まなければならぬ。デミウルゴスは、そのための力を偉大な創造主からいただいているのだから。

本来であれば英気に身を漲らせ、主のために働けること、主に使っていたただく幸福に酔っていただろう。

だが、今のデミウルゴスの気分は晴れない。無論、それで仕事を疎かにすることはないのだが。

デミウルゴスの中にある懸念は、創造主である至高の方——ウルベルトの身だ。

圧倒的な気配を見失ってしまったとき、他の至高の方々が未だナザリツクに居てくださる安堵と感謝も抜け落ち、デミウルゴスはイリニのように悲鳴をあげたくなった。

かの偉大な方に与えられた役職にあるまじき失態は見せられないとそれを飲み込んだが、頭の中はウルベルトの安否でいっぱいだった。

世界の終わり——そして、それを避けるためのナザリツクを転移するための大秘術の行使。その術にはどんな代償をどれだけ必要とするのか。

尊い宝であるイリニの後継決定の儀も、シモベとしての忠義に疑いを向けられても仕方ないくらいに身が入らなかつた。主の御子が至高の次の座に選ばれることは誇らしいはずなのに、視線は人の身となつてしまったウルベルトに固定される。

シモベに向けてモモンガが発した大いなる命を、転移した先でも完遂すべく固い誓いを胸に秘めるべきなのに、デミウルゴスは全身の震えが止まらず固唾を飲んでいた。

私たちは共に行けぬ——そう、告げた瞬間にデミウルゴスの中に

あつた予感めいたものが、決して明確な形にしたくない予測が、俊英な判断力によつていつそ確信に変わる。

(その大秘術に使われるものとは一体なんなのか?)

考えられる可能性が、無数に脳内を巡った。

本来なら乾きを覚えるはずのない喉が、幾度も唾をのみこんでしまふほど、痛かった。

彼の推測が正しければ、世界、という大きな次元を超える大秘術に使われるものとは、もしましや――

終わるはずの世界が終わっていない、モモンガが不可思議そうにこぼした言葉に、デミウルゴスは歓喜した。

周囲のシモベたちは、世界が終わろうと、転移しようどちらでもよく、モモンガたちがいなくならないことに歓喜していたが、デミウルゴスは違った。

たとえナザリックに御方がたが帰ってくるのがなくても、その御身が無事でありさえすればよかった。

デミウルゴスの一番の願いは、世界の終焉は避けられ、大秘術は行われず、だれ一人として至高の存在が欠けていないこと。

「七階層はどうなっているのかしら? あなたの事だから不足はないのでしょうけど」

アルベドが淑やかな女の顔で七階層に訪れた。

「警備に関して問題はあります。トラップも通常通り作動、七階層にどこにも破損した地点はなく、配置されたモンスターにも変化はありません。異常は見当たりませんよ」

「そう、それならば良かったわ。ここは次期ナザリックの主人となられるイリニ様が居られる場所。至高の方が生活される九階層と同じように、他の階層よりも安全性に関しては万全でなければならぬの」

「抜かりはありません。ご心配なく――ところで、アルベド。ひとつ聞いておきたいことが」

「なにかしら」

「モモンガ様が仰つた大秘術の行使には、一体何が使われているのか

知っていますか」

デミウルゴスがぶつけた質問は端的だった。

「……貴方なら前情報なしで、その結論に辿りつくと思っていたわ。聞かなくても分かっているのでしょうか？ これはアウラとマーレ、そしてパンドラズ・アクターが直接創造主たる至高の方から聞かされたことよ。他のシモベたちは知らないから、ナザリツクの混乱を避けるためにまだこのことは黙秘しててちょうだい。」

大秘術の代償は、我々の知るお姿の至高の方の半身。今、ナザリツクに居られる方々以外は、リアルの世界にある半身に魂を完全に宿されているらしいわ。

「……デミウルゴス？」

デミウルゴスが常に浮かべている余裕のある笑みが消えた。

「いえ、なんでもありません」

なんでもないとごまかせる表情ではなかった。アルベドは追求する。

「貴方が何か知っているのであれば、教えてほしいのだけれど。今は些細な情報でもかき集めなければならぬの」

守護者統括としての厳しい眼差しをデミウルゴスに向けた。

「不敬に値するような愚かでおぞましい最悪の想像をしてみましただけです。口に上らせるものではありません」

平静を保とうとして失敗したかのように、わずかに声が震えた。

それにアルベドが痛ましいものを見る目を向ける。

玉座の間に居た至高の存在の中で、彼の創造主だけが欠けてしまったのだ。

ウルベルトだけが突如として消えたのは、彼だけが大秘術に正常に巻き込まれたからだと考えたのだろうか——そう、アルベドは察した。

「安心なさい、デミウルゴス。ウルベルト様ならば、無事だわ」

安請け合いのような慰めでもなく、期待をかけるような曖昧なものでもなく、アルベドは確信を持って断言した。

「二グレドから何か情報があったのですか!？」

「いいえ。でも、私には分かるの。」

ウルベルト様がいないと気づいた瞬間、とても動揺して苦しそうにしていたけれど、すぐに落ち着いておられたわ。

ウルベルト様はモモンガ様とずっと共に在らせられた言わば盟友のようなもの。至高の方々が次々と御隠れになったときも、あのお二方だけが長い間ナザリツクに残ってくださった。そのせいなのでしようね、他の御方がたとは一線を画した絆で結ばれておられる。

デミウルゴス、貴方はわからないでしょうけれど、モモンガ様は貴方が想像する以上に、ウルベルト様のことを思っただけじゃありません。もし、二度と会えないのだとしたらもつとお嘆きになり、失った原因に憎悪を見せるはずだわ。

私たちシモベに支配者としてのお顔を見せ続けられる余裕があるだけの、なにか確信があるはずなのよ」

アルベドの説明に、デミウルゴスの中にあつた最悪の想像がやつと否定された。

そうだ、そうだった。不確定の最悪の可能性に振り回されて、シモベとして最も大事なことを忘れていた。

至高の存在に比べたら、はるかに矮小な身でどれほど思い悩んでも無駄なのだ。どれほど高い確率の可能性を羅列したところで、それは至高の前にはすべて無意味。自分たちの絶対唯一の最高の主人を信じればいいのだ。

「ええ、本当にそうです。貴方の言う通りですね、ありがとうございます。あの時、あんなにも取り乱していた方が、我々の前にいるとはいえ先ほどはとても冷静だった。モモンガ様は私にはおよびもしない明晰な頭脳をお持ちのお方だ。例え不測の事態に陥ろうと、ウルベルト様の無事を確信できても不思議はありません」

モモンガの激しい怒りと覚悟を見たのは、つい最近の出来事だ。ナザリツクから外出するとき、いつもなら七階層にイリニを送りとどけるのは父親であるウルベルトであった。しかし、その日はモモンガが七階層に訪れた。

酷く暗い顔をしたイリニを連れ戻したモモンガは、ウルベルトの不在に怪訝に思ったりイリニを案じたりする余裕をデミウルゴスから奪う

ほど、何者かに対する敵意に満ちていた。

デミウルゴスや十二宮の悪魔、魔将たちの存在など目もくれず、シモベへの慈悲として下々に与えてくださる支配者然とした雰囲気をかなぐり捨て、ただの男としてそこにた。

『取り返す、絶対に取り返す。あの人は俺の大切な仲間なんだ。一緒にいられるのは、あと、たった数日しかないんだぞ?! それを、奪いやがって! 糞、糞、糞!』

尋常ではない憤怒は、七階層の空気すらも揺らすものであった。

さしものデミウルゴスすらそのお姿には背筋が冷えるような恐怖が沸く。

口を挟むことは許されない圧倒的な憎悪を放出し続けて、やがて収まった。

傍にいる小さなイリニは怯えたように身を竦ませて固まり、デミウルゴスも呼吸ひとつもできずに硬直していた。

自分たちに向けられているわけではないのに、モモンガの発するものは嵐のように暴力的で彼らの呼吸を奪った。

「イリニ、お前の父親はちゃんと取り返してくるから安心するといい」  
激しさから一転した穏やかさで告げると、モモンガは去っていった。

ウルベルトの喪失を理解できたのは、それからだ。

世界の管理者が恐れるほどの力を発揮したが故に、存在を奪われた。

「モモンガ様は、世界そのものから奪われたウルベルト様を取り戻した大いなる力と知恵を持つ御方だ。私たちは再び、ウルベルト様の無事なお姿を拝見できる。私もそれを確信することができました。そのためにも私は力を尽くさなければなりませんね。」

手を拱いていては再会した後にはウルベルト様に失望されてしまうーそれはとても恐ろしいことですから。私が、結果を必ず出すと知っている。そうまで仰った方の信頼にそむく訳にはいきません」

いつもの余裕がデミウルゴスの中に戻ってきた。

「理解してもらえたようで嬉しいわ。私たちはモモンガ様という偉大

な方を主人として頂いているのよ。なにひとつ間違いなど起こるはずがないわ。

ウルベルト様を取り返したという話、あの方が人間の姿に変わってしまったこととなにか関係あるのかしら？ 今は時間がないから、後ほど落ち着いたら聞かせてもらっても良いかしら。

それと、デミウルゴス。守護者統括として、そしてモモンガ様にそうあれと定められたイリニ様の母の代わりとして、あの方にお会いしていききたいのだけれど、どこにいらっしやるの？」

「貴方がイリニ様の母代わりですか？」

「あら、デミウルゴス、もしかして不服なの？ モモンガ様がそうあれと定めたことに反意をするつもりならば謀反とみなし、守護者統括として黙ってはいないわよ」

「いえ、モモンガ様がそう決められたことに反対するつもりはありません。あの御方のなさることです。何か深い考えがあつてのことなのでしょう。」

イリニ様の私室はこちらです」

デミウルゴスはアルベドを案内する。

神殿各所に配置されている彼の私用スペースもそうだが、イリニの部屋も入り組んだところに配置されている。

灼熱神殿という場所になれていなければ、確実に辿りつけない場所だ。

案内のためにアルベドに背を向けたデミウルゴスは、ひどくほっとしていた。

気がかりが解消されて、デミウルゴスの胸の内は晴れやかであった。

もつともデミウルゴスが恐れていた、ウルベルトが完全に失われてしまったという最悪の可能性は否定された。

むしろ、ウルベルトとはいずれ再会できるだろう。可能性が高い、などという曖昧なものではなく、確実に。至高たるモモンガの振る舞いでそれが容易に理解できてしまう。

叡智が集結された結晶ともいべきモモンガのもとにいれば、決し



て間違いはない。

モモンガの傍に立って彼を支えるたつち・みーたちには遠く及ばないかもしれないが、その麾下で尽力しよう。それだけで、ウルベルトとの再会は約束されたものとなるのだから。デミウルゴスの恐れていた推測はただの塵芥となった。

デミウルゴスが最も恐れていた可能性。

それは、ウルベルトと二度と会えなくなることではない。

もし、彼が大秘術によって『こちら』側だけの体を失い、リアルというもう一つの世界にのみ囚われ、ナザリックに戻れなくなったのなら、おおいに嘆き悲しみながらも、創造主が残してくださいださった御子に誠心誠意仕えていただろう。そして残ってくださいださった至高の存在の手足となり、シモベとして御方のお役に立てる力を授けてくださいださった創造主に感謝し、今は共におられない御方の幸運を祈る毎日を送っていただろう。

会えなくなることとは、絶対の喪失ではない。

デミウルゴスが最もそうであってくれるなど願い、だが最も確率が高いと睨んでいた可能性。

一つの魂に対して二つある肉体、そのどちらもウルベルトから失われてしまうこと。

——世界の管理者が恐れるほどの力を発揮したが故に、存在を奪われた。ナザリックの最高位につくモモンガが尽力し、やっと取り戻したウルベルトは、かつての力を失いたただの人間となり果てていた——アルベドには語らなかつた、そしてこれからも絶対に語るつもりのないこと。

デミウルゴスは、至高の方達が帰る“リアル”というもうひとつの体に対して、あるひとつの推論を立てていた。

不敬であることは承知している。あまりにも馬鹿げていることも。至高の存在であるウルベルトの半身とは、人の身なのでは、ということ。

純粹なる悪魔であるデミウルゴスだからわかるのだ。人の弱いところに滑り込み、利用する術に長けた彼だからこそ気づくことができ

た。

時折、ウルベルトは雰囲気を変えるときがあった。

絶対者たる優雅なものから、おぎなりでいささか乱暴な口調にかえる。

デミウルゴスにとって、そのどちらも大切なものだった。

下位である自分たちが落ち着く上位者としての話し方は、こんなにも素晴らしい御方に仕えていられるのだと優越感をくすぐり、いいよりのない多幸福感を満たしてくれる。段上から下々を見下ろし、下知してくださる優しさを持ち、存在意義を満たしてくれる力強さがあった。

後者は違う。真逆だ。親しみがあり、壁一枚どころか、何枚も隔てているような至高との心理的な距離が、ぎよつとするほどに狭まる。

自分は本当は賢くないのだと自嘲する。臆病で、寂しがり屋で本当は無力なのだ。だからこそ、デミウルゴスという存在を作り出したのだと。

大変苦労した、と。学がないから、理想を形にするのも人の何倍もかかった。頭がいいふりをして生きてきた嘘つきの愚か者だから、空っぽの知識しかなかった。完全な『今のデミウルゴス』を生み出すために、一度形になりかけたものを完全に破壊した。納得のいくものを作り上げるために、漠然としたものを、全ての理想を、ウルベルトの中にある夢と救済を何時間もかけて、自分という存在に注ぎ込んだのだと。

ウルベルトは語る、本当に壊したい物、壊したい世界、デミウルゴスに壊してほしい世界、願い、悪魔の楽園という夢を……

創造主たる彼がそう願うのなら、デミウルゴスはそれを何をしてでも叶えたかった。だが、それには世界という壁があった。己の無力が、ひどく悔しかった。これでは見限られても仕方ないのに、本当にやさしいウルベルトは無能なシモベを簡単に許してくださる。その優しさに、いつも胸が詰まる。

ウルベルトがその時にみせる人間への憎悪は、人間だからこそ生まれる類のものであった。

気づいてしまった時の動揺は、言葉にならないものだった。

まさか、と今までのウルベルトの悪魔としての生き方がそれを否定するが、それを頭の中から一度取り払ってしまえば、ウルベルトの悪魔としての姿や振る舞いは仮のもので、もう人間であるとしか思えなかった。

後者こそ本当のウルベルトの姿だとするならば……

裏切られた、などとは思わない。仮に、彼が人間と知ったシモベたちがウルベルトを否定するようなことを発言したら、仲間に見せる優しさなどかなくなり捨て、悪魔の残忍さと知恵をもってそれ相応の報復をするであろう。

デミウルゴスの忠誠は絶対だった。ウルベルトが悪魔であるとか人間であるとか、関係ないのだ。そんなもので翻るような半端で脆弱なものではないのだ。

ただ、怖かった。リアルというもうひとつの世界での彼が、言葉の通り無力なのだとすれば、側に控え御身を守ることのできない焦燥に駆られる。何かがあつてからでは遅いのだ。世界という壁が忌々しい、ウルベルトの宿願をやり遂げられないと理解したとき以上の、無力感がデミウルゴスを襲った。

臆病だというのならその懸念を振り払うためにも力を尽くしたい、寂しさを感じないように共にいたい。足りないものを自分という存在で補いたい。ウルベルトが辛そうに自虐などせずともすむように、全て、全て、全てを、彼の足先から髪の毛一本までデミウルゴスという存在の行いの全てで満たして、幸せであれるようにしてさしあげたい。彼を苦しめるものを退けて守りたい。作っていただいた恩を返したい。シモベとして、当然の願いだった。

ウルベルトの優しさだけで存在できるシモベでいたくなかった。もつと必要とされたかった。彼がデミウルゴスに求めてくる欲求はこちらがもどかしくなるくらいに薄く、それだけでは足りない。デミウルゴスがいるだけでいい——その言葉と思いに嘘がないのは知っているし、これ以上願いを抱くなど不遜であるとわきままえているが、本音を言えば、足りない、足りない、ちつとも足りないのだ。本来な

ら悪魔が抱くはずのない飢え、というものを理解できるくらいに、足りない。

デミウルゴスは我儘な自分を自覚している。

ウルベルトはデミウルゴスがいるだけでいいというが、デミルゴスはウルベルトがいるだけでは満足できない。

帰ってこれられない至高の方々への被造物を思えば、とてつもなく幸せであることがわかって居るのにも関わらず、だ。

『今の私は、お前にはどのように見えるのだろうか』

デミウルゴスはウルベルトからの問いかけを思い出す。

悪魔の姿ではなく、人の姿となって帰ってきたウルベルト。

その姿こそが真のお姿なのだとデミウルゴスは直感的に悟った。

強大な力を持つ肉体こそ取り戻せなかったものの、モモンガ様はウルベルト様の魂を世界から取り返し、リアルの世界のお姿で会いにきてくださったのだ、と。

核となる至高の気配は変わらないものの、強者としての力を失った脆弱なもの。

これが、これが、この下位モンスターにでもすぐに命を奪われてしまいそうな御方が……

ぞっとした。

いつまた再び彼を失ってしまうかもしれない恐ろしきで。

無力とは聞いていたが、このような弱々しい御方が外に出て行かれるなど信じられない。

このナザリックにずっといていただけなければ！ お守りしなければならぬ！

デミウルゴスは誓いを新たにしたのだ。

この、こんなにも弱い御方が、本当は臆病な御心を隠していらつしやる御方が、下々であるシモベたちが望む姿を見せようと、虚勢を張った姿を見せているだけなのならば……

そんな、無理をしてまで強者であろうとするのか。

嘘つきなのだと思ってしまった嘆きをこぼすほどに偽りの姿に違和感を抱いているのに、さらに嘘を積み重ね続けていたことを思うと、

無性に、いとおしさが生まれた。

自分だけが知っている、ウルベルト・アレイン・オードル様の、真実。

その優越感に、骨の髄まで喜びで痺れた。

問いには結局答えられなかった。

再会の喜びと、生まれてしまった感情に混乱していた。

畏怖と畏敬の念を持って接するべき至高の存在に、抱くべき想いではない。

必死に蓋をして、閉ざした。

喪失の瞬間、忘れようとした感情がまた揺り動かされたが、今のデミウルゴスの心はとも凧いでいる。

シモベとしての当然の心構えが、ちゃんとできている。

逸脱した感情は、最初からなかったように落ち着いている。

こちら側の世界の体がないウルベルト、ではその人の身の半身まで秘術の礎として使ったらどうなるのか？

その疑問は氷解した。

デミウルゴスはひとりごちる。

モモンガ様が、ウルベルト様を損なわれるようなことなどするはずがないのに、なにをいらない心配をしていたのでしょうか。

あるいは、最初からモモンガの掌の上だったのかもしれない。

ウルベルトがナザリックにいないのは、大秘術に巻き込まないようにモモンガがなんらかの手を打ったのだろう。

その上で、ウルベルトが再びナザリックに戻るように手段を講じているはずだ。

ウルベルトは帰ってくる。

モモンガが、ウルベルトを手放すはずなのだ。

デミルゴスは、よく知っている。

『ウルベルトさんは、俺の、大切な仲間なんだ。奪われたままになんてしておくものか、絶対に、絶対に！ あの人は、俺の！ 俺のっ』

とても、よく知っているのだ。



ネイア・バラハは今回の任務の困難さと無謀さ、そして横柄さに舌打ちしたい気持ちでいっぱいだった。気持ちだけで、実際はしないけれど。物音ひとつたてることすら恐ろしいのだ。たつたすこしの身じろぎが、自身の死に直結する——そんな追い詰められた予感があった。

雨水でぐしょぐしょに濡れた大地に死んだ蛙のように這いつくばり、背の高い草木に紛れ身をひそめる。

専門の野伏の技術を、もつと父から習っておくべきだったと痛感する。

呼吸の音すらも殺すくらいに気配を消す。

これで本当に自分の存在を薄めていられるのか、不安に駆られるがこれが今のネイアの精一杯だった。

他者と比べて優れている感覚の鋭さを十二分に発揮し、動いてもいい、その瞬間を見極める。

聖騎士魔法によってかけられた夜ダーク・アイ目の効果が切れないことを切に祈りながら、彼女は待った。ただ、ひたすら。

彼女は犯罪者のような目つきをしている以外、どこにでもいる少女であり、聖王国にならどこにでもいる変哲のない凡庸な従者だ。

ただ、彼女は少し、否かなり不幸であった。

ネイアが所属している隊の今回の任務は、亜人の侵攻を防ぐ長大な城壁の外に出たの偵察任務——人間などよりも遥かに優れた肉体力や魔的能力に優れた種族がいる亜人の一隊とはち会おうものなら、死んでもおかしくはないと危険な任務だ。

命を対価にしても行わなければならない、重要な任務でもあった。

国防を担う城壁の防衛は、その内側に住むものにとって受け入れがたいが、絶対ではない。

内側に引きこもり続けて維持できる安全ではないのだ。

スラーシユによる悲劇は長く語り継がれるものであり、人間の能力では思いもかけない奇襲をかけられて二度目の悲劇が起こりそうに

なったのは、一度や二度ではない。

ほかに、丘陵の種族間の抗争で土地を失った者たちが、今度は自分達人間の土地を手に入れようと攻めてくる。

強敵の接近をあらかじめ察知するための索敵や、丘陵の——とくに国に近い位置にある地帯の——情勢変更の偵察。それらは誰かが命をかけなければならぬ任務なのだ。

この任務自体は、正規の定められた範囲であれば、必ずや完遂しなければならぬ。

ネイアはその任務のためなら、命を落とす覚悟だつてある。

だが、今現在ネイアひとりに課されたものは違う。

（生きて帰って、お父さんには絶対恨み言を言わなきゃ。お父さんへの逆恨みで娘の私を無駄に死地にやるなんて……これが本当に必要なことなら、潔く……うん、ちよつと怖いかもしれないけど、当然のことだつて受け入れられるのに。でも、これはそうじゃない。騎士にあるまじき私情で命令するなんて、そんなの絶対に聖騎士に相応しくない）

悪いのは父親ではなく、ネイアにバフォルクの領土をひとりで斥候に行つてこいと命じた聖騎士の隊長だ。だが、無事生きて家に帰れたならば、八つ当たりくらい許されるだろう。

（バフォルクの領地を見てこいなんて、無理に決まってるじゃない。山岳地帯までどれだけ時間がかかると思っているの）

偵察予定地になく、情勢の変化に対応するための早急の案件というわけでもない。

しかし隊長はこじつけのように絶対に必要なことなのだと断言した。副隊長が諫め、ネイアがその任務の無意味さを訴えても、「聖騎士としてあるまじき臆病風に吹かれるなど、懲罰に値する!」「それでも誉れ高き聖騎士を目指す者なのか!」「重要な任務であることが理解できない無能を、軍が育てる理由などない!」と密偵任務の最中でありながら喚き、結局ネイアは厳命により部隊を追い出されたのだ。

本来であれば、聖騎士の従者であるネイアが門外漢である密偵スカウトや野伏レンジャーそのものの仕事をするなんて、ありえない。だいたい、隊長の話

は最初からおかしいのだ。本当に情報が必要ならば、専門の者が仕事をしたほうがよりよい情報を得られる。

(ああ、早く、行って。お願いだから気づかずに通り過ぎて)

山岳にたどり着くまでの丘陵地帯を縄張りとする巫人の縄張りに、ネイアは入り込んでしまっていた。

生きた心地などしなかった。

すぐそばに、自分のような駆け出しの従者などあっけなく殺せる巫人がいる。

その足の向かう先ひとつひとつの変化に、うるさいくらいに心臓が鳴った。

(こっちに来るなよ)

経過した時間がわからなくなるくらいの執念が、やっと身を結ぶ瞬間がやってきた。

気配が遠ざかる。

ほかの巫人が近づいて来ている気配はない。

今しかない。

ネイアは姿勢を低くし警戒を強めながら、できるだけ音を殺して先を急いだ。

(なに、あれ……)

やがて、身を潜めて進むネイアの目に、想像もしなかった建物が飛び込んで来る。

遠目には分からなかったが、警戒しつつ進むとその全容がつかめてきた。

小高い丘部分からそれを見下ろす。

ネイアは呼吸をできるだけ音をたてずに行っていたことも忘れて、ごくりと唾を飲む。

夜目ダーク・アイで暗闇の中でもはつきりと物を見ることができるようになっている目に、ぞっと背筋が凍るような光景が飛び込んでくる。

墓だ。

とても広い墓地地帯だった。

死者を祀る厳かさや静けさよりも、恐ろしげな雰囲気纏う混沌と



した空気を感じ取った。

乱立するののもう、弔うものもいなくなったような墓標。

高い壁に囲まれた敷地に、東西南北に霊廟であろうあろう建物四棟。その中央には巨大な霊廟が構えてある。

頭の中に叩き込んだ地図が正しいならば、ここは亜人たちのつきりとした領地ではなく、まだ緩衝地帯のはず——。

丘陵の亜人たちのどれかが、ここを新たな領地にしたと考えられれば、話は早いのだが絶対にそうではない。ここは昔からいずれかの種族の領地であつたのだろう。そして、かなり高度な文化を持っているはずだ。

この丘陵に住む亜人たちの住処はほとんどが天幕だ。中には移動式の木製簡易コテージのような建物で暮らしている種族もあるらしいが、聖王国のようになりつかりとした建造物を建てた生活をしていない。縄張り争いが激しく、種族ごとの建物の文化など簡単に破壊されるので、丘陵の亜人たちは簡易な天幕で生活していると聞く。

建物が放つ空気の禍々しさは別物として、その定説を覆すような非常に立派な建物に、ネイアは丘陵の勢力図を頭の中で描き直した。

（天幕やコテージならまだ分かるけど、あんな霊廟なんてすぐに建てられるものじゃない。亜人の中には、こんなにも立派な建物を建てて、群雄割拠の丘陵でも、それを守っていける強い者たちがいるんだ）  
遙か昔からそこにあつたかのように、その地に佇む霊廟。

（調査をしたほうがいいのかな。バフォルクよりも、こちらの情報のほうが重要じゃないか）

ネイアの勝手な判断だが、それでも隊長の判断のほうがよほど自分勝手で誰の益にもならないことだ。

ネイアは、山岳に向かうのではなく墓地地帯に向かうことに決めた。

それでも完全に近寄るのではなく、ここよりも少し近いところから観察する程度にとどめるつもりだが。亜人のすみかに接近などとてもではないができない。

その決断が少女の運命を変えた。

## 情報収集

空には宝石のごとく輝く星々がまたたいていた。

光を遮るものなどない、満点の星空だった。それは見るものが見れば――例えば環境汚染のせいで本当の星空を見たことがない者からすれば――絶句するほど美しいものであったが、三人のシモベにとつては意味のないものだった。

特に、アウラにとつては、至高の存在が手ずから作られた六階層の星空のほうが、尊く美しいものであったから。

周囲はなだらかな丘が視界の限り広がっていた。

草木が茂り、ときおり小動物が走っていく。

「……転移はやっぱり成功していたんだね」

アウラは固い声で言った。

尊い方の命が使われたのだ。失敗するはずがない。

三人の目の前には、かつてナザリックを覆うように広がっていた沼地帯が姿形もない。

本当に、別の場所に転移したのだと実感する。

ソリュシャンはいつも元気で明るいアウラがやけに気落ちしている原因がわからず訝しむが、迅速な行動を求めていることが伝わってきた御方からの命令もあり、そちらを優先させる。

「この場にいない至高のお方々に、感謝をしましょうアウラ様」

事情を知るパンドラはアウラに優しく声をかけた。

うん、と少女は頷いた。

「高レベルの危険なモンスターが姿を消して潜んでいる様子もありません」

アウラのペットたちが、三人を囲むように輪になって周囲を警戒する。

ソリュシャンは地下墳墓から出ると周囲を見渡すことなく、視線をすぐに固定した。

「スキルを使うまでもなく、あそこに何かがありますね。あれで隠れているつもりなのでしょうか」

女はゆつたりとした笑みを浮かべる。

アウラとパンドラス・アクターは頷いた。

「レベルは高くありませんね。雑魚、と言ってよろしいかと」

何の変化もない墓地地帯をある程度観察し、この情報をそろそろ部隊に持ち帰ろうかと思いい始めたころ、じつと見つめていた霊廟に変化があった。

誰かが出てくる。

ぞろぞろと出てきたたくさんのモンスターの数に、ネイアは絶句する。聖王国でよく見るような、ただのモンスターではない。遠目に見ても異様な気配を感じるのだ。相對してもいないのに、その存在感の強さに圧倒されて息を飲む。

あたりを警戒するように、あちこちに視線をやり、執念深く地のおいを嗅いでいる獣たち。

何か、始まるのか。

ネイアは駆け出したいのをぐつと堪えた。

下手に物音を立てたら、すぐに存在に気づかれる。

こんな状況に陥ったら、小さな子供でも理解できるだろう。少しでも間違ったら、一巻の終わりだ。心臓がうるさいくらいに跳ねている。耳元で死神の呼気でも聞こえそうなくらいの、異様な恐怖に囚われた。

(まだ、気づかれていないはずだから)

ゆつくり、ゆつくりと逃げるのだ。

ネイアは判断を見誤ったことを今更ながら理解した。確実に地図と違う情報を届けるために、周囲の気配を探りながらすぐに撤退するべきであったのだ。

報告に必要な情報を届けることに命をかける意義はあるが、その情報とどかなかつたらただの無駄死にだ。

後ろに視線をやる。退路は確実にあるのか、不用意にぶつかるようなものはないか、慎重に確認する。

何もない。誰もいない。ほつと息を吐きそうになったのも我慢する。油断はダメだ。可能な限り自分を消すのだ。

正面に視線を戻し、草の陰に隠れられるていどに状態を起こしながら、後ずさる。

どんな変化も見逃さないようにくいているように視線を注いでいると、モンスターの群れに次いで、人影が出てきた。

出てきた影はみつっ。

こんな場所で見かけるのでなければ、そしてその顔が三つの黒い穴で構成された明らかに異形と言える姿をしていなければ、ネイアの中の美的感覚に著しく突き刺さって感心してしまう格好のいい制服を着た男。

この辺りでは見るはずのない、ダークエルフの少年。

恐ろしい亜人が跋扈する丘陵には、ひどく場違いな服装の人間に見える女。まるで宮廷に使えるメイドのようだ。

あの霊廟から出てきた三人にどんな関係性があるのかとか、なぜここにダークエルフがいるのかとか、人間が当たり前のように亜人たちといえるのかとか、本当に人間なのかだとか、疑問詞が頭の中を大量に駆け抜け、最後にどっしりと根を張り残った至上命題は。

(どうすれば、生きて帰れるのか)

なめくじのようなじれったさで、足を後ろに下げる。

音をたててはならない。

驚愕で空気を揺らすようなことはしてはならない。

女はぐうると全体を見渡すように視線を動かし、ぴたと止まる。草むらの陰にできるだけ隠れていて、どれほど視力がよかろうと見つけ出すのは難しいであろう距離で、ぴたりと、ネイアがいる方向で止めたのだ。

その一瞬、ネイアの心臓は確実に止まった。

大地にはいつくばるネイアと、メイドの格好をした美しい女の目が、合った。

(終わった)

その時ネイアの全身を満たしたのは『見つかった』という絶望では

なく、『終わった』という確信だった。

何が終わったのか？

一縷の希望にすぎた逃走劇か、はたまたネイア・バラハという人生そのものか。

ネイアは絶望という心的状況に陥るには、ある程度余裕がなければできないということを、この時初めて知った。絶望の裏側には、掴み取れるか否かは別としても、わずかな希望が潜んでいる。なんらかの願望を抱けるだけの、隙間がある。

そんな浅はかな絶望というものから隔絶した、絶対的な終幕を理解させる、女の笑み。

蛇に睨まれた蛙のようにネイアは思考も奪われて動くこともできなかつた。

モンスターが近づいてくる。

三人組も。

風の音も、その足音も、なにもネイアの耳には届かなかつた。

ただただ、激しく動悸する脈拍の音を聞いていた。

死に向かうカウントダウンーネイアの耳にはそのように聞こえた。

卵型の穴の空いた顔をした男が一步前にでる。

もし、言葉をかけられるとしたら、それは死の宣告に違いないーそう思っていたネイアが聞いたのは。

「やあ、こんばんは。お嬢さん」

やたら抑揚がはつきりとした、そして何処ぞで見た歌劇団のような派手な手振りをつけた珍妙な夜の挨拶だった。

「え、あ。はい、こんばんは」

ネイアは、先ほどまでの恐怖とは全く別の意味で思考を放棄し、ついつつかり普通に返事をしていった。

じつとしていたら死んでしまうのだろうか？

そんな疑問がぼんやりと思ひ浮かんでネイアがぼかんとしてしま

うほどに、男は忙しない。

「お初にお目にかかります、お嬢さん。私はかの大いなる墳墓の主人たる至高の方の被造物であり、至高の方々が集めた財宝を収めた宝物殿を守護する名誉ある役職に就いております、パンドラズ・アクターといいます。以後、お見知り置きを。」

初対面のお嬢さんにいきなりこのようなことを問うのは不躰かと思いますが、よろしければ貴方の名前を伺っても?」

卵顔の格好いい服を着た男は、まるでこちら側と会話する意思があると言わんばかりに紳士のように友好的だ。

背後にいるメイド服の女性はネイアを見下すような、値踏みするような視線を向けているし、ダークエルフの少年は敵意はないにしても、ネイアの一挙手一投足でたちまちに命を奪ってくるような人間に対する冷淡さを感じる。それに比べれば、見た目さえ気にしなれば、目の前の男は圧倒的に話しやすかった。

「え、ええと。ローブル聖王国の聖騎士の従者、九色の娘、ネイア・バラハといいます」

つい、自己紹介をしてしまう。相手取る男が丁寧に教えてくれるものだから、こちらにも真面目に応答してしまう。

「……ふむ、ローブル聖王国の従者それに付け加え九色のご令嬢ともあろうお嬢さんが、このようなところで一人で泥だらけになって何をしていたのかお聞きしたいのですが」

皮肉のようにも聞こえたが、他意はなくただ疑問であったのだろう。ネイアはそのしみじみとした問いかけに、自分の置かれた状況も忘れて少しだけ恥じ入った。

それにしてもご令嬢とは! ネイアのように目つきがひたすら悪く犯罪者に間違われるような者に対して、使う言葉ではない。

「自国の聖騎士の恥を晒すようで言いくいのですが……ひっ」

ネイアが言い淀むと、さっさと言えばばかりに背後の二人の眼差しがきつくなる。

剣呑さに気づき、男は振り返ってまあまあと宥めてくれる。

「その、バフォルクの領地を偵察してこいと隊長に命じられたので、あ

「これらの山岳地帯に向かっていたところでした」

従者でしかないネイアがそんな命令を下された諸々の原因は伏せー自国の誇るべき聖騎士がそんな者ばかりとは、たとえ人外であつても勘違いはされたくないー正直に告げた。

「バフォルクの山岳地帯に偵察、ですか。貴方の様子からすると、それは無謀で無意味な命令だったので？ 見た所レンジャーではありませんね。従者としての職分のない仕事を、無理矢理振られたように見えますが」

実にその通りだった。素直に頷くわけにはいかないが、気まずくなつて逸らしてしまつた視線のせいで、すぐに察せられたかもしれない。

「そうですか。それはとても、大変でしたね。道中危険も多かつたでしょう？ 敵対生物とは遭遇しませんでしたか？」

心の底から向けられたいたわりの言葉に、ネイアは緊張感がほぐれ少しだけ目頭が熱くなつてしまつた。

「はい……亜人と何度が鉢合わせそうになりました。ここに来るまでにいろいろな種族の領土を通りますので……」

（人間じゃなくても、こんなに知的？ で優しいひとがいるんだ。亜人、とはまた違うんだろうけど）

ネイアの中に、目の前の男に対するわずかばかりの信頼が生まれた。

「そうですね。この一帯は、亜人たちの領土で、ローブル聖王国の人間である貴方にとつてはとても危険な地域。とてもではないが、人間がおいそれと足を踏み入れられる場所ではない」

パンドラズ・アクターは役者が舞台で振り付けとともに台詞を読むように言う。

「……はい。その通りですね」

とりあえず、沈黙すると後ろの二人が恐ろしいので、端的な肯定で場をにごした。

「と……ころでお嬢さん」



一人舞台に酔っているような、自分の世界に入り込んでいたような状態から、す、とネイアに向き直る。

「は、はいっ。なんでしょうか!」

「聖騎士の従者として誇りがあるであろう貴方に、こんなことをいうのは一種の侮辱と取られても仕方ないかもしれませんが、私としては女性である貴方がこんな夜分に危険な仕事をしていることに、思わず案じてしまうのです」

「え、あ。心配してくださってありがとうございます」

何処までも丁寧で、他者の誇りにまで思いやれる優しい人外だった。

じいん、と胸に染みるものがある。

感動していると、パンドラズ・アクターは軍帽に手をかけ視線（ただの穴だが）だけをネイアに向ける。

「そこで、提案があるのですが」

思わせぶりに、異形は言う。

「偵察の任務、私たちに任せてみませんか?」

## 混乱する男

そのとき世界に揺らぎが起きた。

地を揺らす物理的なものではない。

目に見える力とは別の力、魔法の持つ理にも似た世界とは表裏一体にある次元に干渉する力。

地上に住む生き物すべてがその揺らぎを観測できなくても、確かに起こった揺らぎ――

なにも、だれも気づかないはずだった。

破滅の竜王と呼ばれた災の存在がいた。

大きな力を持ち、力の限り大地を荒らし、幾多もの命を散らした。それが故に封じられたもの。

揺らぎは、その封印にほころびを生じさせた。

だれも気づかないはずの揺らぎにより、その存在は目を覚ます



周囲によもや恋をしているのでは、と誤解されてしまうくらいに自分に執着してくるモモンガには本当に困ったものだった。

それがなければ、彼の気を楽にしてあげてもらうことをもう少し言えたのだと思う。

もうちよつとこう、抑えるべきでは？ うん、モモンガさん、俺はいなくならないし、むしろあんたがいなくなったら困るのは俺のほうだし、もうちよつと落ち着こう、な？ 昔は辞めるつもりはありましたが、イリニを放っておけないから辞められないし、ナザリツクにいるデミウルゴスのためにも辞められないんですよ。俺の傑作に消えてほしくありませんから。だから、こう……

二人だけでナザリツクにいたときは、かけるべき言葉に相当苦慮した。

下手なことを告げたら地雷でも踏み抜きそうで……孤独感を拗らせまくって告白の一手手前の空気になるという難易度ウルトラEの離れ業をやつてのけるモモンガに、ウルベルトは匙を投げた。余計なことは何も言わないほうがいい。そう判断した。

同性同士で、互いが特別な存在であることを確認しあうとか、作り話でもあるまいし、勘弁してくれよ。モモンガさん。

だいたい察してくれ。声にしなくても分かるだろうに。

無理矢理ことばという形にしたところで、陳腐になるだけのものだ。虚しくもある。

貧民層出身で、子供の頃に両親を失ったという共通点から、それが原因で精神的にいろいろ拗れ、歪み、少しだけ、他人の持つ『当たり前』というものの箍がお互い緩んでしまっていた。

自分たち二人はそれぞれ違う方向にいびつで、何かが圧倒的に足りない。

だからこそ、作られただけの世界から離れられないでいた。

向けられているのが恋愛感情の類ではないのが救いだろう。

遠慮しがちで人のふところの深いところにはいった経験がないひとで、人との距離の詰め方だ下手だけなのは知っていたから、それ故にそうなってしまっただけなのだ。

わかっていたがその時期のウルベルトは乾いた笑いが胸中を占めていた。

男二人きりが維持するギルドで、恋愛感情のもつれっぼいのが発生するとかどんな地獄絵図だそれは。

たっちが帰って来たことにモモンガはとても感謝していた。

ウルベルトはプライドもあつて表面上はそれを見せなかったが、それ以上に感謝していた。

ミーシャが来て、リーザが来て、メンバーの何人かが戻って来てくれた……

モモンガも落ち着くかと思つたが……そうはならなかった。

モモンガは全方向にギルドメンバーが変な意味でなく大好きだった。みんなが辞めていくから、均等に分配されてたその好きという気持ちだが、全部ウルベルトへと向かった。

重量などないのに、向けられるそれは気圧されて息苦しくなるようなもの。

モモンガに似た者同士の同胞意識を持っていなければ、裸足で逃げ

出したくなるくらいのいろいろと誤解しそうになる圧倒的好意だった。

それはどうやら、二人だけでナザリックを維持していた間に、ウルベルトにまでいなくなつて欲しくないという執着や恐怖心で、ぐちゃぐちゃになり、どうにも一般のギルドメンバーに向けられるものとは一段違うものとなつてしまつたらしい。再分配されるようなものではなく、ウルベルトにのみ向けられるものとなつていた。

彼らが帰つてきたところで、好意の質量、のようなものは減らず、むしろ独占欲で悪化したような気がする……

ペロロンチーノなど、割と一番被害にあつたのではないだろうか。

言うなればモモンガが欲しいのはウルベルトの親友という位置。恋人ではない。

例えばウルベルトが恋人を作つたとしても、ちゃんとユグドラシルに顔をだしていれば、態度は何も変わらないはずだ。

やまいこやぶくぶく茶釜がウルベルトと一緒に居ようと全く気にしてなかつたのに、ペロロンチーノと一緒にいるとやけに嫌がつた。かつては無課金同盟として仲良くしていたペロロンチーノに、最も親しい男友達としての座を奪われるのが嫌だつたらしい。

たつちとウルベルトは、好意的に解釈するとしたら喧嘩友達で、親友というくりに最もふさわしくない二人である。

武人健御雷さんと二式炎雷は既にツーカーの仲で親友が成立しているの、ウルベルトの親友という位置は搔つ攫わないから安心——という心理が無意識のうちに働いているらしい。

たつち・みーは、モモンガがウルベルトに無自覚の恋愛感情を抱いていると思つていた。妻であるリーザもそうだ。

察しのいい女性陣も「あー」となんとも言えない声を出し、応援しにくい恋にどうしようかと頭を抱えていた。

子供のミーシャすら「モモンガさんはウルベルトおじさんのこととっても好きなんだねー」と、気付いてしまうくらいだ。

一番遅く気づいた男性陣も、真面目すぎるギルドマスターのことを茶化すこともできず、困惑していた。

誤解を解くのに、どれだけウルベルトが頑張ったことだろう。

モモンガ本人に忠告すると、本人が目に見えて反省して気ままずくなりそうなので何も言えず、孤軍奮闘でノーマル主張に励んだ。

それも、いい思い出ということにしておこう。

三十年に満たなかった人生で、自分を一番大事に思ってくれたのがネット上で知り合った同性というのは、他人に聞かれたらあれかもしれないが、ひとの評価など関係ない。他人の目を気にしていたら重度の厨二病に罹患してはられない。ウルベルトは大事なかけがえない友人を作れたことがとても誇らしかった。

困ったこともあるひとだが、とても優しい周囲の和を重んじる最高の友達だった。

こうやって、最高のプレゼントももらえたのだ。

気配り上手なギルドマスターに頬が緩む。

心残りは、モモンガに何も返せなかったことだろう。

こんなにもウルベルトを思ってくれているのに、ウルベルト自身はモモンガに何も言えていない。

モモンガの確信を得たいがゆえの天然暴走は、ちよつとどころかかなり照れ臭いものであったが、ウルベルトも最後までくらくらいにはなにか言葉にしたいと思っていた。

(モモンガさんには悪いことしたなー。ユグドラシルが終わっても、俺とまたこうやって遊びたい、って感じのこと言いたいのは分かってたけどさ。うん、分かるんだけどさ、言葉としての確約が欲しいっていうか、あの人自分に自信がなくて遠慮しがちだから、俺に何か言っただけで負担になるのを遠慮してるの……俺から何かアクション欲しかったのも察してたけどさー。俺はあなたのこと、一番の親友だと思っますよ。そう、言っただけで良かったんだけど、俺、すぐに死ぬしなあ。言えねーよ)

親友宣言したウルベルトが、再び会うことも叶わないまま死んだら、あの優しい男はどう思うだろうか。

そう、考えるとウルベルトは下手のことを言えなかった。

とにかく、最後の最後まで楽しもう。

ウルベルト・アレイン・オードルは、ギルドマスターモモンガにとって良き友であった。それだけでいい。

玉座の間で、たちち・みーに負けてなるものかとむきになって声を張り上げた。

たちち・みーはウルベルトの負けん気に気づいたのだろう。向こうも張り合って、大声を出していた。

三十を目前に控えたいい歳した男が、何をやっているんだと思わないでもないが……

いいだろう、どうせ最後なのだ。

ゲームの最後という意味ではなく、こうやって馬鹿をやるのが、ウルベルトの人生において最後となる。

だから、いいのだ。

心残りだった、イリニも消えてしまう。

いや、親である自分の手を離れ、別の世界に旅立つのだ。

モモンガもサプライズで粋な計らいをしてくれる。

ウルベルトは感謝でいっぱいだった。

我が子がナザリツクの主人とは……光栄ですよ、ギルド長。

時間が来て、周囲の音が途切れた。

ああ、終わったのだ。そう思っただけ目を瞑る。

この目を開けば、がらんどうの部屋に帰るのだろう。

余韻にひたりたいがために、現実を目の当たりするのは少しあと回しにした。

ウルベルトは目をつぶったまま深呼吸をする。

なぜだろう、心が清々しいせいだろうか妙に空気が美味く感じる。

カビだらけの居心地の悪い安普請のアパート住まいにいたとはとても思えない。なんとも言えないような、初めて嗅ぐのにとっても落ち着く心地よい匂いがする。

最後に、最高に良い気分を味わえた。ウルベルトは目を閉じたまま微笑む。

明日からのために、しっかりと身辺整理をしてきた。

近いうちに、ウルベルトと名乗っていた男は死ぬ。

間違いだらけの社会体制に少しでも一石を投じるために、この命を捧げるのだ。

ベルリバーが文字通り命を賭して伝えてくれたあの情報は、ゲームをしながらもなんとか秘密裏に関係を築いて来た反巨大複合企業の組織に既に渡してある。あとは、この身の残りの人生全てを――命ごとくれてやるだけだ。

腹芸は得意なほうではなかったが、モモンガたちは何も気付いていないのが幸이었다。

仲間の死を隠されていい気はしないだろうが、みんなとまた会えるかもしれないと楽しみにしているモモンガにはどうしても伝えられなかった。

（たつちさんがミーシャちゃんのために出世を捨てて、窓際のおまわりになってたのは本当に良かった。下手したら友人同士で殺しあうことになってたもんな）

仲良くなれない男、だが結局最後はなあなあままの関係を築き、友人と言えるまでの仲になってしまった男。かつての自分たちならばいざ知らず、たつちを害したいとはとてもではないが、思えない。このまま、世界の闇とは関係なく、家族で幸せになってほしいものだ。それとなく探りをいれたが、ベルリバーの死はたつちに伝わっていないようだ。企業の闇と関わる出世コースでもあるがきな臭くもある事件とは、幸いなことに縁遠いところにいるらしい。

「さーて、二元气に死んでくるとするか！」

ウルベルトはヘルメットを外そうとした。

だが、はたと気付く。

ない。ヘルメットがない。

首につなげるコードの感覚の類もない

というか、むしろなんで自分は突っ立っているんだ？

ゲームをするために、椅子に座ってダイブしていたはずなのに？

ウルベルトは目を開く。

そしておかしい理由に合点がいった。

ヘルメットを被っていないはずだ。

「は？」

気の抜けた呆けた声が漏れる。

ウルベルトは終わったはずのゲームの世界に未だ取り残されている。  
た。

目を開くと、そこは見知らぬ夜の森の中であった。

玉座の騒々しさから一変、しんとした息をひそめるかのような静寂に包まれている。

星と月の明かりが、木々の合間から注いでいた。

装飾品の効果のおかげか、はたまた完全な暗闇でなかったためか、目が慣れて来るとその姿がより正確に捉えられるようになる。

記憶にある、不規則を装ってはいてもデータ表示の連続により何処か整然としたユグドラシル森ではない。少し先にはユグドラシルの世界樹ほどではないが、非現実的な大きさの巨木の影。すぐ近くにある木々は、規則性もなく雑然と、そして生き生きとしている。もつと小さく近くを見ると葉脈ひとつひとつ、水滴のひとつひとつが丁寧に表現され、あたかも本当に存在しているかのような狂気の沙汰の作り込みだ。製作者の魂がこもったとも言える第六層の森林であっても、比べ物にならない。

ヴァーチャルリアリティの粋を極めた、かつて至るところにあったという自然の森をそのまま再現してあるかのようにだった。

ウルベルトは手近にあった葉にそつとふれる。

水滴で指先が濡れ、子供のころ学校の教科書でしか見たことのないような小さな羽虫がウルベルトの手をかすめながらふらふらと飛んで行った。

よく見れば、虫はそこかしこにいる。

見かけだけかと思っただが、こんな小さな虫にも質量が再現されているらしく、手を伸ばすとしっかりと感触があった。

ユグドラシルでは、容量の削減のためか、このような小さな虫はグラフィックの一部でしかなかった。

臨場感が、ありすぎる。



ふ、と吐いていた息を止めた。

目を見開き、背筋に冷汗が這うほど悪い予感がしたのを、首を降つてその場しのぎに振り払う。

（あんな虫なら、データでなんとか表現可能なはず……無駄に作り込んであるだけで……もしかして、実装予定のユグドラシル2にでも迷い込んだか？）

水滴で濡れた指を服でぬぐう。かつてのユグドラシルであれば、こんな細かで煩雑な動作など必要なかった。作り込みすぎだ。こんなもの実装したところで、容量を喰うだけで誰も徳しないだろうに。

クソ製作は最後までクソである。

こんなバグにユーザーを巻き込むなんて、余韻のある最高の気分が台無しではないか。

そう、罵つて終わることができれば、ウルベルトはまだ平静を保てたであろう。

ゲームの体に冷や汗が流れるという可笑しさを無理矢理無視して、ウルベルトはコンソールを開こうとした。

心拍数が跳ね上がり、己の脈拍の音が耳に届いている。

「なんで、だよ」

使い慣れたコンソールが出現しない。

「強制終了、チャット、GMコール、強制アクセス！ ああ、なんだよこれ」

コンソールを使用しないシステムを使おうとするが手応えは一切なく、全て空振りに終わった。

（サーバーにバグが発生した？ 容量を無駄に喰うそのうち実装予定のユグドラ2を同じサーバーで動かしていたせいで、なんらかの不具合が起きてユーザーがゲームの中に取り残されてしまった？ 俺だけか、みんなは？）

周りを確認しても、近くにいない様子はない。

ここにいるのは自分ひとりだけだ。

（クラス取得のイベント用NPCをそのまま流用したんだっけ。プレイヤーキャラとは違うんだもんな。無理矢理PCにしたせいで、サー

バー終了時のプログラミングがおかしくなつて俺だけバグに巻き込まれたか？ まさかこのまま放置はないよな)

命を捨てる覚悟はあったが、ゲームのバグでログアウトできず電脳世界で死亡という、ふざけた死因は我慢できない。

(営利誘拐、あるいは監禁の犯罪だぞ、これは……)

どうにか解決してくれることを願ったが、願うだけでは一秒一秒無駄に時間が経過していくだけだ。

こめかみに伝う汗を拭いた。暑くもないのに、焦燥のせいで脂汗が流れる。

おかしい、おかしいだろう、と内なる声が響く。

だが、ウルベルトはその声を無視した。

「伝言<sup>メッセージ</sup>はコンソールが開かないから無理か……あーそう言えば、覚えてねーな。レベルリセットされて魔法もなにも習得してないんだ」  
装備変更のときにぎつと確認したステータス画面に、取得した魔法は表示されていなかった。ヘラルディストが必ず取得する解放<sup>リリース</sup>というスキルを持っていたくらいだ。

(スクロールは、……伝言<sup>メッセージ</sup>なんてわざわざスクロールは持つてねーな。コンソールが開かないからアイテムボックスも開けない。あ、でも)

1日に決められた回数のみ任意の魔法をスクロールがわりにできる便利なワールドアイテムを腰に巻いていることに今更思い至り、ウルベルトは薫にすぎる思いで、使おうとする。

(コンソールが開かないから、無理かもしれないが)

不安になりながらも、先ほどよりもやたら絢爛で目に見えない力のようなものを感じるワールドアイテムに、伝言<sup>メッセージ</sup>と念じているとすぐになにやら手応え、のようなものを感じた。

(視覚に現れるコンソールじゃなくて、神経から直接電気信号が流れて任意の行動が取れる、のか)

ワンアクションを省けるのは便利といえば便利だが。

恐る恐る伝言<sup>メッセージ</sup>の魔法を使おうとすると、どうにもうまくいかない。使える気がするのだが、その先に至らない。感覚でいえば、通信端末

の中にある連絡先が全てクリアされて真っ白になってしまった、というのが一番近い。

「嘘だろ……」

頼みの綱の連絡手段が断たれてしまった。

使えるような気がしたために、落胆が大きい。

連絡先が白紙になった理由はいろいろと思いつく。ゲームが終了したことで今までの連絡先データのみがリセットされた、魔法を失ったことで今まで蓄積された連絡先データも一緒に失った、など。あるいは強引なアバター変更が原因かもしれない。

他に何か手段は、通信手段は……いや、そもそもこのまるで仮想現実が現実になってしまったようなこの場所から出て行く方法はないのか。

「畜生！」

ウルベルトは八つ当たりのように声を荒げた。

ゲームだと思いついたのに、非現実的な空想が脳裏をかすめる。さつきから濃厚に香るこの匂いはなんなんだ。電脳法で禁止されているはずの嗅覚がはつきりと知覚できてしまうのは何故だ？ 鈍くなっているはずの触覚が、現実と変わらずに働いているのは何故だ。口に入ってしまった汗に、しよっぱさを感じたのは何故だ。

己の耳に、心音が絶えず響く。偽物の体であるはずなのに、まるで、この体が生きていて本物の心臓が動いているかのようなではないか。恐る恐る、右手を心臓にあてた。

動いている。

データでしかないはずの体が、生きてるように脈打っている。

「一体、なんだっていうんだ」

泣き言のように声が漏れた。

こんなにも興奮状態に陥ったら、ニューナノインターフェイスが肉体の異常状態を察知して強制ログアウトが行われるのが普通だ。それすらも実行されないのだ。

ウルベルトはじつと自分の手を見る。現実の自分の手ではない。傷やタコ、長年の過酷な労働でこびりついた汚れもなく、つるりとし

ていて綺麗なものだ。胸から下をぐるつと見る。先ほど使ったワールドアイテムもそのまま、ゲームのままの格好だった。おそらく、顔も若かりしころの自分が少し細くなったような見た目をしているのだろう。

衝動的な怒りも去り、混乱も通り過ぎて行く。どうすればいいのか、という建設的な思考も思い浮かばずただひたすら途方に暮れていると、どん、とそこそこにほど近いところから大きな音が聞こえた。

その直後に、地震のように微細に大地が揺れた。同時に、森の中で獣が唸るように威圧を感じた。立ちすくむような揺れでもないに聞わらず、ウルベルトは息を飲み棒立ちになった。足がすくむ、訳もななくせり上がってくる恐怖感で息もできなくなる。

小刻みに体が震える。

混乱と動揺とは全く種類を別とする理由で胸が跳ねる。心臓がうるさい、潮騒のような鼓動が鼓膜をがんがんと叩く。

体が言うことを効かない！

梢枝がしなる、枝が払われ、背の低い草木が乱暴に踏みにじられ、何かから逃げるように小動物や小鳥がウルベルトの脇や上空を通り過ぎて行く。

その後を追うように、破壊音が迫ってくる。いつだったか、昔、映像で聞いたことがある音。樹木が機械で伐採される、悲鳴のような。

絶望を生み出す咆哮が聞こえる、鞭のようなというにはあまりにも巨大な触手がしなる、少し先にあっただはずの巨木が、木々を薙ぎ払いながらこちらに向かってくる。

本能が逃げなければと叫んでいるのに、ウルベルトの足はぴくりとも動かない。

（死にたくない、こんなところで、死にたくない。死ぬなら、死ぬなら、すこしでもあの世界を変えて死ぬんだよ！）

決意とは裏腹に、歯の根が合わない。思考がバラバラになって、残されたわずかな時間を使ってまともなことも考えられない。

一瞬間の中をよぎった、虚栄感と執着で混沌とした過去の日々は、走馬灯というやつだろうか。

ウルベルトは、視界の端をかすめるように通り過ぎて行った紋章の影にはっとする。

(ギルドの指輪を……！)

ワールドアイテムが使用できるのならば、外部からナザリックへ直接移動できる指輪も使えるかもしれない。残されたほんのわずかな可能性にかけ、指輪をはめてある逆の手で、握り込むようにして指輪を使おうとした。魔法の力がこめられた、ギルドサインが刻まれた仲間間の証。

このわずかな間にも、この世の邪悪さを体現したかのような巨木は、ウルベルトの目前に迫っていた。

ウルベルトは、ひとつ判断ミスをおかしていた。

そのミスは、彼を責められるような類のものではない。

彼がヘラルディストというクラスについていなければ、起きなかったミスであり、ヘラルディストのクラスについてしまったのはウルベルトの意味ではない。

そして、ゲームで設定された力が、実際に自分の体に宿っているなどという馬鹿げた自覚をすぐに持てるほど、彼は子供ではない。なおかつ、その力はゲームですら使ったことのない、持っていたという意識など歯牙にもないほど些細なものであった。

けれども、本人の自覚のない要因が絡み合って、指輪の力を発生するための起点が、ずれる。

彼は指輪を使うとき、帰還の意思を持って使おうとするべきであったのだ。

決して、ギルドサインに意識を持って使うべきではなかった。

ヘラルディストの持つ解放が、本人の思惑を無視して発動する。

ユグドラシルの内部に蔓延したアインズ・ウール・ゴウンというギルドの人々の身勝手なイメージ。

ゲーム内に蓄積された行動や言動のログ。

そこに所属するものたちの思考、思想をコンピュータが読み取った秘密裏の記録。

それらが混沌と混ぜ合わさったものが、ギルドサインから力として引き出される。

アインズ・ウール・ゴウンのギルドサイン。

その紋章の持つ力が、疾くこの世に放たれる。

ウルベルトは指輪を包み込んだ手の中で、何かが膨張するのを感じ取った。生きているかのような無数の脈動が、手のひらのうちに感じ取れる。それは決して、暖かいものではない。死に誘う、どこまでも暗く冷たく恐ろしいものであった。

目の前の巨木をも遥かに上回る禍々しさが、ウルベルトの手の内から生まれようとしている。

恐怖に震えていた体は、もはや生きる気力を完全に失う。

正気を手放し、いつそ狂気の世界に落ち込み廃人にでもなったほうが幸せなのではと錯覚するほどの、夜の闇よりも尚も深く濃い夥しい黒が、生まれ出ずる。

押しのける力で、手が弾き飛ばされた。

指輪の宝玉から轟めくように、異形の影が躍り出る。

殺意、殺意、殺意、殺意――ひしめくような殺気が爆発して、周囲を揺るがした。

ウルベルトにすんでのところまで迫った触手が、目に見えない威圧でしかないものに四散させられる。

それにほっとするような精神状態ではなかった。むしろ、生という絶望から救ってくれる最後の慈悲を失ってしまったのだと、ウルベルトは意味のわからぬ獣のような絶叫をほとばしらせる。

生まれてきたことを後悔するほどの、圧倒的な悲観。

相手をいかに残酷に殺してやるか、策にはめて貶めてやるか、いかに楽しんでやるか、悲鳴を聞いてやろう、悲痛を笑ってやろう、助命を踏みにじろう。そんな嗤い声が聞こえてくるかのようだ。見覚えのある異形たちに、きつと躊躇いはない。

この世の生きとし生ける者のことごとく刈り尽くすような、邪悪な宴を楽しむために顕現したと言わんばかりに、ひたすら恐ろしい。自身もその獲物の一人なのではないか、今は脆弱な人間にすぎず、異形が遊びのために殺してきたものでしかない。

悪魔の生み出す絶望に、己もろとも焦がし尽くされたのならば、その願望を抱いたこともあった。所詮、夢物語にすぎないと自嘲していたものが現実化しようとしているのに、ウルベルトの胸中に広がるのは満足感ではなかった。

心を手放して茫洋とするウルベルトに、指輪をはめた骨だけの指が伸ばされる。片頬をなぞり、触れただけのそれに、焼け付く痛みを覚えて。

皮膚が溶け、肉が焼ける強烈な臭いが鼻をつく。

「絶対に逃がさないから」

優しげな青年の声であるはずなのに、相手の意思を一切無視した一方的な感情が剥き出しのまま叩きつけられる。

動かないはずの骨の顔が笑った気がした。眼窩に灯る火が妖しく揺れる。

終着点なき執着。肥大していくだけの欲求がウルベルトの肉体に呪いとなって刻み込まれた。

このまま、殺されるのかな。

ギルドアインズ・ウル・ゴウンの悪意のみを凝縮して具現したかのような者どもは、そんなウルベルトの懸念とは裏腹に動き出す。真っ先に一撃を下したのは、巨大なイビルツリーに対してであった。

闇色の衣をまとったオーバーロードがウルベルトに背を向けて先陣を切ると、次々と異形たちの容赦ない攻撃が巨木に襲いかかる。

「はあ、うわあ……」

頬の火傷めいた痛みも忘れ、感嘆した。

ギルド全盛期メンバーで哀れな巨大なだけのレイドボスを虐めているだけにしか見えない光景に、ウルベルトはやっと僅かに冷静さを取り戻した。

脅威は自分にはなく、敵意は山のような巨木にのみ向かっている。魔法を繰り出す骸骨の死者の王、颯爽と天空を駆け凶悪無比の遠距離攻撃で触手を次々と撃ち落とすバードマン、邪悪さとは全くかけ離れた存在感で燦然と輝く聖騎士。黒い粘体が樹皮を溶かして、ピンク色のぬらりとした肉の塊が盾のようにウルベルトの前に立ちはだかる。

懐かしさすら覚える、前衛役の面々がほんの僅かの漏らしもなくウルベルトを悠々と守る。

草木が集まって出来た人形のような姿をしたものがひとたび号令のとき指令を出せば、殲滅力がいや増した。

ハーフゴーレムの忍者が舞う。醜悪な巨体の侍の一撃が容赦なく炸裂する。ネフィリムのモンクが前線を支える。悍ましい姿をした精霊や、肉体の一部分だけを抜き出して人型を取っているだけの異様な姿の者共の笑い声が今にも聞こえてきそうだった。実際にウルベルトの耳に届くのは、巨木に対して容赦なく叩き込まれる破壊音だけだ。けれども、ウルベルトの耳にはメンバーの声が聞こえた気がした。

弱い！　なんて弱い！

バカにするように、物足りないと呼ぶように、遊び相手にもならない木偶の坊を笑っている。

この光景を見てみると、ウルベルトがアレに怯えて声も失くしていたことが、なんとも馬鹿馬鹿しくなる。からからになった喉から、呆れを滲ませて笑い声が小さく漏れた。その時、

「いってー！」

背後から何者かに蹴られた。

慌てて振り向くと、見知った姿がそこにあった。

最強装備に身を包んだ山羊頭の悪魔。



ウルベルト・アレイン・オードルが、青年を咎めるような冷淡な眼差しで立っている。

情けない、格好悪い、ありえない、そんな責め句が酷薄に歪められた口から今にも飛び出してきそうだった。

悪魔はウルベルトを一瞥すると興味を失ったかの態度で優雅に通り過ぎていく。

(あれを、使ったんだな)

蹴られた怒りも湧かず、呆然としたままたもに見たことのない後ろ姿を見送った。

きつとあの悪魔は、自分の代名詞となったあのスキルを使うのだから。

はるか彼方の昔に作られた無言映画を見ている心地で、ウルベルトはその光景を視界に焼き付ける。

この世の全ての災いを集積した渦が、名前も知らないイビルツリーに降りかかった。

## 思うこと

マーレは再び落ち込んでいた。

リーザの胸を借り、普通の子供のように泣きじやくってしまったことを、見ている周囲が戸惑うくらいに悔いていた。

「も、申し訳ありません、リーザ様！」

マーレは平身低頭で顔を青くして謝罪する。

シモベにあるまじき失態だと、死をもつて償うほかないと、また思い込んでいたような様子だった。

パンドラズ・アクターのとときも思ったが、NPCたちは想像以上に、自分たちギルメンを慕っている。

その忠誠を疑うのが申し訳なるくらいに、こちらの役に立とうと必死なのだ。

NPCに対して恐々としていたリーザが、一番に胸打たれて、マーレを氣遣うようになるくらい、こちらの懸念はあまりにも馬鹿馬鹿しいと理解できてしまう。

ミーシャとリーザの女性陣が主となって気にしないでと慰めていたが、効いている様子がない。

どうやら、彼らシモベの忠誠心というのはあまりにも高すぎて、ギルドメンバーである自分たちと比べるとかなり低い価値しかないと思いついでいる節があるようだ。そんな価値の低いシモベが、モモンガたちを少しでも煩わせることは絶対にだめなことなのだ。今の所、言葉でどんなに言い募っても、その宗教のような絶対的な価値観は変わりそうにない。

(確かに、たっちさんたち仲間と比べてしまったら下に来るけど、NPCもみんなが残してくれた大事なモノには変わりないのに)

感情が宿り、まるで生きているのと変わらない。困惑するくらいの忠誠まで向けられてきているのだ。嫌いになるほうが難しい。

もつと自分を大事にして、そしてこちらが大事に思っていることを知ってほしい。そう言っても、今の追い詰められたマーレには届きそうにないけれど。

気にするなと言っても余計塞ぎ込んでしまうなら、言い方を変えよう。

これでいいのか？ もっと悪い方向に転ばないか？ とドキドキしながらモモンガはおもむろに骸骨の口を開いた。

「マーレ、顔を上げて涙を拭け。お前を六階層の守護者としたぶくぶく茶釜さんの期待を裏切るな」

小さな子供をなだめる優しい声音ではなく、叱りつける厳しいものであった。

そんな言い方をしなくても、とどがめようとするリーザをたつちが腕で制止する。

たつちはモモンガのほうに無言で頷いて、続きを促した。リーザも渋々といった体でこちらの言いたいようにさせてくれるようだ。

モモンガは内心胸をなで下ろして続ける。

「お前は泣いていれば全てが許される小さな子供とは違う。理解できるな？」

おどおどした表情に涙を溜めていたものを一変させ、マーレは膝をついたまま顔を上げた。

「は、はいっ」

「いや、そうだな……ウルベルトさんは期待などというのは曖昧な無駄なものと言っていたな。私もそれに同意だ。マーレ、お前は誰に対しても誇れる、このナザリックの第六層ジャングルの守護者だ。私も、お前に期待などしない。期待などしなくても、お前はその地位に對してふさわしい存在であることを私は知っているからな。」

また、お前たちがそうあるよう私も努力しなければならない」

「し、至高のお方であらせられるモモンガ様がボクたちのために、ど、努力なんて！」

マーレは酷く驚き、取り乱した。

「これに関して口を挟ませるつもりはないぞ。ナザリックの支配者としての義務だからな。」

お前が最初に罪と言ったことは、私たちが罰を与えられるものではなく、マーレ、お前自身が納得いくまで贖わなければならないことだ。

どんなに辛くても、苦しくても、悲しくても、幸せになるんだ。リアルの世界にいるぶくぶく茶釜さんを安心させられるように、立派に成長するといい。

そして、リーザさんに抱きついて泣いたことだが……」

正直これに罰を与えるというのは、あまりにも酷で、大人気ないと心の底から罪悪感が湧き上がってきて嫌なのだが、そうでもしないと場がおさまりそうにない。▪

「此度の失態を挽回する機会を近いうちに与える。

ぶくぶく茶釜さんが失われたばかりであることも留意し、それによって、シモベにあるまじき態度を取ってしまったことを不問とする。

いいですよ、リーザさん」

「はい、もちろん」

リーザはマーレを安堵させるように優しいな笑みを浮かべて快くうなずいた。

「モモンガ様、リーザ様っ……!」

感きわまると言った様子で、マーレはふたりを見つめた。居心地が悪くなる純粹に尊敬する眼差しである。

そんな目で見られるような立派な大人だと思えないモモンガは、胸に迫ってくるものに「う」と苦しげに言葉を詰めた。

「モモンガ様、ボクは何をすればいいのでしょうか!」

まだ決めてもないことを、涙がまだ残るキラキラした眼差しで問うてくる。

「そんなに慌てなくても大丈夫だよ、マーレ」

へロへロが助け舟を出してくれた。

「そうだよ、マーレ。そうだ、まずは第六層の報告を聞きたいな」  
すかさずたつちが話題を逸らしてくれる。

素晴らしい連携であった。

モモンガは心の中で感謝しきりであった。

一人ではこうも上手くはいかなかっただろう。

「は、はい。六階層は異常なし。全く問題ありませんでした」

「そうか、それならば良かった。農場のほうも問題はないか？ 転移の影響で作物が突然枯れたり、配置されたモンスターが突然凶暴になったり、そういったことはなかったのだな」

ここにはたつち家族がよく遊びに来る場所で、さきほどもミーシャが遊びに行きたそうにうずうずしていた場所だ。より一層の安全確保は大事だろう。

「はい。転移前と変わりません。あ、あの、もし、モンスターたちが不安でしたら、御身のために全て処分いたします」

可愛い顔で、真剣に物騒なことを言う。

「大丈夫だ、マール。そこまでする必要はないからね。あそのモンスターは餡ころもちさんとみんなで頑張つて出した子たちだから、もう少し優しくしてあげてほしい」

たつちがびつくりした様子でなだめはじめた。

「マールお兄ちゃん、猫ちゃんたちいじめちゃだめだよー」

ミーシャもおろおろしている。

「は、はい。す、すみません」

たつちたちを不愉快にさせてしまったと、失言だったと思い込み、マールはまた顔をさげてしまった。

このままでは負の連鎖が再び始まる。モモンガは打開策を必死に考える。

「マール、アルベドに連絡を。各階層の報告が届いたか聞いてくれないかな？ もし、全て届いているようであれば、モモンガさんに各階層の報告をするように言って」

へろへろがどろどろの黒い触手で、マールの肩を叩く。

落ち込む暇を与えずに、簡単な仕事を振るのはいい判断だったのか、マールははつとして、すぐに命令を達成すべく動く。

それとほとんど同じタイミングで、モモンガの頭の中に直接声が響いた。

『失礼いたします。モモンガ様！』

声の向こうで、軍服姿の埴輪顔が、敬礼をしているのが見えた気がした。

「……お、おう。パンドラか」

動悸、息切れ、めまいという不整する脈もないのに、不整脈のような症状が現れ、モモンガは一瞬呼吸を整えることを必要とした。

「人間の少女と遭遇し、友好的にナザリックに連れてこれるのか。よくやったぞ、パンドラ」

パンドラは、手に入れた情報を次々に報告してくる。

本来なら外に出られないはずの拠点NPCが、システムの規制から解き放たれて外出可能になっていることをモモンガが無言の内に確認したのがまずひとつ。

外は、沼地から丘陵地帯へと変貌し、どうやらナザリックが転移した一帯は亜人たちが領土争いをしている地域だとのこと。

丘陵から先にある山岳地帯にはバフォルクという山羊の亜人たちが住み、そこに偵察に向かう最中の少女に、自分たちがその偵察を請け負うことを提案した。

交渉、という対等な立場にすら立たせない、圧倒的に実力が上のものから善意によって差し伸べられた手。

偵察の安全をより一層図るため、互いの情報の違いをすり合わせ、周囲の亜人たちのことをよく知っておきたい。という名目で、違和感なく周辺状況の情報をさらに手に入れることを可能な状況にした。

（うわ、本当にやり手だわ。こいつに営業やらせたらばんばん仕事とってくるんじゃないか）

サラリーマン的な感心をしてしまう。

人間たちの住むローブル聖王国、亜人たちが暮らすアベリオン丘陵、二つの勢力の戦線となる城壁。

蛙人間のようなツヴェークの巣から、今度は亜人の縄張りか。モモンガはひとりごちる。

ゲーム内のPOPモンスターが拠点に侵入してくるのはまずなかったが、その亜人たちはおそらく違うだろう。

警戒レベルを引き上げなければなるまい。

やるべきことを脳内で構築し、次にするべき指示を考える。

連れてくることに成功した少女だが、自分たちの前に連れて行くに

は、あまりにもひどい格好なので墓地地帯の領域守護者の私室で姿を最低限整えてから連れてくるそうだ。外は雨上がりで、ずいぶんと泥だらけらしい。そんな格好のまま連れてきたら、優しい女性陣がしきりに心配しそうだ。時間は気にせず、に身ぎれいにさせてやるという伝え、パンドラに墓地地帯の領域守護者に伝言を頼む。

地表の墓地地帯は、ナザリック防衛の最前線。侵入者がまず足を踏み入れるのはそこになる。

侵入者がいた場合は、できるだけ怪我をさせずに生きてとらえるようにと命令する。

右も左も分からない状況で、揉め事はごめんだ。

(他の守護者たちにも通達させないとな)

少しの情報でも、やるべきことが目まぐるしく増えてくる。

(大秘術はやっぱり成功していた、とかなんとか言ってそれらしくまとめて、現状を教えて……たっちゃんたちにも相談しなきゃ。巫人たちのレベルによってはツヴェークどころじゃない脅威になるし、表層やシャルティアの守護領域の警備レベルの引き上げは重要。外に出れなくなる籠城戦も覚悟しなきゃいけない……でも、ウルベルトさんが)

もし、レベル1のウルベルトが巫人たちの縄張りに一人で放り出されていたら。

その可能性を思うだけで、恐ろしさで思考が凍りつく。

悠長な判断のせいで、助けられるかもしれない彼に何かあったら、そう思うといってもたつてもいられなくなる。

何か大きな怪我をしたら、ポーションでの回復も間に合わないような致命傷を負ったら、最悪、自分の知らないどこかで死んでしまったら……

真つ赤に染まったウルベルトの姿を想像した瞬間、がちりと恐怖の想像に歯止めがかかる。

身のうちから湧き上がる恐怖をも押しとどめるストップパーに、モモンガは息をつく。

焦った判断など、ろくなことにならない。それはぶにつと萌えさん

がいつも言っていたことではないか。

『モモンガ様?』

奇妙な沈黙とモモンガのため息に、パンドラが訝しげな声をあげた。

「あ、ああ。すまないな。なんでもない」

ウルベルトがこの世界に本当にいるのかいないのか分からない今、モモンガがすべきことは慎重な情報収集だ。

捨て鉢になっていいわけがない。

目の前には大切な仲間がいるのだ。彼らのために、自分のできる限りを尽くすべきであろう。

でも、もしも自分ひとりだけしかおらず、しがらみが何一つなかったのならば。

(なにもかも打ち捨てて、このゲームみたいな現実世界にいるかいないのか分からなくても、あの人を探しに行っていたらどうなるかな)

身のうちに巣食う、餓鬼めいた不安を一刻も早く捨て去るために。



ウルベルトは嘔吐していた。

出るものは何もなく、吐き出すものは胃液ばかり。出るものなどなにもないというのに、体内に入ってくる劇物を迫り出そうと、肉体が過剰防衛を働かせている。

鼻からはだらだらと血が溢れ、目からは涙が溢れていた。ひどい有様だった。

失禁までしていないのが、唯一の救いだらうか。

(なんだよ、これ！)

巨大なイビルツリーが災いの渦に飲み込まれ、ギルドメンバーたちも光の泡となって消えた。それを見送った直後、ドン、と体に何かがぶつかってくる衝撃を感じた。

見えない巨大なハンマーを叩きつけられ、細胞ひとつひとつまで丹念にすり潰されるような、激痛。

自分の中にある何かが拡張されているのをうっすらと知覚するが、



その拡張の速さが許容範囲を超えた時、肉体が悲鳴をあげた。

入ろうとしてくる物の量に対して、許容量はあつけないくらいに小さかった。

今の自分は、何かに溺れている。圧倒的な容量の何かに押し包まれ、つぶされそうになっている。

仕事の最中に化学薬品の溶液の中で溺れかけたことを思い出す。

呼吸ができない苦しさ、昔とは違い泳ぎの練習などしたことのない世代の人間だ。溺れるというのは初めての経験だった。無我夢中でもがいて、液体が限界を超えて口の中にはいつてきた。

今の苦痛は、あの時以上だ。

「うえっー、おげ」

情けないくらいにの喘鳴が、繰り返される。吐瀉物が何度となく地面を汚す。鼻血とまじった胃液の悪臭がせまってくる。

地面に爪をたて、えぐった。

ぶちぶち、と体内から異様な音が聞こえる。あまりにも力みすぎて、毛細血管が内側から破裂した音だった。

苦しきのあまり、気が遠くなる。しかし、激痛ですぐに意識は戻る。

その繰り返しだった。

吐いて、吐いて、吐いて、薄くなった酸素を取り戻すために酸素を吸い、呼吸とともに入ってくる過密した物に拒絶反応を示してすぐに吐き出す。

早く、この苦しいだけの時間が終わってくれ！

ウルベルトは自分の中に、もうこれ以上この異物が入ってくるなど強く思い続けた。

力の源となるモノなのだ、本能のようなものが察知していたが、必要以上のそれはただの毒だ。

受け入れられるだけの器が育っていないウルベルトは、空気を詰め込みすぎて破裂寸前の風船を思い浮かべる。それが、今の自分の状況なのだ。

(くるな、くるな、くるな、くるな)

頭がおかしくなるくらいに、そればかりを繰り返す。

どれほど時間がたったのだろうか。

気が狂うくらいの長い時間だったような気もするし、十分程度の短い時間であったような気もする。

やがて嘔吐も収まり、流れ続けた鼻血も止まった。全身に与えられ続けた激痛は引き、その余波が残っている程度だ。指を地面に突き立て、力を込めすぎていたせいか、いつの間にか爪が割れ、何枚か剥がれていた。その痛みも、あの内側から壊れる痛みには比べれば大したことではない。自分を苛む痛みとは感じない、どこか他人事のようにだった。

荒い息継ぎを繰り返せる程度には落ち着き、ウルベルトは剥がれた爪に気をつけながら手で顔を拭った。

「うわ、くっせ。きたな」

涙と胃液と鼻血で、顔は随分と汚れている。土まみれの手に、その拭いた汚れが加わり気持ちが悪い。

服で拭うことも考えたが、汚れを今着ている服になすりつけるのも生理的にいやだった。

(ここがゲームと変わらないなら、アイテムボックスが使えりやいいんだけど)

ウルベルトはここがゲームの法則が通じる現実、というのを否応なしに受け止めていた。

あれやこれやと往生際悪く考えるのは無駄だということを、我が身をもってまざまざと思い知らされた。

あの苦しみは、もしかしなくても急激なレベルアップがもたらしたものだっただろう。途中からそれを拒絶したから、とてつもなくレベルが上がったような気はしない。苦しんだだけ損したようなものだった。

あのイビルツリーはユグドラシルであったならば、レベル1から50くらいにまで急激にレベルアップできた経験値を持っていたのではないかとぎっくりと考えた。

ゲームであればデータとして簡単に処理されるものであるが、それに現実の肉体が伴うととてつもない苦痛を味わうはめになる、という

ことをウルベルトは理解した。

いわゆるパワーレベリングはやっちゃいけない。レベルアップしたければ適正な狩場に入り浸ってゆっくり上げろ、そういうことだ。(はあー、しんど。うん、でも、何も分からないまま死ぬのよりはずつとましだった)

倦怠感が残る体に喝を入れ、ウルベルトは上半身を起きあげた。

コンソールが使えないなら、アイテムボックスはどうやって使えばいい？

魔法だつて使える。

アイテムだつて使える。

あんな巨大なモンスターも存在し、召喚魔法じみたもので倒せて、経験値が入り、レベルアップだつてするのだ。

アイテムボックスが使えてもおかしくないだろう。

任意のアイテムを取り出せないものかとうろろと手を空に彷徨わせると、手がどこかに入り込む感覚があった。

(お、やった。使えそうだ)

窓を開くような動作で、アイテム欄を見ていく。

ワールドデザイナーという職業のため、ウルベルトには大量のスクロールやワンドが必須だ。結局はあっけないくらい簡単に二発で沈めたイベントボス戦のためにためこんでおいた大量のスクロールやワンドの在庫があり、最終日の安売りに買い込んだ各種のアイテムがいくつもある無限の背囊に詰め込んである。

これを現実世界でも問題なく使えるのならば、しばらく生活に困る気がしない。

イリニに食事による補正をつけさせるために、食料も多く保管してある。

ゲームとは違い、賞味期限や消費期限が気になるが、できれば不思議な力が働いてアイテムボックス内部は時間経過が止まっていくれるとありがたい。

まずはポーション、素材に使う布アイテムを数枚に、汚れを洗い落とすための無限の水差しを取り出す。

低レベルだし、と試しにとマイナーヒーリングポーションを飲むと、驚くくらいに体が軽くなった。味は薄い栄養ドリンクといったところ。まずはなかった。剥がれた爪が何事もなかったかのように戻っていくのは、凄いやうでなんとも気味が悪いが、その効果を実感する。

布ごしに無限の水差しの取っ手を掴み、傾ける。

かつての世界ではお目にかかったことがない綺麗な水が溢れ出る。勿体無い、と思いつつ空いた手を出し、汚れを洗い落とし、綺麗になつた片手で水をすくい顔にかける。

一瞬、召喚したオーバーロードにつけられた傷が痛んだ。

(ポーションを飲んだけど、こっちは治ってないのか)

恐る恐る触れると、じくりとした痛みが頬から広がった。皮膚や肉が焼けた気がしたが、顔の肉が焼け落ちているということはなく、瘡蓋のような固さのあるものが指を押し返すだけだった。

我慢できない程度ではない。というか、つい先ほどのことを思うと屁でもない。

怪我の具合は確認できないが、あまり大したことはない気がする。それよりも今はへばりついている汚れのほうに気になる。

傷になるべく指をふれないように気をつけながら、水で何度も顔を洗う。

さっぱりとした感覚が、とても気持ちよくなった。

汚れのついた布を一旦置き、綺麗になった手に取っ手を持ち替える。

同じように手を洗い、布で拭いた。

そうしてようやく人心地ついたウルベルトは、ギルドの指輪を見る。

本来なら宝石に浮かんでいるはずのギルドサインはなく、その指輪を帰還のために使おうとしてもうんともすんとも言わない。

宝石がはめ込まれているだけのただの装飾品になってしまっていた。

あの召喚魔法はヘラルディストの解放リリースがもたらしたものだだったの

だろう。

紋章の力が解放される、ということは後には何も残らない。力を発動させる代わりにアイテムを使い捨てにさせるのがこのスキルなのだ。

(ま、おかげで助かったけどな)

もし、指輪の力がちゃんと発動してギルドに帰れたならばそれでいいが、帰還できる先がなかったら、ウルベルトはなす術なくあの巨木に殺されていたかもしれない。

そう思えば、あのタイミングでのスキルの発動は最善であったはずだ。

無限の水差しをしまい、『ゴミ袋』とラベルが貼つてある無限の背囊を取り出した。昔、いろいろ作っていたアイテムの廃棄品やら未完成品やらを突っ込んでいた袋だ。今となっては何がはいってるのかもちゃんと覚えていない。仮に、これをうっかりなくしてしまったとしても、ウルベルトとしては痛くも痒くもないものしか入っていない。

これだけ見事な自然の中に、ゴミを捨てていくのはかつての仲間のことを思うと罪悪感があったため、一応綺麗な布で汚れた布を入念に包み、その中に突っ込んだ。ポーシヨンの空き瓶もそこに詰め込む。

(二度と中の中のものには触りたくないな)

中のものに胃液と鼻血がついていそうだ。

簡易のラベルを引き剥がし、背に負う。明らかにゴミとわかるものを、綺麗なものが並ぶアイテムボックスに放り込むのは、なんとなく抵抗があったためだ。どこかで布を捨て、それ以外の中身も処分したい。どうせ大したものはいっていないのだ。

ウルベルトは、歩き出す。

ユグドラシルではないよりはマシという気持ちでつけた装飾品だが、闇視の効果があり、昼間と変わらない明瞭な視界で動けるのは助かった。

夜だからといって、こんなところで休む気にはなれない。もっと落ち着ける場所を探したい。出来れば、人里がいい。

(ここが、どこなのか。)

俺と同じように巻き込まれているプレイヤーはいないのか。

モモンガさんたちはいないのか。いたら伝言メッセージくらいはしてくれそうなもんだけど……もし、俺と同じようなことに巻き込まれていたとして、伝言メッセージが通じないのは、こちらに来てから会ったことがあるひとじゃないと使えないとか、そういう縛りがあるからなのかもある（気になることはたくさんある）。

ひとつ分かるのは、ここでじっとしていても現状を何一つ解決できない、ということ。

探索系魔法を無効化するワールドアイテムを外して、向こうに見つけてもらうことも考えたが、ここに仲間が本当に来ているのか分からない以上、身を守ってくれる物をわざわざ外しておくのは危険だとウルベルトは判断した。

レベル1の自分があれば巨大な敵を倒せたのは、スキルの効果もあるだろうがワールドアイテムの魔力補正も大きいだろう。

どんな敵が、いつ現れるのか分からない今、希望的観測のみで行動するのは極めて危険だ。黄金豊穰の宝鍵は、ウルベルトの命綱となり得るだろう。なにせ、かつては得意としていた魔法を今は一つとして扱えないのだから。

（ヘラルドアイテムが使える魔法を調べて、あらかじめ黄金豊穰の宝鍵にストックしておいたほうがいいな。持つてるスクロールは大体第八階位以上だしな。たぶん、使えねーよな。短杖も何本か出しておいたほうがいいか）

緊急の何かがあった場合、アイテムボックスから即座に必要なアイテムを出せる自信がない。

必要なものはあらかじめ、出しておいたほうがいいだろう。

今の自分ができる全力を費やし、生きるための算段をつけなければならぬ。

（こんな訳の分からん場所で死んでやる気はない。俺は、あの世界に帰るんだ）

それは、この世界にモモンガ達が来たいようと、来ていまいと変わらない決意だ。

(あの世界を、少しでもいいから、俺は変えたいんだ)

殉じることの意味などなく、ベルリバーの命ほどに自分の命に価値はなくとも。

少しでもいいから、あの壊れた世界を。

(たっちさんでもないのに、こんなことを思うのはホントないわーって感じだけど)

正義が世界を変えられないのならば、悪として変えてやりたいのだ。

## 方針

1

仰向けになって柔らかかそうな腹部を露出させている大きな獣を、ウルベルトは見下ろす。

(ハムスターだよなあ。どう見てもハムスター)

尾は異常に長く哺乳類の動物には本来見受けられないはずの鱗が生えているが、かつてのギルドメンバーが愛していた愛玩動物をそのまま巨大化させたような姿だ。

こちらの世界のモンスターの一種なのだろうと思う。

爪は鋭く、むき出しの齧歯は岩をも砕きそうな頑強さを感じる。鞭のようにこの尾がしなつたら、ウルベルトからしてみればひとたまりもないだろう。

怯えをにじませた小動物の瞳には、理知的なものを感じる。

レベルアップがもたらした体調不良が落ち着き、使用できる警戒系のアイテムや短杖を惜しみなく使って歩きはじめてすぐに遭遇した珍獣に、ウルベルトは目を丸めていた。

鉢合わせた瞬間、なぜ、とウルベルトは驚愕した。気配を完全に消している様子もないのに、索敵に引つかからなかった。

もしかして、索敵系の能力を無効化にする力があるか、この世界ではユグドラシルの警戒アイテムが全く通用しないのか、と焦りながら考えを巡らした。

その疑問はすぐに氷解する。相手に敵意がなかったから、そもそも警戒に引つかからなかったのだ。

木陰からこちらを窺うように見ていた大きなハムスターは、ウルベルトと目が合った瞬間、音をたててひっくり返った。見た目の可愛らしさとは裏腹に獐猛な気配をまとっている獣に、本能的に実力の強弱をまざまざと感じ取れる。正直なところ、心臓を掴まれるような生き心地のしないものを植えつけられている男のほうが気絶したかった。

「降伏でいぎるー。負けでいぎるうー」



腹を見せることで動物的な恭順な意思を示し、つぶらな瞳でこちらを見上げ、必死に命乞いをしてくる。

(喋った、しかもごぎるって……)

「殺さないでほしいでござるううー!」

「いや、殺すつもりはないが」

なんとかいうか、実力差的に殺すのも骨が折れる作業になる気がする。

帰るといふ目的があるといつても、即座に目指さなければならぬものがあるわけではないから、寄り道だつてできるだろうが、敵対する意思もない者と戦つて無駄にアイテムを消費するつもりはない。

「ほ、本当でござるか!」

ハムスターは勢いよく起き上がる。豆大福のような愛らしさ、というウルベルトが口にしたこともない食べ物に例えられた生き物の立ち姿。

(うん、小さければ可愛いんだろうな。でも、これは怖いわ)

巨木のような威容がないとはいえ、ウルベルトの命を簡単に刈り取れる存在なのだ。

ウルベルトの身長を凌ぐ、大きな生き物だった。見下ろされると圧倒感がいや増す気がする。

これが本当にゲームなのであれば、ハムスター一匹に恐れをなす大災厄の悪魔など、かつての仲間に見られたくはない恥ずかしい光景だと理性的に思う部分はあるのだが、感情はそんなものを無視して勝手に湧き上がってくる。

「ひとつ聞きたいんだけど、お前、俺よりも強いだろうか？　なんでそんなに俺を怖がるんだ?」

ウルベルトの問いに、ハムスターは心底不思議そうに、見た目だけなら大層可愛らしい顔をかしげた。

「何を言っているでござるか、それがしが明らかに太刀打ちできないあの邪悪な大きい木を倒してしまったではござらぬか。それも、あんなに強くて、恐ろしいものたちを呼び出していたのをしつかりこの目で見ていたでござるよ!」

目を強調したいのか、まんまるい目を、こころなしかきりりとさせる。

「あー、そうか。あれを見ていたか、そうかそうか」

レベル100プレイヤーの一方的な虐殺劇を見たら、確かにその召喚主のウルベルトを恐れるのは当然だった。

ウルベルトは得心して頷きながら、考える。

今、彼には圧倒的に情報が足りていない。

かつての自分たちのように、中に人間の意識が入った異業種、という可能性もなくはないのだが、やりとりから感じ取れるものに人間の厭らしさ、というものが一切なかった。

ハムスターの見た目のユグドラシルのプレイヤーであったならば、もつと違う態度を取るはずだろう。

ウルベルトは目の前の存在に、過剰な警戒をするのをやめた。

このハムスターは意思疎通ができ、幸いなことにウルベルトを恐れているから攻撃の意思をみせていない。

知性的なものを感じるが、人間のずる賢さは感じない。性格的には素朴な素直さ、愚直さ、というのが第一印象なのだ。

どこまでがウルベルトの常識が通用して、どこからがこの世界ではおかしくなるのか。面倒な腹の探り合いなく、引き出すことができそうな気がする。

はじめの情報収集の相手として、最適ではなからうか。

「いろいろ聞きたいことがあるんだよなあ。命の代金つてことで、話を聞かせて欲しいんだ」

ウルベルトとしては脅すつもりはなかったのだが、目の前のハムスターは彼の言葉に毛皮を逆立てさせ、長い尻尾をぴんと張りつめさせて怯えた。

「なんでも答えるから殺さないでほしいでござるー」

黒い瞳を潤ませて、必死に懇願してくる。

「あ、悪かった。そんなに怯えなくても……」

そういえば、と思い出す。

この場を上手く切り抜けるのに、よさそうなアイテムを所持してい

た。

ウルベルトのアイテムボックスの中には、低レベルモンスターをはずけるためのアイテムがいくつかはあったはずだ。フレイバーテキストを信じるならば、たぶんこの巨大ハムスターでも美味しく感じるはずだ。無限の背囊から取り出すふりをしながら、アイテムボックスを開き、手探りでアイテムを取り出す。

ミーシャと一緒に遊ぶときにこなしたクエストで使った、笹と呼ばれる大きな葉っぱにのった団子の山を巨大ハムスターの鼻先に突き出した。

ウルベルトの鼻にも届く、ふんわりとした上品な甘い匂い。間近に突きつけられたハムスターはふんふん、と思いきり鼻をひくつかせた。

恐怖にうるんでいた目が、今や期待に輝いている。

「も、もしやこれをそれがしに……？」

「ああ。友好のしるしってところだろうか」

ウルベルトが渡すと、前脚で大事そうに笹ごと受け取った。ハムスターは団子の山にかぶりついた。笹の上の団子の山は一瞬でなくなり、目の前でぷっくりとほほ袋がふくれる。

（これが、うわさのほほ袋）

「美味しいでござるよ！ あー、ええと。お前は名はなんというのでござるか？」

一瞬、リアルでの本名を名乗ろうかとも考えたが、ハムスターが喋るメルヘンめいた幻想世界でリアルネームを使うことに、男の中の矜持というか常識力というかなにか耐えられない羞恥的なものが胸を満たしたため、ゲームでの名前を告げることにした。

「ウルベルトだ。それで、そういうお前は名前はあるのか？」

「それがしは森の賢王と呼ばれているでござるよ！ ううん。美味しい！ こんなに美味しいものを食べたのははじめてでござる。礼をいうでござるよ、ウルベルト」

（ハムスターが森の賢王？ 見た目の割に随分と大層な名前だな……：もしやここは、動物だけが暮らすミーシャちゃんが好きそうな絵本み

たいな世界じゃないだろうな)

第六層農場領域が世界そのもののような場所を想像し、男の存在感にはとても似つかわしくない場所への違和感に全身に苦渋が広がった。

(いや、あんな恐ろしいなイビルツリーがいるんだし、それなりにいろんなやつがいるんだろう。頼む、そうであってくれ)

脳内が疲れてしまう想像に、ウルベルトは首を振った。

「美味いようなら良かった」

馬鹿げた妄想で疲れた脳を癒したかったウルベルトは、もぐもぐと団子を食べるハムスターを見る。

毛感触がやわらかい。あたたくくてだっこすると気持ちいい。ギルメンのジャンガリアン談義を思い出す。

小動物を触ることは、とても癒されることらしい。はて、この巨大なハムスターはどうなのだろう。

ウルベルトは強さに見合う硬さで手触りはさほどだろう、と諦めつつも、すこし期待しながらさりげない自然さを装ってハムスターの背中に触れた。

手のひらにちくちくと大量の小枝が刺さるような感触が伝わる。予想通り、毛皮はとても硬かった。

すこし、いやかなり残念だった。

この辺りは森の賢王と名乗るハムスターの縄張りで、その言い分を信じるのならばこのハムスターより強いモンスターはいないらしい。

あの巨木は長くこの森に住んでいるハムスターも初めて見るもので、他の縄張りの主は「この森の賢王に比べれば皆弱いでござるよー」と豪語した。

ウルベルトはその言葉を一応、信用することにした。

ハムスター以外の縄張りの主人達も、森の賢王と並ぶか、多少差があるか程度の実力とあたりをつける。丸腰で準備のない彼では、あっけなく殺される相手、ということだ。ただし、万全の準備さえしていれば、今の自分であっても勝てる相手だろう、と。

少なくとも、あの巨大なイビルツリーが他には存在しない、ということには信じたかった。あんなものがまた出てきたら、今度こそ逃げる暇なく殺されそうだ。

道中の話で、ウルベルトと同じような人間がこの世界にいるのは確認できた。

森の賢王と名は、その人間たちがつけた異名であり、名前ではないらしい。

「美味しい食べ物の礼に、それがしの名前をつけさせてやってもいいでござるよ」

上から目線の偉そうな物言いをハムスターにされて、ウルベルトは少しだけ苛つとした。

これが丁寧をお願いする態度であれば、異世界転移のようなことをして初めて知り合った知的生命体である。その縁を尊重し、彼の語学センスを持って渾身の名前をつけてやっただろうが、その気力は完全に萎えた。

いい加減で適当な名前をつけてやろう。

ウルベルトはそう決めた。

「ハムスケ。今日からお前の名前はハムスケだ」

このなんらやる気のないネーミングを聞いたら、アインズ・ウール・ゴウンのギルドメンバーたちがこそつてウルベルトを心配していただろう。

ギルマスモモンガ並みに安直でひねりのない、ウルベルトらしきとも言える厨二成分の欠けた名前。

実際、ウルベルトの体調や精神状態は、転移直後で気が張っているせいで本人には自覚はないが、他者から案じられても仕方ない状態だった。

顔色は悪く、目からはやや生気が欠けている。人間の顔色の違いなどよくわからないハムスケしかこの場にいないから、誰もウルベルトに指摘できなかったが、頭が働かないくらいかなり疲れていたのだ。「ふむ。ハムスケでござるか。今日からそれがしは森の賢王ハムスケと名乗るでござる」

得意げに鼻を鳴らすハムスケは、ウルベルトの予想を超えるくらいに嬉しそうで、ほんのちよつぱり罪悪感が生まれた。もう少し、ましな名前にしてやってもよかったかもしれない、と。

ウルベルトは生まれてしまった罪悪感をかき消すため、ハムスケが美味しいと喜んでいた団子を差し出した。

「食えよ」

「むむっ。さっきの美味しかった食べ物でござる。ありがとう、ウルベルト」

うきうきと長い尻尾を揺らし、団子にがつついた。

一生懸命に食べてほほ袋が膨れる様は、確かに可愛いかもしれない。

図体のでかさはさておき、動物への餌付け行為というのは、なんとなく楽しい。かつては理解出来なかったギルメンの言い分に、ウルベルトは時を経て同意した。自分が差し出したものを相好を崩して嬉しそうに食べている動物の姿は、感じ取れるレベル差さえ無視すればとても癒される。

それに、アークロジの外ではほとんどの動物が死滅していた。動物への餌付けなど、ウルベルトが生きていたリアルでは、決してできなかった贅沢な行為だ。すこしおっかなびつくりであるが、現世に帰って死ぬ前になかなか出来ない貴重な体験できた。あの世にいる両親への、いい土産話になるかもしれない。

「さっきからそれがしばかり食べているようだが、ウルベルトは食べなくていいのでござるか？」

「あの巨大樹を倒していたところを見たなら、俺が吐いていたのも見てた。まだ胃の中に何か入るコンディションじゃないんだ」

怪我や、鼻血、嘔吐の後遺症事態は綺麗になくなっていく気がするが、リアルでの感覚をまだ引きずって吐いた直後に何か食べる気にはなれない。

「お腹が空いたら言うでござるよ。美味しいもののお礼に何か狩ってくる。なにせここはそれがしの縄張りであるゆえ、狩などたやすいでござる」

「気持ちだけ受け取っておく。食べ物なら一応あるからな。とりあえず、感謝してるならいろいろ教えてくれ」

「わかったでござる。と言つても、それがしは森のことは知つていても、外の人間のことはあまり知らぬから、期待に応えられるかはわからないでござるよ」

ハムスケにさらりと付け加えられたことばに、ウルベルトはそうだようなと内心ひとりごちた。森の中に住む動物に、あまり過度な情報量を期待するのはやめておこう。

「ああ、わかった。最悪、人里まで送つてくれればそれでいいさ」

すぐに人里に向かうことはせず、ハムスケから聞けるだけ話しを聞いてから人間たちが住む村に送つてもらふことにした。

それに、誰か人と会う前に、自分が今できることなどを安全を確保した上でたしかめておきたい。

今日はハムスケのもとで休むことになり、ウルベルトはハムスケの寝ぐらへと案内された。

原始的な住処だ。ごつごつとした土壁でできた大きな洞穴の奥に、巣があった。

ゲームで見たことがあるネズミ系モンスターの寝床そのもので、枝や葉っぱの自然物で作られた巣だ。丸みを帯びた大きな巣の中央は、凹んでいる。ここでいつも丸くなって眠っているのだろう。

ゲームのネズミモンスターの寝ぐらとちがいで、獣の骨や餌の残り、あるいは人間の死骸で巣の中が汚れているということはなく、じんわりと湿った地面には大きなハムスターの巣しかない。

周囲のモンスターは、森の賢王を畏れ、ここには近寄らない。

ハムスケは自慢げに言うが、それを鵜呑みにするウルベルトではない。

盗賊の警戒スキルを使用可能になる指輪を握って集中する。

ゲームでは課金しなければ使えなかった三個目、四個目の指輪が使用可能かはめていたものだ。

ユグドラシルでは表示された簡易マップにエネミーが赤点で表示されるものだったが、ゲームが現実になつてしまったらしいこの世界では、視界にマップが出現するというのではなく、第六感が刺激されて敵の気配を感じ取れる、というなんともあやふやなものになっている。

研ぎ澄まされていく、聴覚、目に見えない触覚めいたものが多方面に伸び、敵を探す。

今までの自分にはなかったこの第六感を信じるならば、知覚できる範囲には敵はいない。

一応、ここは安全圏とっていいはず。

そう思ったら、肩の力ががくりと抜けて、張り詰めていたものが溶けた。

「ゆつくりくつろいでいてほしいでござる」

「遠慮なくそうさせてもらおう」

ウルベルトは相当疲れていて、無限の背囊から取り出すふりも忘れてアイテムボックスからもうひとつの無限の背囊を取り出した。

「すごいでござる。いきなり袋が増えたようだが、どうやったでござるか？」

「……あー魔法」

その指摘にしまった、とすら感じないウルベルトは、無限の背囊から毛布を取り出した。

最終セールバザーで投げ売りされていた、なんの効果もない見た目だけ豪華な家具アイテムだ。

『ふわふわもこもこな毛皮がしあわせでこちよい快適な眠りを約束します』という説明が書いてあった気がする。

神獣と呼べる高レベルモンスターの毛皮を無駄にふんだんに使ったという設定の趣味アイテムだ。

NPCの部屋に置いてもよさそうだし、安かったから買ってみたけれど結局いらなかったもののひとつである。

「ウルベルトはやはり、魔法詠唱者なのでござるな。さっきの召喚魔法もすごかったでござる」



聞き覚えのある単語を出されてもそれにはつとすることなく、ウルベルトはなにも言わずに横になりもそもそと毛布にくるまった。

(本当に気持ちいいな、これ。リアルの毛布とは偉い違い……)

「ウルベルト?」

ハムスケは男の名前を呼ぶが、返事はない。

毛布にくるまった男を覗き見ると、すっかり眠り込んでいる。

青白い顔をしているイー仮にウルベルトをととても大切に思っているギルドマスターが居合わせようなら盛大に心配してしまう様相でイー気絶するように意識を手放していた。

くりつとした目に、不思議そうな光を宿し、ハムスケは毛皮にうずもれた首の部分をななめに傾げる。

「寝てるでござる」

美味しいものをもらい、名前までつけてくれた者を冷たい地面に置いておくのは、森の賢王とまで呼ばれた智者としての名が廃る、とハムスケはウルベルトを乱暴に担いで巣に放り込んだ。

その衝撃でも、ウルベルトは目覚めることはなかった。

## 2

ぷにっつと萌え曰く、

「自らを深く知らないことは、最初から敵に負けているのと同じことだよ。0から100まで把握しない慢心は死に向かうことに等しいんだ」

その言葉、今のウルベルトには深々と突き刺さるものがあつた。

今、ウルベルトは自分が置かれている状況はおろか、自分のことすらなにひとつ知らない。

死ぬべき場所で、死ぬ。

そのためには、自らの取れる手段を確認しておくこと。それがこの異常事態で生き残るためには重要だつた。

このような状況にでもならなかったら、思い出すこともなかったぶにっつと萌えのことば。その助言を忠実に守っているのが、ギルドマスターのモモンガ。

モモンガは自身が習得する718全ての魔法の特性を把握し、状況に応じた最善の手段を即座に判断し行使することができる。

その膨大な魔法取得数に嫉妬することもあった。そしてウルベルトよりもはるかに優れた状況適応能力にも。

本人は謙遜しがちでそうは見えないが、対人戦においてモモンガほどの戦術構築力を持つ者を、ウルベルトは知らない。

ギルド内の実力では第三位となっているが、PVPの勝率でいえば圧倒的にモモンガがギルドトップと言っていていいだろう。

ギルド最強のたっち・みーとて相性が悪い相手にはすこぶる弱く、ウルベルトは長期決戦に弱いという弱点を抱えている。総合力ではどんな状況でも臨機応変に対応できるモモンガがダントツなのだ。

一番の武器は、他者の助言に素直に耳を傾けることができる素直さなのだろうと思う。

ウルベルトだと、相手にもよるがプライドと負けん気が勝って、相手の言い分が正しかろうが我を通してしまう。

モモンガは、自分是他の者よりも劣っているという過剰な劣等感を持ち、それにより少しでもよくなるために、と砂が水を吸うように吸収して、助言を我が物としてしまう。

ぶにっつと萌えがあれこれとモモンガを構っていたのも、その成長を見るのが楽しかったからだろう。

そんな、モモンガをよくかまっていた彼が完全にギルドを辞めてしまったときの、ギルドマスターの悲嘆と来たら……

(重さがっ。思い出したくないあの、重さが。いや、今は昔を懐かしんでいる場合じゃないな)

懐かしむという言葉では言い表せ類の感傷を振り払い、ウルベルトは手にした本に向き合った。

ウルベルトはワールドサーチャーズ特製のクラス解説読本を手に、現在自分が取得しているクラス《ヘラルディスト》に関して勉強をしていた。

気絶するような睡眠から覚めたあと、朝食をとり(リアルに帰ることを一瞬本気でためらうくらいびっくりするほど美味しかった)、ハ

ムスケの寝ぐらのすぐ外にレジヤール用のハンモックを広げ、ウルベルトは熱心に本を読んでいた。

縄張りの主であるハムスケはウルベルトのすぐ近くで同じようにハンモックに揺られている。こちらは丸くなってすっかりご機嫌で眠っていた。

ハンモックを興味深げに見ていたハムスケのために、騎獣用の大きめのハンモックを出してやったのだ。

しげしげと見やり「これはなかなかいいでござるな！」子供のような歓声をあげると、すぐに大人しくなっていた。

おおきな大福がぐるんとなっている姿に時折視線をやりつつ、ウルベルトは生存戦略に努める。

イリニの部屋に飾るためにと集めていた本が、こんな形で役に立つとは思わなかった。フリーバーテキストやユグドラシル内にある関連文字データを執念的に集め、解説や考察とともにデータ集を記している。この本がなければ予備知識を得られず、試行錯誤で能力を確認するほかなく、無駄に時間が取られていたに違いない。時間というのは貴重だ。特に、こんな右も左も分からない状態に陥っていたら、ほんの少しの時間の足りなさで発生した知識不足が、危険や死をまねくかもしれない。変態集団ワールドサーチャーズ様様だった。

ヘルルディストは人間種専用の、下級職においては非常に珍しい系統複合魔法職だ。信仰系魔法と魔力系魔法を習得でき、レベルをあげることで戦士系のスキルの習得を可能とし、完全魔法職にはない体力や耐久のステータスの上がり方をする。いわば魔法戦士のようなものだった。

一見、さまざま手段を選べることから、有用なようにも思えるがこれがゲーム内であれば異形が取得できるクラスだとしてもウルベルトは無視しただろう。

モモンガに語った通り、いろいろなことができる分、特化した力がない。クラス取得にイベントを必要とするもののためか、その成長値の合計値は目を見張るものがあるが、信仰値も魔力値も、体力や耐久のステータスも、それ専門のクラスに比べると完全に水を開けられる

まんべんのなない正九角形成長。

取得魔法にも目新しいものはなく、一回目のスキルの発動は何が起るかわからない紋章に秘められた力を解放するということにロマンを感じる者用の、あるいは博打を楽しむ者用の、完全趣味職。その博打感覚も、レベルアップすると得られるスキルによって、意味がなくなる。

このクラスに、旨味を感じない。

だが、それはゲームであれば、の話である。

仮想現実が血肉を伴った現実になってしまった以上、できることが多く完全魔法職のような肉体の脆弱さが無いというのは、窮地に活路を見出すことができるはずだ。肉壁になってくれる仲間をすぐに見つけられるゲームとは、わけが違う。

魔力値がわずかに足りなくて死ぬような状況よりも、回復や使える手数  
の多さ、肉体の頑健さが生死を分ける状況のほうが多いだろうと推測する。

レベルを最大である15まで上げれば、第五階位の信仰系魔法と魔力系魔法まで取得することが可能。下級職を最大レベル15まであげることはゲーム内ではステータスや取得魔法、スキルなどの無駄が多かったから、できるならばヘラルディストが10まで上がったなら、ハイ・ヘラルディストに切り替えたい。しかし、ゲームとはちがいがコンソールで指定のできないここでは難しそうだ。だいたい、レベルが10まで上がったからと言って、機械的に新しいクラスを取得できるのかも定かではないのだ。

目に見えて確証を得られるものがない、ステータスを閲覧できない、というのは大変不便だとウルベルトは内心嘆いた。

今できるのは、所持スキルや取得できる魔法で自分のクラスレベルや合計レベルを推測できるだけだ。

《魔法距離延長》、ゲーム内の特殊文字を日本語訳してくれる《翻訳》スキル、戦士系の初期防御スキル《パリイ》、ヘラルディスト専用スキル《紋章知識》これは紋章にふれるとあらかじめ解放<sup>リリース</sup>での効果を知っておけるスキルだ。

試しに、これを使えるようになってきているかどうか、ウルベルトは試してみた。

結婚指輪には、自分の紋章も刻まれている。

紋章にかざした手から、ふ、と知識がはいってくる。

生贄の使用により上位悪魔の召喚が可能。

ちらり、と見覚えがあるかつて廃却した悪魔の姿が視界によぎった気がしたが、ウルベルトは気にも止めなかった。

(解放するにも条件付の場合があるって、書いてあるがこれのことか) スキルを発動させるだけでは、紋章の力を発動できない場合がある。生贄を必要としたり、一定の割合のHP以下であったり、なんらかのステータス異常を起こしている場合であったり。

淡々とスキルの確認を続ける。

レベル6で新たなスキルは習得せず、7、8でまたヘラルディスト専用のスキルを習得する。

複写コピーというもとからある紋章を、コピーする力。このスキルで複写されたものは原本のものより効果は劣化する。

ヘラルディストの説明欄に、使える紋章一覧という項目があり、ウルベルトはそれに複写コピーを使用した。

スキルの使用を意識すると、指に何かが張り付くような感覚があった。

指を見ってみるが、はつきりと形のあるものは見えない。だが、粘着質なものが自身の指に絡まっているのは確かだ。

アイテムボックスから紙を取り出し、そこにシールでも貼るように貼り付けた。コピーした紋章がしっかりと紙に印字されている。

成功した。手応えがあるのは正直嬉しい。

紋章自体の精度、紋章が刻まれている材質により解放リリースの効果の強弱が決まるらしく、ただの紙にコピーした紋章は、あまり期待できるものではない。

だが、ウルベルトは大量の上位素材をもっており、効果を劣化させる複写コピーであっても、かなりの威力をもつ紋章を作れるだろう。

(上手くいけば、攻撃、治癒、防御の能力が量産できるが、大量に紋章

を作っても解放は一日に使用回数が決まってるスキルなんだよな)

複製も同様で、一日の使用制限がある。時間がある限り延々と紋章のコピーをできるわけではない。

便利そうでも、ゲームの仕様がある以上制限はあるのだ。

次に、<sup>デザイン</sup>描画。解放に使える紋章を、自分でも作成可能になるアクティブスキル。なんらかのアイテムにあらかじめマークを書いておけば、力を引き出せる。

(絵心が割と絶望的な俺でも、それっぽいものが描けるのか?)

ウルベルトは○の中に三角や四角くらいしか描けない自分の描画力を思い、ため息をついた。

とりあえず、使えるかどうかやってみるべし、と意識を前向きに切り替えた。

下手なものしかできなくても、ウルベルトには<sup>コピー</sup>模写という便利なものがあるのだ。

リーザやミーシャのギルドサインを考えるとときに参考にした書籍や、ギルドメンバーのギルドサインを記した<sup>デザイン</sup>帳も持っている。

自分で描けなくても、困りはしない。

アイテムボックスから宝石がついた洒落た羽ペンと下敷きがわりになる板を取り出し、スキルを意識して描き始める。

(う、これは……)

すらすらとペンが動いていく。

丸みある線に迷い線がまったく生まれず、パソコンのペイントツールでも使っているような均一な太さの線が描画できる。歪みのない円形の中に、頭の中思い浮かべた形が、そのまま手によってアウトプットされていく。

渾身のNPCであるデミウルゴスをイメージした紋章が、自分の理想通りに完成してしまった。

(ゲームスキルってすげえ)

ウルベルトは調子にのりスキルを使わない状態で、完成した紋章を真似て描こうとした。線ががたがたになり、てんで似つかないものに

なった。無言で破り捨て、失敗したほうはゴミ袋代わりの背囊に放り込んだ。

紋章の仕様効果は、支配の呪言を一定時間だけ使えるようにするもの。紙に書いたものであるため非常に短い時間だが、あれば便利なものだ。

（時間限定とはいえ、スキルを付加できるのか。ヘラルディストの説明に書いてあるよりも、大分できることが多いんじゃないか？）

ヘラルディストが解放リリースによってできるパターンというのは、本を信用するならばそんなに多くはないのだ。

スキルが一時的に付加されるなどの文言は一切ない。あの変態集団がそんな簡単な情報漏れをするとは思えず、ウルベルトが偶然運良く発見した、という可能性も低い気がした。

（解放リリースの効果も、ゲームと変わってるのかもな）

ゲーム中は、スキルが付加されることはなかったが、現実世界にシステムが即したことで、データで支配していたときよりも膨大な可能性がひろがったのだ。

ゲーム中には反映されることはなかったが、ヘラルディストの説明にある『解放リリースは使用者や周囲のイメージによって能力が決まる場合がある』というのが、ひとつのキーワードなのかもしれない。

（時間があるときに、これに関していろいろ調べてみるか）

何事も試行錯誤は欠かせないだろう。

ヘラルディストがレベル10で取得するスキルは、自分の中で使える気がしなかった。どうやら、そこまではレベルが上がってはいないらしい。

（とりあえず、ヘラルディストは最低でも8までは上がっている、と。ワールドディザスターを持ってたけど、それもレベルが上がってるのか？ 燃費が悪くなるから、正直今の段階ではレベル1にだっただくないんだが）

ワールドディザスターが強制的に取得してしまうスキルがある。

魔法の威力を跳ね上げる代わりに、MP消費が格段に上がる呪いのようなスキルだ。このスキルを一度覚えてしまうと、ワールドディザ

スターのクラスを失わない限り、解除することは不可能。かつてのウルベルトの圧倒的殲滅力を担うスキルであり、最大の弱点を生み出すもの。

このスキルのことを意識したとき、自分の内側にある何かを明確に認識する。

ウルベルトの体内で、大釜の中でぐつぐつと燃えたぎる魔法の根源が蠢いている。もうひとつの心臓が息づいているようであった。

地獄の渦がフレアのような原始的で凶暴な火を散らし、純粹な魔力を凶悪な魔法へと精製する本来なら存在しないはずの内臓が、血液を循環させる心臓のように動いている。それは底なしの胃袋でもあった。大食らいの口を奈落のようにぽっかりと開けて、ひとたびその内蔵を意思を持って動かそうとすれば、ウルベルトの中にある魔力を吸い尽くす。

「レベルアップしてんじゃねえか！」

あまりの衝撃に思わず怒鳴ると、眠っていたハムスケがびくつとして飛び起きた。

「ど、どうしたでござるか、ウルベルト！ 敵襲か！」

きよろきよろと辺りを見回すハムスター。

「悪いな。気が動転して大声を出した。寝直してくれ」

顔を抑えてうつむきがちに呻くウルベルトに、ハムスケは心配そうな目を向けた。

「ウルベルト、あんまり根をつめるのはよくないでござるよ」

いい歳したおっさんとしての尊厳めいたものが、ごりごり削られていつて目眩がした。

うっかり声を上げてしまった恥ずかしさに、ハムスターにいたく案じられる人間というシユールな絵面が加わり、ウルベルトは気が遠くなり意識がぐらついたが、なんとか持ちこたえる。

「大丈夫だ。本当に気にしないでくれ」

ウルベルトは重ねて言った。

ハムスケは信用していない眼差しでウルベルトをじっと見つめる。

「本当でござるか？ 昨日もウルベルトは疲れてすぐに寝ていたでござるよ」



ざるよ。それがしは魔法のことはあまり詳しくないが、あの召喚魔法はウルベルトの負担になっていたのではなからうな？ 顔にも模様のような怪我の跡がまだ残っているでござる。無理はしないでゆっくり休むか、人間の村に行って治療したほうがいいのではござらぬか？」

「本当に大丈夫なんだ。気にしないでくれ」

ウルベルトはハムスケの追及を強い言い方で封じ、本に視線を戻した。

と言っても、低レベルでワールドディザスターのレベルが上がってしまったという衝撃は、いまだにウルベルトの中に残っている。

文字はまともに頭の中に入ってこなかった。

彼の中でトップクラスの理想であるワールドディザスターを、こんな中途半端な強さで保持している悔しさと、最強クラスを使いこなせない歯がゆさがある。

同時に、スキルのデメリットがこれから魔法詠唱者としてのウルベルトの足を存分に引っ張っていつてくれるだろう不安も。

普通の低レベルの者に比べれば、アイテムと装備に恵まれているから困ることはないだろうが、これからのことが全く想像がつかない不安から、スキルのデメリットにばかり注目がいつて居心地が悪かった。

気を取り直すために、本を閉じる。

ウルベルトはレベルが上がってしまったものは仕方ない、とすぱつと諦めた。

大量にストックしてあるスクロールの一部が使えることになったことを喜ぼう。

魔法の取得順予定は、ワールドディザスターのレベルが上がったところで変わらない。

今のウルベルトでは、高位クラスが取得する魔法は使えないからだ。

もしかたしたらユグドラシルの魔法習得の法則と違い、いきなり高レベルの魔法を使えるようになるのかもしれないが、ウルベルトはと

りあえずユグドラシルのルールに則った魔法習得をしていくことに決めた。習得の仕方の法則性に違いがあるのかは、徐々に調べていけばいい。

今のウルベルトがワールドデザイナーを最大レベル5まで上げて得られるのは、スキルと能力値だけだ。

ワールドデザイナーの代名詞とも呼べる大災厄グランドカタストロフはレベルに係なく使えるスキルであることが、幸いだろう。

ワールドアイテムの補正があるとはいえ、最大レベルのガチビルドが放つそれには、今のウルベルトでは到底比肩できない威力しかでないであろうが。

(とりあえず、ワールドデザイナーをレベル5まで上げるのを目標にしよう。

まだ総合レベルが低いから、ハムスケと同じくらいのモンスターがいれば簡単に上がるはず。

むしろ、上げすぎないように注意しないと。またあんな目にあうのはごめんだ。

それで、ヘラルディストを10まで上げて、ハイ・ヘラルディストのクラスを取れるならとって……魔力系魔法系統の下位クラスをもう一個か二個くらい取りたいな。どうすればクラスを得られるんだ？ 都合よくクラスを得るイベントは起こらないだろうし……)

クラス読本をぱらぱらとめくり、考える。

魔法の研究をするマギ・リサーチャー。

秘術に触れることで才能を芽生えさせるアーケイナー。

魔法の世界に接続する才能を持つウィザード。

特定レベルに達するどころか、初期段階からコンソールを叩くだけでレベルを上げられた基礎クラスが、今やウルベルトには遠いものとなつている。漠然とした解説ばかりで、これといってすぐにクラスを得られるきつかけになりそうなものはない。

(ウィザードなら、基礎中の基礎クラスだし頑張ればクラスレベルを上げられるか？ でも、ウィザードは完全魔法職だから打たれ弱い。魔力の上がりには下級職の中で一番高いが……)

メリットとデメリットの天秤をかけながら考えていると、メイジ・ティーチャーという項目に目が止まった。

チュートリアル並みに簡単なイベントによって取得するクラスで、ざっと見てヘラルディストとスペルリストの被りが少なく、魔力はウィザードに劣るが体力や耐久が魔力系魔法詠唱者のクラスにしては高い。

第三階位の魔法ファイアーボールを披露し、生徒役であるNPCにファイアーボールを教えることで取得できるクラス、とある。

はつきりとクラスにつく条件が提示されている下級魔法職だった。(魔法を教えられる状況になったら、このクラスの取得を考えてみるか?)

悪くはないな。

魔力特化は格好いいしロマンがあるしゲーム的に見ると無駄はないが、生き残ることを念頭におくと危険が多すぎる)

ウルベルトはそれ以外にもペラペラとページをめくったが、メイジ・ティーチャーほどはつと目を引く下級クラスはなかった。

近く、このクラスの取得を目指そう。

人間種が住む街に出て、第三階位のファイアーボールを覚えたいという者を探すのだ。

そのためには、まずは自分が魔法を習得しなければならない。

ゲームの通りならば、今の自分のレベルなら魔力系、信仰系共に第二階位まで習得できる。

ヘラルディストが習得できる魔法をリストの中から選ぶ。全ての魔力魔法の基本である始まり魔法マジック・アローの矢などの攻撃魔法が数種類、バフ系の早足クイックマーチ、状態異常おこす睡眠スリープそして信仰系魔法の初歩軽傷治療ライト・ヒーリングと簡単な状態異常を回復する魔法や信仰系の防御魔法がいくつか。そしてなんらかの魔法を取得できる状態になると魔法選択リストにある伝言メッセージとなる。

魔法の矢は必須だろう。保持魔力に応じて攻撃力が上がり、ある程度のレベルになっても長く使える魔法だ。それに加え、高位の魔法を取得する際に必要な前提魔法になっていることが多い。

次に軽傷治癒。ライト・ヒーリングもつとも下位の治癒魔法のため効果は薄い、これより上の治癒魔法の取得には必要不可欠なもの。せめて、第三階位の重症治癒ヘビーリカバリーくらいは使えるようにしておきたい。

とりあえずはこの魔法を習得しよう。

そう決めたウルベルトは、はっと動きを止める。

習得しようと、したのだ。

「どうやって、覚えるんだよ」

コンソールが開かない今、リストからの魔法の選択は不可能だった。

3

ユグドラシルの魔法という現象に対して深い考察がなされている本の読み解きを放棄したウルベルトは、リアルの世界には一切役に立たない、効率的な魔法の習得方法というものを半日の間で編み出していた。

黄金豊穰の宝鍵を無駄に使った、力技である。

第一階位魔法をわざわざワールドアイテムに限界までストックさせ、何度もそれを使用する。

スクロールを行使し、魔法の世界に接続する感覚、というものを徹底的に肉体に叩き込み、習うよりも慣れるの精神で魔法の使い方を体に理解させる。

理屈を頭の中で暗記しても、それが魔法の発露にまで到達しない。ならば感覚に飽きるまで刻み込んでやる、と投げやりになって実行してみた手段だが、ウルベルトにはあっていた。

スクロールでは分からない自分の中にある魔力を魔法へと変換させる、という段階に一度躓いたが、そこさえ超えてしまえば、ウルベルトは第一階位の魔法を使える駆け出しの魔法詠唱者となっていた。

「魔法の矢」マジック・アロー

的にした岩めがけて、光の玉が五つ飛んでいった。ぶつかった光の玉は、岩を粉々に砕く。

スクロールでは自身の魔力は反映されず、光球は決まった数しか出現しない。

魔力に応じて出現する玉の数が変わるということは、自分自身の力で魔法を使ったということだ。

達成感に、ウルベルトの口元は知らないうちにほころんでいた。しかし、ゲームであれば一瞬で習得可能になる魔法に、半日も時間をかけて習得した自身の体たらくぶりにすぐに肩を落とす。

もっとも簡単で基本的な魔法にこれだけ時間をかけることになるとは。第二階位、第三階位の魔法を習得するとなるとどれだけ時間を必要とするのだろうか。

ウルベルトはゲームのシステムに現実が伴うことによつて判明した才能の無さに落胆する。

比較できる他者がいないから分らないが、優秀ではないだろう。

男は、現地の人間にとつては破格の速度で魔法を習得していることなどまったく知らず、てんで見当違いの理由で失意に沈んでいた。

「ウルベルトー。そろそろ休んだほうがいいのではないでござるかー？」

ひと段落ついたと察したハムスケが、落ち込むウルベルトに声をかけた。

もう、時刻は夜になっていた。

取り出した懐中時計の時刻が正しければ、もう11時だ。

一応といえる程度の時間の魔法の対策が施された懐中時計は、ゲームでは一応ブローチ扱いの装備品だったが、そういった定義を無視できる今はトレンチコートの上に通したベルトに引っ掛けてある。

ゲームの仕様を無視できる場合と、そうでない場合があり、ウルベルトはその仕様に困惑しながら装備を整えなおしていた。

指輪は、十本の指全てに通しても、効果が表れているようだ。違う効果のブレスレットを二重、三重に巻いても、しっかりと機能は果たす。

しかし、レベルによる装備の制限と、クラスによる装備の制限は不思議なことに残っていた。

現在装備しているのは、最上級のアクセサリーを中心とした元から着ていた上級の衣服だ。

状態異常や、精神異常、監視魔法はワールドアイテムが完全に防いでくれるので、アクセサリーは自身の能力を底上げするものや、属性魔法に対する耐性をあげるものを中心に選んだ。

ゲームの中で装飾品をじゃらじゃらさせているのは、一種の示威行為であるため気にならなかったが、現実の自分に近い姿でアクセサリーをこれみよがしにつけるのは気になったので、黒いレザー手袋をはめたり袖の下や襟の下にしっかり隠すなどして対策してある。夜であろうと燦然と輝き闇を照らすワールドアイテムも、しつかりとコートの中に隠した。

コートの上に通した工具をしまうポケット付きのベルトには短杖や、スクロールをいれてある。マイナーヒーリングポーションも二本ほどベルトに下げた。見た目の薄いガラス瓶とちがいだいぶ頑丈で、多少乱暴に扱っても割れそうにないのはウルベルトにとってありがたかった。

これからどんな荒事に巻き込まれるのか分からないのだ。すこし動いただけでポーションの瓶が割れてしまつては困る。

「おお。流石にそろそろ休むよ」

経過した時間を理解すると、どつと疲労が肉体に降りかかった。自覚していなかった疲労を認識すると、立っているのも億劫になった。とにかく、魔法を覚えるという一つ目の課題はクリアした。

あとは、明日頑張ろう。



ウルベルトは三日間でいくつかの魔法を習得した。

魔力系魔法は魔法の矢で要領を理解し、黄金豊穡の宝鍵を使うことで比較的簡単に習得できたが、信仰系魔法は難航し、第一階位の軽傷治療の習得で精一杯だった。

黄金豊穡の宝鍵に込められるのは魔力系魔法だけなので、スクロールを持ち合わせていなかったことと、神に祈ることでも得られる祝福、という言葉がウルベルトにとって取っ付きにくかったためだ。

ウルベルトは悪魔なら信奉できるだろうが、人民を救うなどという障りのいい言葉を平然と吐き捨てられる詐欺師に祈れるような性根

は育っていなかった。

神に祈らずともシステマ的に習得できたのだから、ここでもそうだろうという一念で、ウルベルトはなんとか信仰魔法の使い方のコツ、というのを掴んだ気がする。

これからは、少しは信仰系魔法を覚えやすくなるといいのだが。

ユグドラシルの終了から四日たった、今日。

一人と一匹の、ある種の牧歌的で平和な生活もこれにて終了である。

ウルベルトはある程度魔法を習得を覚えたことでこれを区切りとし、人里に向かうことに決めた。

これでハムスケとも別れることになると思っただのだが。

「それがしは、ウルベルトと一緒に行くでござるよ！ 生き物の務めとして同族を探し出して子孫を繁栄させるでござる！」

縄張りの森を捨てて、ウルベルトの一人旅について行くことを勝手に決定していた。

何を言っても無駄に終わりそうだ。

団子がすっかり気に入いられて、ずいぶんと懐かれてしまっていた。

ハムスケに懐かれて悪い気はしないのだが、問題があるとすればハムスケの気配にモンスターが警戒して、経験値稼ぎによさそうな雑魚モンスターと遭遇がなかなかできないことだろう。

「俺はいずれ、帰るべきところに帰るつもりだ。そのときは俺と一緒にいられないからな」

「構わないでござるよ。ウルベルトの大事なことを優先するといいでござる。一匹でも今まで暮らせていたのであるから、元に戻るだけでも、それまではついていくでござる」

ハムスケは別離を承知したうえで、ウルベルトの終わりの分からない旅の共となることを決めた。

（この世界、テイマーはいるのか？ 魔獣を連れ歩いても騒がれないといいんだが）

ハムスケはおそらくレベル30ほど。ウルベルトよりも強いが、ユグドラシルのプレイヤーからしてみればプレイ初日で倒せるようになる雑魚と言っている。モンスターを連れ歩くことがおかしくない世界であれば、ハムスケの可愛い見えた目からして、街中に連れて行ってもさほど問題はないとおもふのだが。

人里についたらいったんハムスケには隠れてもらい、そのあたりのこの世界の常識も聞き出そう。

今後の予定を決めつつ、ハムスケの先導で歩く。

まさしく獣道と言える道程から、森の中に人によつて踏み固められた道が表れる。

途中、ハムスケが止まった。

「血のにおいがするでござる」

警戒するように鼻をひくつかせ、耳をぴんとたてた。



少女の当たり前の世界は、その日崩壊した。

しあわせという言葉を口にすることはなかったが、その当たり前の日々は少女にとつてしあわせなことであつたのだと、幼いながらも理解した。

痛みも感じなくなるほどに、全身の感覚がうすかった。

蹴られ、殴られ、そして切り捨てられ……その直後は悲鳴をあげるほどに痛かったが、今は痛みよりもただただ悲しみが少女を満たしていた。

真つ赤にそまつた視界の先に、瞳孔を完全に開いた姉が倒れているのが見えた。

夕焼けよりも、ずっとずっと赤く染まった、姉の姿。

痛めつけられ、それでも少女を助けようとしてくれたやさしい大好きなおねえちゃん。

もう、かつてのように少女に微笑みかけてくれることはないのだから。

必死に、命がけて、少女を守ろうとしたがゆえに、失われてしまった大切な存在。



突然の激変によって降りかかった己の不幸も嘆くこともなく、少女は悲しみになみだをこぼした。

からだは動かないことが、とても辛かった。

いずれ、自分も姉と同じように動けなくなるのだろう。

すぐ隣に迫って来た死を、少女は理解していた。

死ぬことはもはや受け入れている。

けれども姉のそばに寄り添えないのが少女は悲しく、悔しかった。

せめて、最期のときをだいききなひとのとなりで終わらせたかったから。

おねえちゃん。

おねえちゃん。

おねえちゃん。

こえにならないこえで、よぶ。

まあってね、ネムをおいていかないでね。

のぼそうとした、ゆびさき。それが姉ではない何かにふれる。

なあに、これ。さつきまでは姉と自分の間をさえぎるものはなにもなかったはずなのに。

おかしい、足音がする。

あの、こわい兵士がもどってきたのかな。

こわい、こわいよ、おねえちゃん。

「ウルベルト、こっちの子供はまだかろうじて生きてるでござるよ」「わかった。致命傷にポーションが効くといいいんだが」

ぼろぼろの体を支えられた。仰のかされると、血の色のような液体がはいった瓶が、近づいてくる。

血の色にそまつた視界よりも尚赤い液体がくちびるを濡らして、口内にすべっていった。薄い呼吸とともに飲み込むと、ゆっくりと沁みていくそれにより奇跡のように体に力が湧いた。あんなにも近くにあったはずの暗い死の気配が、靄が一気に晴れるように遠ざかる。

「あれ……?」

「こんな怪我にでも効くとか、凄いな……物理法則どうなってるんだ……大丈夫かい?」

支えられた首を傾け、声の主を見る。

頬に禍々しい模様めいた痣を持つ、黒髪の日つきの悪い男。

「おじさん、だれ……？」

これが、少女にとっての神との出会いだった。

◆◆◆

「おねえちゃん、おねえちゃん」

姉の遺体にすがって泣く少女を、ウルベルトは言葉なく見つめていた。

帰ってこない両親に泣き、世界への憎悪に身を焦がした過去の己の幻影を、少女の背中を透かして見てしまった。

耐えきれなくなつて、視線を逸らした。

息がつまり、吐き気がこみ上げて来た。

どうしてそんな目にあつたのか、詳しい事情はわからないが、一目で、その死が理不尽なものだということがわかった。

これからの未来への希望を感じさせる若く、そして無力などこにもいる少女が、一方的な暴力に晒され、命が失われた。

胸のムカつきを懸命に飲み込む。

やりきれなさに、奥歯を強く噛む。

今、一番感情をあらわにすべきなのは、部外者の自分ではない。

身内を亡くしたことをひたすら悲しむ、幼い少女だ。

ハムスケは肉親と涙の別れをしている少女には無関心な様子で、うつむくウルベルトをじつと見つめていた。

「ウルベルト……？　大丈夫でござるか？　いつもの倒れる寸前の顔になつているでござるよ」

三日間共に過ごすうちにいつの間にか、人の顔色を見ることを覚えてしまったハムスケが、ウルベルトをのぞきこむ。

「なんでもない」

口もとを手のひらで強く押さえ、視線から逃れた。

『とうさん、かあさん。はやくかえってこないかな』

リアルにだって、当たり前のようにどこにでも存在していた悲劇。仰々しく語られることに陳腐さすら醸し出す話だ。

いちいち同情をしていてはキリがない。

テレビの向こう側、ネットニュースの向こう側、誰かの過去、なんどもなんども聞いて、自分だって体験したことだ。

目の当たりして、下手に心を揺さぶられたからといって、こんなにも動揺するのは今更おかしいだろう。

世界はいつだって弱者には理不尽だ。それはよくわかっているはずなのだ。

あるいは、こんなことがこの世界でも当たり前なの出来事なのかもしれない。

そのたびに自分は、身動きを取れなくなっているのか。

『かえせ、かえせよ！ かえしてよ！ とうさんと、かあさんをかえしてよ！』

リフレインする過去の己の声に、体が冷えて行く。

幻聴が不愉快だった。

幻聴を生み出す原因の子供を置いて、どこかに逃げてしまおうか？ 出来もしない解決策を浮かべて自嘲する。

どうするのが一番いい？

後先考えず、感情のまま助けてしまったからには少女に対してウルベルトは責任ができてしまった。

この森の中にひとり放って置いていいはずがない。

両親のもとに送り届けるのが一番いいだろう。

ウルベルトは泣き継る少女に、できるだけ優しい声で話しかける。

たつちの娘のミーシャに話しかけるとき以上に慎重に、気を使う。

けれども男の問いに返ってきた答えは、最悪のものだった。

しあわせだった貧しい村での生活。

大好きな家族。

このままずっと続くと思っていた毎日。

訳も分からないまま、日常と家族が奪われる。

同調できてしまう悲しみに、渦を巻く強い感情が男の中でぶり返す。

たつち・ミーのように正義感で動くような性格はしていない。ただただ私怨がウルベルトを突き動かそうとする。

一方で、理性がそれに歯止めをかける。

後先も考えず、感情のまま振る舞っていいのか？

頭の中の冷静な部分が、激情に身を焦がそうとしている自身を押しとどめる声を聞く。

自分が全てを投げ打つべきは、家族を奪ったあの世界なのだ。

ゲームで手に入れた力に酔って、調子にのっついていないか？ 自分はなんの力も持たないちっぽけな存在のはずだ。そんな自分に何ができる？ ここで我も忘れて行動して、下手をうって呆気なく死んだらどうするつもりだ？ 俺はそんな死に納得できるか？ その死は、家族に胸を張れるか？ 己の全てをかけて作り上げた悪魔に誇れるか？

答えはノーだ。

ウルベルトは思考を変える。

じゃあ、自分が一番したいことはなんだ？

見ず知らずの少女の窮状を哀れむこと？

理不尽に勝手に同調して、怒りのまま惨劇の原因を討ち亡ぼすこと？

家族を失ってしまった悲しみから救うこと？

その答えに行き着いたとき、ウルベルトは知らぬうちに舌打ちしていた。

ずっと昔から、男の中に巣食っている虚しさがある。それが浮上し

てきたことによる不快感に、渋面を作った。

自分を重ねてしまう誰かを助けることで、過去の自分が助けられているような気がする。

この少女を助けることで、ウルベルトは自分の中にある何かが救われるような気がした。

馬鹿馬鹿しいと吐き捨てたくなる女々しい感傷である。

他人を助けたいから手を差し伸べるのではない。本当は、自分が誰かに助けてほしくて、手を差し伸べるのだ。

損得勘定など度外視した純粋な優しさ、それは一体どんなものなのだろうと思う。

ウルベルトには絶対に理解できない未知のもの。美しいのか、澄んでいるのか、輝いているのか。

自分がそれを得られたならば、助けられたならば、そんな愚かな期待をにじませているのだ。

馬鹿げているという自覚があっても、少女を救いたいという感情——自分を救いたいという感情——は消えない。

ウルベルトは頭をふった。

考えすぎて、頭痛がしてきた。

少女を救うことには、きつと利点がある。利点を探せ。

今から自分が行うことは、利害行為なのだ。

決して、小さな子どもが泣き喚きながら無い物ねだりをする感情の発露ではないのだ。

コートの裾の下から取り出すふりをして、短杖を取り出す。

幸いなことに信仰系の魔法を使えるから、短杖にこめられている魔法の位階が高かろうと、課金アイテムがなくてもこれを使用できるはずだ。

この事態は、ウルベルトの責任だ。

少女を助けてしまったからには、面倒を見る必要がある。だが、いつ帰還するかわからないウルベルトに、小さな女の子をずっと見てやる余裕はない。では、どうすればいいのか。

簡単なことだ、この少女の面倒を見られる身内を蘇らせればいいだけの話なのだ。

それに、これは実験でもある。

ユグドラシルの蘇生アイテムが使えるかどうかの実験をする。それだけで。いつかやらなければいけないことを試す、ちようどいい機会にでくわした。それだけのことなのだ。

「これから、俺がすることはお姉さんにも内緒にするんだ、いいね？」  
ウルベルトは少女と視線を合わせ、安心させるように出来るだけ笑みを作った。

「君のお姉さんは、死んでいない。少し、深い眠りにしているだけなんだ」

倒れ伏した少女に、柔らかな光がそそいだ。

## 集合

伝言メッセージが使えないマールレは、アルベドに至高の方からの命令を届けるべく、すぐに動く。

領域守護者に六階層の警備と至高の方の警護を頼み、七階層へと急ぎ向かう。

その背中を見送ってへろへろは申し訳なさそうに、粘体を丸めた。

「マールレは伝言メッセージが使えないのか。ちよつと悪いことしちやったかな。わざわざ階層を移動するのは大変ですよねえ」

「気が紛れていい、ということにしておきましょう。へろへろさん」

たつちは反省している粘体を励ますべく、へろへろの肩にあたりそうな部分を叩いた。

「考えてみれば、NPCが伝言メッセージを使っても意味はありませんでしたよね。NPCに伝言メッセージを覚えさせるなんて、原作者の趣味にしかありませんもんねえ。生きてるのが当たり前のように動くから、そのことが頭から抜けてましたけれど」

リアルブラック企業で務める彼にとって、無駄な命令を下されることは何よりも辛いことであるが、それを我が身が下すことになるとは思ってもみなかったことで、申し訳なさに、はあ、とへろへろはため息をついた。

丁度パンドラとの通信が終わったモモンガは、アイコンが出ていなくても落ち込んでいると一目でわかるへろへろにどうしたんですか？ と訝った。

話を聞いて、モモンガは少しずつわかってくる問題点に、困り顔のアイコンを連打で表示したくなった。

（スクロールを使えば問題はないんだろうけど、スクロールは使い捨て。今の所大量に使っても問題ないくらいに在庫は大量にあるけど、補充の目処がたっていないのに使うだけ使っていたら、いずれ枯渇する。その辺も考えないといけないのか）

モモンガはこの問題は可及的速やかに解決しなければならぬものではないから、一旦思考の隅へと追いやり、パンドラからの報告を

皆に告げた。

「パンドラが人間の少女をナザリックに連れてくることに成功したようです」

手に入れた情報を告げ、身支度を整えたら六階層に来ることになっていることを伝える。

「無茶な命令を上司から振られたなんて……かわいそうに」

ヘロヘロは身に覚えのあることに共感してしまったのか、あつたこともない少女に対して同情していた。

「亜人、ですか。レベルが高くないといいんですが」

ユグドラシルの100レベルプレイヤーを想定し、たっちはナザリックに亜人たちが襲いかかった場合どうすべきなのかと、危機感を募らせている。

「あの……パンドラの話聞きながら考えたことがあるんですが、マールレの失態……だとは思ってないんですが、あの子本人は気にしているみたいなので挽回の機会をあげようと思うんです。これから来る人間種の少女から話を聞き出す、ということにしようと思っっているんですが、皆さんどう思いますか？」

「え、マールレにですか。おどおどしている子みたいだから、なんだか人見知り激しそうに見えますけど、大丈夫ですかね」

「ヘロヘロさん、マールレお兄ちゃんなら、はじめて会うひとでもちゃんとお話できるとおもおうよ」

「ミーシャにはそう見えるのね。マールレ君はなんだか放っておけない子に見えるけど、大丈夫なのかしら」

「すぐに挽回の機会を与えてあげれば、マールレの気が軽くなるだろうし悪くないと思いますね。他には何か理由があるんですか、モモンガさん」

「いいことを訊いてくれましたね、たっちさん。

パンドラがあんまりにも情報を聞き出すことが上手すぎて、こちらが何も知らない異邦人ということを向うに気取られないまま話を進めてしまったみたいなんですよ。

我々が何も知らない、という不利益な情報を渡さずに短い間でこれ



だけ上手くことを進めるとは、思ってもみなかったです。

交渉に関しても、交渉ではなく『善意による手助け』を申し出て、かつ我々にさらに情報が入るように話を持っていたらしいです。

お恥ずかしいですが、私にはその後を引き継いで上手く情報を聞き出す自信がないんです。でも、子供のマーレなら何も知らない状態で、変な質問をしてもおかしくはないかな、と。言わば保身でもありますね。

マーレを矢面に立たせるようで、大人として本当に恥ずかしいのですが……」

上手くことが運ばれすぎた弊害に、モモンガはつい愚痴っぽく言っていました。

出来る上司を演じるからには、その上をいかなければならないのではないかという重責がモモンガの肩にのしかかる。

今回はそれをマーレに放ることで逃げたのである。

本当にどうしようもない上司だった。

自責の念に駆られるのが、マーレに任せること、現在積み上がっているちよつとした問題の一部が解決することもまた事実なのだ。

「モモンガさんの作ったNPCのことはよく知らないんですが、優秀なんですねえ」

へろへろが善意ある誤解をしてくる。

優秀という言葉でアレを片付けられてしまったら、実際のパンドラズ・アクターを目の当たりにしたときその差異にどれほど驚かれることだろう。

もんどり打って転げまわりたくなる類の存在なのだ、あれは。素直な感嘆がモモンガの胸に深々と突き刺さった。

「優秀なんですけど……そういう設定はしたんですけど……違うんです。本当に、違うんです。誤解なんです、へろへろさん」

対面させたときにドン引きされる想像しかできなくて、ないはずの胃が今からシクシク痛み出して来た。

震えた声で否定しはじめるモモンガに、え、と皆が驚く。

「大丈夫ですか、モモンガさん」

肉体があれば脂汗でも流して軽い錯乱でもしていそうなくらい急変した態度に、おろおろとしながら四人は口々にモモンガを案じる。

精神抑制が働かない程度の軽い動揺に心身が蝕まれていたモモンガだが、自分がみなを心配させていることに気づき、はっとした。すぐに話を戻さなければとまっすぐに顔をあげた。

「失礼しました。もうひとつ理由があるんですが、私はアンデットですから普通の女の子は怖がるんじゃないかと思うんです。話をする最初の段階でつまずきそうですから、情報を聞き出すのはかなり向いていませんよ」

「それは……確かにそうですね。なんだか異形でいることが当たり前になっていて忘れてました、考えてみたら、私もスライムですからアウトになりますね」

「私は全身鎧で中身が見えないからまだ……でも、威圧感はあるかな？」

「このメンバーの中で人間の女の子とふつうに話せるとしたら、私とミーシャくらいかしら」

「えー、モモンガさんもへ口へ口さんもパパも全然怖くないよー。格好いいよ」

「うれしいことをお世辞でなく褒めてくるミーシャに、モモンガはくすぐったさを感じた。

「はは、ありがとうミーシャちゃん」

「美沙、ありがとう。格好いいだなんて、パパ、うれしくてこまっちゃんなあ」

周囲の目も気にせずでれでれした様子で娘をなでた。

「この真っ黒いスライムボディが格好いいとは……」

へ口へ口が挙動不審に震えていたが、すぐにはっと何かに気づいたように触手をのばした。

「ああ、そうだ。確かめたかったことがあるので、ここに来るその少女に協力してもらって、いや正しくは利用するわけなんですけど、この機会に済ませてもいいですか？」

「なにかあるんですか、へ口へ口さん」

モモンガが問うと、黒い粘体がすうつとのびる。人間で言えば背筋を伸ばし、大事な発言をする前準備をしている段階だろう。

「ナザリックの主だったNPCの、人間に対する認識をチェックしたいんです」

へろへろが真剣な様子で言った。

玉座の間でのアルベドの発言により、モモンガもいずれは意識調査の必要性を感じていた。

それをこの機会にやっつけてしまおうというへろへろの提案には頷くところがあつた。

申し訳ないがその少女には人間を下等生物扱いしている面々の踏み絵になっていただくことになった。

イリニやアルベドによればセバスなど最初から友好的に人間と接することができるものから、見下して食料か玩具にしか思っていないものもいる。ピンからキリなのだ。

しかし後者の中でも下等生物と内心思っているとしても、それを表面にださず分かりやすい攻撃性も示さない場合もある。

そういった者ならば、外に出せるのではないか。

「ナザリックに閉じこもつての情報集めは、絶対に限界がありますもんね。かといって、その仕事に合わないものに命じて外で問題行動を起こされては困りますし。」

今の段階ではウルベルトさんの捜索に関わることや今回のような緊急事態以外で外に出す必要性はないとおもいますが、今後のことを考えると私はへろへろさんの提案に賛成です」

「NPCたちを外に出す前提なんですか？ 彼らの危険性は？」

たっちは懸念を示す。

「周囲の敵の強さがわからない現状で、そんなことをと思われるかもしれませんが、個人的にこの周辺の亜人たちも人間たちもそんなに強いと思えないんですよ。」

ネイア・バラハという少女は隠蔽スキルも持たない、10レベル以下の存在。

装備もゲーム内での初期装備以下の性能。

九色なる役職持ちの娘でも、すぐれた装備を得られるわけではない。

少女が言うには、彼女はそう劣った存在ではなく人間の従者の平均レベル。

亜人たちはその程度の少女を全く見つけられない程度の能力。まあ、その警戒にあたっている亜人が特に無能なだけの可能性もありませんが。

騎士は従者よりも強いが、際立った実力者以外は一般的な亜人に苦戦する程度。

亜人には二つ名持ちと言う強い存在がいる。

亜人側の領土と、人間側の領土の間には石造りーこの石というのが私たちの認識するただの石と変わらないということを前提に話しますが、普通のなんら変哲のない石で作られただけの城壁がある。

亜人は騎士を苦戦させるほどに強いが、石造りの要塞を築いただけの城壁の存在で、長年のこう着状態の戦争になる程度には瞬間的な破壊力を持たない。それは二つ名もちの亜人をもつてしても長年変わっていない。

我々と同じようなレベル100の実力もあれば魔法やスキルで、ただの石造りのバリケードなんて破壊できそうなものですからね。石造りの城壁しか作れない人間を嘲笑って遊んでいる可能性がなきにしもあらずですが、亜人側には城壁を完全破壊できない程度の実力者しかいない。人間側にも、その程度の実力者を倒せるものが存在しない。

楽観的すぎる予測かもしれませんが、私はこう思っています。この周辺で有名な高レベルの者って最大でもレベル60くらいしかないんじゃないかなあ」

理路整然と話すへ口へ口に、モモンガは感嘆する。

なるほど、パンドラが聞き出した情報量にも驚いていたが、そこか

らこれだけのことがさらに推測できるのか。

「すごいですね、へろへろさん。それが当たっていたら、ひとまずの懸念事項は解決できそうです」

未知の敵からの襲撃はモモンガにとっては恐ろしいことだ。

仲間が傷つくこと。

自分が傷つくこと。

仲間の残してくれたものが傷つくこと。

それにびくびくと怯えて憂えなくてもいいとなると、鉛のような胸のつかえがとれる。

「そう言われると確かに納得できます。へろへろさんの推測が正しいようであれば、安全策をとりすぎて後手に回るよりNPCのみんなに協力してもらって、早めの情報収集を心がけたいですね」

顎に指をかけたたつちが頷いた。

リーザはへろへろのわかりやすい情報整理に素直に感心していた。

「推測がまるつきり外れていたら後が怖いので、盲信しないでくださいねえ。ひとまずは、失っても惜しくないような偵察できる傭兵モンスターや召喚モンスターでぎつとでいいので、周囲の主だった強陣営を確認したいですね。NPCを外に出すとしたらそれからでしょうか」

へろへろは皆の賞賛に照れていた。

蠢くへドロの波の動きが、かなり早くなっている。

「人間に対する意識チェックですが、どうしますか？　ひとりひとり話してもらおうとなると、時間をとりますよね。人間を見る態度だけでぎつと算段をつけるんですか？」

「メインはマールに話してもらおうとして、それ以外にもひとり一回ずつ、質問してもらいましょう。情報収集のための質問よりも、性格が見えやすい個人的な質問をしてもらったほうがいいでしょうか。心理学はまったくの門外漢ですから、それで全部わかる自信なんてないので、みんなわかりやすい態度をとってくれればと良いんですけど。」

そのときの人間への対応の仕方、今後の情報収集でナザリックの外に出して人間と接触させていいか、させないほうがいいかを決める

「というのはいかがでしようか」

へ口へ口の提案以上のものは思い浮かばなかったので、モモンガは同意する。

「いいと思います」

「私も、それでいいと思います。」

それともうひとつ、みんなを疑うわけではないのですが、NPCたちが私たちをどう思っているのか知らないのです、それに関してもこちらから質問してもいいでしょうか。

私が作ったセバスは信用しています。それとあんなに、こちらに対して誠意を見せてくれたマーレも。でも、他の子達にはまだ信用がおけていない。私が知っているのはデータの彼らだけで、意思を持って話す彼らのことは何一つ知らない。

このような状況で、知らないというのは怖いことです。私には、守りたいものがありますから。

リアルだっと思ってもかけないような恐ろしいことはたくさんありましたけど、それとはまた違う、予測できない危険性があるというのは、無視できません」

「外だけではなく、内側の未知もまだありましたね。念のため、私もNPCのみんなにはウルベルトさんが人間になってしまったことをどう思っているか聞いておきたいです。場合によっては、ウルベルトさんを見つけれられた場合でもナザリックに連れて帰らないで、セカンドハウスのものを作ったほうがいいのかな……それは、嫌だな」

鬱屈した暗い感情が目に見えて現れるような変化を見せるモモンガ。

自分たちが作り上げ、守ってきたナザリックから追い出すようなはめにならないといい、そう強く願う。

最初から最後まで、ずっといたのは自分とウルベルトだけなのだ。ナザリックを、ひいてはNPCらを守り続けたひとだというのに、そんな彼を裏切るようなことばを聞いたなら……

NPCたちが人間アバターになってしまったウルベルトを拒絶するようなことを言ったら、怒りを堪えることができるであろうか。

「落ち着きましよう、モモンガさん。疑うような発言をした私が言うのもなんですが、仲間が作った子たちを信じましよう。」

ナザリツクにはオーレオールが存在もありますし、完全に人間を否定することはないんじゃないでしょうか」

「う、あ、はい。それも、そうですね」

「あー。私なんて、長年放っておいていきなり帰ってきましたからね。もしかしたら受け入れてもらってないかも……」

不穏な気配がなかったかのようになぎとらしく振る舞うへろへろは、やや声を大きめにあげていった。

「私たち、様をつけて呼ばれていたけれど、彼らの上司？ 主みたいなものになるのかな。仲間にさせてもらったのはついさつきだけれど、私たち二人がどう思われているのかは気になります」

「ミーシャは、みんなとお友達になれるか気になるなあ」

のほほんとしたミーシャの発言で、モモンガの剣呑さがなかったかのように場が和む。

モモンガが提示した二時間という期限が迫っていることもあり、慌ただしくこれからの段取りを決めた。



ナザリツクにはNPCの数が多い。

拠点入手時に手に入れた2750ポイント分で作ったNPCに加え、課金やワールドアイテムで入手したポイントによって追加作成されたNPCもいる。

レベル1のメイドなど41人もいるのだ。その数は膨大だ。

今回のへろへろが提案した認識チェックを全てのNPCにさせる時間も必要性もないだろうということになり、数を絞ることにした。

まずはナザリツクのNPCのトップに立つ守護者たち。

そして、人間の住む場所に情報収集を行かせることになった場合、人間世界に違和感なく混じれる容姿と能力を持つ者だ。

パンドラズ・アクターにはこちらから連絡があるまで、人間の少女と墓地の領域守護者の私室で待機を命じる。こちらの準備が終わったら、指輪を使わずに来てもらう。

伝言を使って各階層の報告を聞きがてら守護者に警備レベルの一段階引き上げを命じ、特に一から三階層の上層の守護を担当するシャルティアには一層の警戒を命じる。

子供NPCのイリニも含め、皆に六階層に集まるように命じた。アウラにも先に戻って来てもらおう。

六階層にマーレとともにやってきたアルベドから報告を受け取り、モモンガはそのままアルベドに六階層に待機をさせた。

探索部隊に加わったソリユシャンも戻らせ、末の妹をのぞく戦闘メイドたちも六階層に、そして竜人の五つ子たちを呼ぶ。

長男、ナザリック地下墳墓男性使用人スワン。

次男、ロイヤルスイート娯楽施設担当官スワロー。

三男、ナザリック地下墳墓表層掃除人ピジョン・ブラッド。

四男、シヨットバーの用心棒イーグル。

五男、ナザリック地下墳墓第十階層領域守護者ホーク。

第六階層は、農場をワールドアイテムを使って後発的に拡張させた際、300ポイント分のNPC作成も同時に可能となった。

そのときに作られたNPCである。

農場の領域守護者である、一見するとただの白猫にしか見えないケットシーの雪丸も、彼らと同時に作られたNPCだ。

残念なことに外装担当の者がリアルで忙しいせいで、猫を除けばまともに作成できたのは一人分のキャラだけだった。

起こしたイラストを作成できないのは非常に残念だが、仕方がないので(るし★ふぁーが特に残念がっていた)五つ子と言う設定で、同じ見た目のキャラを使い回すことになったのだ。そういった理由があり、色違いと多少の髪型の違いやクラスによる装備の違いがあるだけで、顔立ちはみんな同じだ。

アルベドからの報告を聞き終える。といっても、各階層異常なし、とモモンガが魔法で聞いた内容と変わらない。すぐに終わるものだった。



「ふむ、些細なことに手間をかけさせたな。だが、大事なことは分かった」

ナザリックの内側に危険はないということ。些細なことだと思つて、上司であるモモンガには打ち明けなかったが、同僚であるアルベドには気軽に告げるかもしれない可能性も考えた。そういったこともなかった。

「いいえ、手間などではありませんわ。御身の命であればどのようなことも意味のある大事。喜んで全力をもって完遂いたします。それが私共シモベにとつて、なによりの幸せなのですから」

仕事が出来た女の顔は、嘘偽りなど全く見受けられないまっすぐな眼差しでモモンガを見ている。

この、過剰なまでの信頼や忠誠心に応えなければならぬのか、その前途多難さに気重になったのはモモンガだけではあるまい。

「シャルティア、参りましたでありんす」

若々しさを持つが感情を排除した硬質な響きを持つ声が、モモンガの背後からあがる。

その姿を見て、モモンガはたじろぐ。たちたちもびつくりしたに違いあるまい。

侵入者でもない限り、製作者の趣味で美しくも愛らしい顔立ちに合う可憐な装いをしているはずの少女が、物々しい真つ赤な鎧をまとい、追い詰められたかのようなわずかな狂気の光すら宿した瞳で神話級の武器を携えていたのだから。

「あらシャルティア、随分と仕事熱心ね。あなたのそのやる気は、こちらとしても心強いことだわ」

アルベドはそんな少女の姿を見てもおどろくことなく、朗らかに微笑んだ。

「あたりまえでありんしょう。わらわの守護する階層は、戦いの前線。このナザリックに侵襲する不屈き者など、お方々の手を煩わせず始末するのがわたしの仕事でありんす。全力で、いかな油断もなく、叩き潰すっ」

断固とした意思を持つ瞳で、アルベドに返す少女。ナザリックに近

づく不心得者は全て咬み殺すとも言いたげで、その姿はまるで闘犬のようであり、悪く言えば冷静さを失った狂犬のようでもあった。「シャルティア、手に負えるようであつたらまず捕縛からで。最初から殺しにからなくていいからね。生かして捕まえれば情報収集だつてできるだろうし」

安易に侵入者をころして、なにか問題が発生する可能性を考えると、後手に回りそうであっても安全策は必須。こちらに比べても弱者が多い地域と想定しても、誰かを処分することでわざわざ無用な軋轢を生む必要性はない。

自分たちと同じようにプレイヤーが転移している可能性がなくてはならないのだ。侵入したから、正当防衛だったからと言って殺した相手が、プレイヤーの息がかかっている存在であつたりしたら、笑い話にもならない。

モモンガたちはこの身ひとつで逃げられるような身軽な状況ではないのだ。

ナザリックという宝を守らなければならない以上、むやみな争いごととは避けたい。

へろへろがなだめると、少女には似つかわしくない軍人めいた短い返答をし、膝をつく。

「わかりんした、へろへろさま。御身のお役に立てるよう、必ずや生かして捕えます」

（え、ペロロンチーノさん。あなたシャルティアにどんな設定したんですか？ 警戒レベルをあげたのがまずかったのかな。仕事熱心だから、完全武装待機しなきゃって思っちゃったのか。）

とりあえず現場のピジョン・ブラッドには生かして捕らえるように命じたけど、シャルティアにはまだ言っただけでなかったんだよな。部下にだけ言つて、その直属の上司に俺たちの意向を伝えないって、会社としてはおかしいよな。誰が言つてることが正しいのか分からなくなるやつだ、これ。

連絡がごちゃごちゃで下が混乱する最悪なパターンだ！

俺、自分がやられたら困るやつをやつてるよ）

モモンガは忸怩たる思いで、異世界転移最初の失敗を噛み締めた。それによつて取り返しのつかないことが起こったわけではなく、内心で反省するだけで済んだ。

しかし、気を引き締めないとまた似たようなことをやらかしそう  
だ。

この失敗を生かして、みんなでナザリックの舵取り頑張らねば。

その後セバス、プレアデス、五つ子、コキュートスが来て、アウラとソリュシャンが外から戻ってくる。

アウラはモモンガたちに帰還の報告をするとシャルティアをしきりに心配していた。

円形劇場にあらわれたときの彼女は、マールと同じで創造主を失ったことでも追いつめられているように見えたのだが、それよりも先の窮地に立つようなシャルティアを見て、小さな少女はしつかり者のそれへと表情を変えた。

「あんた、なんでそんなに酷い顔してるの！」

「うるさい、チビすけ！ いつもと変わらないわよ」

「泣きそうな顔してるくせにいつもと変わらないわけないじゃん。胸の詰り物だつて忘れてるでしょ。おかしいわよ」

「わ、忘れてなんか……」

「何があつたのか……なんとなく予想できるけどさ、あんまり思いつめすぎちゃダメなんだからね。」

あたしだつて……でも、今いる方達のためにも、思い込みすぎて視野を狭量にして動くのは駄目。あんた、ただでさえ馬鹿なんだから失敗するかもしれないでしょ。絶対に、御方々の足を引っ張らないように！

いいわね？

話なら、後でたくさん聞いてあげる。あたしも、シャルティアに聞いてほしいこと、あるもの」

見た目からしていえばシャルティアのほうが年上に見えるのだが、どうみてもアウラの方が姉のようだった。

親しげなアウラからすると、シャルティアの様子はいつもと大分違

うらしい。

『あとで、あの二人もマーレと同じようにフォローしてあげたいですね』

『そうですね、たちさん』

小声で会話を交わす。

みんながないことで、作られた存在のあの子たちの心境にも大分影響があるのだ。

状況に振り回されて四苦八苦しているが、それにかまけて彼らを放っておくわけにはいかなそうだ。

アウラとマーレ、シャルティアなどの目立った子達だけでなく、もしかしたら他のNPCたちもなにか心的な不安を抱えているかもしれない。

「遅れて申し訳ありません、皆様。ぼくたちが最後ですか？」

デミウルゴスとユリを背後に従えたイリニが、ゆっくりとやってきた。

イリニの姿を認めると、傍に立つアルベドの花のようなかんばせが変わった。

甘さなど一欠片もない忠義の徒から一転して、愛情深い慈しむ女の顔に変わる。もともと美しい女性であったが、その表情はいやにモモンガの目に鮮明に映った。

その母親めいた顔に、純粹なだけではない陰りがちらりと見える気がするのも、美しいだけではない棘めいた魅力があった。

陰惨な部分を秘めた、子供を愛する女の顔。策謀を連ねる女、それを殻で完全におおい隠し微笑を浮かべるその美貌。

一枚の見事な絵画めいた慈愛を見せながら、子供を愛しているだけではない、何かを持つ女。

忠義があり、慈愛を見せ、その内側に己の欲望と残酷なものを隠している。

隣り合わせに相反するものを持ち合わせている危うげな差異に、モモンガのないはずの心臓が跳ねた気がした。

久しく覚えていなかった、ふわりと脳内が軽くなる心地。

(ギャップ萌えて、こういうことかあ)

図らずしてタブラ・スマラグティナの術中に嵌ってしまった気がする。

こんなことが起こるとはおもわず、タブラの描いたアルベドという名画に手を加えてしまった罪悪感はある。だが、それは自分ひとりの責任ではないしと責任を分散させながら、これはこれで悪くはないんじゃないか、と薄くなってしまった男としての意識が悪気なくささやいていた。

あるいはこんなifルート（本編に関係ないので読み飛ばしても問題なし）

どこかの世界線で、全盛期に比べるとはるかに少ない数とはいえ、仲間と最高の最後の瞬間を迎えているとき、どこかの並行世界のモモンガは、ぽつんと栄光の残骸に立つ寂寥を抱えながらその終わりの瞬間を迎えていた。

どんどんとやめてしまった仲間たち。

かろうじてギルドに在籍していたけれど、顔を少し見せただけで慌ただしくログアウトしていなくなってしまった、ギルドメンバー。

仕方ない、仕方ない、そう言い聞かせるモモンガの胸の内には、決して言葉にはしないけれど、

（裏切られた）

そんな憎しみと怒りの黒い染みが、ほんのわずかに広がっていた。責める感情よりも、仲間を好きな気持ちが強すぎてすぐに寂しさと虚しさにかき消されるが、それは確かにモモンガの中に生まれてしまった感情だった。



玉座の間で、たっち・みーに負けてなるものとむきになって声を張り上げた。

たっち・みーはウルベルトの負けん気に気づいたのだろう。向こうも張り合って、大声を出していた。

三十を目前に控えたいい歳した男が、何をやっているんだと思わないでもないが……

いいだろう、どうせ最後なのだ。

ゲームの最後という意味ではなく、こうやって馬鹿をやることが、ウルベルトの人生において最後となる。

だから、いいのだ。

心残りだった、イリニも消えてしまう。

いや、親である自分の手を離れ、別の世界に旅立つのだ。

モモンガもサプライズで粋な計らいをしてくれる。  
ウルベルトは感謝でいっぱいだった。

我が子がナザリツクの主人とは……：：：～  
時間が来て、周囲の音が途切れた。

ああ、終わったのだ。そう思って目を瞑る。

この目を開けば、がらんどうの部屋に帰るのだろう。

余韻にひたりたいがために、現実を目の当たりするのは少しあと回しにした。

ウルベルトは目をつぶったまま深呼吸をする。

まぶたを閉じた頬や額に感じるやわらかな風。そして、思い切り吸い込んだ鉄臭いにおい。

(いくら安普請つっても隙間風はだめだろ！ それになんだよこのにおいは！)

ウルベルトはヘルメットを外そうとした手を無意味に素振りさせながら、ぎよつとして目を見開いた。

はつきりと開いた目には、どこまでもなだらかに続く丘があり、その遠くには美しい夜空を背景にした山岳があった。星の瞬き、やわらかな月の明かり。うっすらとかかる雲が風に流れる。ゲームの規則的な動きにはない無秩序な動きに、強烈な違和感を覚えた。ウルベルトの背筋は知らずうち寒気が走っていた。

「はあ？ そ、とっ？」

自分の目を疑い、ごしごしと手の甲で拭く。そんなことをしたところで、この光景は変わらない。

「は、死んでない？ いや、なんで。たち、さんに……お前」

背後で狼狽する声が聞こえてウルベルトは振り返る。

現実に帰っていたはずなのに、見慣れぬ場所に放り出されて驚いた以上の、驚愕。ウルベルトは息を飲んだ。

山羊頭の悪魔が胸から下を真っ赤に染めて、山羊の顔を困惑に歪め突っ立っている。装備の違いはいろいろとあるが、どう見てもログイン時やゲームの鏡に映った時に見る体だ。チート誤認によって失ってしまった十数年慣れ親しんだアバターである。

その隣には、さきほどまで玉座の間に一緒にいたはずのたち・みーが頭蓋から滴る血液で鎧を真っ赤にしていた。正面のウルベルトの顔を見て、そして隣の山羊頭の悪魔を見て、自分の体を見て、うろろと視線を動かし相当混乱していた。彼もまた装いが記憶のものとは違う。ワールド・チャンピオンのみ装備でできる最強装備ではなく、よくて遺産級程度の何処にでもありそうな銀色の鎧を纏っていた。

「走馬灯……にしてはおかしくないかな」

呆然と呟く、たち・みー。

唐突に、わけのわからぬ状況で、見知らぬ場所に放り出された三人は、言葉を失い固まっていた。

少しして、真っ先に我を取り戻したのは聖騎士だった。

「とりあえず、落ち着いて話をしませんか」

そう、切り出した声はよく知ったたち・みーのもの。

けれどもこの言葉を聞いて、このたち・みーは自分の知る彼ではないのだとウルベルトは察した。

つい先ほどまで一緒にいた大切な妻と娘が不在の状況で、こんなにもすぐに冷静さを取り戻せるはずがない。

では、目の前にいる彼は一体誰なのか。

そんな疑問を置き去りに、物騒な姿をしたまま、物騒な話を始めた。

それは、ウルベルトにもありえたもしもの話――

ウルベルトこと藤和練はリアルの世界で死んだ。

世界を支配をする体制を破壊するために動く『悪』として。

たち・みーこと橘翼もまたリアルの世界で死んだ。

間違っていると知りながらその体制を守る側として動く『悪』として。

――彼らは、互いに悪として対峙し、己の所属する側のために殺しあった。



何が正しくて、何が正しくないのか、もはや互いにわからないまま。

藤和練の死因は橘巽が正確に放った銃弾で心臓を撃ち抜かれたためだ。

橘巽の死因は、藤和練にはわからない。大して手傷を負わせた気がしないのに、いかにも致命傷といえる位置に血痕がある。

ウルベルト・アレイン・オードルの体に残る血の跡は、藤和練の死因となった傷と一致している。

橘巽は、藤和練を殺した後、誰かに殺された？ 自分の所属する組織の仲間に一矢報いられたのかと、そう思ったのだが。

「私が死んだ原因ですか。あの後、そうですね。ウルベルトさんの組織の仲間たちを全て処分した後、自殺しました」

仲間思いで、人一倍優しく正義に拘る熱い男が、何処か他人事のように淡々と言った。

「は？」

藤和練の残滓を持つ悪魔は、一瞬自分の聞き間違いかと思った。

隣で聞いているウルベルトも、自身の知るたち・みーとは全く違う凄みを持つ男に、気圧されて息を飲む。

「自殺しましたよ。貴方が私を殺してくれなかったから」

虫の顔が、おそらく、笑ったように見えた。そしてその笑みは何処か、壊れていた。

穏やかなように聞こえる声なのに、その内に内包しているものは全くの真逆。全身が総毛立つ。ウルベルトは、無意識のうちにたち・みーから距離を取っていた。

「チツ。人をぶっ殺しといて、俺のせいにすんなよな」

忌々しそうに舌打ちし、山羊頭の悪魔はふわふわとした山羊の毛をむしり取るように乱暴に掻いた。

「まあ、俺も人のことは言えませんけど。あんたを殺して、然るべき手段をもって情報を公開したら……死んでたでしょうね。たちさんが相手じゃ、万に一つもその可能性はなかったでしょうけど」

ゲームの中ではいかに肉薄した僅差の実力の持ち主でも、リアルで

はまったく違っていた。

恵まれた体格、天性の身体能力、装備の差、諸々のせいで藤和練が勝つ可能性は全くなかった。

それでも、藤和練は本気で殺すつもりで橘巽に挑み、橘巽は一切の容赦なくそれを迎え撃った。

最期の会話――あのとときも橘巽は己の抱える正義というものの矛盾に疲れ果てていた様子だった。それでも自分が所属し、守り続けてしまったものをなんとか信じようと足掻いていた。「あんたは、間違っていないさ」藤和練がそう告げた瞬間に撃ち殺されたから、彼からしてみれば、本当は「間違っている」と言っただけ欲しかったのかもしれない。

誰が言っただけやるものか、と本心から思う。

藤和練からしてみれば、この男は正義でなければならなかったのだ。正しく、真つ当で自分が信ずることを貫く我儘な男であって欲しかったのだ。今だって大嫌いだし、顔をあわせていると腹が立つ。けれど、自分と全く真逆の道を行く男が、眩しくなかったか、と言えは嘘になる。誰かを助け、救うことができると思える愚直さを、表向きせせら笑っていても、綺麗事をてらいなく話せるその姿勢にわずかに憧れる部分はあった。

ほんとうに、ほんとうにすこしだけれど、自身がこうありたかったという姿でもあるのだ。恵まれた環境の羨ましさや妬ましさだけではなく、その人格が、心が、こんなふうに素直になれたら、少しは人生が変わったのだろうか、そんな絵空事を浮かべることもあった。

だからこそ、自分の持つ怒りと憤りをぶつける相手でいて欲しかった。

決して、自分と同じような場所に落ちてきてほしい男ではなかった。

迷いを抱え、ゆるやかに壊れていくような、そんな目にあっていた人物ではなかった。

本当に、どんな手段をもってしても殺してやればよかったのかもわからない。

どれだけ仲が悪かったといっても、長年ゲームで肩を並べて遊んだ知り合いを殺したことは、あまりにも正反対で嫌いあいすぎて逆に忘れられないくらいに互いに心の中に刻まれていた相手を殺したことは、橘翼の中でかろうじて正気を保たせていたものを、致命的に打ち壊してしまっただろう。

悪魔は諦観と、わずかな後悔があった。

それと同時に、ぞくぞくと全身を満たしていく快感があった。

背徳的な喜びだ、今までの藤和練であったならありえないものだ。

諦観と後悔が、わずかに残る藤和練としての感覚のものならば、快感は悪魔としてのものだろう。

瑕一つなく完璧であったものが、ひび割れてボロボロと壊れていく様はなんと美しいことか！

自身の中に生まれた感情に吐き気がするほどに、己の中の悪魔は喝采を挙げている。

(確かに、嬉しい、嬉しいかもしれないけど、俺はな)

黙ったまま自らの腕に爪をたてる。

嫌いとはいえかつての仲間の不幸を嗤うほどの存在にまで、墮ちる気はないのだ。

「自殺したって、たちさん、あんたには理沙さんや美沙ちゃんがいるだろ！」

声を張り上げたのは、リアルの自分の若い頃によく似た姿のもう一人のウルベルト。

死んだはずなのに、ゲームでのアバターでの姿となって生きていることから、もうなにかあってもおかしくないような気がして、もう一人の自分という存在を、あまり違和感なく受け入れていた。

現実の過去の世界から来たとは思えないのは、顔の作りが不自然に左右が整いすぎていることと、普通にゲームのアイテムを身につけていることから。

リングオブアインズウルゴウン。

悪魔が引退とともに手放したギルドの証を、この男は指にしつかりとはめていた。

「死にました」

感情の抜け落ちた声でいう。

ウルベルトは目を見開き、唇をわななかせたまま何も言えず固まった。

「二年前の話です。私は家族を守れなかった。その、死後の眠りすら」  
そうなのだろうな、と悪魔はすぐに納得した。

あれだけ家族が好きな男が、あんなにも自暴自棄になるなんて、よほどのことがない限り無理だろう、と。

その、よほどのことが降りかかっていたのだ。

なにを告げればいいのか迷ったままウルベルトは視線を逸らした。

「……あんたらみたいなの、アークロジの人間でも、人肉工場の餌食になるのかよ」

やつとの思いで絞り出したものは、悼む言葉でも同情の言葉でもなく、支配体制への怒りを滲ませたもの。

しかし吐いた言葉をは反対に俯いた視線には、死者を悼むやるせなさを見た。

「資源がないから、よほどの上流階級の人間でもない限り、もうなんでも活用するようですよ」

火葬場という名の、生産場。

大企業の息がかかった火葬場に持ち運ばれた遺体の末路。

藤和練が、ゲームで知り合った仲間から得た情報……昔からまことしやかにささやかれていた、貧困層の、今や中流階級も食することも珍しくない基本食の原材料、それを捉えた見るも悍ましい写真の数々。

死んだ人間が『加工』されて見慣れたチューブ式の食料や、骨がブロッコリーの食料に変わっていく過程。

人間の所業ではなかった。

老若男女の死体を選び分けられ、切り分けられ、ベルトコンベアに流れていく。徐々に見慣れたものになっていく。味付けられ、詰め込まれて、人としての最後の尊厳も奪われて、最下層の者たちを生かす餌となる。

噂は前々からあった。

だが、その噂を聞いたものは都市伝説のように信憑性のないもの  
しか受け止めていなかった。

どれだけ社会が狂っていても、そこまでおかしくなるはずがないと  
たかをくくっていた。

現実には、目を背けたくなるくらいに醜悪に染まっている。

その写真を見た時、今まで自分が食わされていたものが、同じ人間  
であった真実を突きつけられ、胃の奥からこみ上げてくるものを堪え  
ることができなかつた。

全身の血の気が引き、思考が止まった。

世界は変えなければならぬ。絶対に変えてやる。

もはや取り替えしのつかない世界であっても、たった一瞬でもいい  
から誤って踏み間違えてしまった世界を変えてみせたかった。

それが、死してしまった両親の手向けになるのならばーそして、  
大事な悪魔の誇りとなれるように。

今や、その義憤はウルベルトの中では、どういうわけか遠い。

仲間が命をかけて届けてくれた陰惨な光景を、愉快だ、とすら感じ  
るのだ。

「妻と、娘が知らない誰かに食べられることがどうしても嫌で、財産を  
はたいて彼女たちが使用されているであろうロットを全て買いまし  
た」

腹がたつくくらいにまっすぐだった男の狂気。

「毎日、食べました。妻でも娘でもない、でも、妻と娘を使って作られ  
たもの。肉のペーストのチューブ、骨をつかったブロック。血液で作  
られた栄養補助飲料」

ねたましくなるくらい幸せだった男の悲哀。

「吐きそうになって、それでも無理矢理飲み込んで。毎日、毎日、妻か  
もしれないものを、娘かもしれないもの、毎日、毎日、食べました。そ  
うじゃないかもしれないけれど、そうでもして、彼女たちに生かさ  
れているのだと思わなければ、やっていけなかつた」

怖気が立つほどに壊れた男の、愛。

「きちんと、弔うこともできないのならば、せめて……自分の血肉となつて生きているんだと、そして私は生かされているんだと思つて……」

嗚呼、それはなんて、なんて尊く美しく、愉しいんだろうか。

「ああっ！ バツカじゃねえか、あんた！ そんなの間違つてるだろうが！」

歓喜にひたる悪魔をよそに、一方的にキレたウルベルトがたつちに殴りかかった。

殴つた瞬間に、ウルベルトの拳が潰れた。

「……っう」

「……コントかよ」

怒鳴り声にはつとし、悪魔は悦楽に染まりそうになる自身を押しとどめる。これがなんら関係のない他人の不幸であれば素直に楽しめるのだが、同じ世界の地獄を知る者を嗤う非道に落ちたくない。体がユグドラシルの悪魔となつたことで精神が死ぬ前と随分と変容しているが、守りたい一線というものがある。

拳を片方の手でぎゅっと押さええて苦痛を噛み殺しているもう一人の自分を見下す。

たつちを激昂してなぐつた男をしげしげと見つめた。

人間であつた自分は、こういう行動を取つたのか。

鏡に写る過去の自分を見ている気分で、わずかに息を吐いた。

これに会えたことは、ある意味悪魔にとって幸いであつたのかもしれない。

ウルベルトはゲームで悪の美学を貫いたが、その根本にあつたのは他人の不幸を笑うような程度の低いものではないはずだ。

だつて、格好悪いだろう、他人の苦しみを笑うつて、単なる小悪党だ。

悪魔が嫌いな大企業の連中がそういう感じのことをしていそうだ。貧民を見下して、苦しんでいるのを楽しんでいる。悪魔の勝手な印象でしかないが、すくなくならずそういうところは絶対あるはずだ。

それと同じものには、なりたくない。

今の、ウルベルトが振り回されている悪魔の性根というのは、悪魔が描こうとしたウルベルト・アレイン・オードルの像とはかけ離れている。

短絡的に、動物的に、本能のおもむくまま行動して、死を選ぶほど理想を塗り固めて作った像を破壊するのは、悪魔として絶対に許しがたい。

「え、大丈夫ですか、ウルベルトさん!？」

狂気を見せていたたっちだが、それが嘘のようにまともに人間を心配していた。

「だいじょうぶです。というか、俺はたっちさんを殴ったんですけど、なんで俺が怪我してあなたは痛がるそぶりひとつないんですか」

固い声で理不尽な批難をあげるか、たっちは気を悪くした様子もなく、怪我を気にしていた。

「殴られた感じはありませんでしたよ。撫でられたかな、くらいの感覚でした。この姿がゲーム通りなら回復魔法が使えるはずですが、試してみますか」

「あなたに回復してもらうのはなにか癪ですが、ゲームと同じ力が使えるかどうかは気になりますね。お願いします」

骨が潰れて真っ赤になっている手の甲をたっちに向けた。

「コンソールは……出ない。コマンドが使えないとなると……でも、ああ使えそうだ」

ぶつぶつと言いながら指をさまよわせたのち、たっちは傷に向かつて手をかざした。青白い光がゲームのエフェクトと変わらずにあらわれ、赤く染まった手が治っていく。

「本当に治った。痛くない」

傷一つなくなった手を、訝しげに眺めるウルベルト。

悪魔はコンソールが出ないという聖騎士の言葉を聞いて、自分もコンソールが浮かび上がらないことを確認した。

しかし、たっちが魔法を使えたのだ。自分だって使えるだろう。魔法のことを考えると、不意に体の奥からふわりとした力の源が湧き上がるのを感じとった。天啓のように閃くように悪魔に感じさせたそ

れは、魔法の力。

意識することで、自在に魔法を使えるであろうという自覚がなんの妨げもなくすとんと落ちてくる。

「傷を治したもらった礼はいつておきますが、あなたを殴ったことを詫びるつもりはありませんから。」

たちさんの今の状態を見たら、理沙さんも美沙ちゃんも絶対怒りますよ。

……間違つてると、おかしいと、許せないと思うなら、自殺を選ぶよりも、その俺みたいにとえ無茶でも世界に楯突いてから死ねば良かったんです」

発破をかけるというには、あまりにも辛辣な物言いだった。

「そうかもしれないですね」

それに反発を見せることなく静けさをたたえた声で、たちは同意する。

悪魔にはそれが、どこかほっとしているように見えた。

「私のしたことは、間違っていた……天国の理沙にも美沙にも叱られてしまいそうです」

噛みしめるようにこぼし、静かに泣き出したたちを、二人の男は見ないふりをした。

「そういえば、お前の怪我はどうなってるんだ。平気そうにしているけど血痕だけなのか？」

たちちにわずかに背を見せて、二人のウルベルトは向き合った。

（あ、なんだろう。録音した自分の声を聞いた時のムカつきおもいだした）

あらためて目の前の自分の声を聞いていると、言いようのない不快感が湧き上がる。

骨伝導で聞こえる自分の声ではなく、実際の自分の声を聞いていると、どうにも気に触る。

「そうだよ。怪我はしたが……怪我をしたのはこの体じゃなくて、リアルな体だ。怪我の痕跡だけが残ったまま、ゲーム引退した当時のアバターの姿になつてみたいだな」



「終わるはずのゲームが終わっていない俺も不思議だが、お前らの体験していることはもつと不可解だな」

頭の中に聞こえて来る自分の声は、もう少し低く渋いはずなのに、隣から聞こえて来る声はやや甘くキーが高い。

「つーか、よく恥ずかしげもなく最終日まで遊んでられたな。そつちの俺は平和ボケでもしてるのか？」

もう一人の自分の事情は知らない。もしかしたら、悪魔のような環境下ではなく戦いに行くことの決意などとは程遠い平穏な世界なのかもしれない。そう、好意的に解釈しようとしていたのだ、相手の異変に気付くまでは。

気にくわれない実際の声の腹立ちをまぎれさせるために冗談めいて譏ると、鏡の中の自分のような目つきが俄然鋭くなった。

都合の悪い凶星を指された顔だ。

それを理解した瞬間、ジリ、と不甲斐ない自身に対して苛立ちが芽生えた。

「お前、逃げたのかよ。お前も、あの最悪な世界に生きてたのに、戦わないでゲームで遊ぶことを選んでいたのかよ！ ふぎけんじやねえよ！死ぬのが怖くて日和ったか!? この臆病者！」

悪魔は男の襟ぐりを掴み怒鳴った。

「うるせーな、こつちだつて事情があるんだよ！捨てたくないものも、消えてほしいものもあった！俺には大切なものがユグドラシルにしかなかったんだよ！あの場所が好きで、放り出したくなかったんだ、俺だつて、この日が終わったらベルリバーさんの意思を継ぐ気だつた！」

苦しげに顔を青くしながら、ウルベルトは気丈に言い返した。

「二人とも、落ち着いてください。ええと、どちらもウルベルトさんでいいんですか？」

そんな二人の間に、涙を拭いたたつちが慌てて割ってはいる。

「そうですよ」

「そうなんでしょうね。あまり認めたくもない状況ですが」

「……分裂でもしたんですか？」

「どっからそんな発想が出て来るんですか、あんたは」

ウルベルトは苦しげにしながら呆れる。

「そんな訳ないでしょう。この悪魔の体でもそんなことはできませんよ。だいたい仮に分裂するにしても、こんな貧相な体つきの分裂体は、絶っ対に出しません」

山羊頭は見苦しそうにウルベルトをしげしげと見る。小馬鹿にするような嫌な目つきである。

「ああ？　喧嘩売ってるのかよ。こっちだって好きでこんなひよろい体になってる訳じゃないんだからな」

「えー、大分若いですけど、そんなにリアルと変わらないように見えませんが……」

違いがわからないと言いたげにするたつちに、今度は二人が同じタイミング、同じ声量、同じ言葉を発した。

「何処をどう見て言ってるんですか！　全然違う！」

## 質疑応答

イリニがモモンガの隣に来て、アルベドが威圧するような無言の頷きをひとつするとそれまで雑談していたNPCたちが、表情を改めて、隊列を組んで並び始める。

先頭に立つのはアルベド、次に守護者が続き、プレアデス、竜人兄弟と迷いなく整列する。

忠誠の儀という聞いたこともない単語をアルベドが発したかと思えば、主だったメンバーが、真剣な面持ちで並び名乗りを上げ、規律正しく跪き、首を垂れる。一切の乱れない、練習でもしたかのような迷いない動き。その様は、壮観であった。

圧倒されるそれに、モモンガはどうすればいいのか内心焦りながら、それを表に出さないよう挙動不審な声を嚙下する。

たちたちを確認したい気もするが、きよろきよろと視線を彷徨わせてはならない緊張感のある空気だ。

自分以外の誰かが口火を切ってくれないものかと願ったが、そうはいかないらしい。

ギルドマスターであるモモンガを立てているのか、はたまた彼らも困惑しているのか、そこから物事が進む気配はない。

「面を上げよ」

なんとかそれらしい言葉を思ひだし、モモンガは支配者らしい行動を取ろうと四苦八苦する。

「皆、厳しい警戒の仕事をする中よく集まってくれた。感謝しよう」  
アルベドがモモンガの労いの言葉に、やけに畏まって当然のことだと返してくる。

忠誠どころかその身すら差し出すという厚い忠誠心が、物理的な質量でも持っているかのように押し掛かってくるような錯覚。

それに押しつぶされずに立っていられるのは、傍の中間の存在のおかげだった。

自分一人だけではない。仲間と一緒に、このナザリックを守り導けるという安心感。

それは何にも代え難い、モモンガのこれからの自信につながるものだった。

そして、この場にはいないウルベルト。

彼が安全な場所にいるのかどうかすら分からない今、彼の存在を捕捉するのは仲間もそうだが、NPCたちの協力も必要不可欠。捧げられる献身にたじろぐ暇があるのならば、それをいかに有効に利用するか考えたほうがいい。

モモンガは、ウルベルトと再び会うためにたちたちとともに彼らを最善の策を持って使って使っていかなければならないのだ。

モモンガの強い決意を感じ取ったかのように、アルベドは凜々しい表情で意志強く見つめ返す。

その瞳に宿るのは希望だ。

臣下として、これから主人に用いられることに対する喜びと希望に輝いている。

「至高の御方々と比べれば、私たちの力は取るに足らないもの。その私たちが、至高の存在である御方々の意に添い、下命をいただけることこそ至上の幸福。」

私たち――階層守護者各員、至高の方によって創造されし全ての者が、いかなる難行であろうと全身全霊を持って遂行いたします。

アインズ・ウール・ゴウンの方々に恥じない働きを誓います」  
『誓います』

一拍のズレなく、この場にいるNPCが唱和した。

ただの声にしかすぎない、スキルなど一切使用していないのに、それには力があつた。

ギルドメンバーの中にある最後の疑心を粉々に打ち砕く、圧倒的な忠誠心。

忠誠の儀とはまさに、それをおおいに示されるもの。試すような質問を考えていた不明を恥じる心地だった。

苦虫を噛み潰すかのような後悔、そしてそれをすぐに洗い流していく感動。

仲間たちの作ったものは、こんなにも素晴らしい存在なのだ。

黄金すらも彼らの前ではその色をくすませるだろうと確信できるほど、輝きに満ちている気がした。

喜びが内側から溢れ、そして抑制される。

身をいっばいに浸す歓喜に浸りたいのに、それに冷や水を浴びせられるような感覚にモモンガの目の赤い火がわずかに陰る。

ほう、という誰かの感嘆のため息が漏れ、自分の代わりに心の底から喜ぶ仲間がいることを思い出しその腹立たしさも霧散する。

「なんとも、頼もしいですね」

たつちが思わずといったで漏らした言葉に、跪くみな顔が意気揚々と輝く。

頼りにされることが嬉しくてたまらないと、言葉にしなくても伝わってくる。

「ええ、本当に。素晴らしい、としか言葉が出てこないですよーお前たちならば私たちの目的を理解し、失態なくことを運べると今この瞬間確信した」

たつちの言葉にモモンガもつい首肯し、それによつて一層深まるNPCたちの喜色に内心で子供のようだと微笑ましさを抱きながら、支配者にふさわしい態度へと戻す。

「さて、皆に玉座の間で話した通り、かつてナザリックがあつた世界は崩壊した。本来ならば消えるはずの私たちが今なお存在することで我々も混乱したが、大秘術の成功は確認した。ー我々は異世界に来ている」

三十も過ぎて、リアルで口にしたら頭がおかしいと勘違いされるよくなこんなファンタジーな言葉を告げることになるとは思わなかったが、気恥ずかしさを封じて宣言する。

事実なのだから、仕方ないのだ。

「アウラ、外で見たことを皆に聞かせてやってくれ」

「はい、モモンガ様」

周囲1キロを探索し、見た光景をアウラは報告する。

引き続いて、へ口へ口にもパンドラが交渉した少女の情報とそこから考えられる周辺の現地民の強さについても皆に説明してもらう。

シャルティアとピジョン・ブラッドにも命じたように、他の守護者にも侵入者をできるだけ怪我をさせず生かして捉えることを命じる。

そして、さきほど反省したばかりの情報の行き違いを考慮して、連絡網とも言えるような情報共有システムの確認を行い、九階層、十階層の警備の命令をする。

アウラとマールにナザリックの隠蔽工作を頼むと、いざこざが発生したがそれも淡々と収めて、ギルメンで考えた真つ先の懸念事項の穴は封じた。

「さて、皆にはまだこの場に残ってもらうが、警備には問題ないな？」

敵が来るとしたら一階層だが、シャルティア、どうだお前の不在が問題を起こす可能性はあるか？」

「いいえ、問題はございません。高レベルのシモベを嚴重に配置してあります。シモベたちで手に負えない緊急の事態が発生した場合は、メッセージで即座に連絡するよう言っております。その場合は御前を失礼する無礼をお許しく下さい」

「いや、無礼などではないさ。それがシャルティアの仕事なのだからな」

明朗に答えるシャルティアにモモンガは鷹揚に頷いた。守護者がいないせいでナザリックの奥まで侵入を許したとなればお話にならない。

「ここに守護者各位に残ってもらう理由だが、これからこの場に呼ぶ人間の少女ネイア・バラハに対するこの世界の情報収集にあたり、皆にもその話を聞いてもらうこと。紙にでもまとめて通達する手段もあるが、人間の何気ない一言で、私たちだけでは気づかない重要なことに気づく可能性もある。よって、お前たちにも立ち会ってもらう。

そして、この会話による情報収集はマールに行ってもらおう。隠蔽工作の仕事も任せているのに、この仕事まで任せるのは心苦しいが、やってくれるかマール」

「は、はい。もちろんです、モモンガ様」

畏まって返事をするマール。これが失態挽回の仕事だと気づいたのかはモモンガには分からないが、仕事を任された意気にあふれてい

る。

「マーレに任せる理由は多々あるが、相手を油断させるのに一番向いている容姿をしていることだ。異論はないな？」

異論があらうと、マーレに任せることは確定事項なわけだが、話のわかる上司のふりをするためにNPCの意見を聞いた。

反論はなく、モモンガはほつとする。

「マーレの情報収集が終わったら、君たちにはこれからこの場に呼ぶ人間の少女に、情報の収集とは関係のない個人的な質問をひとつずつしてもらおうよ。」

質問の内容はなんでもいいよ。ちよつと疑問に思ったこととか、不思議に思ったこととか。質問が思い浮かばないなら、それはそれで構わないから。

それをさせる理由は聞かないでね。

なんとなく理由が分かったひとと、それに関しては口をつぐんで他のひとに教えないように」

人間に対する意識調査をするよ、とは言わずにへろへろがNPCたちに言う。あらかじめそうと伝えないのは、できるだけ素の反応を見たいから、だそうだ。

「そして、もう一つ。少女を呼ぶ前に、私たちから君たちに聞いておきたいことがあるんだ」

先ほどの忠誠の儀があったせい、疑念があるから確かめるというような緊張はなく、声は柔らかい。

念のため、聞いておくかというニュアンスだな、とモモンガは感じた。

「なんなりとお聞きください。私共一同いかような質問でも嘘ひとつなく詳らかにお答えいたします」

守護者統括が代表して、たつちに約束する。

「そうだね……このナザリックは私たちにとって今まで止まり木のようなものだった」

NPCたちに無言のぎわめきのようなものが広がる。微動だにしないかった彼らが、何かを恐るように、たつちの話を聞いている。

(え？ いきなり何言ってるんですか、 たっちさん)

作られた世界に生きるものの核心に触れるようなことを言い出す たっちに、モモンガは慌てる。

「生活の基盤となる場所はここではなく、この世界の外に家があった。君たちの中で、私たちが『リアルに帰る』という言葉を口にしていたのを聞いていたものはいらるかな」

大多数が恐る恐る頷いた。

「そうか、大秘術に巻き込まれたせいで、私たちがリアルに帰ることは現状、不可能になった。もしかしたら可能なかもしれないけれど、それが分からない今、このナザリックが、私たちの家となった。

ずっと、ここに暮らしていた君たちにとって、私たちの存在は邪魔ではないか。一緒に暮らすことで息が詰まったりしないか。そう言ったことが、私は気になっている。

止まり木としてしかいなかった私たちが、ここを家としてもいいのだろうか。このナザリックを家として、帰ってきてもいいのだろうか。

私は、それを聞きたい」

たっちのその考え方は、目から鱗のようなものだった。

ナザリックこそが自分の居場所とモモンガは信じて疑っていないかったが、たっちは拠点NPCとしてずっとそこにあり続けた存在こそその居住権を強く主張できると考えていたらしい。

その問いの後に巻き起こったのは、滂沱たる涙を流すNPCたちの姿だった。

答えを聞くまでもない。

感情のこもったその涙が答えだった。

「もちろんで、ごさいます。このナザリックが、たっち・みー様の家となられることを、誰が否定しましょうか」

アルベドが涙に声を詰まらせていた。

「たっち・みー様、発言をお許しいただいてもよろしいでしょうか」

片膝をついたセバスが、発言の許可を求めた。彼の目にも涙が浮かんでいた。



「ああ、セバスの話も聞きたい。言ってくれ」

「ナザリックを、止まり木ではなく家としていただけの感謝し喜ぶことはあっても、邪魔など、息がつまるなどそのようなことは決してありません。」

そのような考えをたち・みー様に抱かせてしまうなど思いもいたしませんでした。我々の不忠の致すところが、貴方様をわずかにでも不安にさせてしまったこと、深く、深くお詫び申し上げます。

そして、ナザリックに、私たちの元に帰ってきていただける僥倖と、慈悲に感謝いたします」

「私自身の弱さを、君が詫びることはないよセバス。むしろ謝り感謝しなければならぬのは私だ。私は不在の期間も長く、家を守ることも少なかった。モモンガさんとウルベルトさんと共に、君たちはこの家を守ってくれた。」

みんな、ありがとう」

たつちのその言葉が、作られた存在にとつての琴線へのとどめとなった。

止まり木ではなく、ナザリックが家になる。

心に激情の渦が巻き起こったのは、NPCだけではない。モモンガもだ。

だが、その渦はすぐに沈静化される。

仲間とともに過ごせる確約のような言葉への喜びと感動が打ち消されたモモンガは、せつかくのいい気分からひとりだけ置いてけぼりにされた苛立ちも混じって、少し荒んだ目でNPCを見つめた。

(どうやって收拾つけるんだ、これ……)

泣き伏し感動する面々に、モモンガはまだまだこなさなければならぬ案件を前に冷静に考えていた。



へ口へ口の質問にはソリユシヤンを筆頭に、過剰なまでの歓迎の意が示され、リーザの質問には至高の存在が増えることはお仕えすべきことが増えることでむしろ喜ばしいことであり、そもたつちの家族であるのだから一層忠義に励むと返され、ミーシヤの質問にはあくまで

主であつて友達など畏れ多いと難色をしめした。

「僕が友達になるから。ね、元気だして」

一応同位者であるイリニの励ましがあつて、友達になれないと聞いて落ち込んでいたミーシャがやつと元気になった。

たつちが少しだけ気にくわなさそうにしていたのが面白かつた。まだまだどちらも子供なのに、異性と仲良くする姿は父親としてはどうしても気になるものらしい。

そして、最後に残つたのはモモンガ質問である。

人間の姿になつていたウルベルトを探すことに反対意見は出なかつたことから、モモンガの中の危惧は薄い。

しかし、万が一という場合もあり得る。

見慣れた悪魔の姿から人間になつてしまつた理由をNPCの理解に及ぶように語り、そのうえでNPCがどう思つているのか知らなければならぬ。

「私が聞きたいのはウルベルトさんのことだ。

まずは、彼が何故悪魔ではなく人間の姿をしているのかを説明しなければならぬ。

全ての原因は彼が世界の管理者が恐れるほどの力を持つてしまつたことにある。

あの瞬間火力はギルド最強のたつちさんでも再現できないだろう。管理者の想定以上の魔法の力を行使したことにより、その力はあつてはならないものとされ、彼はその存在を一度は完全に奪われた」

ひゅ、と呼吸が止まる音を聞いた。

場を満たしたのは怒りだ。

命を賭けても惜しくない大切な存在が、自らが知らぬところで奪われていたと聞き、彼らの中に生まれたのは奪つた存在に対して怒りが生まれ、同時に何もできなかった自分の無力に忸怩たる怒りを覚えた。

「それから、私はなんとかウルベルトさんを取り戻した。

だが、世界の管理者はウルベルトさんの規格外の力を恐れ、悪魔としての肉体を奪い……そうだな、返つてきたのは彼の魂だけだつたの

だ。魂だけでは、このナザリックに帰ってくることはできない。そのため、ウルベルトさんはあのレベル1の人間の体を仮の肉体としてこのナザリックにあらわれた。

あの姿になってしまったのは彼の過失ではなく、全ては世界の管理者のせいだ。

ウルベルトさんには一切の責任はなく、よって私たちはアインズ・ウール・ゴウンの不文律を破り、仲間として再び迎えることを決めた。だが、今のウルベルトさんはただの人間だ。

アインズ・ウール・ゴウンでは、受け入れられない人間種。

ウルベルトさんの肉体ごと世界そのものが崩壊してしまった今、彼の悪魔としての体を再び取り戻すのは私たちの帰還以上に困難だろう。

お前たちは、そんなウルベルトさんを快く迎え入れられるか？

私たち上位者が決めたから渋々受け入れられるのではなく、私たちと対等に扱えるか？ 弱くなってしまった彼に対して同様の忠誠を誓えるか？」

静謐さをもちながらも、その奥底に苛烈さを秘めた問いかけであった。

ひとつ、返すべき言葉を間違えれば、マグマのような激昂が噴き荒れることをこの場にいる誰もが瞬時に飲み込んだ。

幸いなことに、いや当然というべきことに、言葉を間違える者など、この場にはいなかったのだ。

至高の存在がたとえ人間になろうと、レベル1のか弱き存在になろうと関係ない。

愛情を持って創ってくださった方への感謝があり、そして一部の者は命を賭けるほどに愛されているということを知っていた。

そのような方を拒むはずないのだ。

忠誠が変わるはずない。

「もちろんでございます。ウルベルト・アレイン・オードル様が例えお姿を変えようと、その威光とも言える気配は決してお変わりありませ

んでした。私たちが頭をさげ、平伏し奉るべき御方。私たちはウルベルト・アレイン・オードル様にモモンガ様、たちち・みー様、へ口様、リーザ様、ミーシャ様と変わらぬ忠誠を誓います」  
『誓いますー！』

守護者統括の宣言に、背後に控えるものたちの声が唱和する。

その場しのぎの偽りではなく、彼らの真意がうかがえる真剣な瞳。

モモンガは知らずのうちに威圧するように発していたスキルを解き、息を吐いた。

(嘘は、ない。よかった)

ああ、これで彼をちゃんここに連れて帰ってこれる。

そう、あとは見つけるだけだ。なんとしてでも。

モモンガの眼窩に灯る赤い光が安堵に揺らいだ。

「発言ヲオ許シ頂イテモヨロシイデシヨウカ」

「ああいいぞ、コキュートス。どうした」

「ウルベルト様ヲ捕ラエタト言ウ不屈キ者デアル、世界ノ管理者トハ一体ドノヨウナ者ナノデシヨウカ」

(うん。世界の管理者っていうだけでは漠然としすぎていてわかりにくかったか)

クソ制作のGMだよ。

とは言えず、言ったところで意味が通用しないであろうから、モモンガはあらんかぎりの語彙力を駆使した。

「世界の管理者とは……そうだな力でどうにかなる者たちではない。

それこそナザリックのワールドアイテムをかき集めて1000のレベルを120に上げたような強さにして戦いを挑んでも、我々は勝てない。ユグドラシルという世界を創造し、ありとあらゆる生き物を作り、世界に存在する理そのものを操る。私たちギルドメンバーもその理に縛られている。どれだけプレイヤーに打ち勝とうと、世界が定めた物理法則には勝てない。

世界の管理者は例えるなら自分たちの陣営を10000にまで上げて圧倒的実力差で我々を虫でも叩き潰すように消滅させることも可能なものたちなのだ。

まともなぶつかり合おうと、策を弄そうと、どんなにあがこうと絶対に勝てない相手だ」

「ナント、ソノヨウナ者が居タノデスカ！」

ゲームの運営や制作の者というのは、プレイヤーのモモンガとは一線を画していて当然だ。そのゲームの枠組みそのものを作って操作できるわけであるからして。同一に語る方がおかしいのだ。

モモンガはその思考のもと、自分たちよりも強い者が存在していたと淡々と情報を開示したわけだが、それはゲームという枠組みの中にいたことを知らないNPCの意識と、完全に隔離してるものだった。アインズ・ウール・ゴウンこそ至上であり唯一絶対の強者と信じて疑っていない彼らにとって、その存在が勝てないと断言する相手がいるというのは、天と地がひっくり返るような衝撃だった。

だが、その衝撃を乗り越えた先の真理に行き着いた者は、自分たちがどれほど強大で偉大な方を主と頂いているのかを悟り、その異様なまでの法悦に全身に痺れを走らせた。

「流石です、モモンガ様」

デミウルゴスは興奮混じりの称賛の声をあげた。

「え？」

「そのような存在から、単身でウルベルト・アレイン・オールド様をお救いするという偉業を成し遂げてくださったのですね。」

その力、智謀。モモンガ様は一体どれほどまでの能力を有しておられるのか……！

無論、至高の存在であられる方は大いなるお力をお持ちしていると最初からわかってはおりましたが、それは凡夫でしかない私の想像の内にはすぎないものであったのですね。創られし者でしかない私の物差しでおさまる御方ではなかった。

私程度では到底理解が及ばない、及ぶはずもない遥かなる高みにおられたことを、今この瞬間理解いたしました」

話の半分も頭に入っていないが、モモンガはとてつもなく過大評価されていることだけは分かった。

何か、勘違いをされている。

ウルベルトを取り戻したことを、なんらかの武力行使と思っていないか……!?

「待て、デミウルゴス。何か思い違いをしているようだが、世界の管理者からウルベルトを取り戻したのは、武力ではなく会話だ」

正しくは、なかなか返答がないメールでのイライラするやりとりの応酬の結果であった。

しかし、それはモモンガへの誤解をさらに深めるものとなってしまったようだ。

眼鏡の下で細められていた目が完全に開き、レンズ越しに宝石があらわになる。

「なんという」

激情で声も出ないと言いたげな有様だった。

(え、俺なんか言った?)

モモンガは加速する勘違いにさらにアクセルを踏み込んでしまったかのような予感に、ごくりと息を飲んだ。

デミウルゴスは、智者であれと創られた。

それによって得た知識という力。卓越した発想力。それらを万全に活かすための演算力。残念なことにそれをもつてしても、世界を作る、世界そのものの理を操るということはできそうにない。

デミウルゴスにできるのは例えるならば盤上にある駒をいかに最適に動かすかという、『最初から有ると決まっている』ものを使つての策謀。

舞台となる盤を作れるわけでも、駒を作れるわけでも、ルール自体はいじれる訳でもない。

世界の管理者とは、いわば不条理な存在なのだろう。

元となる盤を作り、駒を配置し、ルールを作る。それらを自分たちにとって好きなように有利に変更できる。

至高の存在以外の者が自分よりも上にあるとは認めたくはないが、その存在はナザリック随一の智者であるデミウルゴスの智謀を凌ぐ

のであろう。

モモンガは、そのような者たちと知恵で持つて渡り合い、ウルベルトを取り戻したのだ。

「世界の管理者から、危険を顧みずウルベルト様を助け出してくださいましたのですね。その叡智は、いかほどのものであるのか」

レベル1000などというまるでおとぎ話のような、戯言としか思えないような者たちに話術でもって挑み、あの日の言葉通り宿願を果たしてくださった。

それがいかに、無謀か、危険であつたかなどもはや想像もつかない。智者であれと与えてくださった力を有効に扱いきれない自身の不明に、情けなさが増すばかりだ。

そして、デミウルゴスは思い知る。

モモンガは我が身の何も省みず、ウルベルトを取り戻した。

それは仲間を思う気持ちからさせるものであるのだろうが、それ以上……

(モモンガ様は、やはりウルベルト様のことを……)

畏敬を塗り替える苦い感情に、名前をつけてはならない感情に、デミウルゴスは体の芯を凍らせながら頭を下げた。これは、表に出てしまいそうになった家臣にあるまじき心情を隠すための行為ではない、そう自身に言い聞かせながら。

「モモンガ様は、賢明な判断力と、瞬時に実行される行動力も有される方——まさに端倪すべからざる、という言葉が相応しきお方。

そのような方に仕えることができる至福、改めて噛み締めております」

至高への賛辞は心の底から湧いてくるはずなのに、まるで言い聞かせるようだとデミウルゴスは不甲斐なさを恥じ、呵責した。

## 劇場のアクター 前編

小さく小さく零した、己が創造主の言葉をパンドラズ・アクターは忘れられない。

『あのひとだけがずっと俺と共にいてくれた、支えてくれた、俺を必要としてくれたとても大切なひとの……』

切なる思慕とも、執念じみているとも言えるような、モモンガのウルベルトへの想い。

その時は尊い身を犠牲にして大秘術を行い自分たちを助けるということばかりに思索をふけらせ打開策を必死に巡らせていたが、至高の存在が健在である今、憂慮すべき事柄がパンドラズ・アクターの中で移り変わった。

（モモンガ様の苦悩をいかにすれば軽くしてさしあげられるのだろうか）

ナザリツクに君臨するアインズ・ウール・ゴウンの偉大な方々―それら全てに仕える存在であるが、創造主であるモモンガの存在はパンドラの中では別格であった。

それこそ、ウルベルトの意思をある程度無視してモモンガにとって最高の結末を迎えられるように画策する程度には、その捧げる忠誠にははつきりとした序列がある。

モモンガを頂点とし、その次にずっと彼と共にあり続けたウルベルト、長い不在の期間を経て家族を連れて戻ってきたたち・みー、それに呼応して戻ってきた方々、終焉の日にわずかにでもその気配を感じさせた者。そして最後にそれ以外の者たちだ。

こういった忠義の順位づけを嫌う同胞が多くいるのは知っているが、はつきりと表に出さないだけで、その内心はパンドラと似たようなものだと推測していた。創造主を頂点とし、それ以外の至高の存在が次なのだ。

しかしながら、ここまでではつきりと格付けをするのが、とても珍しいという自覚はある。

パンドラがこうなってしまったのは、霊廟を行き来して仲間のア



ヴアターラを作るモモンガの悲哀と寂寥を見てきたからだ。

創造主を悲しませ、辛く苦い感情を深く深く刻ませた、アインズ・ウール・ゴウンのメンバー。

モモンガの幸せは、パンドラズ・アクターでは与えることができず、彼は励ますこともできずそれを見守ることしかできなかった。

彼が仲間と信じる者たちは、無慈悲にモモンガから笑みを奪っていった。

いつか帰ってきてくれる、会いにきてくれると信じて、いや信じたという感傷にしがみついて、何一つ残されたものを手放すことなく大事にし続けるモモンガの姿はあまりにも痛ましかった。

許しがたいとまで責めるほど、身の程を忘れるつもりはないが、害虫を噛み潰すような思うところがあるのは事実だった。

幸せそうに、靈廟に通い仲間たちの最強装備を持つていくモモンガを見るのはパンドラにとってもなによりも幸せで、主の満ち足りた様子を見ると帰ってきてくださった方々には自然と頭が下がった。

そして、唯一片時も離れず、このナザリックに残って守ってくださったっていたウルベルトにも、一層の感謝があった。

やがてモモンガがパンドラと会うことはなくなったが、悲しげに靈廟に通うことはなくなった。自身の無力に打ちひしがれる哀切は程遠いところとなり、これからもそれがずっと続くことをモモンガのために願っていた。

パンドラズ・アクターが最も希求するもの。

それはナザリックをずっと守り続けてきてくれた主人の、幸せ。

共にあり、寂しさを癒し続け、支えてくれたウルベルト・アレイン・オードルという男に心を傾倒させ、欲し望むというのならば、その手段を整えねばと使命感を抱くのは、創られた者として当然だ。

宝玉のようなそれを誰にはばかることもなく得たときの主の気持ちに夢想する。

いなくなってしまった仲間のことなど忘れるほどに、寂寥すら粉々に打ち砕くほどに、なにかもがモモンガの中で圧倒的な幸福となつて満ちるのであろうか。そうであつてほしい。あれほどの苦しげな

日々を送ったのだ。それを覆すほどのものを得て然るべきだ。  
そのためであれば。

例え不忠と謗られ、その真意を誰にも理解されなくても、結果的に創造主のよしとなるのならはこのドツベルゲンガーは躊躇わない。

不名誉な死と主人の晴れやかな恒久の幸せならばどちらを取る？

秤にかけなくともあっけなく答えが出る簡単な問いだ。

(モモンガ様はあれほど強く想われているが、告げることのできない秘めたる感情なのでしょう)

パンドラは知らない。ギルドメンバーには秘めるどころか小さな子供にも、本人にもバレバレであったことを。

(だから、あのように苦しげにそして誰にも聞こえないような声で漏らされた。ま、私は聞こえましたけどね！ この私が、モモンガ様の小さな一言であれ聞き逃したり、一挙手一投足見逃すはずがありませんとも！)

パンドラは知らない。マイクを担当していたペロロンチーノがうっかり音を拾ってしまい、顔が動かないアバターに感謝するくらいに言葉にし難い微妙な気持ちになっていたことを。

(ウルベルト様にその愛を告げられない理由は……種族もそうですが、きつと性別のこともあるのでしょうか。なんと、悲しいことでしょう。)

一個の人格が一個の人格を想うときに、同性という些細な問題が壁になってしまふとは。例え次代という実りがなくとも、愛し合うことにはきつと意味があるはずです！

ナザリックの支配者としての責務がそれを押し隠させてしまうというのであれば、不肖パンドラズ・アクターがこの命をかけて一助といたします)

パンドラは知らない。果てのない執着は、恋愛感情ではなく一応友愛に収まる範囲だと。

(なにやってるんだらう。パンドラズ・アクターさん)

ネイアに胡乱な目で見られていることには気づいてたが、パンドラはモモンガに呼ばれるまでの待ち時間、無言のまま盛大に動き回っていた。



潇洒な造りの木製のテーブル一卓とそれに合わせたデザインの椅子を二脚。

テーブルには精緻なレース製のクロスがかかり、その上には大きな白紙が一枚とペン。

その後ろにギルドメンバーが座る椅子を用意させ、背後にはNPCたちが控えている。

伝言で呼び出すと、そう時間をおかずに少女を伴ってパンドラズ・アクターが円形劇場に現れた。

(少女、年頃的にはそうなんだろうけど……目つき悪っ)

騎士の従者の道を目指す少女というのだから、真面目そうというか一本筋の通った厳しい印象を持つ少女というのならばモモンガの予想の範囲内になるのだが、斜め上の見た目の女の子が出てきて驚いた。

人の二、三人くらいなら殺していそうな人相だ。

パンドラに伴われた少女が近くまで来る。

近くで見ると、ますます目つきが悪さが際立って見えた。

「さて、わざわざご足労願ってすまないな。ローブル聖王国の従者殿。どうやら私の……」

(この場合NPCって言っても通じないような。通じないよな、絶対。創造物でわかるか?)

さっきの世界の管理者と同じで聞いた時ぱっと分からないよなあ。

……うん、仕方ない。こう、言いたくはないけど、言ってみればそうだし、背に腹は代えられないというやつか)

「どうやら私の息子が、君にお節介を申し出て、ここまで足を運ばせてしまったようですまないな。」

私の名はモモンガ。この地下墳墓の代表者を務めている」

息子と言った瞬間に、びびびと電撃でも走ったかのようにパンドラ

ズ・アクターが震えた。

(え、なに。もしかして何かしでかす前兆? やめろよ、ほんつきでやめてくれよ)

モモンガは祈るかのように懇願した。

幸いなことに、感極まっていたとしても言いたげに天を仰ぎ見る動作で踏みとどまっていた。しかし、一拍おいて全然幸いではないことに気づいたモモンガは、断頭台に登る絶望にも似た感情のうねりと即座に発生する抑制に素直に己が心を任せた後、パンドラからそつと視線を外した。

『ナザリックの主じゃないんですか?』

パンドラを見ないようにしているモモンガに、たっちは小声でからかうように問うてくる。

『え、いやですよ、たっちさん、なんか俺だけ偉そうじゃないですか』  
「はじめましてー。私ミーシャー!」

ミーシャはネイアの容姿にたじろぐことなく挨拶した。

「はは。怖がらせているようですまないね。この状況でゆっくりしていつてほしいというのは難しいかもしれないけれど、あまり緊張しなくても大丈夫だからね。私は名はたっち・みーという」

申し訳なさそうにする言葉に嘘なくたっちの言を信じるのならば、どうやら少女は怖がっているらしい。

モモンガの目には、あまたの異形にも怯まず堂に入った態度で立っている強心臓に見えるのだが。

たっちの名乗りに、ネイアは三白眼をやや見開く。

「至高のお方の御名前に、何かおかしな点でも?」

静かな問いかけでありながら、やや険を含んでいるような気がする。

人間に優しいらしいのに、セバスが怖い。

「え、ええと。『斬れるものなら斬ってみろ』とは凄い挑発的なお名前だと思ひまして、すみません!」

少女は慌てて謝った。

(え。たっちさんの名前がそんな風に聞こえたのか。

会話が通じるのを当たり前のように受け止めてたけど、日本語をしゃべってる訳じゃないもんな。こないかにも西洋人みたいな容姿で、日本語ペラペラって言うのはおかしいし。

魔法みたいな力で勝手に翻訳されているとか？

異世界転移だつてありなら、そういうこともありなのかな

ふむ、とたつちは何か考えの決着がついたのか、何かに納得したようにしてから、話始める。

「いや、謝ることはないよ。そうか、そのように聞こえたんだね。それはある意味間違っていない。もうひとつの名前である橘翼という名前をもじつてはいるが、『触れるものなら、触ってみろ』と対峙する相手を挑発するつもりで名乗った名でもあるからね。私はたつちという。

今度はちゃんと名前が伝わったかな？」

「は、はい。たつち様ですね」

こくこくと懸命に頷いている。

その視線は背後のNPCたちをずっと気にしていた。

(背後のあいづらがどんな顔をしているのか分からないからな。人間嫌いつて設定されているNPCたちに睨まれてるのかな)

へろへろ、リーザと簡単に名乗り、NPCは代表してアルベドとマーレだけ名乗らせた。

「ネイアお姉ちゃん？ それともバラハお姉ちゃん？ どっちがお名前？」

「ええと、ネイアがファーストネームだよ……ファーストネームです！」

ネイアがたじろぎながら答えると、途端に仰け反るように背筋を引き締めて言い直した。

「まってー、みんな威嚇しない威嚇しない。落ち着いて」

へろへろが振り返ってなだめる。

彼の様子はできる上司というよりは、手のかかる子供たちの見守る面倒見のいい保父さんといった感じだ。

NPCに命令することなく、とてもやわらかく喋る。

(思ったんだけど、やたらと張り切って偉そうな支配者ロールしてるのって俺だけじゃね？　へロへロさんとたつちさんはいつも通りだよな。リーザさんとミーシャちゃんなんて言わずもがなだし。

もしかして、無理して気取ったふりしなくてもいいのかな？

いや、でもなんか今更このタイミングで切り替えるのもおかしいし、この女の子に話を聞いてから考えるか)

「今日はここに招待されてくれてありがとうね。ネイアお姉ちゃん！」

ミーシャは椅子から降りて小走りに移動し、NPCたちが並んで立っていたマーレを前方に引つ張り出した。

「それでねお願いがあるんだけど、ここにいるマーレお兄ちゃんとお話ししてもらってもいいかな？　お外のお話を聞かせてあげて欲しいの！」

「え……お兄ちゃ？　え、ええ？　あ、は、はい」

鋭い目つきで、いわゆる二度見をする。

少女の格好をしたマーレが男をしめす名詞で呼ばれてびっくりしていた。

賢明なのか、驚きで言葉も出ないのか、なぜ少年が女の子の格好をしているのか深く突っ込んで来ることはなかった。

ミーシャがさくさく話を進めて言ってくれてありがたい。

モモンガが主導を取るとなると、為政者にふさわしい言葉遣いが求められて、正直荷が重すぎる。

「すまないな。パンドラによると君はこちらとそちらの情報のすり合わせのために来てもらったようなのだが、少しばかりそのマーレと話をしておいてほしいな。」

いささか人見知りの気があるせいで、あまり外を知らない子だから君の話を聞かせてやって欲しい。

「さあ、そこに座ってくれ」

呆気にとられているうちに考える隙間を与えずことを運ぶ。

まるで詐欺師にでもなっている気分だ。

しかしながら、

(はっはっは。どう見ても尋問だな)

表面上はできるだけにこやかに促しながら、胸中では乾いた笑いを漏らしてた。

(よくよく考えてみれば、ただの人間には相当な重圧になっているんじゃないか?)

この奇妙で威圧的な絵面にようやつと思いつたモモンガである。大昔体験した圧迫面接を思い出し、反省する。その上、同じ場所にいるのは異形ばかり。どれほど心身の負担になっているのだろうか。

自分の容姿の恐ろしさに頭はいつたのに、それらに囲まれることに対しての恐怖に頭が働かなかった。

せつかくマールレを会話役にした意味がないような光景だ。

体の感覚どころか美意識もアンデットになっているせいなのか、人間から程遠い容姿の者を見ても直感的に恐ろしいと感じない。そのせいで、そのことがすっかり抜けていた。

感情もそうなのだろう。どうにも人間に対する配慮というものが万全に至らない。

(まあ、しようがないか。騎士の従者というんだし、普通の村娘よりは恐怖耐性があるだろう)

モモンガは昔を思い出したせいで浮かんで来た少々の罪悪感を、なんのためらいもなく流し捨てた。

「座って座って―」

ぐいぐいとマールレとネイアを真向かいに座らせ、一仕事終えたミーシヤは満足げに席に戻る。

ぎくしゃくと椅子に座らせられた二人。

そのすぐ先に。

視界に否応なしに飛び込んでくるものがある。

なるべく目線をやらないようにしていた黒歴史を、そろそろどこかさない。

彫像のように微動だにしないパンドラズ・アクターがとてもつものなく視界の邪魔だ。

自分が見ないことで平静を保てても、それは其の場凌ぎの一時的な

もの。モモンガが見ないようにしたって、アレが皆の目に入っているという事実は、途方もなくモモンガの精神をえぐってくる。

「何をしている、パンドラズ・アクター。お前も控えよ」

「はい！ 失礼いたしました、モモンガ様！ あまりの感動に我を失っていました！」

(ひええええ！)

はっと我に返ったドツベルゲンガーは、派手な動きで返事をする。止めると命令した心胆を冷やす敬礼をとり、埴輪顔でありながみようにきりりと引き締めた表情を見せる。骸骨とおんなじで表情なんて変わらないはずなのに。

襲いかかってくる羞恥の波に、モモンガは声を殺して悲鳴をあげた。

格好わるいのに、格好いいような仕草を無理にしようとすんなよ！ やめろよお！

顔を両手で覆って、叫ぶ鈴木悟を幻視した。

穴があつたら入りたい。逃げ場があつたなら逃げたい。

これが異形へと変容したモモンガでなく、人間の鈴木悟であつたならば、速攻にログアウトしてベッドにダイブしてジタバタしていたに違いない。ああ、出来ればベッドでジタバタしたい。

異世界に来た僥倖に胸躍らせ、希望に満ちた仲間との未来絵図を描くモモンガを、本気でリアルに帰りたいと思わせる男。

それがパンドラズ・アクターである。

すぐにかき消される強い感情。だが、目の前に敬礼するパンドラズ・アクターが存在する限り根本的な解決策になっていない。

モモンガは生きていたときの名残のような深呼吸をし、命令通り背後に控える列に加わろうとするパンドラズ・アクターをやや恨みがましい目で見送った。

(もう、なんのためにあのとき宝物殿にみんなを連れていかないでいたと……！)

あれを、見られないために。見られ、見られたよ！ もう、もう！  
うわあああああ！)



再び起こる、抑制。

「ああー」

抑制が間に合わず、内心の嘆きが漏れていた。

「どうなされましたか、モモンガ様」

皆に注目されてしまう。

「あ、いや。うん、そういえばパンドラズ・アクターには質問をしていないことを今この瞬間思いだしてな。それだけだ、気にするな。よし、マーレとバラハ殿は構わず話しているといい」

モモンガは無理矢理ごまかした。本人がそう言っても、それで済まらぬのがこの忠臣たちだった。

「質問ですか？ モモンガ様がお聞きになりたいことがあるのであれば、なんでもお答えいたします！」

主人であるモモンガが気にすることならば、と本人も周囲もその時間を設ける気満々である。

マーレはネイアではなくパンドラズ・アクターを見つめ、後ろの臣下たちも黒歴史に注目している気配がある。

（頼む、みんな。見ないで、見ないでくれ！）

昔の俺の畜生！ 鬼畜！ 未来の俺を殺しにこないでくれよ！

いや、落ち込んでいてもなにも始まらないぞ。このままだとパンドラズ・アクターが衆目に晒され続けるだけだ。

へこたれるな、俺。頑張れ、俺。

この、質問イベントを終わらせないと、多分延々とあいつから注目が外れないぞ）

かつての己を口汚く罵り、今の自分を鼓舞した。

「いや、うん。はあ……みんなはどうですか、パンドラズ・アクターに聞いておきますか？」

どんよりとした様子で問うと、いえと大人たちは三人首を振った。モモンガの作ったNPCだから、皆と同じ答えを返してくれるのは聞かなくてもわかる、という返事を三者三様にもらった。

ミーシャは「お友達になれる？」と尋ねて、オーバーアクションで畏れ多いと断られ、「友達になれたら面白そうだったのにー」とむくれ

ていた。正直ほつとした。素直な子供で周囲に影響されやすい年頃である。うっかりパンドラズ・アクターの真似をはじめて敬礼でもされたら目も当てられなくなる。

「まあ、私も答えは想像つくがな。念のため聞いておきたくてな

パンドラズ・アクター、お前は人間となったウルベルトさんをこのナザリツクに快く迎え入れられるか？」

返ってきたのは沈黙だった。

モモンガは最初、パンドラズ・アクターは勿体ぶっているのだと思った。

妙なためを作って、歓迎の意を表する。そう、予想していた。

しかし、彼の答えはそれを覆すものであった。

ぐるりと、NPCたちを見渡したパンドラズ・アクターは顔を俯き加減にして帽子の鏝をつまむ。

「申し訳ありません、モモンガ様」

謝罪した彼は丁寧なお辞儀をし、

「私はウルベルト様をこのナザリツクに迎え入れることを拒否いたします」

はつきりと拒絶の意を示したのだ。

## 劇場のアクター 後編

生者のことごとくを憎悪し無限に続く死の螺旋へと引き摺り込むような、たちまちのうちに命を奪っていく病魔を凝縮したかのような、息苦しくも悍ましい威圧がモモンガの体を震源地として津波のように広がった。

呼吸などいらぬはずの体が、う、と息を詰めた。俄かに体が重くなる。

わざわざ地雷を踏みに来てるなあ、彼。

へろへろは異質な空気を孕む隣席の骸骨に閉口しながら、パンドラズ・アクターの思惑を読みあぐねていた。

モモンガが作ったドツペルゲンガーは感情を読み取りようがない外装をしている。種族そのものといった姿だ。それでも、大振りな身振り手振りや声色から、細く扉を開いた先を覗き込むような僅かな情報を得られる。

パンドラズ・アクターは自分の中の考えを吟味して返答したというよりも、周囲の顔色をうかがっていた。ここにいるものたちに聞かせるべきことを考えているような。そんな一瞬の思考。

それから告げた言葉に、ひっかかりを覚えるわざとらしさがあった。

本心は別のところであり、彼は理由があつてあえてモモンガを逆上させる返答をした——へろへろが出した結論だった。

モモンガは、と言うか大部分がそれを気取った様子はない。

前後左右などない姿をいかして、ほとんど身体を動かすことなくこの場全体を確認する。

特にウルベルトの子供NPCとデミウルゴスは、激昂で親の仇でも見るような目をしているし、アルベドなど許しを得たら今にでもパンドラズ・アクターを誅殺しそうだ。各々怒りは強く、冷静さを保っている者は皆無。

リーザはこの場に溢れる怒りの気配に身を竦ませながらもミーシャを守ろうとしているし、たっちは何があつてもいいように警戒し

ている。もしかしたら彼のワールドチャンピオンの力は、この仲間割れのようなことが原因で久しぶりに見ることになるかもしれない。

ミーシャがモモンガの放つ威圧に恐れる様子もせず、きよとんとした顔でこの場のなりゆきを見守っている風なのが印象的だった。

椅子に座っている少女は……

(あー、なんというか。ごめんねえ。後で蘇生させてあげるから)

へろへろはいろんな意味を込めて心の中で合掌した。

不穏な気配を纏っているというのでは到底たりない、むしろ周囲を押しつぶしてくるような存在感を放ち罪のない少女を知らずのうちに圧殺した男は、嚇怒を堪えたようだった。

重く息をはき、なんとか平静を取り戻そうとしてる。

「ウルベルトさんが人間となつてしまったのは、彼の過失ではないー」

それでも漏れ落ちたのは、声や言葉というよりも、怨毒が音となつて空気を震わせて聴覚に届いているような刺激。

NPCたちにさきほど説明した経緯を朗々と説明しているようで、モモンガの感情を極めて押し殺した声からは滲みでているのは殺氣、いやむしろ死そのものの気配であろうか。

なんというか、先ほども思つたことだがウルベルトのこととなるとモモンガの様子がずいぶんとおかしくなる。

仲間想いなのは知っているが、それだけではすまないものを抱いている気がするの、自分の勘違いだろうか。

あらかた同じことを話し終えると、それでも尚受け入れないというのなら、という言外の最後の通告を含めて「その上でもう一度お前の答えを訊く」そうモモンガが言い切った。

モモンガは空中に手をさまよわせると、砂時計を取り出し骨の指で弄ぶ。確かあれば、超位魔法の長い詠唱時間をキャンセルするための課金アイテムのはずだ。

(え、モモンガさん。超位魔法？まさか超位魔法を使う気ですか？)

モモンガさんだけが使えるアレならそこまで威力は強くないんだろうけど、ナザリツクの中で使っちゃうつもりですか？)

ずいぶんと昔のことなので詳しい名前を忘れた魔法のことを思い出す。

へろへろはモモンガの怒りに慌てふためいた。漆黒の粘液が漣のように揺れる速度が、焦りで早くなるのも仕方ない。

「確かに、ウルベルト様は被害者。しかし、私はそれとこれとは別の問題だと愚考いたします。

モモンガ様に忠誠を誓う臣下の役目として、過ちと知りながら見過ごすわけにはいきません。

アインズ・ウール・ゴウンは人間は受け入れないはずではなかったのですか？」

へろへろの焦りはよそに、パンドラは怒りなど全く意に介していない様子で、返さなければならぬ答えの代わりに質問で返した。

「確かにそうだ。アインズ・ウール・ゴウンは異形のみが所属できるギルド。

だが、このような場合の例外は認める。これは仲間の皆で決めたこと。ウルベルトさんは誰がなんと言おうとアインズ・ウール・ゴウンの仲間だ。

お前一人の意見で覆せる類のものではない」

「皆で決めたとおっしゃりますが、それは四十一の方全てではないのでしょうか？ 果たしてそれは正しい採決の結果と言えるのですか？

いない方々のご意見をないがしろにしてもよろしいのでしょうか。

それともお隠れになってお姿を見せてくださらない方々は、仲間ではないとでも言われるのですか？ モモンガ様がそうおっしゃいますのならば、私は自身の意見の否を認めます。

ウルベルト様の至高の座への存続は、一部の方々による偏った意見ではなく、ギルドの総意であると。何故ならば、その一部の方々のみがアインズ・ウール・ゴウンの至高であらせられるから。

そうであるならば、私は至高の方全ての決定と受け入れ、ウルベルト様のご帰還を歓迎いたします」

（うわ、痛いところついてくるう。なかなか煽るねー。パンドラズ・アクター）

聞いているこちらの肝が冷える。

あの仲間が大好きなモモンガさんが、辞めていってしまった者たちを仲間ではないなんて言える訳がないのだ。

少なくとも、ヘロヘロの知るモモンガとはそういう男だ。

「俺は」

モモンガの一人称が変わる。

「皆を仲間じゃないなんて思ったことは一度もない。言うつもりもない。」

アインズ・ウール・ゴウンの四十一人、いや今は四十三人だな、その四十三人は俺の大切な仲間だ」

（迫力あるなあ。でも、これ質問の答えになってないや。胆力がないやつなら、それで怯んでごまかせたんだらうけど）

「おや、堂々巡りになってしまいますね。」

では、もう一度言わせていただきます。

ウルベルト様を受け入れることが四十一人の皆様の総意でないのであれば、私は異を唱えます。

貴方に創られたものとして、誤った結論は看過することはできません。

この栄えあるアインズ・ウール・ゴウンは、いつからモモンガ様の一存で動かせるものとなってしまったのでしょうか。

人間となったウルベルト様を受け入れること。私にはその言い分は取り分けモモンガ様の私情を多分に含んでいるものにはしか聞かせません」

パンドラはもちろん怯むことはない。よってごまかされることはない。

（お、きつきは『一部の方々』で複数形を指していたのに、今度はモモンガさんひとり指名指してきたね。今の決定を下しているのは私たちで、責められるべきは私達も同じだろうに、そこを突いてこないのは……）

モモンガさんの私情、か。パンドラズ・アクターの目的はそこかな）  
ヘロヘロは次々とメンバーが辞めていくギルドの中で、それでも長

く残っていたほうだった。

だからパンドラの能力も、そうなった経緯である悲しい真意も知っている。

もしかしたら、パンドラズ・アクターは何かしらの理由でモモンガの内情を知っており、逆上した彼からそれを曝け出させるつもりなのかもしれない。

モモンガは昔と変わらずにこやかに歓迎してくれたが、いかに彼が純真であろうと、ギルドや仲間が好きだからこそ恨み言のひとつやふたつくらい言っていただろう。

表面上は何事もなかったように取りつくりしていることが、モモンガを敬愛するが故に許せないのかもしれない。

理性という殻を剥がすことで、むき出しになる感情にどんなものがあるかと受け入れよう。

もし、パンドラによって引き出される本音に、仲間を責める言葉があったなら。

いや、それがなくても、モモンガに謝り、もう一度感謝して、この異世界に転移してしまった同胞として、改めて仲間として歩んでいこう。

そんな胸に染みる誓いを浮かべる。

それも、モモンガの豹変……今までだっただいぶおかしかった訳だがそれを凌ぐものに、遠くかなたに吹き飛ばされる。

「私情か……はは。

そうだな、私情かもしれないな……

だがなあ、パンドラズ・アクター。私情を挟んで何が悪い。

なんで、ずっと、ずっと、ずっと、ずっと、ずっと、ずっと、ずっと、俺と、俺と一緒にいてくれたウルベルトさんをこのナザリツクから追い出さなきゃいけないんだ。

皆の心が、ここから離れていってしまったときに、あの人だけが、俺にここに一緒に残っていて欲しいって言ってくれたのに。

去っていくのを止めるのはいつも俺だった。置いていかれるのはいつも俺だった。そんな俺に、置いていってほしくないと言ってくれ

たのはウルベルトさんだけだった。ギルドからどんどん人が減って  
いって、寂しかったし、怖かった。でも、ウルベルトさんはいてくれ  
たんだ。ナザリックを同じように大切にしていた。ずっとここを  
守ってきた。俺が、あの人に依存して、執着するのも当然だよなあ？  
俺にはあの時、あの人しかいなかったんだから。

そのウルベルトさんを、俺のとても大切な人を、俺のウル  
ベルトをどうして、たかだか人間種になつたくらいで、このナ  
ザリックから、俺の元から、わざわざ手放さなきゃならないんだ？  
俺にはちつとも理解できない」

あれ、流れがおかしいぞ。

予想していなかった流れに、へ口へ口は絶句する。先ほど確かにウ  
ルベルトが関わると怖いなあ、なんて考えていたがまさかのモモンガ  
の吐露に頭の中がパンクした。

(ええー！ まさか、モモンガさんとウルベルトさんってそういう仲  
なの!?)

ハニワ顔で「やってやったぜ」みないなしたり顔するなよパンドラ  
ズ・アクター！ めっちゃ器用だな！ どうやってその穴だけの顔を  
動かしてるの!?)

帽子の下に隠された顔。その影から見えてしまった表情に、へ口へ  
口はつつこんだ。

モモンガの横でいつでも動けるようにしていた緊張も解いて、あんな  
まりな出来事にたちちが頭を抱えていた。

誰にも決して聞こえることはない心の声で「友情じゃないですよ、  
これ。やっぱり、モモンガさんはウルベルトさんのこと絶対恋愛愛的な  
意味で好きですって。やばいくらいに好きですよ」と今はこの場にい  
ない友人に語りかけていた。

ウルベルトがしつかりと向き合うことを避けている間に、モモンガ  
は情念を肥大化させて取り返しがつかないくらい狂氣的に愛してし  
まっていたらしい。

過去にその疑問をおそれるおそれるぶつけたときはウルベルトに必死  
になって否定されたので、その時はかろうじて納得できたが、もはや



たっちの中では疑いようなものになっていた。

手遅れだな。

何がどうとは言葉にしたくないものを、たっちはひとりごちた。どちらにとつても、手遅れだ。

ウルベルトは多分、見つかったら最後、モモンガからはもう逃げられないだろう。あそこまでの感情を周囲にここまでさらけ出したら、モモンガは開き直ってさらに彼に対する愛情表現が過激になるのではなからうか。

ウルベルトの必死の否定というバケツに水を汲んだような消火では、決して消せない猛火のような感情だ。

男同士だろうとあれだけ好きな相手がいて、体面もあるから一応隠してはいたけれど、ここまで周囲に言ってしまったら隠す必要性もないと、そう思ってもおかしくはない。

「そのように、何にも代え難く離れられないと大事に思われているのであれば、手に手をとって出奔されるのも一つの手ではありませんか」

「残念ながらそれはできない相談だ。身勝手な私では相応しくないからギルドマスターを誰かに譲れという話ならば俺は快く譲れるが、ここを出て行く気はない。

ナザリックは俺にとつても、あの人にとつても大事な場所だからな。

私にとつては、大切な仲間との思い出が詰まる場所。

ウルベルトさんにとつては、デミウルゴスとイリニがいるから守らなければならぬ場所。

こうは言いたくはなかったのだが、ナザリックを去っていくという形でこちらを蔑ろにされたんだから、少しくらいこっちの勝手をしただっていいだろう、と私はそう思っている。それくらいのことを言う権利はある、そう思う。

ナザリックに来てくれた者には了承は取った。今はそれで十分だ。

帰ってこない他の皆の意見に関しては、もしも会えるときがあればそのときにもう一度話し合えばいい。

はあ……言うつもりもなかったものをここまで言わせて、まだ分からないのかパンドラズ・アクター。

今の俺は、アンデットなのに恥ずかしさで軽く百回くらい死ねるぞ」

落ち着いたかのように聞こえる感情を排除した声音がいつそ空恐ろしい。冗談を言う余裕があるように見えるが、その視線は砂時計に固定されていた。ゆらめく赤い光にはモモンガの中にある怒りが隠れている。

「それは恐ろしい。モモンガ様が本当の意味でお隠れになってしまうのは決して本意ではありません。

ですが意見をかえるつもりはありません。

最期にもうひとつ質問があるのですが、仮にウルベルト様の奥方であらせられる明美様が居られた場合はどうなされるつもりでしたか？」

「ん、なんだ。明美さんが居たら？ もちろん歓迎するぞ。

というか俺は、あの人に恋人ができればようが結婚しようが、正直関係ないと思っている。

ウルベルトさんがちゃんと俺のそばにいてることを一番に選んでくれていて、あの人俺のモノだと相手がしつかりと理解するならば、という前提条件がつくけどな」

（ひえええええええ、何その言い分、訳がわからなくて怖いよモモンガさん！ 執着強いのに、独占欲はそんなにないの？

明美さんとは仮想現実内結婚で、現実で結婚したっていうのはまた違うし、やまいこさんの妹だから歓迎できるんだろうけど……）

へロへロは困惑し、

（あーウルベルトさんがそんなこと言っていたような気がする。親友になりたいだけで、恋人になりたいわけじゃない、だから友情の範囲だっけって言い訳していたな。

付き合ってるわけじゃあないのに、自分のモノ宣言してもう……本当にもう……片想い拗らせすぎですよ、モモンガさん。絶対に逃すつもりはないって決意というか執着というか……重いなあ。

それに、恋人よりも親友を選ばせて、そのうえ当たり前のように恋人を牽制してマウントを取るのは、友情に収まらないと私は思うんだ。百歩譲って友情だとしても、恋愛感情よりもかえって性質が悪い気がするね)

たっちは目頭をおさえた。

余人には到底理解不能な執着を語り、男性ギルドメンバーを混乱の坩堝に叩き込んだモモンガは、手の中にある砂時計をなんら前振りなく割った。

「言いたいことはそれだけのようだな、では、死ね」

(あー。モモンガさん、やっと落ち着いていたように見えるけど、やっぱり相当キレてるね。それとも、本当はこの魔法を向けることにためらいがあるのかな?)

たっちは砂時計が割れる音に我を取り戻す。

そんなことを思う余裕がある程度には、決定的な瞬間に余裕がある。PVPの時のモモンガには、絶対がない隙だ。

発動した魔法とパンドラとの間に、瞬足の動きで白銀の鎧の騎士が割って入る。

威力はさほど。だが、まともに喰らえばたっち・みーでもただではすまない禍々しい魔法を目前に、それを恐ることもなくたっちは己の中にある力を解放させる。

次元断層。

ワールドチャンピオンの持つ、最大の防御スキル。

タイミングがシビアな技だが、呼吸するように体に馴染んでいるこのスキルを一コマのミスもなく発動する。

たっちの構えた剣に添うように音もなく空間が撓んだ。

ギルドマスターモモンガの容赦を切り捨てた超位魔法をまるでこの世界から切り取ったかのように、たっちは易々と受け止めた。

(あー、やっぱりたっちさんが守ったか)

抜き放った剣をおさめ、たっちはパンドラを諫めている。

目的は察したが、あまり第三者が引つ掻き回さないように、それにも嘘でもウルベルトの存在を拒否すると言われるのはこちらとしても

いい気分じゃない、とたつちが言っている内容はそんなところだった。

モモンガは追撃をすることも、魔法を止めたたつちに怒りも見せず、ただ黙っている。

ウルベルトのことでとやかく言うのなら、殺すことも辞さないという本気を見せたことで一応満足したのだろうか。

パンドラズ・アクター主演のこの三文芝居もそろそろ終焉に近づいている。

へろへろはやつと落ち着いて考える時間ができそうだと、これから先のことを思った。

やるべきことはまだまだ残っているけれど、正直なところ何も考えずにもう寝てしまいたかった。

男同士の痴情のあれこれを見せつけられた疲れもあいまって、現実逃避してみたことを考えているへろへろの視界に、ふわりと透明なメールアイコンが浮かんだ。

一瞬、なんだろうと思ったが内密理にメッセージをやりとりする課金アイテムのメールのことに思い至り、へろへろは指先で透明な手紙を叩きそれを開く。

差出人は、すぐ隣にいるモモンガからのものだった。

すぐ隣にいるのに、一体何事であろう。

モモンガは先程までの邪悪な死の威圧をかき消し、一目でわかるくらいにどんよりと落ち込んで居た。

仲間の自己主張の強いアグレッシブさに振り回されて胃を痛めている、へろへろのよく知るいつものモモンガさんだった。

『言い訳をさせてください。違うんです、とりあえずいろいろ違うんです。いや、あの本当、誤解しないでください。とりあえず、後で円卓の間に集合で！』

## どうしようもない話

後悔の極致にあらうと、完全に取り乱すことはできなかった。いつそ激しい怒りに突き動かされたままこの場から去りたかったが、感情が抑圧されると、いろんな義務感にそうもいっていられなくなる。

まだ、この場を収めるといふ面倒な仕事が残っていた。

あろうことか、自分が創ったNPCにウルベルトを拒まれたことへの腹立たしさ。

しかしそれとこれとは別に仲間の存在を重ねるパンドラズ・アクターにはほかのNPCたちから嫌悪の視線が向けられるのも、モモンガの中で不快な痼りになる。

自分自身がパンドラズ・アクターを見るのが嫌なことと、その視線が気に入らなかつたことから、彼をさつさと元の場所に戻すことにした。

「パンドラズ・アクターに無期限の謹慎を命じる。謹慎を解くまで宝物殿での仕事に従事している」

冷たい声音で命じると、ドツペルゲンガーは仰々しい仕草でその命令を受け入れた。

それに感情が動かない程度には、モモンガの中には複雑なものが渦巻いていた。

(あれ、なんで死んでるんだろ、あの子)

とりあえずネイア・バラハとの話は仕切り直して翌日に持ち越させよう。

そう、告げようとしたら本人が生気の失せた顔色で椅子に座ったまま事切れていた。

人が死んでいるというのにとっても冷静で、ただただ唐突に死んでいったことが疑問だった。もしかして発作の持病持ちか何かだったのか？

モモンガが首をわずかに傾げていると、ヘロヘロが『モモンガさん、スキル使ってますよね。あの子、それで轢死してましたよ』と小声で教えてくれた。

「え？」

(そういえば、うっかり絶望のオーラ纏ってたな。これで轢死？ たかだかオーラに轢き殺されたの？ オーラって人間を轢き殺せるのか？)

恐怖効果と能力ペナルティの効果しかもたないこれに、なぜ？ ギルド武器で強化されているかもしれないが、なぜそれだけで死ぬんだろう。

人を殺してしまったかもしれない罪悪感よりも、モモンガの中に湧いて出たのは「手間がかかって面倒だなあ」という感覚。モンスターを捕縛するクエストで間違っただけ対象を殺してしまったときの、億劫さに似ている。

(フレンドリーファイアも解禁されているみたいだし、ウルベルトさんと会う時は気をつけなきゃ。あ、リーザさんとミーシャちゃんに死体を見せているのはダメだな。一旦、たっちゃんの部屋に行ってもらおう)

そんなふうに平然と思えることに、なにかが違うだろうと警鐘を鳴らすものがあるが、それにかまけている余裕はなかった。

「すみません、たっちゃん。今日は夜も遅いし、お二人には休んでもらっていいですか？ 話を聞く空気でもなくなっちゃいましたし」

たっちにも課金アイテムのメールを送ったから、二人を部屋に送り届けた後にも円卓の間に来てくれるだろう。

聖騎士は二人の視界にネイア・バラハの遺体が目に入らない位置に立ちながら応じる。

「そうですね。緊急事態だから言いだせませんでしたけど、さすがに理沙と美沙はそろそろ休ませたいと思っていました。

ルプスレギナを……いや、この場合はペストーニヤか。セバス、その少女をペストーニヤに介抱させてやってくれ。あとは頼んだ」

ナザリックにおける信仰魔法のスペシャリストの元に少女を運ぶように執事に命じ、たっちは二人を連れて早々に引き上げた。

「ネイア・バラハに対する情報収集は、明日……といつても、日付はも

う変わっていたな、翌朝に改める。今日は解散するので、各自休息を取りつつ、職務に戻り忠義に励め。

……お前たちまで私を失望させてくれるなよ」

釘を刺すような捨て台詞とともに、モモンガは指輪の力で六階層から転移する。

拜謁の姿勢をとったNPCたちは、そのようなことは絶対にありえないと否定する間すらもええ、その姿を見送ることとなる。

一人残ったへ口へ口は、細々としたNPCたちへの指示や、後継者となつていくはずだがNPCであったせいでギルドメンバーからは取り残されがちのイリニへのフォローを終えてから、

(ホモの言い訳かあ、できれば聞きたくない類の話だなあ)

とぼやきながら嫌々円卓の間へと転移した。



リーザとミーシャを先に休ませて、男三人だけで円卓の間に集まった。

そこにはなんとも言い難い奇妙な空気が流れている。その居心地の悪い見当違いの生温い気遣いムードに、モモンガは全力で抗った。

「違うんです、メールでも言いましたが、誤解しないでくださいね。なんだかこう、俺がウルベルトさんを好きみたいなことを言ってしまった気がしますが、お願いですから、勘違いしないでください。そうじゃないんです。本当に、そうじゃないんです」

ガンガン発生する精神抑制が意味がないくらいに、本音を勢い余つて吐き出してしまった後悔と向けられる誤解に心乱れた。

人に聞かれたら絶対に誤解されるような重い気持ちだと理解していたからひた隠しにしてきたのに、怒りに我を忘れていた。

「え、どの辺が誤解なんですか？」

「大丈夫ですよモモンガさん、今更そんなふうにごまかして自分を偽る必要なんてありませんよ。」

私も理沙もそうだったことに偏見はないので、安心してください。

モモンガさんが同性愛者でも、友人なのは変わりありませんから」

へ口へ口とたつちは全く取り合ってくれなかった。へ口へ口は聞

く耳を持たないし、たつちのおおらかでさわやかな気遣いは、むしろモモンガの胸を深く抉ってくる。

「だいたい、モモンガさんの気持ちは昔からダダ漏れでしたから。ペロロンチーノさんと一緒にいるときなんて、嫉妬が特にわかりやすかったですよ。二年前から戻ってきていたギルメンはみんなモモンガさんの気持ちは知ってるから、無理に隠すことなんてないんです。

でも無理矢理はダメだと思うので、再会したときはウルベルトさんの意志を尊重することは忘れないでくださいね」

「え？」

目の前の聖騎士は今、なんとのとまった。

「昔からって、あの、えー！」

モモンガは頭を抱えた。

寄せては返す波のように、モモンガのいたたまれなさによる動揺は絶頂に登っては急激に下がることを繰り返す。

ペロロンチーノと二人だけで話しているとなんだかおもしろくない、さりげなく割って入ったり、無理矢理ウルベルトの注目を自分のほうに持つて行かせた記憶は、多々ある。

いい歳をした大人にあるまじき子供じみた感情で、そんな感情に振り回される恥ずかしさがあったから、モモンガとしては内心の妬心を曝け出さないように、かなり気を使っていたはずなのだ。

「あの、私ってそんなにわかりやすかったですか？」

「とても分かりやすかったですよ。」

それにうちには観察眼の鋭い女性がいいますから。私たち男性陣が気づかない些細なことまで見ていて、目撃証言の多彩さには目をみはるものがありました。

これが取り調べだったら、私は問答無用でモモンガさんにさつさと黒判定をしますね」

たつちはモモンガにとどめを刺した。

「んひー……！」

モモンガの骸骨の口から悲鳴がほとばしった。精神抑制も追いつかない。



「前からそうだったんですかー。へー。」

モモンガさんはホモつてことで。言い訳もなにもないですよねえ。それではかいさーん」

へロへロが勝手に場を切り上げようとするので、モモンガは慌てて待ったをかける。

「待つてくださいって。私は別にウルベルトさんと付き合いたいとか、その、えーとキスしたいとか思ったりしたことありませんから！セクシヤルな欲求は一切ないんです！ 私は昔から女の人が好きです！」

「依存とか執着とかほざいた人が何か言ってますよお、たっちさん」  
「確定黒が何か言ってますね、へロへロさん」

はっはっは、とわざとらしい笑い声と共に仲のいい掛け合いをしている。

モモンガは必死に訴えた。

「あの、依存とか執着は、その……お恥ずかしいことにみんながいなくなったことで、一時期本気で病んでいた時期がありまして、そんなときにウルベルトさんから俺にギルドを辞めて欲しくないなんて言われて、俺にはウルベルトさんしかいないように、ウルベルトさんにも俺しかいないんじゃないかって一度思ってしまったら、ずるずると……」

その発言に、三人の間にしんみりとした空気が生まれた。

「パンドラズ・アクターが貴方から本音を聞き出そうとするのを見て、モモンガさん、私は貴方に謝らなきゃいけないと思っただんです」

突然真面目な声で言います。

「へロへロさん？」

「私はけっこうギリギリまで長く入れたほうだから、彼の存在理由を知ってます。そんな彼だから、何事もなく私が受け入れられているのが許せなかったんじゃないかと思っただんです。」

それで、受け入れられるのが当たり前のような厚かましい態度を取っているのって、なんか違うなああって感じて。

途中でこのギルドに来れなくなった私が、このままなあなあにその

まま受け入れられるのは虫の良すぎる話だと反省しました。

まあ、パンドラス・アクターの暴露させたい目的が全然違くて、最終的にキャッチボールをしていきなり渾身の暴投くらった気になりましたけど」

へロへロは頭を掻いた。

「パンドラス・アクターがモモンガさんから引き出したかった本音は全然違かったけど、私はそれによって気づかされることがありました。」

私は、何もしていなかったんですね。すみません。

モモンガさん、今までナザリックを守ってくれてありがとうございました。たちきさんも、戻ってきてからモモンガさんたちと一緒にギルド維持をしてくれて本当にありがとうございました。

みんながいてくれなかったら、私はあんな風にいきいきと動くメイドさんたちに会えませんでしたから。

今まで自分がなんとか生きるためだけに働いていましたが、これからはナザリックのために働いていこうと思つています。

あの、だから、これからよろしくお願いしますね？」

「は、はい……い！」

モモンガは歓喜をこめて頷いた。

このいい感じの雰囲気のまま話が終われば、モモンガの心の平穏を保てたわけだが。

「でも、それとこれとは話が別で、モモンガさんはホモですよ」

感動的な空気は無慈悲なホモ発言でへロへロは完全破壊した。

「やばい発言多すぎですからねー。言い逃れできませんよ」

「いつも丁寧な言葉遣いのモモンガさんが、さん付けを忘れて俺のウルベルトって相当力強く断言したところなんて、少し鳥肌たちましたね。あの瞬間、モモンガさん本気でしたよね。私の知る限りお二人が恋人同士になっていたなんて聞いてませんし、ただの友達の状態での発言って、なかなかすごいものがありましたよ」

うう、とモモンガは痛いところを刺されたように呻く。

「それにも理由があるんですよ……」

しどろもどろに言い募りはじめた。

「さつきも言ったとおり、すぐく申し訳なきように、止める権利はないけれど俺に出来れば辞めないでほしいです、って、すぐためらいがちに言われたことがあるんです。ああ、なんて言えばいいのかな、その時のウルベルトさんは小さい子供が手を伸ばそうとするんだけど直前でなにか我慢するようにぎゅっと握り込んでしまうような感じで……」

ウルベルトさんと一緒にいて、そんな感じのことが何度かあったんです。何かを掴もうとするけれど、掴む前から諦めてるように見えること。私は、それを掴みたくなくなっただけです。本当はずっと、掴みたくて仕方がなかった。諦めて逃げられる前に力一杯掴んで、俺に渡せるものなら自分ごと全部やるから、そんな寂しそうにするのはやめてほしいって言いたかった。それを言っただけでウルベルトさんの悩みを全てどうにかできるような能力なんてなかったけど、一緒にいれるくらいのことではできたと思うんです。

それで、まあ何かを渡すなら俺も何かを欲しい、っていう下心ではないですけど、等価交換とも違うなあ、言葉が出てこないです。

俺は、他の誰にもあの人の手を掴ませるつもりはなくて、俺だけがあの人を掴んで救いたかった。何ができるわけではないけど、俺の差し出せるものすべてあげるからその代わり、俺は貴方の全部が欲しい……みたいなことを勝手に思っていた部分がありまして、それがあの滅茶苦茶恥ずかしい俺のウルベルトさん発言に繋がっちゃって……」

俺のモノだなど言うのは、さすがにこれはちよっとおかしいと思っていたから、口に出さうになっただけの時も誰もいなくてもずっと我慢していたのだ。思うことも躊躇われ、頭の中でも仲間だとかギルドメンバーだとかいう言葉に置き換えていた。

言葉という形にしてはつきりさせてしまうのは恐ろしいくらいの、あまりにも大きすぎる執着だったから。

その存在を失ってしまったときの喪失感を想像すると怖かった。いつ何時いなくなるかわからなかったのだ。

ゲームという縁が切れてしまったときの防波堤として、その欲求からは距離を置いて蓋をしていた。

いなくなつて欲しくはないけれど、いなくなつたとしても、ちゃんと別れを告げられるように。

それが、今や。

かつては、我慢できていたのだ。

別離を告げられたときの傷を浅くするために、特別な感情の中にひそむ、さらに深い気持ちを見捨てた。

もう、そんなことは無理だ。

この骸骨の体はひどくおかしい。感情の抑圧はするくせに、自分の中にある欲求をむき出しにさせて強く意識させる。

鈴木悟という人間がもっていた良識とか常識、思いやりを削ぎ落として、言い聞かすようにしてごまかして形を歪めて隠してきたものはつきりと見せつけてくる。

別離を恐れて、執着をぶつけて嫌われるのを恐れて、自分の中に眠る感情を知らないふりなどできない。

近づきすぎて、なんて思われるのかわからなくて怖かった。図々しいと嫌われたりしないだろうか。気持ち悪いと思われたりしないだろうか。

そんな保身のせいで、逃げる手を何度も掴み損ねていた。

けれど、もう、モモンガは恐れない。

もし再び会えたなら、その手を掴むことをためらわない。

逃げられる前に、絶対に捕まえるのだ。

絶対に、逃がさない。

いなくなる言葉など、言わせてやるものか。他の誰かに告げられるそれは許容できても、ウルベルトからのそれは許すつもりなんてない。

あの人は自分の前からいなくなるなどない。

絶対に、逃がさないから。

ぶつけられる依存と執着に嫌気がさして拒まれて逃げられそうになつても、離してなんかやらない。

だって、あの人が欲しい。

あの人は、俺の。

「できることなら、欲しいんです。ていうか、自分のものにします。絶対」

考えすぎていたせいで、この場では絶対にこぼしてはならない本音がぼろりとこぼれていた。

「あ、しまった」

話を聞いていた二人は、雲行きがあやしいどころか土砂降りのようにウルベルトへと降り注いでいる愛情に、砂糖を吐くような思いだった。

「その牽制がね、アウトなんです。モモンガさん」

「ストップ。もう十分です。聞いているこつちが胸焼けします。これはアウト、アウトですよ、モモンガさん。甘酸っぱすぎてスライムの体が溶けそうなんですけど、何これえ。なんでこれで恋じゃないって言うってんのうちのギルマスは」

「あー、恋って素晴らしいなあ。理沙と出会ったときのことを思い出します。今、無性に理沙に会いたいなあ。とりあえず、もう解散しましょうか」

「待ってくださーい、本当に違うんですから！ 友情です、私はウルベルトさんに友達以上の関係は求めていないんですってば！」

慌てるモモンガに、たっちはぽんと肩に手を置いた。

「正直に告白して、あまり自分の感情を押し付けずにウルベルトさんの気持ちも尊重すれば、ちよつとは脈ありだと思いますよ、モモンガさん。」

ウルベルトさんは、モモンガさんから向けられる好意に友情だって言っただけながら否定はしても、嫌がったり拒んだりするようなことは言っていないませんでしたからね。割とまんざらでもなかったんじゃないかなあ」

「はいいっ!? ちよつと待ってください、もしかしてウルベルトさんにも、私の執着が割と筒抜けだった!?!」

「あれで本人にバレてないと思えるその抜けっぷりはすごいですね。」

完全に筒抜けでしたよ。『モモンガさんのアレはあくまで友情だから、恋心とかじゃないから。お願いだから気にしないで』っていう苦い顔で必死に言い訳してました。あれはモモンガさんの気持ちを気づいたうえで黙ってただけですね。

でも、変に指摘して気まずくなりたくないから、モモンガさん本人には何も言わないでくれて頼まれていたので今まで何もいいませんでした。……その時は人様の恋愛事情に深く首を突っ込みたくなかったから、私も言われた通り気にしないようにしていました。

こうなると、私から言えるのはこれくらいですね、モモンガさん頑張れ！」

「モモンガさん頑張れ！」

へロへロとたつちの棒読みの応援に、モモンガは膝から崩れ落ちた。

「ウルベルトさんにもバレていたとか、恥ずかしさのあまり死ぬそうなんです」

震える声で告げる。床に膝をついたまま絶望した。

うう、でもウルベルトさんが誤解していなかったなら、まだマシなのかなあ。

ぶつぶつとつぶやきモモンガは煩悶する。

「恋人ができてても気にしないとか、結婚していても気にしないとか、自分を無理に偽らないでもっと正直になったほうがいいですよ、モモンガさん。ぶっちゃけた話、ウルベルトさんに恋人ができれば嫌だしよ」

へロへロはうづくまつたままのモモンガの肩を叩く。

「いや、でもそこは全く気にならないんですよ。本当ですよ？ ウルベルトさんの特別を恋人に取られるのは嫌ですけど、俺ノーマルですし、恋人になりたいわけじゃないんです」

よたよたと立ち上がり、モモンガは潔白を証明するために断言した。

「でも、恋人や奥さんできたらそちらを優先するようになるんじゃないかなあ」

「優先させませんから」

へ口へ口の仮定の話に、モモンガはきっぱりと言った。

「その理屈はおかしい。おかしすぎますよ、モモンガさん」

頭をかかえるへ口へ口に、モモンガも言いにくそうに弁明する。

「おかしいのはわかるんですけど、アンデッドの体になってしまったせいか、物事の考え方がかなり変わってしまったって。困ったことに、なんだか箍が外れてしまったみたいで、そういった理屈や理性的なことが全く伴ってこないんですよ。」

友達よりも恋人を優先する？ そんな他人の当たり前なんて知ったことかというのが本音なんです。

人間だったころよりも力があるっていう自信がついちやっただせいなのか、それともアンデッドの体の特性なのかは判別つきませんが、ウルベルトさんに関してすぐわがままになってしまっているっていうのが実情で……

かつてこうだった、っていう常識的なことを頭の中で考えることができるけど、それによって不快なことを許容できるかは別問題として脳内で処理されていて、そこは譲れないです」

「うーわー。ウルベルトさん御愁傷様」

「何度もいいますがね、仮に再会できたら、ちゃんとウルベルトさんの意思を大事にしてあげてくださいね」

たっちは内心、モモンガの手が届きようがないリアルにログアウトできているほうがウルベルトにとって幸せだろうな、と友人の平穩について思いを馳せていた。そうになると、モモンガは手に入らなくなってしまう存在に絶望しそうだから、やっぱりこの世界にいて欲しいと同時に思うわけではあるが。

「それと……体が骨になったことでブツがなくなってしまうって、恋人を作るとかそういう欲求が低くなっている気がすんですよ。アルベドのあの胸を見ても全っ然ムラムラしませんでしたし。」

だから、やっぱりウルベルトさんは私にとって大事な友人なんです」

モモンガの告げた衝撃の真実に、男二人はつい股間を注視してし

まった。その視線は、モモンガにとって非常に痛いものだった。モモンガの悲痛さに気づいたのか、二人は気遣うように慌ててそらし、あー、と気まぎれに声をもらす。

「それを言うなら私もそうですね……これに関してはお互いドンマイトってことで」

へろへろはブツをなくした仲間同士、励ました。たっちは同じ男としてかける言葉が出てこず、黙っていた。

「今まで恋人なんていたことないし、アンデッドじゃあ恋人ができる気もしないから問題ないですけどね。だいたい、できたところで感情の比重が二の次になるのは目に見えていますし」

「ウルベルトさんを、できるかどうか分からない恋人という存在よりも大事にするから、恋人なんていなくても問題なしですか？」

「そういうことですな」

ここまで言葉を尽くしたのだから、誤解は解けただろう。モモンガは持ち前の善良さで仲間を信じてしまった。

とくにへろへろは男の沽券を失ってしまった同士なんだ。きっとわかってくれるはず。

けれど、その信頼は即座に裏切られる。

「モモンガさん、それをね」

神の使徒が咎人に許しをあたえるような厳かさで言う。

「プラトニックホモって言うんですよ」

へろへろの声には、突き刺さって胸が痛くなるくらいの労りに溢れた優しさがあつた。

モモンガの弁明は失敗に終わった。



## どうしようもない話2

ヘロヘロは後継者として九階層に住居を移すかどうか提案していたが、父親であるウルベルトが手ずから作ってくれた部屋があるからと、イリニは丁寧になんか断っていた。

ウルベルトの持つ気配を丁度半分に割ったような威圧を持つイリニとネイアの遺体を抱き上げたセバスを、ヘロヘロが七階層と九階層に先に連れて帰った。

至高の方々の気配がこの場から完全に消えた。

重いものが地面に落ちる音がした。緊張の糸が切れた者が、重圧から解放された反動で気絶したのだ。

「あースワン、スワロー。こいつらレベル低いもんなあ」

死の支配者に相応しいあの絶対的オーラに触れて死ななかつただけ御の字とでもいうように、イーグルは呑気に倒れた兄弟の介抱をする。

空気を読まない態度の彼に、張り詰めていたものが一気に緩んだ。

それぞれ20代、30代のレベルでしかない竜人兄弟の上二人は、脂汗を流しながら地に伏していた。

モモンガの赫怒が入り混じった死と恐怖の威圧は、レベル40代になつてようやく意識を保っていられるものだった。

シズは機械仕掛けの体を、酷く重たげにしていた。

ホークは地に手をつき、立ち上がることも不可能な様子で乱れた苦しげな呼吸を繰り返している。

そんな中、アルベドが悠然と立ち上がり、優雅に翼がはためかせた。立ち上がることができる者達は、それに続く。

座り込む者もおり、プレアデスの中でもナーベラルだけがやっと足腰に力をいれることができた。

竜人の兄弟も平然としているのは末弟のイーグルだけで、やっと立てているのは真ん中のピジョン・ブラッドだ。

「モ、モモンガ様、すごく怖かったね、お姉ちゃん」

「ほんと、そうね。あたし、押しつぶされそうだった」

双子はどこか惚けたようにしていた。

幼い子供には刺激が強すぎる狂おしい愛情を見せつけられ、それを脳内で上手く咀嚼できていないようだった。

「あれが支配者としてのモモンガ様。そして男としてのモモンガ様なのね……！」

そんなお子様達を尻目に、アルベドは陶然とした表情で虚空を見つめる。

やがて天使のように清純で美しい横顔の淫美な唇が、奇妙なくらいに深く深く裂け笑みに歪んだ。

その笑みをすぐにあらためたアルベドだが、興奮のあまり情欲に濡れた瞳の色を変えられないまま、守護者統括としての言葉を告げる。

「ウルベルト様の話題に触れるまではモモンガ様はお持ちの力を行使されなかった。

拒絶することを選べばどうなるか……それをわかりやすく示してくださいませのね。

あれは愛する者が傷つく方が一の可能性でも許さないという決意の表れ。それは一方で、私たちがウルベルト様を拒み、傷つけるかもしれないという可能性をモモンガ様に抱かせてしまったということ。ナザリツクの下僕としてそんな不信を持たれるなど許されることではないわ。

至高の方が例え人間であろうと、その忠誠は変わらない。

あえてあのように演じたパンドラズ・アクターはともかくとして、それが伝わっておられなかったのは、私たちの示す忠誠がまだまだ足りないということ。

たち様様に抱かせてしまった懸念と同様にそれを払拭するため、私たちは今以上に励まなければならぬわ」

アルベドの宣言に皆の顔が引き締まる。苦しげにしていた者も、気力で息を整えて決然とする。

「下僕トシテ、至高ノ方々ニ我々ハ完全ニ信賴サレテイル訳デハナイトイウコトカ」

不甲斐なさにコキユートスは打ちひしがれているようであった。

「そういうことでしようね」

「ちいと待ちなんし。あのナザリックの下僕としてありえない欠陥品のパンドラズ・アクターが、演じていたとはどういうことえ？」

パンドラズ・アクターに不快感を抱いた者はあの場では二種類いた。目的を察しながらも、不敬を口に登らせる下僕としてあるまじき行為を許しがたいと憤ったもの。そして言葉通りに受け取ったものだ。

シャルティアは勿論後者である。

「あらシャルティア。それは酷い誤解というものよ。

全てを察したうえで彼のことを嫌悪するのは個人の感覚の相違でとやかく言えるものではないけれど、その真意は理解し忠義の姿勢は我々も見習うべきよ」

「見習う……？ アルベド、ぬしは何を言っているでありんすか？

あのようにモモンガ様をお怒りにさせる発言をしたパンドラズ・アクターの何処に忠義があると言うのでありんすの？」

「アルベド様……理由があれど至高の存在を拒むような嘘をつくことを見習えというのは、下僕としてあつてはならないことではないでしょうか」

縦ロールを乱した様子のソリュシャンが、いささか咎めるような口ぶりで言った。

守護者統括という至高の方が決めた地位に膝をつき敬意を払っても、創られた者達の立場は本来であれば対等。

アルベドという個人の意見に賛成できなければ、不満を募らせるのも当然だ。

女はそんな者達に余裕のある笑みを見せた。

「パンドラズ・アクターの忠誠の凄絶さが本当に分からないのかしら。

私はモモンガ様のためならばなんでもできると思っていたわ。

主人のために死ぬのは恐ろしさなどなく、忠義に僅かでも疑いがあり不要だと判断されたなら躊躇いなく自害するわ。これは、ここにいる皆も一緒でしょう。

でもね、その死は主人にとって誉れ高き死でありたいという愚かな

願いが少なからずあるのよ。

それは絶対の御方の真の忠誠のためではなく、自己満足のための唾棄すべき蒙昧な願いなの。

至高の存在のためならば、いかなることをも遂行すると言葉だけは過剰に装飾していながら、それには真実が伴っていないかった。

私は、モモンガ様のために自ら嫌われるような策は取れなかったわ。それが、モモンガ様のためになるというのに、考えつきもしなかった。嫌悪されるのを恐るがゆえに、取れるはずの手段から目をそらしていたのよ。これが怠慢と言わずになんと言うのでしょうか」

その事實は、アルベドを打ち拉がせる。

ナザリツクの同胞達の忠誠心は優劣をつけるものではなくても、内心では自分のそれがなんびとに劣るものではないという絶対の矜持がかつてないほど失われた。

創造主のためであるならば我が身を投げ打ち、主人にあえて憎まれ忠誠を疑われたまま殺されようとも構わないという強靱なパンドラズ・アクターの意志に、下僕としての完全な敗北を刻まれた。

下僕にとつての喜びは、至高の四十一人の役に立つこと。続いて相手にしてもらえること。嫌われ、憎悪されるなど考えたくもないことであつた。

アルベドは一番大事な存在意義と、愚かしい欲求が混在したせいで、最も大切な役に立つことができていなかったのだ。

「私はつい最近、モモンガ様の命により新たな『在るべき姿』を定められたわ。あなた達ならば分かるでしょう？ 私たち被造物は形を定められるときに、創造主の持つ『何か』を受け取る。

『イリニ様の母代わりたれ』とその形を下さるときにモモンガ様の中にあつたのは、ウルベルト様への秘めた執着と愛情。

一途な、そして決して知られてはならないという決意を秘めた片思いであらせられた。

皆もどれだけの想いをモモンガ様も抱えていられるか、その一端を理解できたでしょう？

モモンガ様は、あれほどまでにウルベルト様を愛しておられなが

ら、それをずっと隠し通すつもりでおられた。

それは同性同士であることが理由なのでしよう。モモンガ様に想われることでほんのわずかでもウルベルト様が奇異の目を向けられないように、感情をあらわにすることを耐えられていたの」

アルベドの玲瓏たる声が興奮で上ずる。

熱を込めてモモンガは秘密にしようとしていたと強調するが、本人が隠しているつもりでも、隠しきれていたかは別問題である。それは幸いにも彼女達を知る由もないことだが。生温い応援のような同情のような変な気の使われ方をして、針のむしろの上にいる痛みにウルベルトが耐えていたことを知らない。

「パンドラズ・アクターはその忠誠心の高さからモモンガ様が本心をひた隠しする辛い恋をしないよう、自らが憎まれ役になることで、ナザリックの皆に知らしめた！」

それでもしなければ、モモンガ様はずっと苦しい片想いをする事になってしまおうから……

殺される覚悟でもって、モモンガ様に憎まれて本心を吐露させることで秘密を暴いたの。

その結果が今よ。

私たちは知ってしまった。知ってしまったからには、モモンガ様はもう、何一つその気持ちを偽られる必要性はなくなるの。

それが、パンドラズ・アクターの忠誠。

……シャルティア、これでもまだ貴方はパンドラズ・アクターを不忠であると詰るのかしら」

シャルティアは押し黙った。

パンドラズ・アクターの真意を見抜けなかった数人も口を噤み、今までの自分たちの忠誠のありようを振り返り、深く反省した。真意を察していた者さえ、その忠誠のあり方に深く考えさせられた。

敵わない。

そんな敗北感が刻まれる。

創造主のために、創造主に憎悪される選択肢をあそこまで堂々と選びとれるだろうか。

己の心に問い、首を振ったのだ。

「モモンガ様はウルベルト様をあのように深く激しく愛されているのでありんすね」

シャルティアは、ペロロンチーノへの愛を隠そうなど思ったことはない。隠す必要などないものだからだ。

けれども、もし秘密にしなければならぬようなことがあったときの悲痛を想像する。それは、なんて辛いものだろう。

想像を絶する辛苦からモモンガは解放された。

アルベドが語る通り、その解放はパンドラス・アクターの一心の忠誠によつてもたらされたものだ。

不忠などと謗れるものではない。

己の浅い考えを恥じると共に、シャルティアはモモンガの孤独に心を馳せた。

愛する者と引き裂かれる悲しみ。それをよく知るシャルティアは、ナザリツクの至高の主人のために必ずやウルベルト・アレイン・オードル様を見つけ出さなければと鎧姿で毅然と決意する。

今にも手折れそうな華奢な体つきが目には焼き付いている。

他者を圧倒する力の気配を失い、力を奪われたか弱きお姿。その方がどことも知れぬ場所で行方不明であることを放置するなど、守護者としてあつてはならない。

その御身になにかあつたらと想像すると、不甲斐なさに狂おしくなり胸が締め付けられるようであった。別に矯正下着をつけているからではない。

「ウルベルト様ハ明美様ト御結婚サレテイル。醜聞ヲ避ケル為ニ、ソノ感情ヲ必死デ押シ堪エテアラレタノダロウ」

ウルベルトの妻でありナザリツクの後継のイリニの母親を悪く言える度胸がある者など誰ひとりいなかったが、皆大なり小なり明美へあまりよくない感情を抱いた。ナザリツクの至高の身内である女性に向けるべき悪意ではないと自制するが、モモンガの幸せを阻害する存在でもある事実は、彼らに苦く突き刺さる。一律背反する感情。

ナザリツクの者たちにとって、目の上のたんこぶになってしまった

のだ。

やまいことは違い、彼女はナザリックに再び訪れることはなく、その存在は遠いものとなっていたのに、肝心なときになってその存在を嫌に思い出させる。

彼らが向かいたい幸せを、阻んでくる。

そのうえりーザやミーシャと違い、彼女はナザリックの至高の一員となつたわけではない。

ウルベルトややまいこを介して向けられていた敬意の質が、格段に下がる。

彼らの中には快く明美の存在を受け入れられない理由ができてしまった。

やまいこの妹であるが、ただの人間種だ。それが余計に拍車をかけた。

「あたしたちって本当にダメな下僕ね」

「お姉ちゃん……」

「大秘術の後に至高の方達がナザリックに残ってくださいしたのは、きつと幸運と偶然の賜物で、私たちはそのために努力なんて何一つしていなかった。無能の誹りをうけてもおかしくないのに、御方々はとつともなく御優しいから何もおっしゃられない。

そしてこんな無能な下僕しかいないナザリックにいてくださるのは、あたしたちが必要だからではなくて、あたしたちの無能を許せてしまう深い愛情があるから……でも、それに甘えるわけにはいかないわ」

「そ、そうだね。お姉ちゃん残ってくださいさつた方々のためにも、ボクたちは今まで以上にもっともっとたくさん頑張らないと」

マーレの中には形容しがたい、いや形にしてはならない疑念があった。いや、疑念を形にすることは問題ではない。形となつたものに対して、負の感情を抱いてしまつてはならないと必死に見ないふりしていたのだ。

最高の支配者は言った。

『帰つてこない他の皆の意見に関しては、もしも会えるときがあれば

そのときにもう一度話し合えばいい』

それ即ち、帰ってきてくださらなかった方がいたということ。

マーレは無意識のうちに、姿を見せなかった方達も大秘術の贄と  
なられていたのだと思っていた。

だが、そうではないのだ。

もやもやとしていて飲み込みがたい思いが胸の内に巣食っている。

自分たちを、必要がないと捨て置くのは構わない。アルベドの語る  
通りそれだけの忠義を捧げられず、価値を見せられなかったこちらの  
怠慢で、こちらの非なのだから。

けれども……

(も、もしも至高の方がそろっていたら、大秘術でぶくぶく茶釜様たち  
が半身を贄とする必要なんて、なかったのかな)

アインズ・ウール・ゴウンに名を連ねていた方々は、それだけの大  
いなる力をお持ちだったのだから。

全員が揃わず、数少ない至高の存在で大秘術を完成させるために、  
命の半分が使われたのならば……

マーレは目の前が暗くなったような気がした。

これ以上考えることに対して警鐘を鳴らすのに、考えは止まらな  
い。

(な、蔑ろにされたってモモンガ様がおっしゃっていた。あのひとた  
ちは、去って行って、帰ってこなかった)

ナザリックに残り続けたモモンガとウルベルトというとてもお優  
しい方たちを。

家族を連れて、真っ先にナザリックに帰ってきてくださったたつ  
ち・みーという誠意ある騎士を。

小さな子供が好きで、自分たち双子を家族のように可愛がってくれ  
た陽気なペロロンチーノを。

戻ってきてくださるようになってから、六階層に来てよく構ってく  
ださったやまいこに武人建御雷、そして二式炎雷という方達を。

そして、何にも代えがたい愛すべきマーレの創造主たるぶくぶく茶  
釜を、蔑ろにして、見捨てたのだ。



裏切ったのだ。

不敬な想像にすぎないものなのに、マールレの深い場所に黒いシミのような感情が落ちた。

拭いたくても、拭えないものだった。

そのシミはじわりじわりとマールレの中で広がっていく。

憧憬と尊敬を、真逆のものへと染め上げていく。

ぶくぶく茶釜様、ペロロンチーノ様、やまいこ様、武人建御雷様、二式炎雷様。この五人のお方々は、大秘術のはじまりのために十日ほど前に既に身をくべられていた。

今日は、気配をほんの短い間に数年ぶりに感じた方々もいた。きつと、モモンガ様の呼びかけに応えて、大秘術の完成のためだけに帰ってこられたのだろう。

仲間を、裏切らなかつたのはたったそれだけの方々しかいない。

おおよそ四分の三の者たちは、絆などなかつたように至高の方々が半身が喪おうと素知らぬふりをしているのかもしれない。

その可能性に思考が至ってしまった瞬間、マールレの中で掛け替えのない大事であったはずのものが、いとも簡単にガリガリと削れ落ちた。

「が、頑張るんだ……」

失態の挽回のために、仕事を与えてくださった。

今のマールレにとって一番大事なのはそれだった。

お優しい方々のために、ナザリツクを家としてくださる方々のために、最後に裏切らずに帰ってきてくださった方々のために、自分たちを生かすために犠牲になられてしまった方々のために、マールレは寄せられる信頼にふさわしい成果をあげなければならぬ。

心の中で削れ落ちたものを容赦なく踏みにじり、マールレは大事にしなければならぬものに対してきつぱりと線引きをした。

整理がついたせいだろうか。マールレはすつきりした気分になっていた。

一瞬前まで、どうしてそれが大事だったのか理解できないほど、打ち捨てた至高であった存在の影はマーレの中で剥離していた。

「ほんと、頑張らなきゃいけませんねマーレ様。」

モモンガ様の恋愛成就のためにも、オレも一生懸命働かないと！

明美様はさ、めつきりナザリックに来られなくなつたし、イリ二様にお会いになっているご様子もないし……円満になんとかかなると思うんですよね。ほら、離婚とかね。」

いざとなつたら重婚だつていいんじゃないですかね？」

イーグルはマーレの決別の覚悟を気取ることなく、単純に言葉通りに受け取り呑気に笑った。

作成時、ギルメン内で通称『るし★ふぁーの悪意』と呼ばれていたイーグルは、カルマ500とナザリック内でトップの善性を誇る。「カルマ悪のやつらばつかりの中にいるカルマ善つて、善意で物事をひっかきまわしてトラブルばかり起こしそう」というるし★ふぁーの思いつきの設定を徹底的に与えられている。同時期に作られたNPCの中では唯一のレベル100だ。

ナザリックの防衛機構が完成しきつた後に創られたことと作者のこだわりで、最高レベルでありながらギルド内の演出のためだけの場所に配置されていた。

「イーグル。ウルベルト・アレイン・オードル様の奥方で、やまいこ様の妹でもあらせられる明美様との仲を、私達が勝手に憶測と願望で決めるべきではないわ」

ぴりつとした空気のユリが軽率な発言を窘めた。

厳しい教師に叱られた子供のようにはあゝ、と恐々と返事をし、イーグルは身を小さくした。

「ああ、でも。やまいこ様のご家族を想うお気持ちを蔑ろにせず、どうすればモモンガ様をお幸せにできるのでありんすか？ アルベド、何か考えはないのでありんすか？」

「今はまだなんとも言えないわ。難しいことだけれど、モモンガ様のためにも必ず思いつかなければならないことね」

その脳内で、障害となる女が現れたならば必ず殺す謀略をしている

ことなど欠片も見せず、アルベドは真面目な顔で考えていた。

とんでもない三角関係の解決にいかに関与できるか。

口々にモモンガの片思いの成就をいかにお手伝いできるかを言い合っている。

絶対の智者たるモモンガのことなので、自分たちが手を回さなくても結ばれそうであるが、それとこれとは別に創られた者として少しでもお役に立ちたいのだ。

恋愛事情が絡まっているせいだろうか、積極的な発言は女性陣たちが多い。

「君たちは勝手なことを言いすぎじゃないか？ モモンガ様の望みを主眼に起きすぎて、ウルベルト様の御意志を蔑ろにしているようにしか見えないね。」

今まで一度も口を開かず、黙って聞き役に徹していたデミウルゴスが手厳しい指摘をした。

モモンガの毒気のように侵食する激しい愛情に触れてしまったせいか、そればかりに気を取られていた者たちが気まずそうにはつとすら。

「モモンガ様の幸せは私も望むところであるが、そこにウルベルト様のお気持ちがないのであれば、ウルベルト様の被造物として私は看過できない」

「何を言っているのかしらデミウルゴス」

熱に濡れた女の瞳が、急激に冷えたものへと豹変する。

「モモンガ様に、あのように深く愛されているのよ？ すぐにウルベルト・アレイン・オードル様もそのお気持ちを受け入れ心を開かれると思うのだけれど。」

まるで『ウルベルト様がモモンガ様を拒む』という愚鈍な仮定を前提に考えるなんて、邪推ではないかしら。あなたにしては珍しい愚考ね。

あれだけの感情を前に、男同士や既に結婚されているということとは瑣末だわ。最大の障害は、ウルベルト・アレイン・オードル様がここにおられないことであり、再会さえしてしまえば両者にとって最高

の結末が控えている。私はそう、信じているわ」

「二つの物事を考えるに至り、あらゆる可能性を元に推論するのが当然でしょうか？」

何事においても最高の結末を迎えるためには、綿密な計算と場合に応じた細やかな軌道修正が必要なのが分かっていますね。

盲目的な手前勝手な願望しか見据えず、まるで思考回路を放り投げるような愚言をしているのは貴女ではないかな？」

「それがナザリック外の者が関わっているのならば愚言となるのでしようけれど、ことモモンガ様の成されることなのよ？ 世界の管理者という私たちが及びもつかない存在と渡りあえる存在だと、下僕のとるべき礼も忘れて感極まっていたのは何処の誰だったかしら。

あの方のされることに、間違いなど、なにひとつありはしないの。それは、ウルベルト・アレイン・オードル様にとつてもそうなるはずよ。

モモンガ様は、ウルベルト様をお言葉の通りご自分のモノにされて、そしてこの世のどんな者よりも幸せにするのでしよう。掌中の玉のように大切にされるわ。

だって、今のあの方は力のほとんどを失われてしまったのだから。このナザリックの中で、そして最も安全な腕の中で誰にも奪われないように守られること、それがあの方の安寧には必要よ」

「そのような事態が続けば、いずれ歪みが生まれるでしょう。守られることが安寧などと、よくそのようなことを言えますね。ウルベルト様は誇り高い方だ。守られるだけの状況をよしとするはずがありません。

ウルベルト様の高潔な性格を度外視して、都合のいい上部だけ見ようとしていませんか？

お二人の関係を楽観的にしか捉えられないのはいかがなものかと。私たちが思考停止の怠慢をしいていた気づかぬ間に、決定的な亀裂が生まれ修復不可能なものになってしまう恐れすらあるのですよ」

絶対零度の笑みを浮かべるアルベドは、デミウルゴスの言い分をゆつたりと飲み込んだ。

デミウルゴスの言葉は、下僕としてのものではない。

アルベドへの反論は、この男にしては酷く陳腐だ。私情なく、創造主の御身を慮るだけの下僕としての感情が言わせているのではないからそうなる。

狂おしい嫉妬と情欲を含めた、『男』の本音が漏れ出ている。

「そう……そうなのね、デミウルゴス。」

もしかしたら、貴方の懸念する可能性もあるかもしれないわ。

もし、もしもの話よ？

私からしてみれば、口に登らせるのも馬鹿げている話なのだけれど、もし、ウルベルト様がモモンガ様を完全に拒んだ場合……

貴方はその結果、どうなると思っているの？

私は、それでもモモンガ様は強引に自分のモノになされると思うわ。あれだけの強い執愛を抱いておられるのですもの。

何もかもウルベルト様の御意志など無視されて、我が物にするの。悪魔であったウルベルト様ならば対等に渡り合えたかもしれないけれど、今のウルベルト様は無力だわ。簡単に力でねじ伏せられるから、容易でしょうね。

何処にも逃げられないように、誰にも奪われないように、大切に大切にナザリツクの中にしまいこむ。

執着と独占欲で誰にも見せたくないからと、会えるのはモモンガ様たった一人の場所に隠されてしまうかもしれないわ。

ウルベルト様の特別が他の誰かに奪われないようにするためには、あの方を自分一人だけしか会えない場所に閉じ込めてしまうのが一番簡単な手段だもの。

そうなったら、モモンガ様にとっては幸せでも、ウルベルト様にとっては幸せではないかもしれないわね。プライドの高い方が、世界の管理者をも恐れさせる力を持つていた方が、その力を失ってしまつたばかりに、仲間であらせられるモモンガ様のいいようにされてしまうのですもの。

悪魔であった矜持も……あるいは男性としての矜持も、二人だけの箱庭のような場所で粉々に踏みにじられているかもしれない。

デミウルゴス、もしそうなら貴方はどうするのかしら」  
上部だけはたおやかな微笑を浮かべながら、アルベドは問うた。

## 掘られた墓穴ふたつ

プラトニックホモという烙印を押されたモモンガは、時間を見つけてはそれを払拭すべく頭をひねっていた。

ギルドメンバーがモモンガの言い分を信じてくれなくなつたどころか、意思をもつて動くようになったNPCたちまでもが誤った認識をしているのである。どうやらあの場にいた面々以外にも情報が拡散しているらしく、モモンガの精神的安定が進退窮る状態だつた。

このままでは、ウルベルトが帰ってきたときに多大な誤解を与えてしまう。

過剰なまでの同性愛許容の歓迎にドン引きされて、その原因となつたモモンガが嫌われてしまうことが容易に想像がつく。

嫌われてモモンガの元から離れていこうとしても、抵抗のために立てられる爪の感触ひとつひとつまで楽しむようにがちりと捕らえておくから問題ないといえれば問題ないのだが、出来れば嫌われることは避けたい。

自分の感情の言語化という内情に向き合えば向き合う恥ずかしいことをしながら、モモンガは必死に話を組み立てていた。

今度こそは、誤解を解かなければならない。

これから帰ってくる(予定の)ウルベルトと己の安寧のために、モモンガは固く決意したのだ。

男性陣のへ口へ口とたつちだと、まともに取り合つてくれずにさつさと結論を出したがる節があつた。彼らからしてみれば、ホモのよもやま話などくどくど聞きたくないという切実な願いあつての態度なのだが、モモンガからしてみるとそれでは困るのだ。

きつちりとこちらの釈明を聞き、モモンガの語彙では形にできない心の機微を上手く汲み取つて貰える相手を、まずは説き伏せよう。

それから、広がってしまった誤った認識を改めるための協力をしてもらえばいい。

恋愛事情ではないのだが、恋愛事情と勘違いされている以上、こういったことに詳しい女性陣を選ぶべきだろう。

そういった心理に対して洞察力が高い女性陣がモモンガの話をしっかりと理解してくれれば、これが恋などとは勘違いしないはずだ。

その考えのもと、アルベドと数人の一般メイドを「手に余裕がある者を数人、出来れば言葉に巧みな者が良い」とメイド長であるペストーニヤを介して自室に呼び出した。

支配者とは、簡単に謝ってはダメらしい。

できれば「めっちゃ個人的なことでもわざわざ呼んでごめんね」程度にはへりくだって頭を軽くさげておきたいのだが、そもいかないのだ。

「個人的な呼び出しに集まってもらって感謝する。

呼び出しの理由がわからず困惑しているようだから、最初に説明しておこう。

今回お前たちに集まってもらったのは、女性ならではの知恵を借りるためだ」

呼び出した者とは別に仕事として控えているメイドは、自分に何か不足があったから別のメイドやアルベドを呼び出したのではと青い顔をしていたが、モモンガの説明に今度はきよとんとした顔をする。

それは呼び出された者たちも同じだ。

「感謝など……」命令があるのならば、何をさしおいてもモモンガ様の元へと参じるのが下僕として当然であり、喜びです」

堅苦しい口上を黙って聞き入れ、「女性ならではの知恵でございませうか。単純な知恵であつたら私たちを遥かに凌ぐ叡智溢れるモモンガ様の助けとなれる自信などありませんが、それでしたら些少ではありますがお助けできそうです」などという蜜のように甘い声で紡がれるお世辞を右から左から聞き流し、モモンガは本題に入った。

「どうも私は、へろへろさんたちにウルベルトさんへの想いがプラトニックな愛情だと勘違いされているらしくてな。そうではないことを伝えたいのだが、私はこういったことに疎くて上手く言葉にならないんだ。

惚れた腫れたの感情の言語化は女性のほうが得意そうだと判断し



た。

「こればかりは私一人では解決出来そうにない難題だからな、手伝え」

なりふり構わずシンプルに「ホモの誤解を解きたい」とでも言えば、更なる悲劇の幕開けとならなかつたのだろうか、モモンガは支配者らしい言葉選びに拘泥して、違う意味にも取れるような言い方をしたことに気づかなかつた。

アルベドは、モモンガがウルベルトを一途に愛していると信じ込んでいる。それは性的な欲求のない子供のようなものだと感じていたがモモンガのこの言により「そうではない」と間違つた認識を加速させた。

プラトニツクな感情ではない。ならば、肉欲が伴うものなのでは。その悪魔的頭脳を持って、気づいてはならないことに瞬時に閃いたのだ。

アルベドは得心が言つたとばかりに微笑を浮かべる。

「左様でございましたか」

可憐な花がほころぶような無垢な笑みだ。

その内側でどんな熱狂が乱舞しているかなど絶対に察せない、完璧な笑みでもある。

守護者統括としての顔を脱ぎ捨てたアルベドの顔は、モモンガの中に残る鈴木悟の残滓の琴線に触れてくる。要するに、ちよつと好みだということだ。

ふわりとしたアルベドのいい匂いに、たつちたちの誤解によって疲弊しきさくれだつた心が癒される。

モモンガは、この目の前の女性こそがモモンガとウルベルトを精神的に追い詰める包囲網を鋭意作成しているとは知らぬまま、呑気に眺めていた。知らぬが仏とはまさにこのことだろう。

「モモンガ様であるならば、何においても優れているお方だと思っておりますが、苦手なこともあるのですね」

樂しげに、そして意外そうに。

初めて知りました。と、新しいことを発見した喜びに頬を染める様

に、モモンガは懐かしい感覚を得た。言葉遣いは堅苦しいが、この瞬間のアルベドには会社の年下の同僚と話すようなきさくさがあった。がちがちの忠誠ばかりを向けられるよりも、居心地のいい距離感に近づいた気がして、モモンガはほんの少し、心の重荷が軽くなった気がした。

「何をいうか。私は苦手なことが多いぞ。私一人では何もできない。それはギルド内最強のたちさんとて例外ではないだろう。」

なにせ、ここに残った者たちはみな戦闘向けで得意不得意の分野がはつきりしているからな。ぷにと萌えさんや、ベルリバーさんがいればまた違っただろうが、内政などはアルベドたちナザリックの知恵者がいなければ立ち行かないだろう。

だからこそ、お前たちが私たちには必要だ。頼りにしているぞ」  
おだてているわけではなく、本心からの言葉であった。

ゲームでの強さが現実化してしまったこの世界で通用することは立証されたが、力だけで全てが解決されるわけではない。むしろこれから必要とされるのはそれ以外の能力だと、いかな凡愚なモモンガとて容易に想像がつく。

ナザリックの維持や、安全の確保には数少ないギルドメンバーでは手が回らない。様々な能力を持つNPCの協力が不可欠だ。

アルベドも、メイドたちもモモンガに必要され、頼りにされていると告げられ、感極まったように震えていた。

怒涛のごとく忠誠を誓ってきそうな面々を押しとどめ、モモンガはさくさく本題へと入る。

「そうだな。まずは私の話を最後までよく聞いてほしい。私の抱えるものを上手く言語化してくれるとありがたい……いや、改めて話そうとするとなんだか照れ臭いな」

モモンガは何の気無しに朗らかに笑ってみせるが、いぎ、話そうとなると照れ臭いなどというものではすまない気まずさがあった。

どれだけ恋愛というものに疎いモモンガとはいえ、もしかしたらこの執着や依存やウルベルトが欲しいという渴望は、恋愛感情から起因しているのではと考えたこともある。

そうではない、と自分の中ではつきりと断言できたのはへ口へ口たちと言ったとおり、女性に対してするようにキスをしたいなどという接触を望む欲求がなかったからだ。

それを女性陣の前で口にするのはダメだろうと、この直面においてようやく気付いた。

(よく考えてみれば異性の部下にこんな話を振るのって、セクハラなんじゃあ)

だが、ここまで来てしまった以上引くわけにもいかない。

彼女たちに手伝ってもらう以外の良い方法も思い浮かばないのだ。

支配者らしい口ぶりに気をつけ、かつ色っぽい生々しい話にならないようにしよう。

モモンガの中で言葉選びのハードルが跳ね上がった。

「私は……ウルベルトさんに深く触れたいという欲求が湧かないのだ」

少し抽象的すぎるだろうか。

モモンガは悩んだが、アルベドたちは実に女性らしく恋話(だと思いついでいる)にうんうんと目を輝かせて聞いていて、意味をなんとか解釈してくれたようだ。

(嫌がられてるわけじゃないからいいけど、なんか気恥ずかしいな)

もう勘弁してくださいよ、と言いたげな男たち二人と違い、全力で耳を傾けてくれる。

ありがたいことだが、それが逆にいたたまれなくなった。男とは難儀なものである。

「抱きしめる……ことくらいならしたいな。でないと逃げられそうになつたとき、捕まえておけないからな」

執着が酷すぎて、逃げられることを前提に考えてしまう。恋愛感情ではないにしろ、ひと一人が受け止めるにはあまりにも面倒で重い感情だ。こんなものをを受け止めることを躊躇われるのは、モモンガ自身がよくわかっている。

「手を掴むだけでは嫌だと思う。振りほどかせるつもりはないが、そういう素振りをされるのも嫌だ。だったら、最初から逃げることを

諦めるくらいに強く抱きしめて、この腕の中にしまいこみたい」

それに、体の一部だけ掴んで留めおかせるのは、どこか味気なく心もとない。

触感が人間の時と比べると薄くなった。

触っている感覚、触られている感覚、それらが薄くなってしまったことを忘れるくらいに、ウルベルトの存在を感じたい。

脈拍を、心臓を、息遣いを、生きている存在感を。全身で確りと感じ取りたいのだ。

「私は、この想いの終着点が何処にあるのか分からないんだ。

どうすれば自分は満足できるのか、この希求を昇華できるのか」

鈴木悟としての肉体があつたときですら、持て余していたこの感情。

努めて潜めていた執着の奥底に滲むものが、はつきりと形になって放たれる性欲として解消出来ていたのならば、オーバーロードとなつた今こんなに悩んでいなかっただろう。傲慢な独占欲の根源が愛欲であつたなら、肉体がなくなつた時点で少しくらいは薄れていてもいはずだ。モモンガが得たいのは肉体を重ねることで得られる充足感だとは、到底思えない。この餓えのような感情の決着は、一体どこにあるのか。

仲間たちを平等に、均等に大好きだつた。大切な家族を失い、誰かに対して心を寄せるのは久しぶりだつた。現実で親しい人間関係を構成することができず、こんなふうには誰を思うことは二度とないと諦めていたから、言葉に言い表せないくらい嬉しかった。ユグドラシル以外に交友関係がないモモンガは、ギルドの仲間たちが人生における幸せの全てだつた。

仲間の存在はモモンガの中で非常に尊く、順位づけをして優劣をつけられるものではなかった。全員が同じくらい大切に、気が合う合わないとか、尊敬できるできない、気安い気安くないとか細かな違いはあれど、圧倒的な他意なき好意に大きい差はなかった。

それが変わっていつてしまったのは、大切な仲間たちが徐々に減つていつてしまったから。

仲間たちにとって、ユグドラシルの時間が切り捨てていいものと目の当たりにすることは、仕方のないこととどれだけ言い聞かせても、痛みを生むものだった。

徐々に減っていく仲間の背を見送るたびに、底のない泥沼にでも沈んでいく気がした。他人から見れば呆れるほどに大袈裟かもしれない、そんなことでと笑われるだろう。だが、モモンガからしてみれば息もできないくらいに胸が圧迫され、絶望に溺れる日々だったのだ。窒息寸前のモモンガを救ったのは、ウルベルトの言葉。

自分に対してここに残って欲しい、と必要としてくれる言葉。

暗闇の中に意識を途絶える寸前に、やっと呼吸を与えられたような。もがく苦しみの中にやっと得られたわずかな酸素にも似た。モモンガを？ぎ止めるなにか。

もつと、もつと欲しいと希うのは当然だろう。

人間は息ができなければ死んでしまう。

泥の水底に沈んでいたモモンガの心は、それと同様に死んでいただろう。

あの人がいなければ、もはや息もできなかったのだから。

たった一人の仲間に精神的にすがり続けているうちに、順列を付けて整理できる存在を通り越して、モモンガの中で唯一絶対のかけがえのないものとなった。

ウルベルトがいることで、どれだけ寂しさに苦しくなっても心が呼吸できていた。

(今は、たちちさんがいる、へろへろさんがいる、リーザさんがいる、ミーシャちゃんがいる、そして皆が残してくれた子供のようなNPCたちがいる。でも、俺は貴方が欲しい)

呼吸できない苦しさは通りこしたが、あのウルベルトから与えられるものが恋しい。

ウルベルトを掴んで、モモンガにとって酸素のようなそれを早く食りたい。

鈴木悟という人間の時ですら足りなかった。かつてはそれで我慢できていたが、鈴木悟の残骸を飲み込んだオーバーロードは、最早人

間としての常識にとらわれて自制するつもりなんてない。

かつての苦しきとは別種のものが、モモンガの中にある。

あつて当たり前ものを切り離された不安、苛立ち、苦痛。

彼の存在で、餓えている部分を満たしたい。彼の寂しい心を満たすことで、自分という存在を深くまで刻み付けたい。自分がいなければ苦しいと、言われるまでの存在になりたい。

そんな風にどれだけ願っても、最終的には拒まれることを想像してしまうから、雁字搦めに逃げられないようにして、自分はやつと安心できるのだろう。ウルベルトの中に自分を何一つ残せなくても、その存在が生きて隣にいることで得られる安堵だけは手にしたい。

そんな執着を愛だ、恋だと言われてもしっくりこない。

「あの人が完全に、自分のものになったと自分自身が納得できるには、そして誰にでも理解させるようにするには、そして何よりもウルベルトさん自身に分からせてやるには、どうすればいいのか。

ありがちなありふれた平坦な関係性で終わらせたくないと強く思うのに、私はどうすればその解決ができるのかが分からない。

……こうやって改めて考えると、分からないことばかりだな」

心なんていうのは肉を裂いて出てくるものでもない。解剖して臓器のように並べることができない。目に見えなくて、完全に明文化できないから酷くもどかしい。

自分の中にあるものを、優先順位とラベル付けでもして理路整然と並べることができれば、既存の言葉にこの感情を置き換えられるのだろうか。

ウルベルトを大切にしたいという想いの中に執着があり、執着の裏には嫌われたくないという願いがあり、願いの隣には同じくらい想われたいという欲求がある。時を追うごとに肥大化していくものはぐちやぐちやにいろんなものが混じりあつていて、モモンガ自身把握できない。ただただ、彼の存在が欲しくてたまらない。

自分の世界に沈み込み、深く考え込んでいるモモンガは気づかなかった。

アルベドがありえないくらいに爛爛と目を輝かせ、女性としては

ちよつとありえないような顔になっていることに。

(そういう……い…… そういうことなのですねモモンガ様！)

サキュバスである私には絶対にわからない矛盾をお抱えなのですね。

ああ、深く触れたい欲求はないとおっしゃりながら、プラトニツクな愛ではないという誤解を解きたいのはこういうことだったのですか！

ウルベルト様に分かせてやりたいなどとそのように強いお言葉を！ 平坦な関係性で終わりたくないとおっしゃるのに、解決策がわからないなどと！ ようするに、お腰のものが……その、今のお姿は完璧で素敵で超絶美形で誰にも負けなくらい格好良くあらせられるのですが、ないばかりに！)

デミウルゴスに下卑た言葉でわざと煽ったが、まさしくそれこそがモモンガの中の真実であつたのだ。

肉体がある者の恋愛というものを理解するからこそ、モモンガにはもどかしさがあるに違いない。

本能的にやりたい欲求が沸かなくても、愛する者同士がするそれをしてみたいと。そうすることで、肉体を持つ男となんら遜色のない悦楽を与え、ウルベルトに自分という存在を刻みつけてやりたいと。

精神的なものだけでは満たされず、もつと先を。その想いが、アンデッドならば本来抱くはずのない欲望が生んだのだろう。

そうすることで、自分自身が満足したいし納得したい。

(御自身の手でモモンガ様という男をウルベルト様に知らしめてやりたいと！ そして周囲にそんな関係を見せつけてやりたいと！)

逃げないようになりこんだ腕の中で何をすおつもりですか、モモンガ様！ くふふふふふ)

女たちは脳内で黄色い悲鳴をあげた。

メイドたちは顔を真っ赤にして、抱いている情欲(だと思い込んでしまった)に目を輝かせている。アルベドに負けじと目を輝かせている。どんびきもせず、目を輝かせてやる気に満ち溢れている。これはヘロヘロ様たちにしっかりとお伝えしなければ！ とレベル10

0の男どもの魂を吹き飛ばす爆撃のような話を、圧倒的な速さで脳内で構成していた。

「こんな身勝手なものは愛情なんかではない」

モモンガが短い話を締めくくると、アルベドは迷いなくきっぱりと答えた。

「それこそが恋です、モモンガ様」

誤解を解こうと恥ずかしい内心を言葉を選びつつもあけすけに話したつもりなのに、一切伝わっていない。

「えっ？」

頬を可憐な色に染めている美しい女たち。いい恋話きいた、と言わばかりの態度だ。愛情ではないと言ったのに、それを信じているそぶりはない。

モモンガにはさっぱり理解できないが、何やら、さらなる疑いが深まっているのは察した。

「ま、待てアルベド、私とあの人は男同士だ」

それなのに、どうして恋になってしまうのか。慌てて訂正しようとするも、アルベドはにこやかに阻まれてしまう。

「なにか問題があるのでしょうか？」

「いや、問題しかないだろ」

つい、素の部分を出しながら突っ込んでいた。

「そのような些細な問題、サクユバスとして必ずや解決に導いてみせます、モモンガ様」

幸いにも実験に使えるようなアンデッドが十階層には多い。彼らにはモモンガのために協力を仰ごう。

必ずや、アンデッドの煩惱の解消を可能とする方法を、この身を使って探り当ててみせる！

不可能を可能とする方法を見つけるのだ。アルベドはどんな困難にぶち当たっても諦めないだろう。サクユバスとしての血が非常に滾った。

話が全く噛み合わないことに、モモンガは戦慄していた。えー、と小さな声を上げる。アルベドは自分の世界に入り込んでしまってい



て、そんな声を聞き届けた様子がない。

「重要なことはひとつだと思えます」

もったいぶりながら、アルベドはモモンガにわずかに詰め寄る。

「ウルベルト・アレイン・オードル様をモモンガ様のモノとすること」  
なにかーモモンガが抱えているニュアンスと、アルベドが告げる  
ニュアンスが全くかけ離れているような、同じような……

圧に押されながら「ああ、そうだな」とたじたじ答えると、アルベドは艶のある声で畳み掛けてきた。

「ならよろしいのではないでしようか」

自分が間違っていないと確信している曇りなき眼であった。

「えー」

モモンガはそれに言葉が詰まる。これ以上何を言えばアルベドの  
思い込みを正せるのか。

「ならよろしいのではないでしようか」

繰り返してくるアルベドに、モモンガは抵抗を試みる。

きつと自分の心の機微を過たず読み取ってくれる、最初に抱いた期待をゴミ箱に放り投げ、忖度なんてろくなもんじゃねえな、と心の中で吐き捨てながら。

「ウルベルトさんが帰ってきたとき、私が彼を愛しているなどと周りの態度で思われたのでは困るのだが」

「ふふ、そうですねモモンガ様。大事なことはご自分のお言葉で伝えたいと、承知致しました。決して下僕たちから気取られないよう、モモンガ様の望みを徹底して周知いたします」

「そ、そうか」

最後まで言いたいことは伝わっていないが、モモンガがしでかしたことがウルベルトに伝わらないようであるならば一安心である。  
いや、果たして安心などしていいのだろうか。

モモンガが心の中で首をひねった。